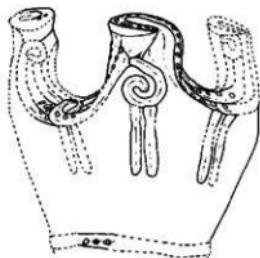


山 手 宮 前 遺 跡

徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財

発掘調査報告書 第8集



1997

水資源開発公団

財團法人 岐阜県文化財保護センター



第6号 住居跡出土土器



山手宮前遺跡調査後全景（南東より）

序

春の訪れとともに種々の草木が芽を吹き、夏は清流に魚が跳ね、秋は木の実がたわわに実る。徳山はその名の通り、豊かな自然に恵まれた所です。そしてこの地には、縄文時代を中心とした数多くの遺跡が残されています。

さて、このたび、水量日本一を誇る徳山ダムの建設に伴って、これらの遺跡の大半が水没することとなり、水資源開発公団の委託を受け、昭和61年度から岐阜県教育委員会が発掘調査に着手し、平成3年度からは財団法人岐阜県文化財保護センターが引き続いて発掘調査を行っております。発掘調査も10年の節目を迎え、昨年5月には、岐阜県博物館において「よみがえる縄文の世界—旧徳山村—」の特別展を催すことができました。また、旧石器時代の遺跡も発見され、徳山における調査への注目は増す一方です。

本報告書は、徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第8集であり、平成4～5年度にかけて実施した「山手宮前遺跡」の発掘調査結果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代と中・近世の遺構・遺物が発見されましたが、とりわけ徳山の豊かな自然の中で育まれた縄文時代中期後葉の貴重な資料を得ることができました。

この報告書の刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成に際しましてご指導・ご協力を賜りました関係諸機関・各位に厚くお礼申し上げるとともに、本書が東海地方の歴史研究に多少なりとも資するところがあればと願うものです。今後ともより一層のご指導・ご協力をお願い申し上げます。最後になりましたが、昨年9月13日に惜しまれながらご逝去なされた故大參義一先生のご靈前に本書の完成をご報告するとともに、先生のご冥福を心よりお祈りしたいと存じます。

平成9年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 篠 田 幸 男

例　　言

1. 本書は、岐阜県揖斐郡藤橋村大字山手字宮前に所在する「山手宮前遺跡」(G19FO6692)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、徳山ダム建設事業に伴うもので、水資源開発公団から岐阜県が委託を受け、財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成4・5年度に実施し、故大參義一愛知学院大学教授の指導のもとに、北洞勝臣・武藤貞昭（平成4年度）、鈴木昇・篠田通弘（平成5年度）、鈴木昇・加藤栄二・中島康夫（平成6年度残務分）が担当し、小坂宗和（平成6年度補助調査員）が補助した。
4. 報告書作成は、平成8年度に穗積整理所において小谷和彦が担当し、酒向邦子・江間香代子・高島桂子・佐藤まさみで行なった。
本書に掲載した遺物の実測については、土器・土製品の実測は佐藤・江間・早野壽人・小谷が、またバドラスによる実測は江間・棚橋朝子・松野晶信が、土器・土製品・錢貨の拓影は酒向が、石器の実測は、高島・江間・千藤克彦・増子誠・小谷が、陶磁器の実測は佐藤・高島俊美・小谷が、木器の実測は小谷が行なった。
5. 実測図等のトレースは高島・佐藤・江間が行なった。
6. 遺物の写真撮影は、佐藤右文氏（奈良県在住）に依頼した。
7. 本書の執筆は、小谷和彦・中島康夫・小野木学・藤岡比呂志・長屋幸二が担当分担し、執筆者名は文末に示した。全体の編集は小谷が担当し、土器については、春日井恒・藤田英博・近藤大典・佐野康雄・谷口和人・堀田一浩・早野壽人・長谷川幸志・篠田通弘の協力を得て、また石器については、河村一彦・佐野・増子誠・長屋・藤岡・千藤克彦・大知正枝の協力を得て、またその他の時代については、成瀬正勝・小塙康眞の協力を得て小谷が執筆した。なお、石器については既刊の第2集「小の原遺跡・戸入障子幕遺跡」、第4集「戸入村平遺跡」を参考とした。
本書の編集に際し、飯沼暢康・竹中一秋・大知・堀田・福川威・松野晶信・村瀬泰啓の多大な協力を得た。記して感謝したい。
8. 地形測量及び空中写真撮影と空中写真測量は、株式会社イビソクに委託して行なった。
9. 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ、財團法人元興寺文化財研究所、京都大学原子炉実験所に依頼して行なった。それぞれの結果は第6章に掲載した。
10. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・順不同）。
故大參義一・八賀晋・泉拓良・吉田英敏・玉田芳英・網谷克彦・山田昌久・間壁忠彦・森下章司・千葉豊・富井真・大石崇・小山雅人・松井忠春・中井均・高橋順之・南久和・小坂大・工藤後樹・白川綾・木下哲夫・坂靖志・海道順子・河村健史・岩田隆・内堀信雄・渡辺博人・大熊茂弘・戸崎憲一・齊藤基生・可児光生・西部良治・三宅唯美・田中彰・後藤信幸・島田崇正・伊藤楨樹・小沢一弘・山下勝年・安藤広道・高橋俊示・岡野清・脇田雅彦・脇田節子・水資源開発公団徳山ダム建設所・藤橋村・久瀬村・揖斐川町・揖斐川町歴史民俗資料館・揖斐県事務所・西濃教育事務所

11. 発掘調査作業、ならびに調査記録および出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た（敬称略・50音順）。

泉武光・伊丹敏夫・市田信子・今村昭夫・岩井弘子・梅本宗七・梅本みつゑ・江口もと・江崎敏夫・太田晴貴・小倉富恵・小倉ふみ子・小沢治良・小沢やゑ子・加藤淳・金指とめの・河合ふみゑ・川口ふじゑ・木本梅雄・湖海道子・小玉春子・小寺繁樹・小寺ひさゑ・小西かの・小西清子・小西直政・小西政治郎・小林さずゑ・佐島岩吉・佐島みさを・白川綾・清水おぎの・清水勝三・清水久雄・清水美智子・(故)清水義太・杉里健三・杉山利子・杉山はる・扇間重男・高橋あきゑ・高橋靜・高橋利美・高橋花子・高橋春枝・高橋みね・高橋實・竹中卓也・竹中としえ・竹中直太・竹中三博・竹中ももゑ・竹中よしの・田中和一・玉木勝・丹度芳子・土屋重義・中石だけ・中川逸枝・中川操・中村たみゑ・長瀬重一・成瀬又勇・野綱義一・野出たつ子・野原明・橋本義治・林典男・広瀬小ひな・福田真・(故)堀田勉・堀田信夫・堀田信子・本多博道・増元一夫・増元清子・増元なつゑ・増元みち・増元やゑ・村山みつ子・森悦郎・森たかゑ・山岸孝枝・山北満・山本きみの・渡辺あきゑ

なお一次整理は、安江祥司（平成6年度）・早野壽人（平成7年度）が担当し、揖斐川一次整理所において、竹中栄子・関晶子・小西清美・林睦・江口陽子・栗野由美子・小西真由美・木本千春で行なった。

12. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

1. 遺構捲図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。

- | | |
|------------------------|------------------------|
| ・住居跡………1/20、1/30、1/40 | ・炉跡……………1/10、1/15、1/20 |
| ・埋甕……………1/5 | ・土器埋設遺構……………1/6 |
| ・配石土坑・ピット・土坑…1/20、1/40 | ・剥片集積……………1/2、1/10 |
| ・石錐集積………1/3 | ・掘立柱建物跡……………1/80 |

2. 遺物捲図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。

- | | |
|-------------------------------|------------|
| ・縄文土器・土製品……………1/3、1/4、1/5、1/8 | |
| ・石器類 剥片・打製石斧・磨製石斧……………1/2 | |
| 磨石類………1/3 | 石皿……………1/4 |
| その他の石器……………2/3 | |
| ・陶磁器類……………1/3 | |
| ・錢貨類……………1/1 | |
| ・さし銭の紐…2/3 | |
| ・木柱根……………1/5 | |
| ・石灰……………1/3 | |
| ・はばき編みの鍾…2/3 | |

・縮尺の異なるものは、それぞれ添付したスケールのとおりである。

3. 図中の方位は、第1・5・6図は真北を示し、その他はすべて磁北を示す。

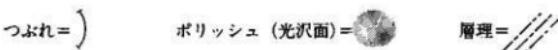
4. 本書で使用した土色名については、「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修)を使用した。

5. 水糸高は標高を示し、土層図の右または左肩に記した。

6. 本文・表・図中に必要に応じて遺構記号を使用したが、これらは次のように遺構の種類を表す。

- ・SB=住居跡・炉跡 · P=ピット · SK=土坑 · SH=掘立柱建物跡

7. 石器の実測図中つぶれ・ポリッシュ(光沢面)・層理の表現を次のようにした。



8. 遺物番号は種類によって次のように表記した。なお、本文・挿図・表・図版とも統一してある。

- | | | |
|--------|-----------|--------|
| ・陶磁器他 | 1～37 | (37点) |
| ・錢貨類 | 101～201 | (101点) |
| ・木柱根 | 301～307 | (7点) |
| ・さし銭の紐 | 401 | (1点) |
| ・石器類 | 501～766 | (266点) |
| ・土器類 | 1001～1487 | (487点) |

以上の899点を実測(拓本)し、掲載した。

目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表 目次

図版目次

第1章 遺跡の環境

第1節	自然環境.....	1
第2節	歴史的環境.....	6

第2章 発掘調査の経過

第1節	発掘調査に至るまでの経緯.....	15
第2節	発掘調査の方法と経過.....	16

第3章 層 序.....

第4章 縄文時代の遺構と遺物

第1節	概 略.....	20
第2節	遺 構.....	33
第3節	遺 物.....	64
第4節	まとめと考察	160

第5章 その他の時代の遺構と遺物

第1節	概 略	167
第2節	遺 構	167
第3節	遺 物	186
第4節	まとめ	201

第6章 自然科学分析

1.	放射性炭素年代測定	205
2.	炭化材の樹種同定	206
3.	付着物の鑑定	215
4.	さし銭のひもの分析	220
5.	黒曜石の原材料产地分析	222

第7章 まとめ

引用・参考文献	226
図版	231

挿図目次

第1図 徳山地域の地形図	1	第36図 土器埋設遺構	56
第2図 摂斐川本流沿いの段丘面の高度 1	2	第37図 刺片集積 (P585) 出土状況 1	57
第3図 摂斐川本流沿いの段丘面の高度 2	3	第38図 刺片集積 (P585) 出土状況 2	58
第4図 徳山地域周辺の地質図	4	第39図 切目石錘の集積 (P586) 出土状況	59
第5図 旧徳山村地内の遺跡分布図	8	第40図 第1・3・4号住居跡出土上土器	65
第6図 旧徳山村地内の中世墓分布図	11	第41図 第2号住居跡出土土器 1	69
第7図 遺跡周辺地形図	16	第42図 第2号住居跡出土土器 2	71
第8図 グリッド設定図	17	第43図 第2号住居跡出土土器 3	72
第9図 年度別調査区域図	17	第44図 第5号住居跡出土土器 1	75
第10図 遺跡土層断面図	19	第45図 第5号住居跡出土土器 2	76
第11図 遺構配置全体図	21	第46図 第6号住居跡出土土器 1	78
第12図 縄文時代の遺構配置図 (B区)	23	第47図 第6号住居跡出土土器 2	79
第13図 縄文時代の遺構配置図 (A区)	25	第48図 第6号住居跡出土土器 3	81
第14図 縄文時代の遺物出土状況 (B区)	27	第49図 第6号住居跡出土土器 4	83
第15図 縄文時代の遺物出土状況 (A区)	29	第50図 第6号住居跡出土土器 5	84
第16図 第1号住居跡	33	第51図 第7・8号住居跡出土土器	85
第17図 第2号住居跡	35	第52図 ピット・土坑出土土器	87
第18図 第2号住居跡石圓炉他	36	第53図 第I群1類土器	89
第19図 第2号住居跡土器出土地点	37	第54図 第I群1・2類、第II群2類土器	90
第20図 第2号住居跡土器出土状況	37	第55図 第II群1類土器	92
第21図 第3号住居跡石圓炉	38	第56図 第III群1・2類土器	94
第22図 第4号住居跡石圓炉	39	第57図 第III群2類土器	95
第23図 第5号住居跡	41	第58図 第III群3類土器 (a種) 1	97
第24図 第5号住居跡埋甕他	42	第59図 第III群3類土器 (a種) 2	98
第25図 第6号住居跡出土状況	43	第60図 第III群3類土器 (b・e・f種)	101
第26図 第6号住居跡土器出土状況	44	第61図 第III群3類土器 (c・d種)	102
第27図 第6号住居跡	45	第62図 第III群4類土器 (a種)	104
第28図 第6号住居跡石圓炉	49	第63図 第III群4類土器 (b種)	105
第29図 第6号住居跡埋甕他	50	第64図 第III群4類土器 (c・d種)、 5類土器 1	107
第30図 第6号住居跡土器出土地点	51	第65図 第III群5類2、第IV群、第V群土器	109
第31図 第7号住居跡	52		
第32図 第8号住居跡	53		
第33図 第8号住居跡石圓炉	54	第66図 第VI群1・3・4・6・7類土器	111
第34図 配石土坑群 (北)	55	第67図 第VI群5類土器	113
第35図 配石土坑群 (南)	55	第68図 石器組成グラフ	115

第69図 P585出土剥片 1	118	第100図 その他の時代の遺構配置図 (A区)	
第70図 P585出土剥片 2	119		171
第71図 P586・SK17出土石錐	120	第101図 第1号掘立柱建物跡	173
第72図 石錐の分類	122	第102図 第2・3号掘立柱建物跡	174
第73図 石錐 1	124	第103図 第4・5号掘立柱建物跡	175
第74図 石錐 2	125	第104図 第6・7号掘立柱建物跡	177
第75図 石錐、ビエス・エスキュー、 その他の石器	126	第105図 第8・9号掘立柱建物跡	178
第76図 石匙	127	第106図 第10・11号掘立柱建物跡	179
第77図 搤器	128	第107図 第12・13号掘立柱建物跡	181
第78図 削器、ノッチド・スクレイパー	129	第108図 第14・15号掘立柱建物跡	182
第79図 打製石斧の折損の部位による分類	130	第109図 さし鉄の紐	184
第80図 打製石斧 1	131	第110図 中近世陶磁器 1	187
第81図 打製石斧 2	132	第111図 中近世陶磁器 2	188
第82図 打製石斧 3、磨製石斧	133	第112図 はばき編みの錘	190
第83図 使用痕のある剥片 (UF)	135	第113図 「はばき編みの錘」の質量分布表	190
第84図 石核、2次加工のある剥片 (RF) 1	136	第114図 石臼実測図	191
第85図 2次加工のある剥片 (RF) 2、 剥片、打欠石錐 1	137	第115図 アミダイの実測図	191
第86図 石錐欠損状態模式図	138	第116図 さし鉄拓影 1	193
第87図 石錐の質量分布表	139	第117図 さし鉄拓影 2	194
第88図 打欠石錐 2	140	第118図 さし鉄拓影 3	195
第89図 切目石錐 1	141	第119図 さし鉄拓影 4	196
第90図 切目石錐 2	142	第120図 錢貨拓影	197
第91図 切目石錐 3	143	第121図 第1号掘立柱建物跡出土木柱根 1	
第92図 凹石の分類	144		202
第93図 磨石の分類	145	第122図 第1号掘立柱建物跡出土木柱根 2	
第94図 凹石、磨石、叩石 1	146		203
第95図 凹石、磨石、叩石 2	147	第123図 第5号住居跡埋甕内外の炭化物取り 上げ層位	207
第96図 石皿 1	148	第124図 蛍光X線スペクトル図 1	217
第97図 石皿 2	149	第125図 蛍光X線スペクトル図 2	217
第98図 打欠石錐計測部位説明図	154	第126図 蛍光X線スペクトル図 3	218
第99図 その他の時代の遺構配置図 (B区)		第127図 さし鉄の紐の分析 1	220
	169	第128図 さし鉄の紐の分析 2	221
		第129図 蔿の分析	221

表 目 次

第1表 旧德山村地内の旧石器・ 縄文・弥生遺跡一覧	7	第34表 珠状耳飾計測表	159
第2表 旧德山村地内の旧石器・ 縄文・弥生以外の遺跡一覧	10	第35表 異形石器計測表	159
第3表 旧德山村地内の中世墓一覧	12	第36表 縄文時代の住居跡一覧表	160
第4表 縄文時代のピット・土坑一覧表1	61	第37表 石器の器種別石材一覧表	166
第5表 縄文時代のピット・土坑一覧表2	62	第38表 石核・剥片類の石材と質量	166
第6表 縄文時代のピット・土坑一覧表3	63	第39表 堀立柱建物跡一覧表	183
第7表 山手宮前遺跡出土土器一覧表	66	第40表 その他の時代のピット・土坑一覧表	185
第8表 山手宮前遺跡出土石器一覧表	115	第41表 その他の時代の遺物観察表	189
第9表 刺片集積(P585)出土刺片観察表	117	第42表 銭貨・さし銭計測表1	198
第10表 P586出土切目石錐観察表	121	第43表 銭貨・さし銭計測表2	199
第11表 SK17出土石錐観察表	121	第44表 銭貨計測表	200
第12表 石錐の分類別出土点数	123	第45表 第5号住居跡埋甕内外の 炭化材の樹種	207
第13表 石錐欠損状態別表	138	第46表 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種2	209
第14表 凹石の分類別出土点数	144	第47表 山手宮前遺跡出土赤色顔料 および付着物分析試料一覧表	215
第15表 磨石の分類別出土点数	145	第48表 山手宮前遺跡出土黒曜石製造物の元 素比分析結果	222
第16表 石錐計測表1	151	第49表 山手宮前遺跡出土黒曜石製造物の原 材产地推定結果	223
第17表 石錐計測表2	152		
第18表 石錐計測表	152		
第19表 石匙計測表	152		
第20表 摶器計測表	153		
第21表 削器計測表	153		
第22表 ノッチド・スクレイバー計測表	153		
第23表 ピエス・エスキュー計測表	153		
第24表 扉製石斧計測表	153		
第25表 打製石斧計測表	154		
第26表 打欠石錐計測表	155		
第27表 切目石錐計測表1	156		
第28表 切目石錐計測表2	157		
第29表 切目石錐計測表3	158		
第30表 凹・磨・叩石類計測表	159		
第31表 石皿計測表	159		
第32表 有舌尖頭器計測表	159		
第33表 異形部分磨製石器計測表	159		

図版目次

- 図版1 山手宮前遺跡調査前の様子、作業風景
図版2 土層の様子、第1号住居跡
図版3 第2号住居跡
図版4 第2・3・4号住居跡
図版5 第5号住居跡
図版6 第6号住居跡1
図版7 第6号住居跡2
図版8 第7・8号住居跡
図版9 第7号住居跡土器出土状況他
図版10 剥片集積、切目石錐集積出土状況
図版11 配石土坑群、P136土器出土・さし銭出土状況
図版12 第1号掘立柱建物跡
図版13 第1・3・4・5号住居跡出土土器
図版14 第2号住居跡出土土器1
図版15 第2号住居跡出土土器2他
図版16 第2号住居跡出土土器3
図版17 第5号住居跡出土土器
図版18 第6号住居跡出土土器1
図版19 第6号住居跡出土土器2
図版20 第6・7・8号住居跡出土土器
図版21 ピット・土坑出土土器
図版22 第I群1類土器
図版23 第II群1類土器
図版24 第I・II・III群土器
図版25 第III群1・2類土器
図版26 第III群3類土器(a種)1
図版27 第III群3類土器(a種)2
図版28 第III群3類土器(b・e・f種)
図版29 第III群3類土器(c・d種)
図版30 第III群4類土器(a種)
図版31 第III群4類土器(b種)
図版32 第III群4類土器(c・d種)・5類土器1
図版33 第III群5類2、第IV群、第V群土器
図版34 第VI群1・3・4・6・7類土器
図版35 第VI群5類土器
図版36 剥片接合資料、「糸巻きの帶状痕跡」の認められる切目石錐
図版37 P585出土剥片
図版38 P586・SK17出土石錐
図版39 石錐
図版40 石匙、異形石器他
図版41 挖器、削器、ノッチド・スクレイパー
図版42 使用痕のある剥片、2次加工のある剥片、石核
図版43 打製石斧1
図版44 打製石斧2、磨製石斧
図版45 打欠石錐
図版46 切目石錐(1)
図版47 切目石錐(2)
図版48 切目石錐(3)
図版49 凹石、磨石、叩石(1)
図版50 凹石、磨石、叩石(2)
図版51 石皿、さし銭の紐
図版52 中近世陶磁器(1)
図版53 中近世陶磁器(2)
図版54 中近世陶磁器(3)
図版55 中近世陶磁器(4)
図版56 はばき編みの錐、石臼他
図版57 さし銭(1)
図版58 さし銭(2)
図版59 さし銭(3)
図版60 さし銭(4)
図版61 銀貨類
図版62 第1号掘立柱建物跡出土木柱根
図版63 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種1
図版64 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種2
図版65 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種3
図版66 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種4
図版67 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種5

図版68 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種 6

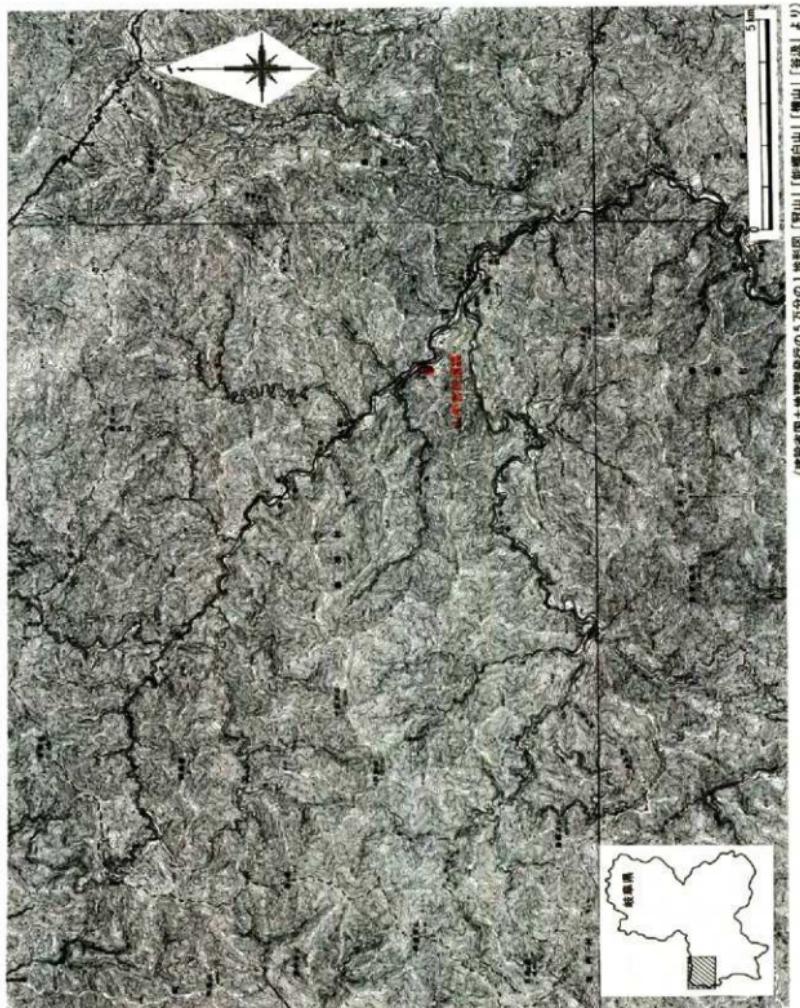
図版69 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種 7

図版70 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種 8

図版71 さし銭のひも 拡大写真

第1章 遺跡の環境

第1節 自然環境

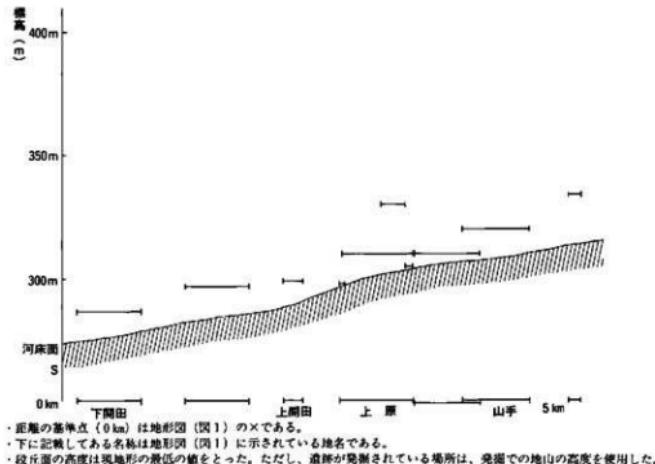


第1図 徳山地域の地形図

1. 逸跡周辺の地形

藤橋村徳山地域及び周辺の山々の頂は定高性を示し、ほとんど1200m前後である。また、徳山地域の中央やや西に位置する千回沢山のように、いくつかの山頂には隆起準平原¹⁾の遺物である平坦面が分布している。徳山地域周辺の山地の分布をみると次のようである。北方から西方にかけての福井県境には、能郷白山（標高1617m）から西へ若丸山（標高1286m）、冠山（標高1257m）、金草岳（標高1227m）が連なり、そこから南へ箇ヶ峰（標高1285m）、美濃俣丸（標高1254m）、三周ヶ岳（標高1292m）が連続する。東方の本巣郡根尾村との境には、能郷白山から雷倉まで次第に低くなりながらも1000m近くの山地が連続する。また、南方の坂内村との境には、三周ヶ岳から東へ烏帽子岳（標高1242m）、蕃麦粒山（標高1297m）、五蛇池山（標高1148m）、上谷山（標高1083m）が連なる。このように、この地域は、1000m以上の3つの山地に四方を囲まれている。

川は、主に揖斐川本流とその支流の西谷川からなっている。揖斐川本流は、この地域の北西端に位置する駅迎嶺に源を発する。そして、2本の流路が駅迎嶺の東南麓で合流し、ほぼ直線状をなして南東方向に流下している。直線状をなしているのは、ほぼ断層（揖斐川断層）線に沿って流れているためである。揖斐川本流にそって断層鞍部などの断層地形もみられ、断層ガウジも何ヵ所かで確認できる。一方西谷川は、この地域の西端に位置する三周ヶ岳に源を発する。揖斐川本流とは違い、源流部

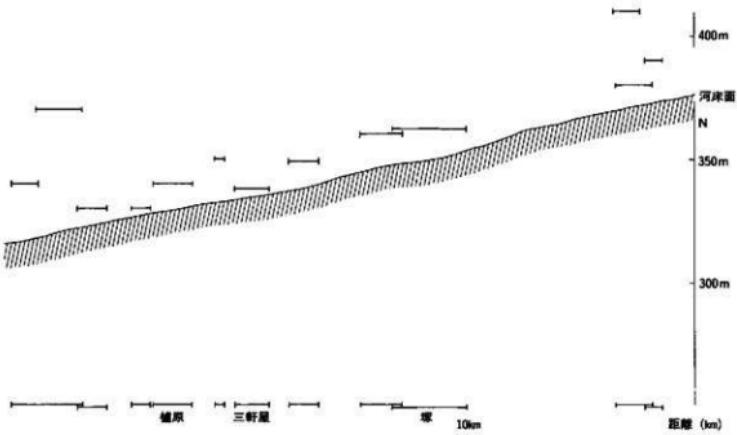


第2図 揖斐川本流沿いの段丘面の高度(1)

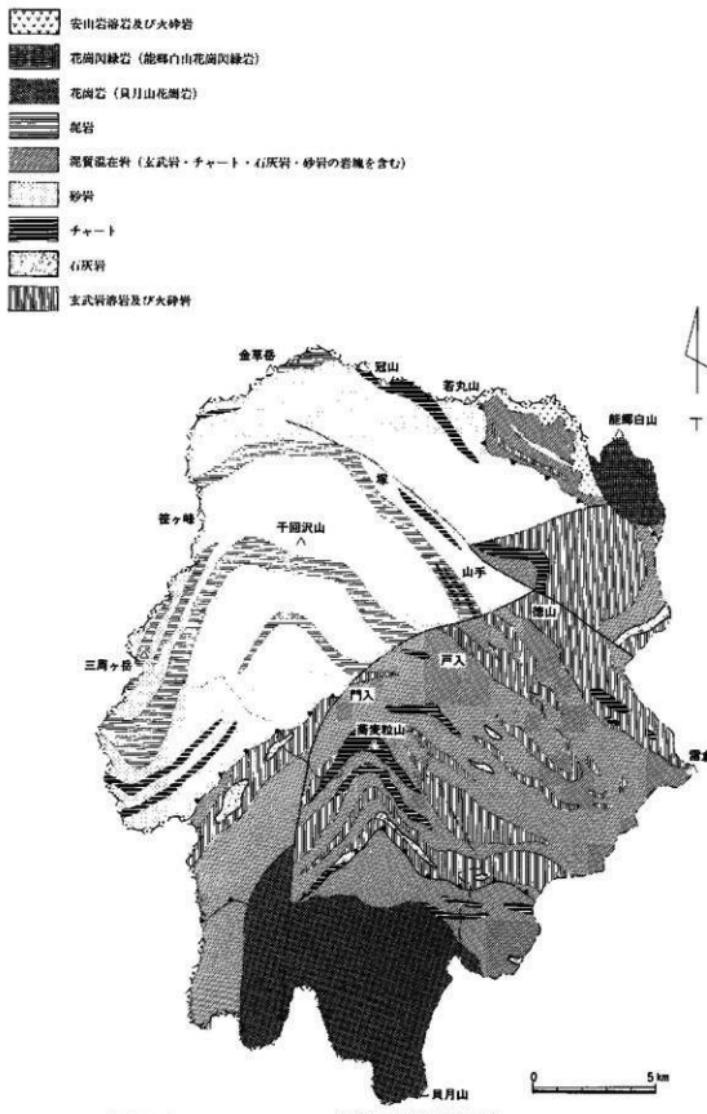
はやや直線的であるが、それ以外はかなり曲流している。戸入付近の地形からすると、下刻曲流と考えられる。すなわち、この河川は地面が平坦な時期に曲がりくねり、その後地面の隆起のため、曲がりくねった川筋のまま下刻して現在にいたっていることを示している。本流と西谷川を比較すると、合流点までの本流の長さは約26kmで、西谷川の長さは約28kmである。また、2万5千分の1の地形図にあらわれている支流の数についてみると、本流では18であり西谷川では19である。しかし、これらの支流の総距離を比較すると、本流は西谷川の約1.5倍もの長さがある。このように、西谷川は本流に近い規模の支流だと考えられる。

揖斐川本流に沿って、左岸・右岸ともに段丘が発達している。本流に沿って断面を見ると、段丘は第2・3図のように分布する。ただし、段丘の標高は、現在みられる段丘地形から読み取ったものがほとんどであるため、本来の段丘の高さとは限らない。ここから判断すると、段丘面は少なくとも3面は認められ、それぞれの面は現河床から約5m、約10m、20~30mの高さである。

調査地は、揖斐川本流の右岸に位置し、標高約320mの段丘面上にある。現河床からは、約10mの高さである。この段丘面は、現在は北と南の谷地形に挟まれ(一部は南の谷より南側に存在する)、南北約600m、東西約100mの長細い地形である。調査地の西側の山の斜面には砂岩が分布し、かなり風化している。



第3図 揖斐川本流沿いの段丘面の高度(2)



第4図 徳山地域周辺の地質図

通産省工業技術院地質調査所
「20万分の1地質図・岐阜」(1992) を一部改変

2. 遺跡周辺の地質

徳山地域周辺は、先新第三紀地質構造区分からすると美濃帯に属し、基盤は古生代から中生代にかけての海成堆積物の付加体²⁾から成っている。そのため、徳山地域の大部分に中・古生層である砂岩・チャート・泥岩・石灰岩・玄武岩質溶岩及び火山碎屑岩などが複雑に混じりあった状態で分布する。その他には、北東部に能郷白山をつくっている花こう閃緑岩が分布し、冠山と能郷白山の間に位置する若丸山の稜線一带に安山岩が分布する。また、徳山地域の南方には貝月山花こう岩が分布する。

地質の違いによって、高低など地形の特徴が異なることがよくある。この地域では中・古生層からできている山々の頂はほぼ1200mの定高性を示しているのに対し、花岡閃緑岩からできている能郷白山は1500m以上の標高を示す。これは、形成年代の違いや侵食の違いなどのためである。

揖斐川本流には、この地域の地質を反映して、砂岩をはじめとしてチャート・泥岩・安山岩・花岡閃緑岩等の礫が存在する。しかし、安山岩の分布範囲は狭いため、場所によってかなり安山岩の礫の量が異なる。本流には、北東からも何本かの支流が注ぎこんでいるが、大きな支流として北西から順にヒン谷、扇谷、磯谷がある。ヒン谷の流入部より上流部では多くが砂岩であり、安山岩の礫は非常に少ない。しかし、若丸山の稜線付近を源流とするこれらの支流が流れこんでくるため、調査地近くの本流の川原では、砂岩の礫が半分近くあるものの、安山岩の礫が3分の1近く含まれている。

3. 徳山地域の気候・植生

徳山地域は、北陸地方と東海地方の境に位置し、前述したように四方を1200m前後の山地に囲まれている。このような位置的・地形的特徴がこの地域の気候に大きく影響している。夏には伊勢湾からの温暖な南東季節風が北上し、福井県との県境の山地にぶつかり、多量の雨が降る。また、冬は日本海から吹く北西季節風の影響を大きく受け、豪雪地帯となり、1年の3分の1は雪に閉ざされている。このように、夏は雨量が多く、冬は豪雪になるため、年間降水量が3,000mmを超える日本有数の年間降水量を示す地域である。気温は、年較差が大きく、冬は-10℃近くにも気温が下がり、夏には30℃をこす暑さを記録する。

徳山地域の植生は、基本的にはブナ・ミズナラを中心とする冷温帯落葉樹林帯に属する。この地域で見られるブナ林は、林床にチシマザサを伴っており、日本海側の地域に見られる植生をしている。この地域が日本海側型の植生を示すのは、この地域が冬に積雪が多いという日本海型の立地条件のためである。樹木には、他にトチノキ・ケヤキ・ホウノキ・クリ・サワグルミ・ヤマボウシなどがみられる。

- 1) 陥起準平原…侵食によって、地表面上の起伏が小さくなりほぼ平坦になった地形を準平原と呼ぶ。ただし、どの程度平坦なものを準平原と呼ぶかについて明確な基準はない。その準平原が隆起して高原状になった地形を陥起準平原と呼ぶ。
- 2) 付加体……海溝などにおいて、海洋プレートが沈み込むときに、海洋底にたまっていた堆積物がはぎ取られて陸側へ押しつけられていく。その結果、陸側斜面に付け加えられた積み重なった堆積物を付加体と呼ぶ。

第2節 歴史的環境

「山手宮前遺跡」は、揖斐郡藤橋村大字山手字宮前に所在し、揖斐川の右岸段丘上の旧山手集落の東半部に位置する。本遺跡の北方500m上流の対岸には、「磯谷II遺跡」と「寺屋敷遺跡」があり、さらに、約500m下流には、「上原遺跡」がある。

徳山ダム建設に伴って廃村になった旧徳山村（昭和62年3月31日廃村）には、平成8年11月現在、38ヶ所¹⁾の遺跡が知られている。このうち、徳山ダム建設事業に伴う水没地区内に所在する遺跡は29ヶ所である。

旧徳山村の遺跡は、すでに大正年間に小川栄一氏によって調査され報告されている。第二次大戦後も小川氏の調査によって報告されたが、5ヶ所の遺跡しか知られていなかった。その後も、小沢一弘氏らによって「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」の遺物紹介がなされただけであった。ダム建設計画が本格化した頃から、根尾弥七氏・篠田通弘氏ら地元研究者たちが、村内を踏査し多くの成果を発表した。昭和59年度、岐阜県教育委員会は先達の成果を踏まえ、徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の分布調査を実施し報告した。そして、昭和62年度から岐阜県教育委員会が、平成3年度からは鵜岐県文化財保護センターが発掘調査を実施している。ここでは、平成8年11月までの発掘調査や整理作業の結果を中心に、概観を述べることにする。

旧石器時代 徳山地区では、地元研究者たちの分布調査によって「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」や「小の原遺跡」などの5遺跡から旧石器時代遺跡の可能性が報告された。そして、平成5年度から7年度まで発掘調査を実施した「寺屋敷遺跡」では、姶良火山灰の層を検出し、さらにその下層からはナイフ形石器を含む旧石器集中箇所を確認したことから、徳山地区の歴史が2万年以前の旧石器時代から始まることが確かめられた。これらの石器の出土状況は攪乱を受けていない極めて良好なものである。また、「上原遺跡」第3地点においても平成7年度の調査で、ナイフ形石器が出土している。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、現在30ヶ所（第4図、第1表）が知られている。このうち、水没地区内にある遺跡は24ヶ所で、平成7年度までに14ヶ所の調査が終了している。

縄文時代草創期の遺跡は、現在のところ有舌尖頭器を検出した「小の原遺跡」だけである。「小の原遺跡」では、多縄文系の表裏縄文土器を検出しており、草創期末の遺跡といえる。現時点において他にはこの時期のものは認められない。今後、調査の進展に伴い、東谷筋でもこの時期の遺跡の増加が期待される。

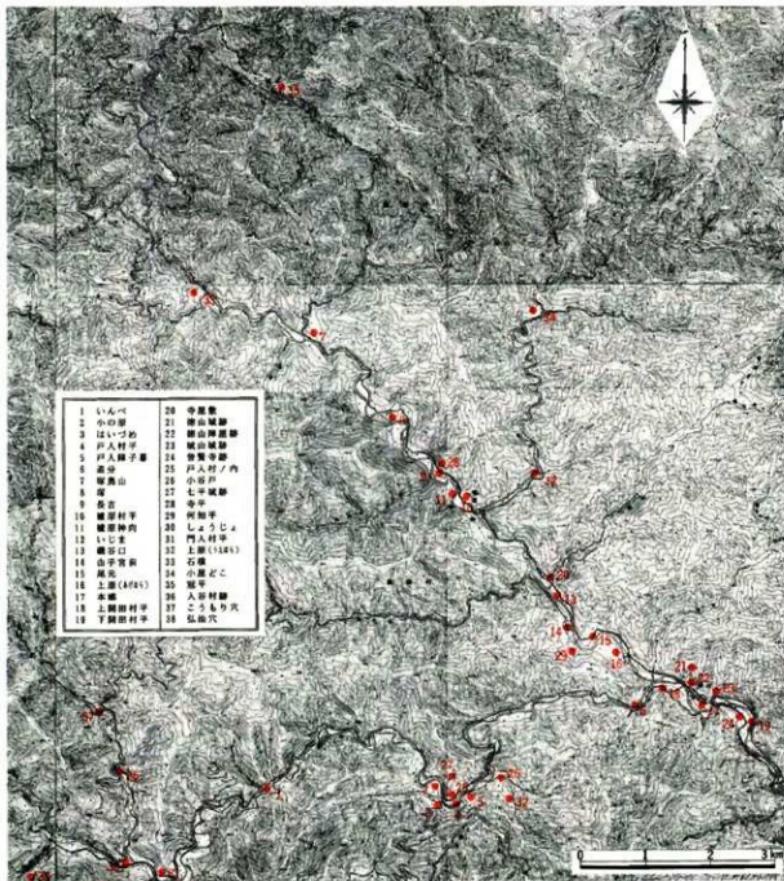
早期になると徳山地区的各地に遺跡が点在てくる（14遺跡）。揖斐川本流域の東谷筋では、「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」・「長吉遺跡」・「寺屋敷遺跡」・「山手宮前遺跡」・「尾元遺跡」・「上原田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」などで遺物が出土している。特に「尾元遺跡」では、替道路進入路の確認調査時に大型の異形部分磨製石器を検出した。「下開田村平遺跡」では、押型文土器・茅山下層式土器・上ノ山式土器やこの時期の焼窯集積造構・配石造構を検出した。「長吉遺跡」では、少量ながら茅山下層式土器がまとまって出土している。「上原田村平遺跡」では、押型文土器・茅山下層式土器が出土しているほか、炭化材を多量に含む直径4mの焼窯集積造構が検出されており、炭化材の年

第1表 旧德山村地内の旧石器・縄文・弥生遺跡一覧

*表内の○・◎・△は、免持調査で出土した土器の量による。ただし、未調査遺跡については、猪山村の歴史を語る会（1984）、猪山村教育委員会（1986）、事務組合（1994）による。

* Saitは、第5回の調跡番号に準ずる。

代測定の結果、早期末の遺構であることが判明している。「寺屋敷遺跡」では、茅山下層式土器・入海II式土器が出土し、「山手宮前遺跡」では、高山寺式土器が出土した。さらに、「上原遺跡」においても第1・3・4・5地点から押型文土器が出土し、特に、第1地点では、アカホヤ火山灰層の下層から高山寺式土器がまとめて出土している。なお、「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」第3地点からは、型式学的にみて、早期に下ると考えられる有舌尖頭器各1点が出土している。西谷筋では、「いんべ遺跡」・「はいづめ遺跡」・「小の原遺跡」・「戸入村平遺跡」・「追分遺跡」で遺物が出土している。「小の原遺跡」については、既刊の第2集で述べているように、早期の集石炉や石器を大量に検出している。



第5図 旧徳山村地内の遺跡分布図

(建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図より)

また、土器では早期の各小時期のものが出土しており、山形や楕円の押型文土器をはじめとして、関東系の田戸下層式・田戸上層式・野島式・鶴ヶ島台式・茅山下層式土器や、東海系のハッ崎1式・柏烟式・上ノ山式・入海式土器などが出土している。「いんべ遺跡」では、平成2年度の発掘調査の結果、押型文土器をはじめとして早期後半の茅山下層式・入海式土器等や集石炉を検出した。「はいづめ遺跡」でも押型文土器が出土しているが、小破片で磨滅しているため「小の原遺跡」からの流れ込みと考えられる。「戸入村平遺跡」・「追分遺跡」では少量ながら押型文土器や織維土器が出土している。

前期では、東谷・西谷両筋に11遺跡が分布する。東谷筋では、「櫛原村平遺跡」・「尾元遺跡」・「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」・「小屋どこ遺跡」などが知られている。特に、「上原遺跡」の第2地点では、北白川下層II式土器や蝶形石器・糸巻形石器と呼ばれる異形石器が出土し、平成5年度の調査で、北白川下層III式土器や大歳山式土器、十三菩提式土器が出土し、前期後葉から末葉にかけての住居跡10軒を検出した。また、「上原遺跡」第1地点では、平成7・8年度の調査で、北白川下層III式土器や大歳山式土器、十三菩提式土器が出土し、前期後葉から末葉を中心とした集落遺跡であることが判明した。徳山地区でこの時期の集落遺跡の検出は初めてのことである。また、多数の切目石錐も出土し、切目石錐の初現が前期後葉から末葉までさかのはばる可能性が出てきた。なお块状耳飾も10点出土している。「山手宮前遺跡」からも同時期の土器が出土している。西谷筋の「小の原遺跡」では、住居跡や集石炉を検出し、前期全般にわたる大量の遺物が出土している。土器を見ると、前期前半では東海系の清水ノ上I・II式土器が主体をなす。後半では関西系の北白川下層式土器やこの影響を強く受けた在地系のものが主体となり、関東系の諸磯式土器は列孔文土器が主で他のものは非常に少ない。「いんべ遺跡」では、前期前半までの集石炉跡と土器を確認した。他に「はいづめ遺跡」で若干の遺物が出土している。

中期になると遺跡数が17に増大する。東谷筋では、「塚奥山(宮ヶ原)遺跡」や「上原遺跡」などのように面積的に広く、大集落が営まれていた可能性の高い遺跡がある。「上原遺跡」第2地点では、集落跡を検出しており、土器・石器も大量に出土している。「山手宮前遺跡」でも、中期後葉を中心とした住居跡を8軒検出し、このうちの2軒は埋廻を伴っていた。詳細については、本書第4章で述べることとする。このような大集落の営まれていた遺跡が存在する一方で、「下開田村平遺跡」や「磯谷口遺跡」のような小規模な遺跡も散在する。「下開田村平遺跡」では住居跡を1軒検出したが、遺物量は少なく遺跡の範囲も狭い。「磯谷口遺跡」も遺跡の範囲は狭く、遺物は出土したが、遺構は検出できなかった。また「塚遺跡」では、中期後葉の住居跡・配石遺構のほか、土器・石器なども大量に出土した。「上開田村平遺跡」でも中期後葉の土器が出土している。「櫛原村平遺跡」・「石橋遺跡」・「小屋どこ遺跡」なども表採資料からこの時期の遺跡と思われる。西谷筋では、「戸入村平遺跡」が中心であり、中期後半の住居跡を8軒検出した。土器を見ると東海系・関東系・信州系・関西系・北陸系のものが混在する。また、「いんべ遺跡」では、中期後葉の関西系の里木II式土器や東海系の土器が出土している。このように、中期になると遺跡が増大するが、中期後葉の遺跡が多い。

後期になると一般的に遺跡数は減少する傾向であるといわれているが、徳山地区では後期に属する遺跡は13遺跡確認されており、この傾向は認められないと思われる。東谷筋で発掘調査によって確認されたのは、「塚奥山(宮ヶ原)遺跡」・「塚遺跡」・「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」である。「塚遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」では、後期前半の磨消

縄文系七器と縄文系土器が多数出土している。「上原遺跡」では、この時期の遺構として土器棺墓2基を検出し、土器も多数出土している。また、平成8年度から発掘調査を実施している「塚奥山(宮ヶ原)遺跡」では後期後葉の土器が出土している。表記資料では、「塚原村平遺跡」「小屋どこ遺跡」などがある。また、「山手宮前遺跡」でも少量の土器が出土している。西谷筋では、「いんべ遺跡」「はいづめ遺跡」「戸入村平遺跡」「追分遺跡」がある。「戸入村平遺跡」では、土器棺墓を4基検出した。土器棺には、中津式・福田KII式の土器が用いられている。また、関東系や東海系・北陸系の土器が出土している。「いんべ遺跡」でも後期後葉の土器が出土している。

晩期では、東谷・西谷両筋で12遺跡が確認されている。しかし、東谷筋では、遺跡の規模が縮小すると思われる。この筋では、「塚奥山(宮ヶ原)遺跡」「塚原村平遺跡」「上原遺跡」「小屋どこ遺跡」「長吉遺跡」「下開田村平遺跡」「山手宮前遺跡」がある。「上原遺跡」の第2地点では、土器棺墓6基を検出した。「長吉遺跡」では、晩期後半の可能性が高い土器埋設遺構1基を検出し、「上原遺跡」「下開田村平遺跡」「山手宮前遺跡」でも櫻玉式土器が出土している。西谷筋には「はいづめ遺跡」14基、「戸入村平遺跡」7基、「いんべ遺跡」11基と大量にこの時期の土器棺墓を検出した。「はいづめ遺跡」で検出した土器棺墓は、晩期後半の五貫森式期から下り松式期のものと考えられる。また、関東系の大洞式土器なども出土している。「戸入村平遺跡」で検出した土器棺墓は、東海地方では、稻荷

第2表 旧徳山村地内の中古石器・縄文・弥生以外の遺跡一覧

No.	遺跡名	古代	中世	近世	不明	遺構	遺物	備考
4 戸入村平		○	○				天目茶碗・銭貨・陶磁器類他	S63・H11年度発掘調査
5 戸入節子墓		○	○			中世墓	古神戸瓶子・近世陶器他	H11年度発掘調査
6 追分	△		△				須恵器・近世陶器他	H11・2年度発掘調査
7 塚奥山		○						
8 塚		○	○				中世陶磁器・銭貨	H2・3年度発掘調査
10 塚原村平			○					
13 磯谷口	○						須恵器・灰釉陶器他	H2年度発掘調査
14 山手宮前		○	○			櫛立柱建物跡	山茶碗・中近世陶磁器・銭貨	H4・5年度発掘調査
16 上原	○	○	○			櫛立柱建物跡	須恵器・灰釉陶器など検出	H2年度～発掘調査中
17 本郷	○	○						
18 上開田村平		○	○			中世墓・断跡	山茶碗・中近世陶磁器・銭貨・和鏡	H4年度発掘調査
19 下開田村平	△	△	○				須恵器・山茶碗・中近世陶磁器	H2年度発掘調査
20 寺尾敷	○					礫石建物跡	灰釉陶器・鉄製角釘	H5・7発掘調査
21 徳山村跡	○					中世城館跡		
22 塚山跡	○	○				近世陣屋跡		
23 城山城跡	○					中世城館跡		
24 菅賀寺跡	△					伝中世寺院跡・遺構検出できず	寺院跡に伴う遺物検出できず	H3年度発掘調査
27 七平城跡	○					中世城館跡		
28 幸平	△					土師器・灰釉陶器		
31 門入村平			○			集落跡		
33 石橋	○							
36 入谷村跡		○				集落跡		
37 こうもん穴		○						
38 弘法穴		○				水銀採取駆除跡		

*表内の○・△・△は、発掘調査で出土した土器の量による。ただし、未調査遺跡については、徳山村の歴史を語る会(1984)、徳山村教育委員会(1986)、事前調査(1994)による。

*No.は、第5図の遺跡番号に準ずる。

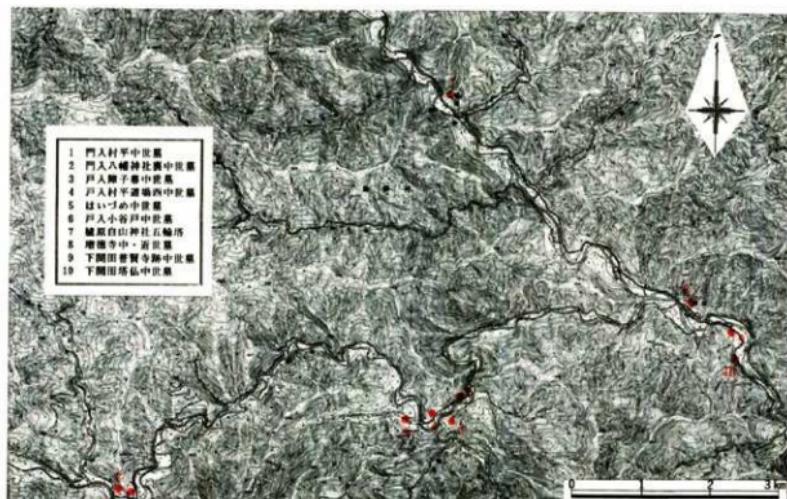
水没地区内に所在し発掘調査を実施する遺跡

水没地区以外の遺跡

山式から西之山式、畿内では、滋賀里III b式に併行する資料と考えられる。「はいづめ遺跡」で3軒の住居跡を検出した以外に他の遺跡では現在のところ住居跡は検出していない。なお、「追分遺跡」でも少量の土器が出土している。

弥生時代 弥生時代の遺物を出土している遺跡は、現在のところ、「はいづめ遺跡」と「上原遺跡」だけである。「はいづめ遺跡」では、前期の遠賀川系土器が2個体とその他のものが出土している。遠賀川系土器は土器棺墓として使用されていた。また、「上原遺跡」第2地点でも数点の遠賀川系土器片が出土しているが、現在、整理中である。さらに、「上原遺跡」第1地点では、平成8年度の調査で、中期の朝日式土器が出土している。この時代の徳山地区の様相については、資料が少ないため、今後の調査の進展によって明らかにされることを期待したい。

古代 古代に属する遺跡は、現在のところ、7遺跡である。そのうち、「寺屋敷遺跡」では、平安時代の礎石建物跡が検出され、平安時代後期の灰釉陶器や鉄製の角釘が多数出土した。また「磯谷口遺跡」・「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」・「下開田平遺跡」・「追分遺跡」でも、須恵器や灰釉陶器が出土し、「石橋遺跡」でも表探されている。「磯谷口遺跡」については、「寺屋敷遺跡」との関連が注目される。なお、「磯谷口遺跡」では、土坑より黒色土器が1点出土している。「上原遺跡」第2地点では、掘立柱建物跡が検出されたが、柱穴から灰釉陶器片が出土したため、この時期の遺構と考えられる。なお、8世紀頃の土師器を伴う集石遺構を検出しているが、現在整理中である。また、「上原遺跡」



(建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図より)

第6図 旧徳山村地の中世墓分布図

第3地点では、灰釉陶器を伴う平安時代後半の土壙墓1基を検出した。「下開田村平遺跡」「追分遺跡」でも若干の遺物が出土している。少しずつ明らかにされてはいるものの、この時代の状況は現在のところはっきりしていない。

中世以降 中世以降の遺跡としては、中世墓の「戸入障子墓遺跡」「徳山城跡」「城山城跡」「徳山陣屋跡」などがある。「戸入障子墓遺跡」では既刊の第2集で述べているように、蔵骨器として使われた鎌倉時代の古瀬戸瓶子が出土した。この遺跡の対岸に位置する「戸入村平遺跡」の発掘調査では、宋銭や明銭、古瀬戸後期以降の陶器類が出土している。このほか「下開田村平遺跡」では、この時期の遺構は検出できなかったが、山茶碗や陶器類の小破片が出土した。「普賢寺跡」では、寺跡を検出することはできなかったが、古瀬戸・瀬戸美濃系陶器が若干出土している。また、「上開田村平遺跡」では、中世墓・廐跡が検出され、和鏡・さし銭（宋銭他）が出土している。「山手宮前遺跡」でも、掘立柱建物跡群が検出され、さし銭（宋銭他）も出土し、この時代についての多くの情報を提供した。詳細については、本書第5章で述べることとする。なお、「上原遺跡」第2地点でも多くの山茶碗が出土し、また、廐跡を検出している。

1) 戸入障子墓遺跡は、改訂版・岐阜県遺跡地図。(平成2年3月 岐阜県教育委員会)では戸入障子墓中世墓(中世墓)と障子墓遺跡(绳文時代遺物散布地)の2遺跡として登録されている。そのため遺跡数は39になる。

(第4集の「歴史的環境」を中島康夫が加筆・修正)

第3表 旧徳山村地内の中世墓一覧

No	名 称	旧 所 在 地	備 考
1	戸入村平中世墓	揖斐郡藤橋村大字戸入 字門入2071-1	門入柴路の入口の草薙の一角に2群からなる丘輪塔4基が建つ。1基は最高30cmの一本五輪塔。1基は地輪・水輪・火輪・風輪・空輪ともよく残る総高39cmの五輪塔。1基は石に火輪ががだけのもの。1基は地輪が失われているが、自然石の石方に水輪・火輪・風輪・空輪が残るもの。
2	戸入八幡神社裏中世墓	# 藤橋村大字戸入 字門入2166-1	八幡神社境内地の本殿裏の一辺高くなったところに前に列に五輪塔2基。後列に宝鏡印塔3基が建つ。宝鏡印塔は右端のものが宝珠と拂花が失せる他のほぼ完く残っており、姿体は秀美である。
3	# 戸入障子墓中世墓	# 藤橋村大字戸入 字障子墓502-2	宝鏡印塔1基、五輪塔2基および自然石を利用した草石からなる。宝鏡印塔の頭部に頭輪を打ち込んだ戸入障子墓が並合部として利用され坪納されていて、宝鏡印塔は露盤と塔身のみが残る。豆輪塔は一石五輪塔であり、全高42cmを測る。
4	戸入村平遺跡西中世墓	# 藤橋村大字戸入 字村内163-12	宝鏡印塔1基、五輪塔1基。道祖神1基が残らる。傍らの白石岩に「(未詳)当面後代造跡跡(夷坂)」昭和二十八年三月二十日宮原記念広瀬源次郎」と刻まれた碑が建ち、これら中世瓦の瓦屑もこの時に汚墳されたものとみられる。宝鏡印塔は相輪輪郭が残り、塔身・基盤部は五輪塔の転用である。五輪塔は各輪ともよく残り、高さ50cmを測る。
5	はいづめ中世墓	# 藤橋村大字戸入 字ハヒツノ715	宝鏡印塔1基が肥らる。宝珠・露盤・塔身・基礎が残り、現存高50cmを測る。露盤の鳥足形突起が直立し、古い様式を留めている。
6	戸入小谷戸中世墓	# 藤橋村大字戸入 字小谷戸467-89	宝鏡印塔1基が肥らる。宝珠・露盤・塔身・基礎が残り、現存高38.5cmを測る。宝珠が塔身上に位置している。
7	横涼白山神社五輪塔	# 藤橋村大字植原 字村平230-1 境内地の内	木輪・火輪のみ残る。傍らに自然石に施刻された「奉納仁田因郎由立烏山神社五世廿八年四月八日ハヒツノ申」の碑が建つ(年号小辞)。
8	増徳寺中・近世墓	# 藤橋村大字植原 字村平360 墓地の内	植山寺内唯一の米沢法人である普賢宗増徳寺の境内に墓域が設けられ、中世以降の墓碑が建っている。
9	下開田普賢寺跡中世墓	# 藤橋村大字開田 字村平145、146	中世の寺跡と伝えてる普賢寺跡の一角に、近世以降の墓碑に混じて3基の五輪塔が建っていたと伝えるが、分布調査においては確認されなかった。
10	下開田塔寺中世墓	# 藤橋村大字開田 字北野64 1	かくて宝鏡印塔が建っていたが、昭和46年に立碑にあい、今日では所在不明である。

(滋賀川上流域徳山ダム・杉原ダム水位低下地帯文化財分布調査報告書)昭和60年3月 岐阜県教育委員会より)

文献等より見る古代中近世の徳山

律令下の西濃地方北部は、揖斐川を境として、右岸を池田郡、左岸を大野郡に区分し、徳山の地も東西に二分されている。「徳山」関係の史料は、江戸時代以降のものがほとんどである。近代以前の集落の地名として、揖斐川上流東谷左岸に「塚」・「塙原」・「徳山（本郷）」が、東谷右岸に「山手」・「池田（上開田）」・「塗原・志津原（下開田）」、西谷に「門入」・「戸入」が挙げられている。

徳山の古代については、史料がないため不明な部分が多い。「徳山」関係の地名が史料に現れるのは、「美濃國神名帳」（天慶～天徳 [938～960] 年間の頃に修撰された官簿）の「山手」集落の加茂神社の記載が最初である。『揖斐郡史』・『徳山村史』では、「上開田（池田）」の六社神社の造立は保元元（1156）年としている。

平安時代のこの地方の歴史を解く鍵の一つに、白山信仰がある。この信仰は岐阜・石川県境の白山を中心に、僧泰澄によって開かれた山岳宗教である。平安末期に成立した『白山之記』には天長9（832）年に美濃・加賀・越前に信仰の三馬場を開いたと記している。『文徳天皇実録』には元慶8（884）年の僧宗叡による白山修行の記事があり、平安初期に白山がすでに山岳修験の靈場として著名であったことを示している。越美山地で最も標高の高い能郷白山は、福井県大野市・岐阜県根尾村・藤橋村（徳山）の境界に位置し、白山を中心とする広域な山岳修験の靈場の一つと位置付けられていたと考えられる。僧泰澄の開山と伝える能郷白山神社は、根尾村能郷にあり、能郷白山信仰の中心馬場として栄えた。越前馬場の福井県勝山市の白山平泉寺への道は、温見峠（能郷～温見）を越えて通じている。能郷と徳山は同じ大野郡に含まれ、江戸時代にはともに旗本徳山氏の領地であり、歴史的に密接な関係を持つ両地の往来は、能郷白山信仰が展開された時代にも活発に行われていたと考えられる。

「塚」・「本郷」・「塙原」にあった白山神社の神像には、いずれも奥国元（1340）年の銘文があり、能郷白山信仰が南北朝時代にも徳山に浸透していたと考えられる。平成4年度に発掘調査された上開田村平遺跡から塙町期の鋳造と考えられる和鏡（松鶴鏡）一面と、「さし鏡」の状態で唐代の「開元通寶」9枚・宋銭21種の合わせて87枚が出土した。また、山手宮前遺跡でも「さし鏡」81枚が出土している。徳山での信仰がどのように展開していたかは不明であるが、能郷白山信仰との関連も推測される。『徳山村史』によれば、「下開田」集落にあった普賢寺は真言宗の寺院と伝え、山岳信仰との結びつきが考えられる。普賢寺跡の発掘調査は平成3年度に完了しているが、信仰に関連した遺構・遺物については確認されていない。徳山・根尾の地が、南北朝抗争の中で南朝方の拠点の一つであったことは、『太平記』などに記載されている。「塙原」には新田義貞の塙原死亡説伝承が残されている。越前で再拳を計った義貞が、越前藤島での敗北後、徳山の地で没したという。勿論、この説は伝承の域を出ないが、この時代に美濃【杉ノ谷】峠（徳山～福井県大野市）・冠峠（徳山～福井県池田町）・塙尾峠（徳山～福井県池田町）・高倉峠（徳山～福井県今庄町）などを経由した徳山と越前の往来が想定できる。

近世における徳山と隣国との往来は、東谷から越前への街道の他、西谷の「門入」からホハレ峠を越え、坂内村に入り、八草峠を経て近江の木之本へ通ずる街道がある。追分遺跡では、少量の須恵器や中近世の陶片が出土した。西谷下流の「追分」は、東谷右岸を廻り「山手」・「塚」から越前への街道と、「上開田」・「徳山（本郷）」・馬坂峠を経て「能郷」への街道の分岐点にあたる。近江・越前・能

郷へ向かうこの地は、その出土遺物などから中世以前よりの往来の可能性を示している。西谷の集落形成は、14～15世紀頃と考えられる。「門入」の八幡神社の鈔印には、文明8（1467）年銘が刻まれている。昭和63・平成元年度の戸入村平遺跡の発掘調査では、古瀬戸の陶片と宋・明銭等が出土している。『指斐郡史』には、永享3（1431）年の年貢、永享6（1434）年の畠作・土地所有・麻作・狩獵等に関する史料が記載され、「はしほら・やまと・いそたに・さもと・とにゅう・かんたに・つか」などの地名も確認できる。

古代・中世に栄えた白山信仰は、蓮如を中心とした浄土真宗本願寺派の布教活動の前に衰退していく。徳山へも越前との各峠道を通り、浄土真宗の勢力が浸透してくる。中世以降、徳山では殆どの住人が浄土真宗に転宗し、在地の人々の手で作られた道場を中心に展開していく。近世以降各道場は、越前にある誠照寺派西福寺、根尾村にある誠照寺派専念寺・西本願寺派西光寺に属している。

戦国時代以降、土着の豪族として「徳山」を支配していたのは、鎌倉・室町時代に美濃守護の土岐氏の支族、徳山氏である。『徳山村史』によれば、徳山氏が活躍し始めたのは、室町時代の応永年間（1394～1427）以降としている。徳山氏の家系図によると、永享10（1438）年頃に、本郷の徳山氏の菩提寺である増徳寺（曹洞宗）の記載があり、徳山氏の出現とほぼ一致する。戦国時代の徳山氏は、美濃国に在住しながらその地理的環境から越前との結びつきも強く、東海地方の勢力に左右されない行動をとっている。戦国期の道三・信長の頃でもこの様相の変化はない。

江戸時代、徳山氏は徳山の領地（約800石）が安堵されたのに加え、各務郡更木領（約4,300石）を新たに封ぜられ、5,000石の旗本となつた。これに伴つて、徳山の地には徳山陣屋が設けられ、大政奉還に至るまで代官と在地の庄屋によりその統治が行われている。なお、西谷に関する記録として、「戸入」の六社神社に寛文5（1665）年の造立を記す棟札がある。

江戸時代初期の古文書に現れる徳山氏領の村名として、徳山の「徳山（本郷）」「山手」「塙原」「塙」・「塙原・志津原（下開田）」「池田（上開田）」「戸入」「門入」の8カ所と根尾の「能郷」名が記録されている。

（第4集より）

第2章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

徳山ダム建設は、昭和32年、電源開発株式会社が発電を主目的に建設計画を発表した。その後、伊勢湾台風をはじめとして相次ぐ下流域の大出水により、昭和46年度からは、建設省が引き継いで調査を行ってきた。そして、昭和48年3月、木曾川水系の水資源開発基本計画の変更により、水資源開発公団が事業を実施することになった。

徳山ダムは流水の正常な機能の維持、水道水および工業用水の供給、ならびに発電を目的として建設する多目的ダムで、ロックフィル形式である。貯水容量は6億6千万m³、堤高は161mである。ダム建設により、洪水満水位水没線は海拔401mとなり、旧徳山村のほぼ全戸が水没(門入地区だけが水没からまぬがれる)することになった。当然、旧徳山村内の埋蔵文化財の殆どが湖底に沈むことになる。

このため、昭和58年10月12日に、水資源開発公団徳山ダム建設所長より遺跡の分布調査の依頼が岐阜県教育委員会にあった。これを受けて、岐阜県教育委員会は、昭和59年10月2日から11月17日にかけて、文化庁の昭和59年度国庫補助事業として分布調査を実施した。そして、昭和60年3月に調査に基づき、「揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書」を発刊した。

さらに、昭和60年5月9日、水資源開発公団徳山ダム建設所において、徳山ダム水没地区内埋蔵文化財発掘調査計画のための打ち合わせを行った。昭和60年夏から秋にかけて、発掘調査計画策定のために、岐阜県文化財保護審議会委員(当時信州大学教授)の大参義一氏の指導のもとに、数回にわたる現地調査を実施した。そして、調査の結果に基づき、昭和61年3月17日、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査計画書を水資源開発公団に提出した。

昭和61年4月7日、水資源開発公団から岐阜県に対し、昭和61年度の発掘調査の委託契約締結の依頼があり、これを受託した。岐阜県教育委員会は、協定書締結のための基礎資料を作成する意味を合わせ持った試行的発掘調査を「はいづめ遺跡」において実施した。

昭和62年3月27日、計画書の一部手直しを行い、水資源開発公団と岐阜県の間で「徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定」を締結した。岐阜県教育委員会では、この協定書に基づき、昭和62年度から発掘調査を実施することになった。

その後、平成3年4月1日、財團法人岐阜県文化財保護センターが発足し、水資源開発公団から岐阜県が受託した発掘調査は、財團法人岐阜県文化財保護センターが岐阜県より受託し実施することになった。この調査体制の変動と新遺跡の発見をふまえ、平成3年4月1日付けで協定書の一部変更を行った。「山手宮前遺跡」は、協定書の変更に基づき、平成4年度と平成5年度の発掘計画により実施した。平成4年度に429m²、平成5年度に2,300m²の、合計2,729m²を発掘調査した。さらに、その後の新遺跡の発見や遺跡面積の変動、徳山ダム建設工期の変更に伴い、平成8年3月1日付けで協定書の第2回目の変更を行い、現在に至っている。

第2節 発掘調査の方法と経過

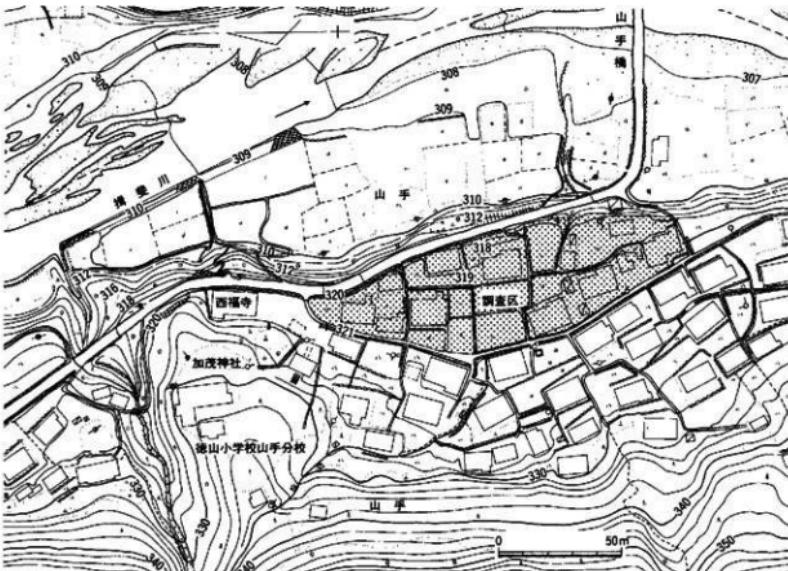
「山手宮前遺跡」は、旧徳山村山手集落の東側段丘上に位置する。廃村前は、宅地及び田畠であったが、調査を開始した平成4年には、廃村から数年を経ており、家屋は解体され、荒蕪地となっていた。調査は、分布調査及び平成4年度に行った試掘調査の結果を踏まえて、村道より東側の2,729m²を対象とした。

調査方法は、グリッドを設定し、中央の湧水地を除いて、全面発掘した。調査区は、中央の湧水地を挟んで、南（下流）側をA区、北（上流）側をB区とし、グリッドは磁北に合わせて基線を設定し、8m単位とした。地形を考慮して、南東端を基点に、南北方向に南からA、B、C…とアルファベットの大文字を、東西方向に東から1、2、3…とアラビア数字を順次付し、グリッドの南東のコーナー杭にグリッド名を記した（第8図）。

掘削はすべて人力で実施し、一部コンクリートなどの除去にのみ車機を使用した。

遺物の取り上げは、トータルステーションの遺跡システムを使用して、出土地点の位置・標高を記録した。ただし、調査全体の進行が遅れ気味だったこともあり、一部の遺構については、最小限の範囲内で一括の取り上げを行った。

土層セクション図のほか、遺構の平面図・断面図・エレベーション図などは、必要に応じて実測し、写真的記録を行った。なお、680余に上るピット・土坑については、平面図と観察記録の作成のみに留めた。発掘調査区全体の遺構プラン図作成及び写真の撮影は、模型ラジコンヘリコプターを使用しての空中写真測量によって実施した。



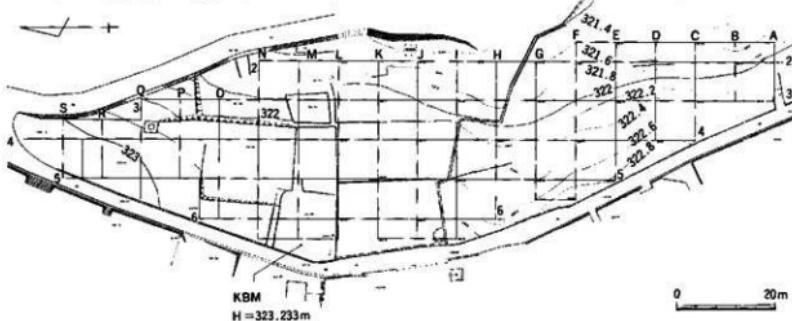
第7図 遺跡周辺地形図 (1/2,000)

次に発掘調査経過について、簡単に述べておく。

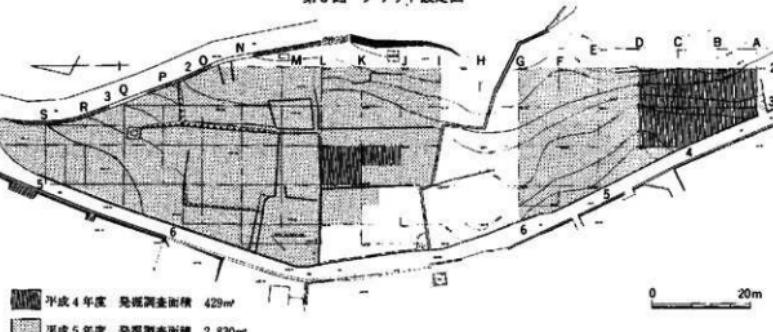
平成4年度は、7月28・29日に、遺跡範囲確認のための試掘調査（1.5m四方、19ヵ所）を行った。その結果、第7図のように、遺跡の範囲を確定した。10月1日より、下流側（A区）429m²の調査を開始し、昭和17年に起こった山手集落33戸全焼の大火灾によるとと思われる焼土及びそれ以前の井戸・廻跡・牛小屋跡などを検出した。また、さし錢などを検出して、11月30日には初年度の調査を打ち切った。

平成5年度は、5月6日より、現地での調査に入り、5月14日の「調査始め式」をもって、正式に調査を開始した。上流側（B区）を中心に、調査面積は2,300m²で、全面発掘を進めた（第9図）。6月は、雨が多く、西側山麓からの湧水が調査区中央に冠水し、作業に支障をきたした。9月に4K・5Kグリッドにおいて、獨立柱建物跡（木柱根）を検出した。11月までに竪穴住居跡5軒の検出を完了したが、さらに、第6号住居跡を確認し、第III層明黄褐色土が早期の包含層であることも判明し、調査の長期化が必至となった。12月10日、第6号住居跡の検出の途中ながら、雨や降雪の日が多くなり、以後の調査は無理と判断し、遺構の保護を施して、本年度の調査を打ち切った。

このような事情で、第6号住居跡の完掘と実測は、平成6年度に当該年度計画とは別に、前年度残務として実施し、空中写真撮影及び測量を行った。さらに、遺構の最終処理・第III層の早期の包含層へのトレンチ調査などを行い、足かけ3年に及んだ調査を無事終了した。
（中島 康夫）



第8図 グリッド設定図



第9図 年度別調査区域図

第3章 層 序

本遺跡は、揖斐川右岸段丘上に立地し、東西約40m、南北約150mを測る。

現地表面は、上流（北）側及び山（西）側が高く、下流（南）側及び川（東）側が低くなっている。そのレベル差は約1mである。なお、遺跡の中央部には、山（西）側からの湧水を流す水路が東西に走り、この付近は若干低くなっている。

調査に伴い、南北方向として4列、東西方向としてD列・M列・P列のセクションベルトを残し、土層断面を記録した。全体的には同じ様相を呈しており、基本的に上層より第I層表土・耕作土、第II層暗褐色土層、第III層明黄褐色土（砂混じり）、第IV層黄褐色粘質土・黄褐色砂礫層（段丘堆積物層・地山）に分けられる。

各セクションベルトの土層断面図より代表的な部分を図示した（第10図）ので、これにより本遺跡の土層堆積を述べる。

第I層 表土及び耕作土等がこれにあたる。厚さ10~20cm程度である。

第I'層 水田耕作に伴う敷土で、鉄分の沈着がみられる。所々にみられた。

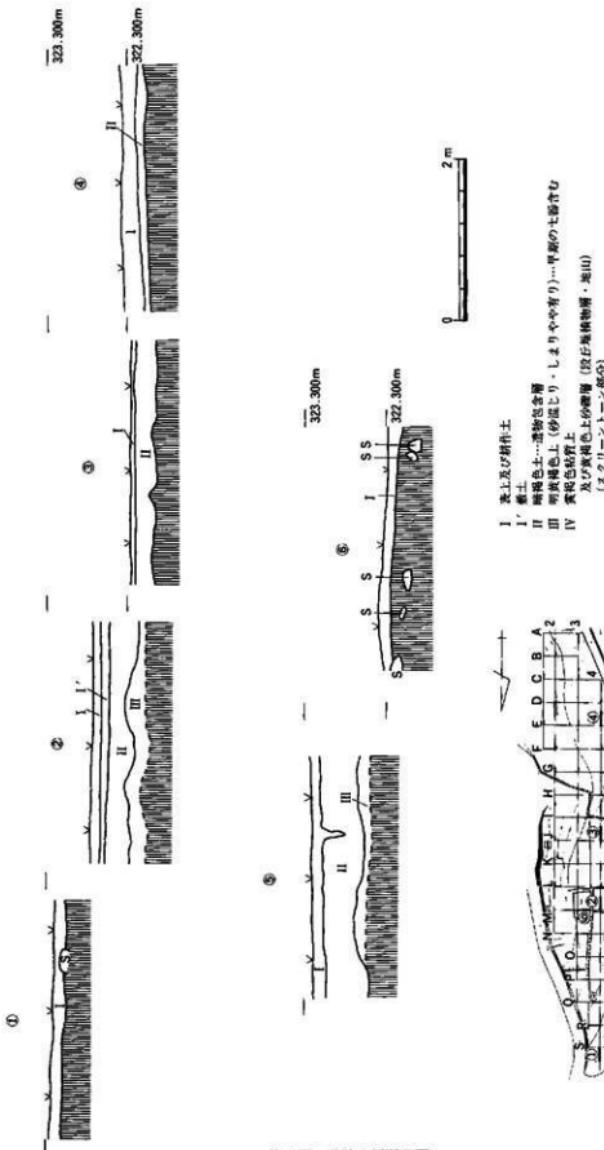
第II層 暗褐色土層で、縄文時代中期後葉を中心とし、前期後葉から弥生時代前期、さらには古代から中・近世にかけての遺物の包含層である。多數の遺構を検出した縄文時代中期後葉の生活面は、この暗褐色土層中であったと考えられる。厚さは10~50cmで、段丘中央部の山側は厚く、川側及び上流（北）側は薄い（場所によっては、ほとんど残っていない所もある）。

第III層 明黄褐色土・砂混じりの層で、しまりがややあり、縄文時代早期の土器の包含層である。段丘中央部付近の4Lから5Lグリッド付近にみられたが、その下の段丘堆積物層（黄褐色粘質土及び黄褐色砂礫層・地山）との明確な分層は難しく、また、他の地点では遺物が出土しなかったこともあり第III層の認定は困難であった。

第IV層 黄褐色粘質土及び黄褐色砂礫層で段丘堆積物層であり、地山である。

今回の調査において、從来地山とされてきた段丘面における（明）黄褐色土層中より縄文時代早期の土器が比較的まとまって出土した。山手宮前遺跡においては、縄文時代早期の段階には黒褐色土や暗褐色土の堆積は無く、（明）黄褐色土（砂混じり）が生活面であったと考えられる。しかしながらこの層をその下に堆積する段丘堆積物層（黄褐色粘質土及び黄褐色砂礫層）と明確に区別することはできなかった。

なお、以上の基本層序の他に、集落内の家屋及びそれに付随する施設等に伴う搅乱も、多数みられた。また下流（南）側のA区では、昭和17年に山手地区が大火にみまわれた際の焼土面もみられた。



第10図 遺跡土層断面図

第4章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 概 略

山手宮前遺跡では、縄文時代中期後葉を中心とした多数の遺構の検出および遺物の出土をみた。

1. 遺構について

本遺跡で検出した縄文時代の遺構は、住居跡（炉跡）8軒、土器埋設遺構1基、ピット・土坑合わせて88基（縄文時代の遺物の出土したピット・土坑のみの数）である（第12・13図）。

8軒の住居跡のうち、SB2・SB5・SB6の3軒は平面形も確認でき、平面形や規模も考えることができた。それに対し残りのSB1・SB3・SB4・SB7・SB8は炉跡のみの検出で、住居跡の平面形や規模については確認できなかった。SB5とSB6からは埋甕を検出し、共に逆位で埋設されていた。SB2とSB8の炉内には土器が敷かれており、SB6の炉内にも一部土器が敷かれていた。SB3の炉は複式炉であった。

ピット・土坑のうち、P585からは剥片20点が、また、P586からは切目石錐13点が一括して出土し、またSK17からも切目石錐9点が出土した。このSK17を含むSK16～SK19・P125～127・129・135は配石を伴っていることから、配石土坑（横）群とした。これらの遺構の時期は、中期後葉がほとんどである。

2. 遺物について

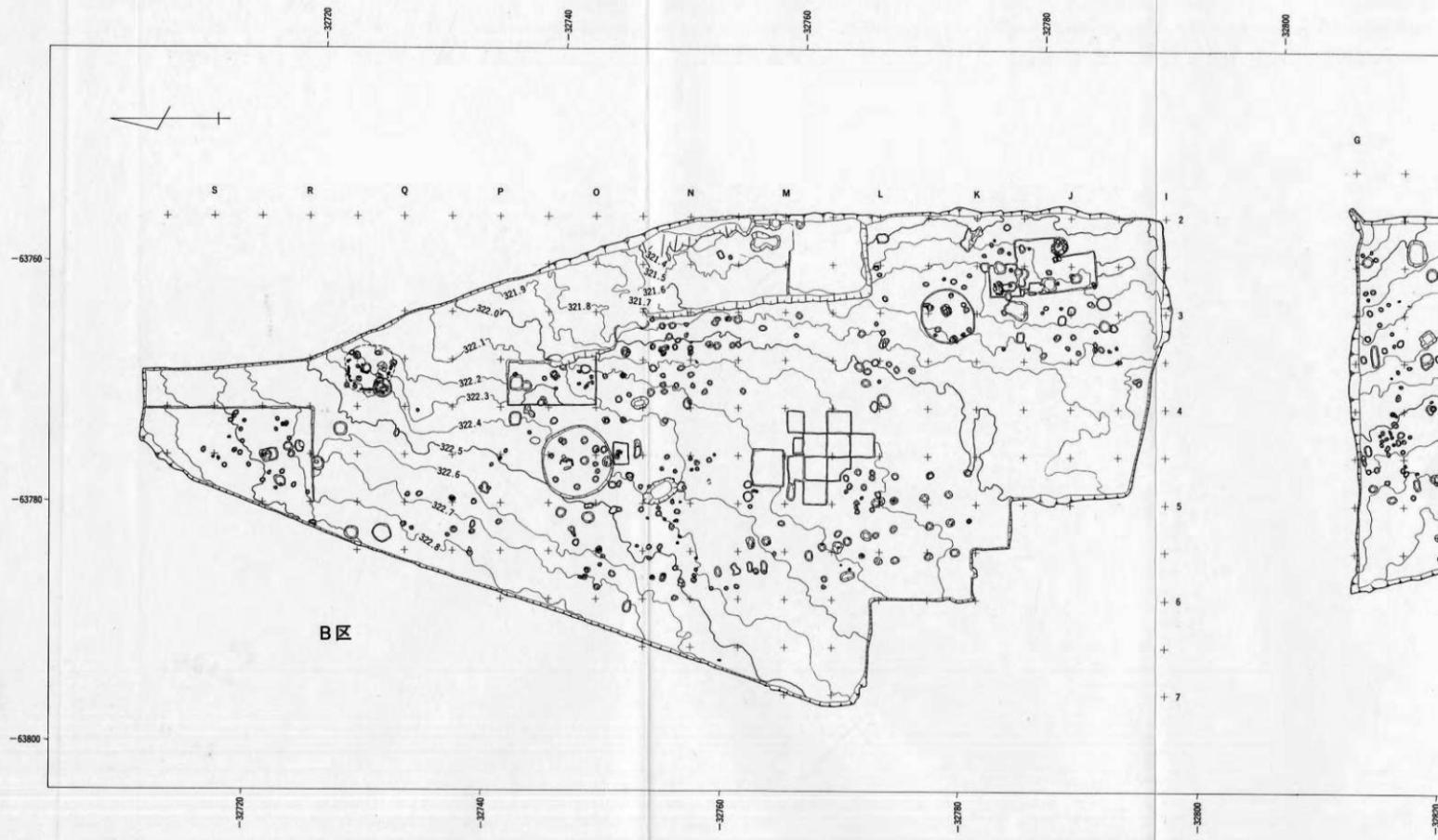
本遺跡で出土した縄文時代の遺物は、縄文土器7,562点、石器1,292点の合わせて8,854点である。出土した土器は、中期後葉のものがほとんどであるが、早期・前期そして後期や晩期から弥生時代前期の土器も含まれていた（66頁、第7表）。

これらの遺物の出土状況をドットで落としたのが第14・15図である。縄文時代の遺物のほとんどは、遺跡中央部の水路を挟んだ上流（北）側のB区より出土し、住居跡や炉跡およびピット・土坑を中心にその周辺より出土している。これらの遺物の出土状況のドットは、大きく環状のベルトの中に集中する。

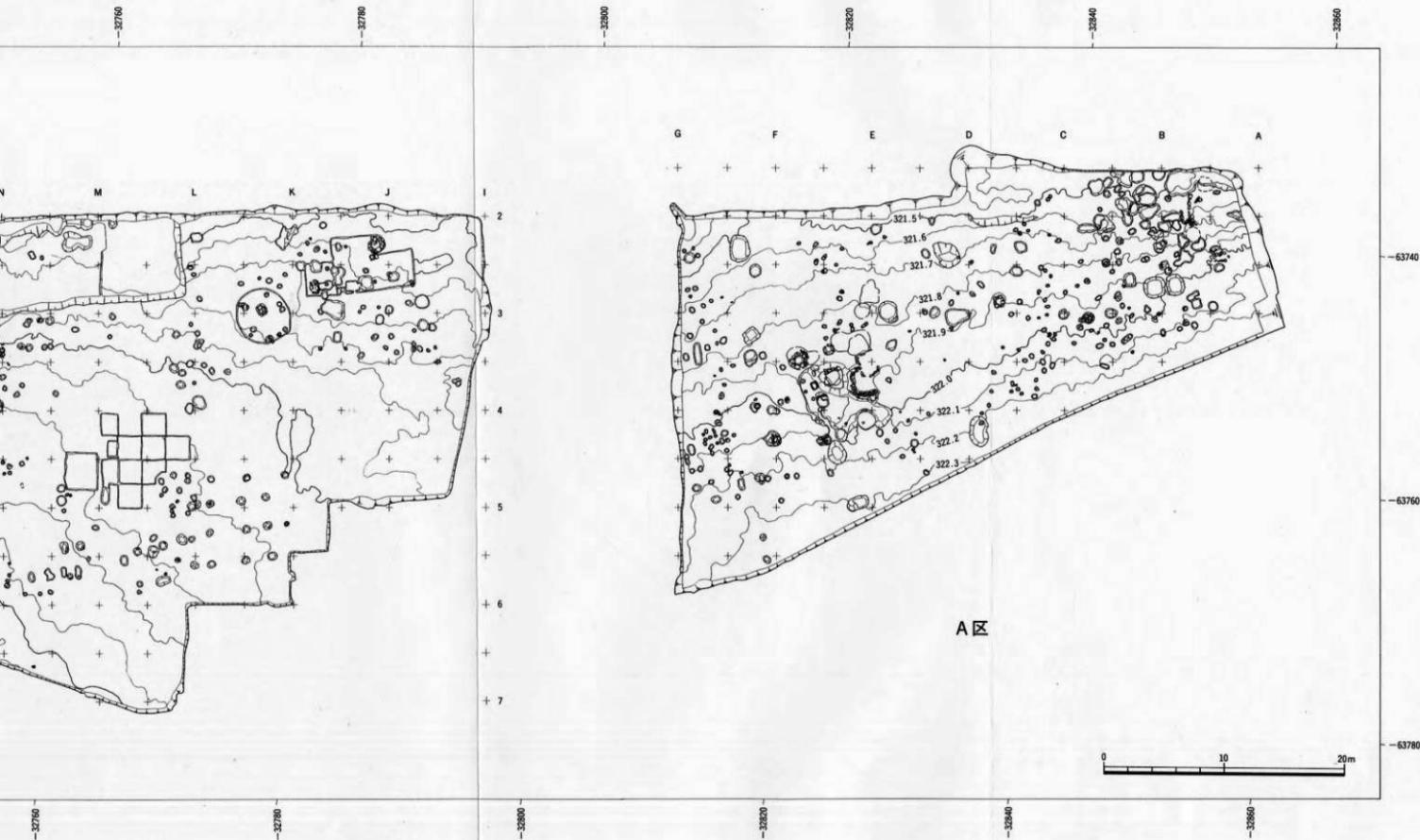
3. 遺構と遺物の分布について

前述のように、縄文時代の遺物の出土は大きな環状のベルトの中に集中する（第14図）。

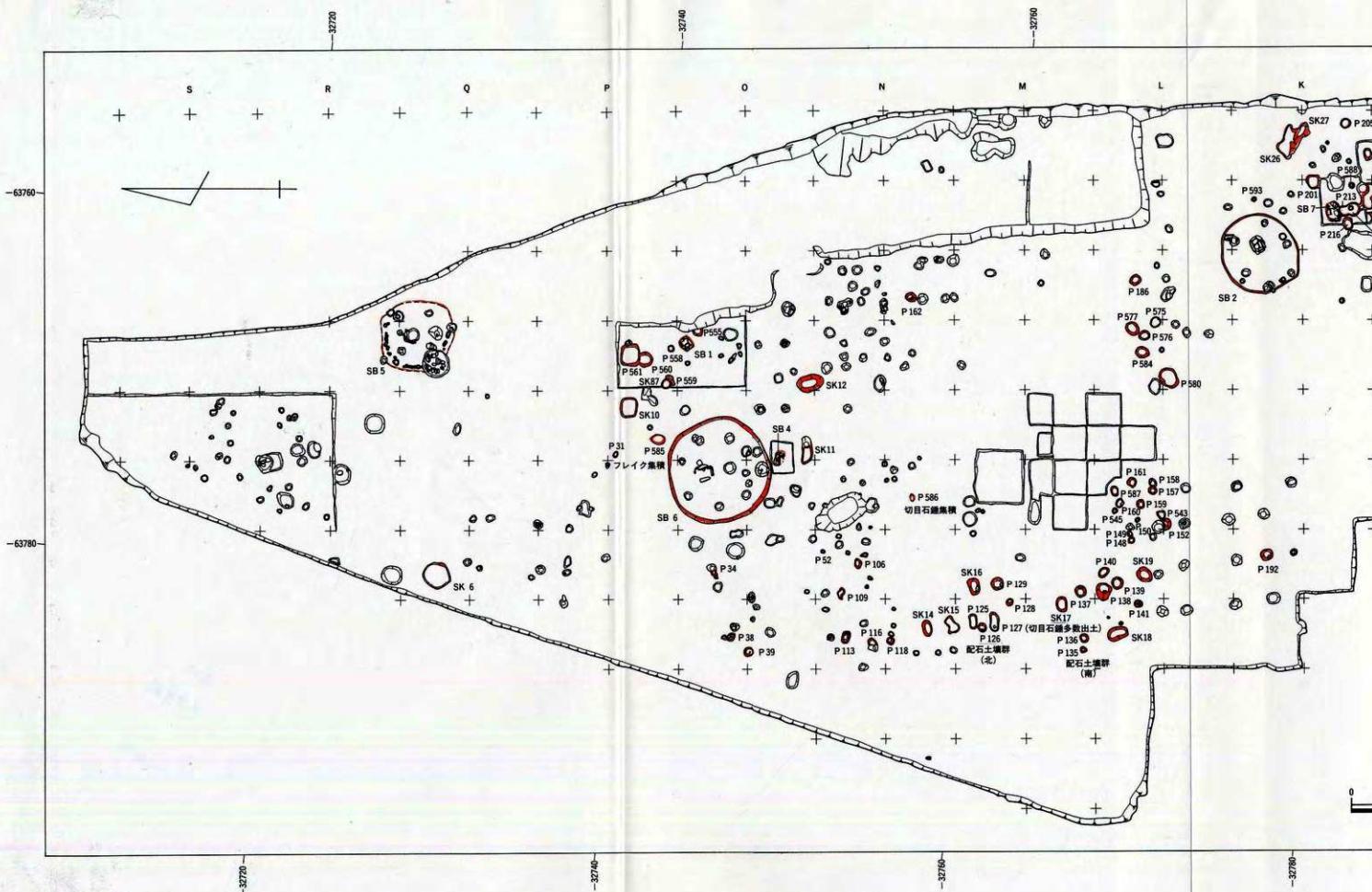
そして、縄文時代の主な遺構も、遺跡中央部の水路を挟んで下流（南）側のA区で検出したSB8を除いて、この環状のベルトの中に入ってくる。遺構と遺物の分布には環状構造が認められそうである。この点については、第4節まとめと考察の中で詳しく触れてみたい。



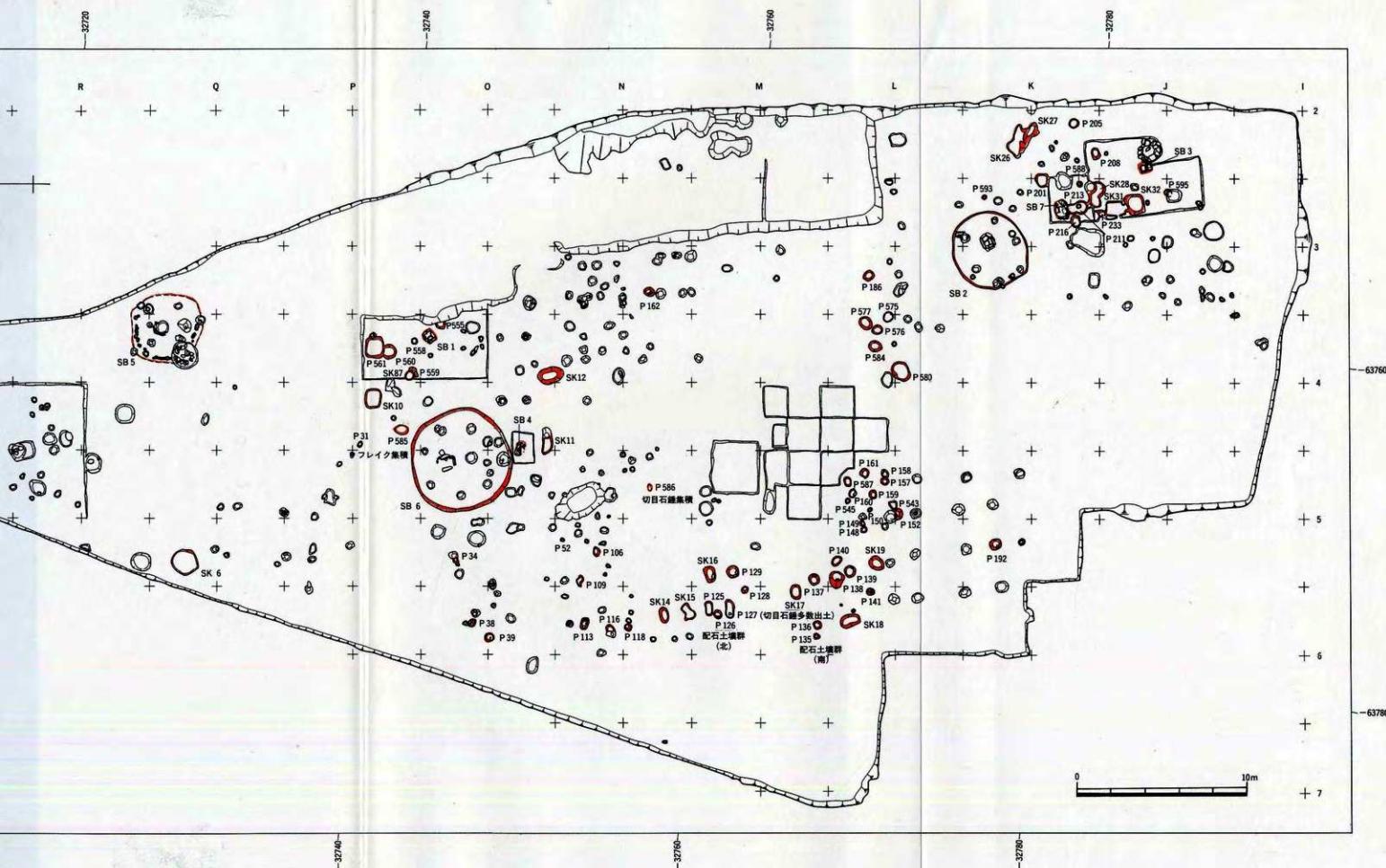
第11図 遺構配置全体図



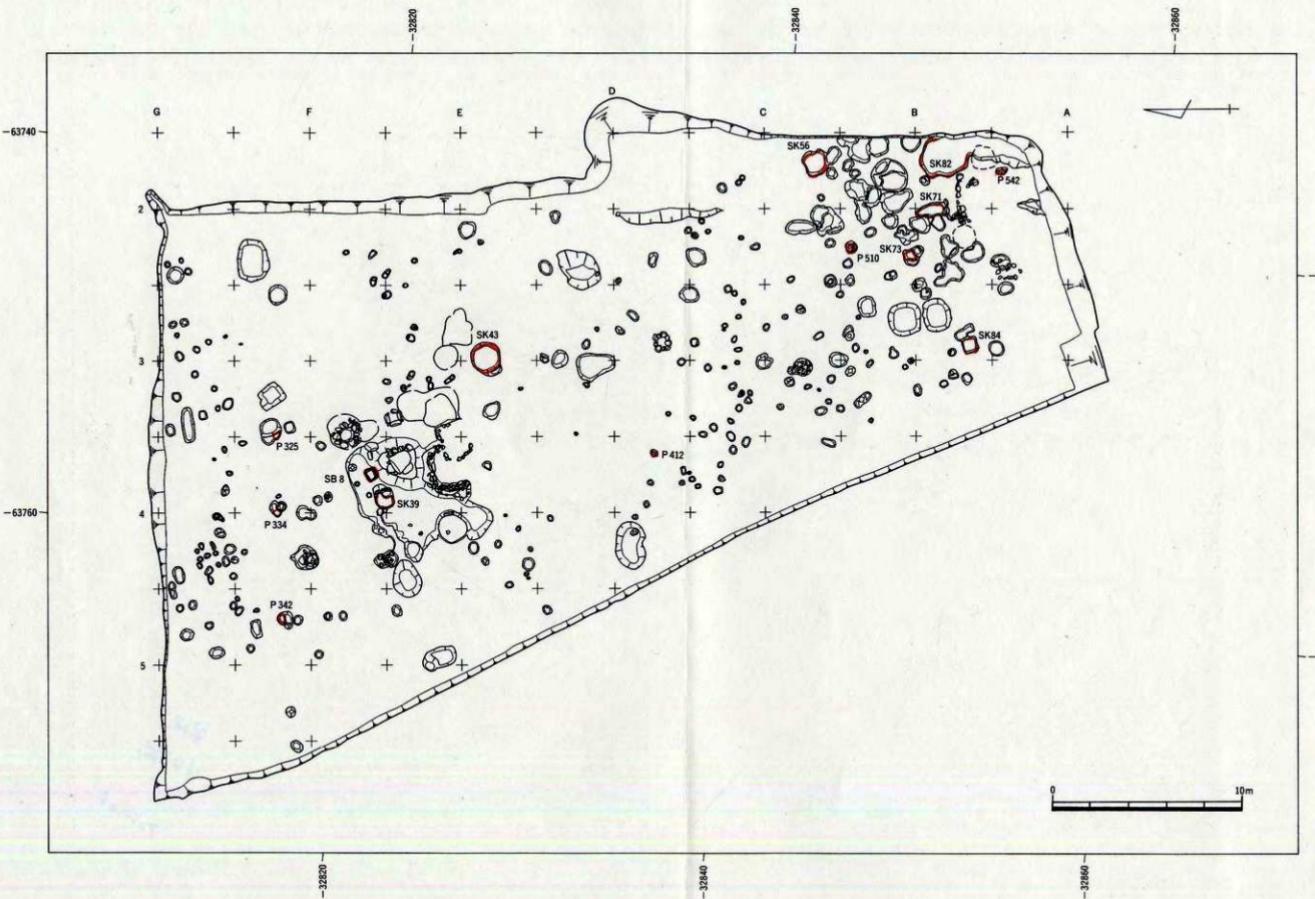
第11図 造構配置全体図



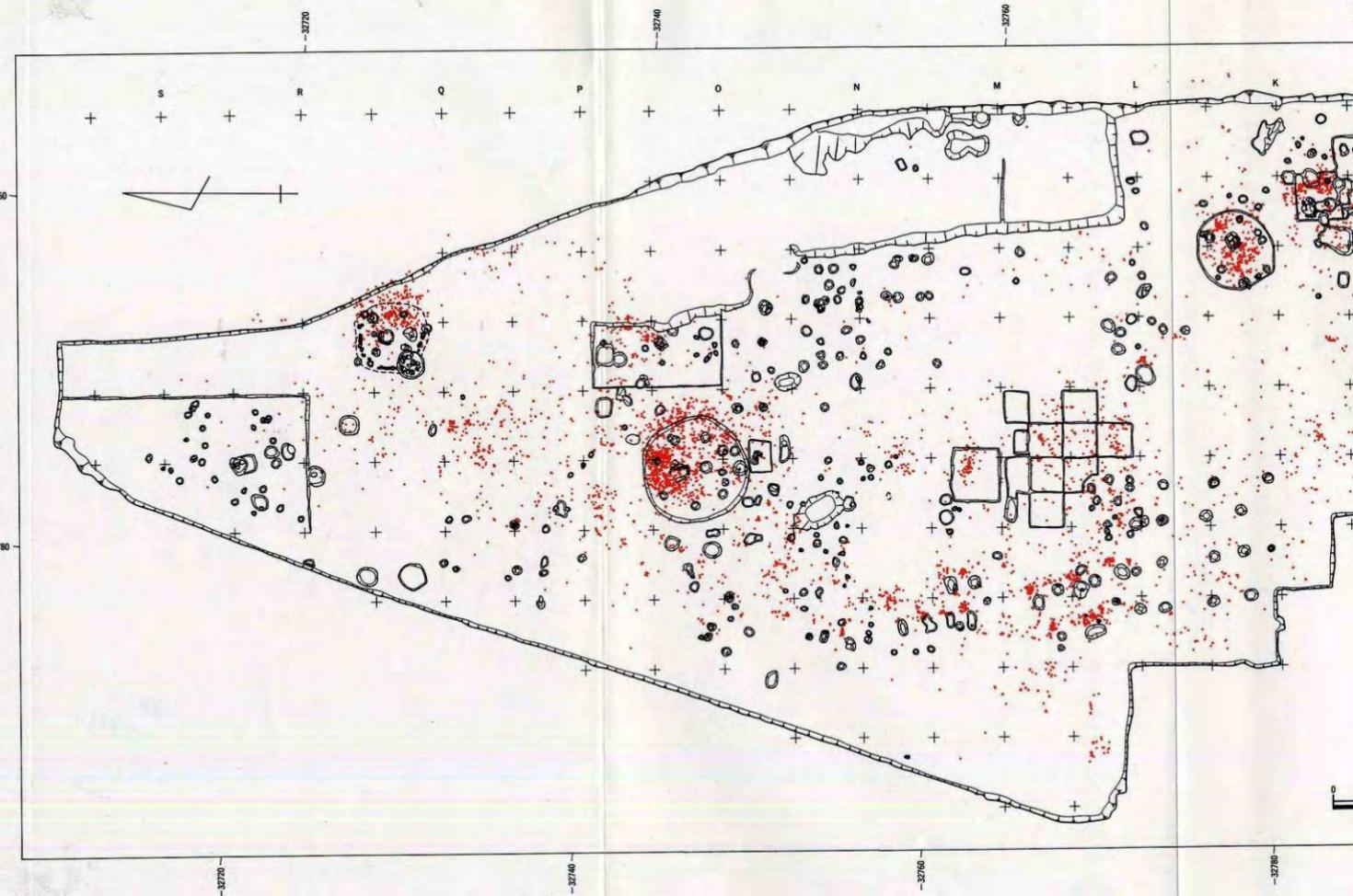
第12図 縄文時代の遺構配置図（B区）



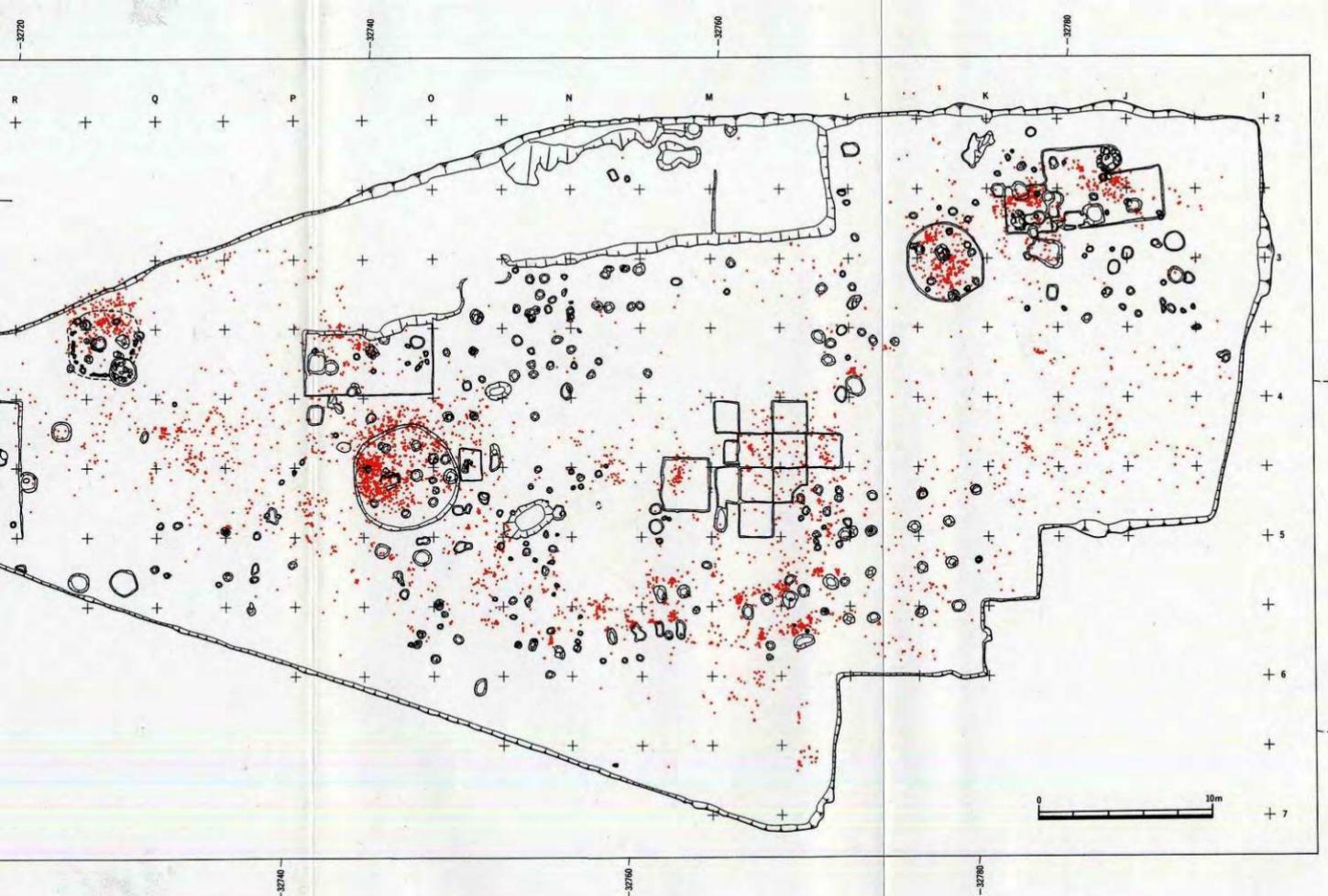
第12図 縄文時代の遺構配置図（B区）



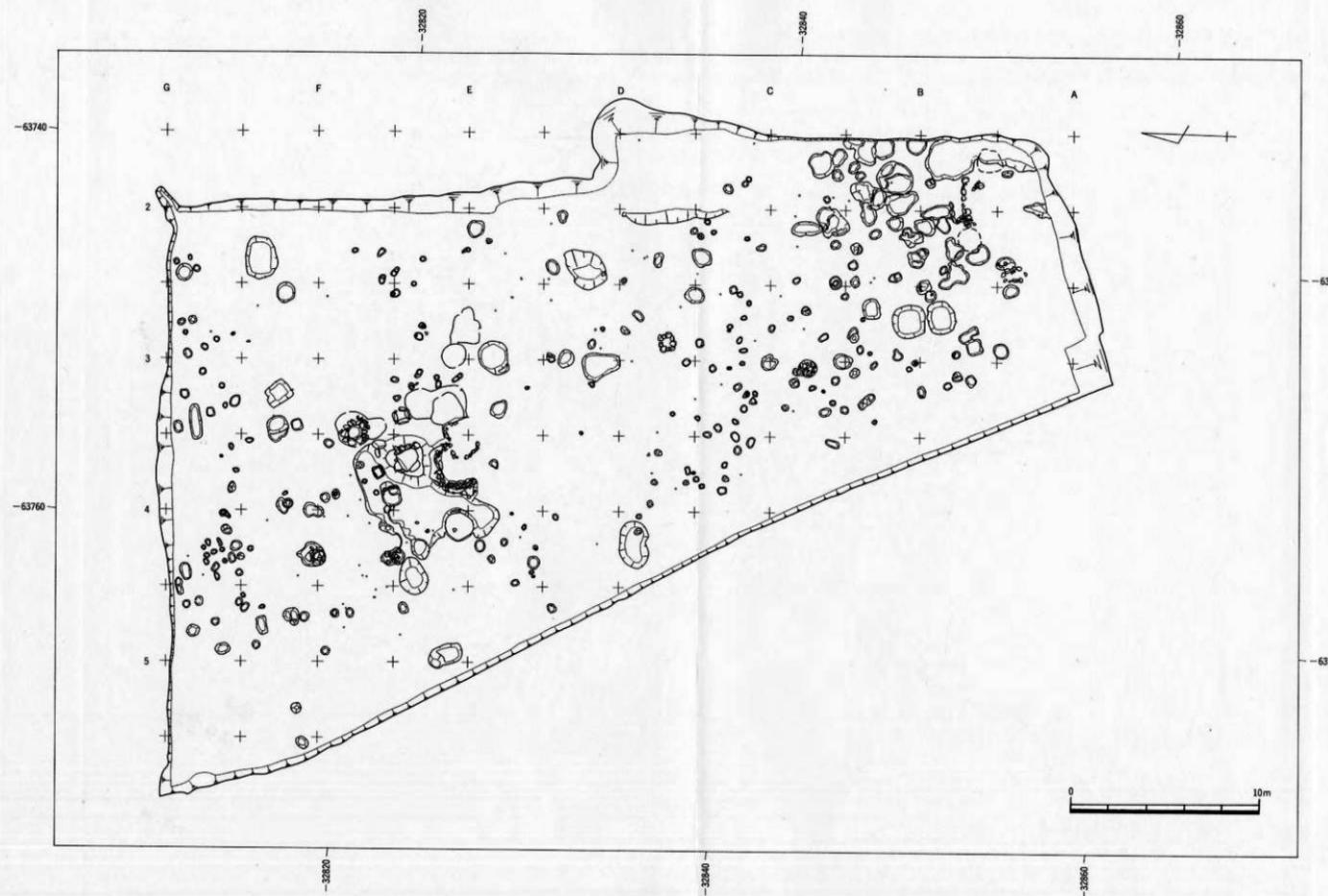
第13図 純文時代の造構配置図（A区）



第14図 繪文時代の遺物出土状況（B区）



第14図 縄文時代の遺物出土状況（B区）



第15図 縄文時代の遺物出土状況（A区）

4. 土器分類について

本遺跡では、縄文時代中期を中心として、早期から弥生時代前期までの土器7,562点が出土した。今回の報告にあたり、有文系土器を中心に、現在用いられている型式設定を適用しつつ、文様要素・文様構成・型式等を考慮し、時期的変遷によりⅠ～Ⅴ群に分類した。

なお、無文系深鉢形土器（無文土器・縄文土器）、時期・型式等不明の土器、浅鉢、底部および脚台、土製品、赤色物の付着した土器についてはその他の土器として、全体としてⅥ群の構成とした。

各群の内容は次の通りである。

第Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器

1類 高山寺式土器

2類 その他の土器

第Ⅱ群土器 縄文時代前期後葉から末葉の土器

1類 北白川下層Ⅲ式から大歳山式土器

2類 諸磯C式から十三菩提提式土器

第Ⅲ群土器 縄文時代中期の上器

1類 船元Ⅲ式土器

a種 縄文を地文とし、貼付隆帯の両側に半截竹管状工具による平行沈線文を施すもの

b種 隆帯や沈線を多用し、船元Ⅲ式が在地化したと考えられるもの¹⁾

2類 縄巻縄文を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線文を施す船元Ⅳ式土器

3類 地文に燃糸文・条線を施す里木Ⅱ式²⁾に類似する土器

a種 燃糸文を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線文を施すもの

b種 燃糸文を地文とし、棒状工具による沈線文を施すもの

c種 燃糸文を地文とし、棒状工具を使った交互刺突および刺突列のみられるもの

d種 燃糸文を施すだけのもの

e種 地文が条線文のもの

f種 その他の土器

4類 極端なキャリバー口縁をもつ器形を呈し、口縁部には渦巻文や梢円形区画文を配して、胴上部には棒状工具による連弧文を施す土器で、中富Ⅳ・V式、炉烟式³⁾などの型式名をもつが、いわゆる咲烟式土器⁴⁾

a種 口縁部文様を隆帯によって、渦巻文とそれに連なる弧状文を描く土器。素面状の粘土紐による格子目文のみられるものもある

b種 口縁部文様である梢円形区画や渦巻文を沈線で表現している土器。口縁部上端に棒状工具を使った交互刺突や刺突列のみられるものもある

c種 胴部

d種 その他の土器

5類 その他の中期の土器

第IV群土器	縄文時代後期の土器
第V群土器	縄文時代晚期から弥生時代前期の土器
第VI群土器	その他の土器
1類	縄文のみのもの
2類	無文のもの
3類	時期・型式等不明の土器
4類	浅鉢
5類	底部および脚台
6類	土製品
7類	赤色物の付着した土器

- 1) 戸入村平遺跡(武藤1994)のC2群土器では、船元III式が在地化したと考えられるもので、貼付隆帯による施文を基調とするキャリバー形口縁をもつ器形の土器。そのほとんどが島崎II式に分類されているものとしている。
- 2) 増子康真氏は、東海西部中期後半の地文に撲糸文を施す土器を中富I～III式に分類している。
- 3) 炉畠遺跡の発掘調査により出土した第I・II群土器を大江命氏は、炉畠式と仮称した(大江1973)。
- 4) 咲烟貝塚の発掘調査により出土した中期の土器群を久永春男氏が咲烟式と設定し、加曾利E式の新しい時期のものに近縁関係を持つとした(久永1960)。その後増子氏は、学史を尊重して咲烟貝塚の報告書の第1群A類を中富V式土器、第1群B類を咲烟式土器と呼称するとした(増子1986)。本稿では、咲烟貝塚の第1群A類土器および、増子氏の中富IV・V式土器、炉畠遺跡の第I群土器に類似する土器を総称して、咲烟式土器とした。

なお、各群一類は必要に応じて細分し、種別した。第III群土器のうち2類から4類が中期後葉にあたり、本遺跡で出土した土器の大半がこの時期のものである。

以上の分類は、様々な型式設定を参考にしているものの、東海・近畿・北陸の接点に位置するという徳山の地域的特性をふまえ、便宜的な部分や曖昧な部分もあることを断っておきたい。

第2節 遺構

本遺跡より検出した縄文時代の遺構について

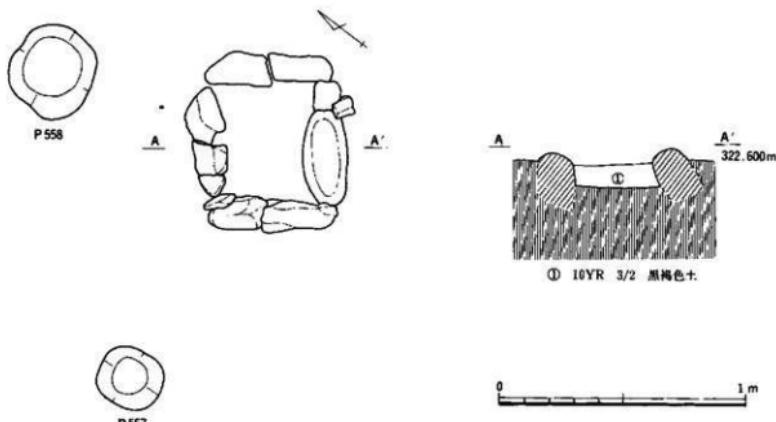
住居跡（炉跡）、配石土坑（壙）群、土器埋設遺構、石器類の集積遺構、その他の順で述べていく。

1. 第1号住居跡（SB1）

SB1は30グリッドに位置する。川原石を方形に組んだ石囲炉を検出した。石囲炉の規模は、約65cm×約70cmである。石の大半は、被熱により割れている。

炉内には、黒褐色土が堆積していた。炉の付近より、柱穴の可能性を考えられるピット2基（P557・P558）を検出した。P557は径約25cm、深さ約15cm、P558は径約35cm、深さ約20cmである。しかしながら、他の柱穴及びプランは検出できなかった。したがって、SB1の平面形及び規模は不明である。なお、SB1の石囲炉は、他の住居跡の石囲炉と比べて、やや高いレベルで検出した。

SB1の時期については、伴出した土器より中期後葉と考えられる。



第16図 第1号住居跡（SB1）

2. 第2号住居跡（SB 2）

SB 2は、2 Kから3 Kグリッドにかけて位置する。南東約5mにはSB 7の石圓炉が位置する。SB 2は、暗褐色土の掘削をほぼ終了する頃に黄褐色土に掘り込まれた径約4mの円形プランを検出した。住居跡の覆土中央部上層（黒褐色土）からは、横位でつぶれた土器1個体分（1022 図版3）が出土し、また、覆土南側周辺部の上層（暗褐色土）からは、土器2個体分（1023・1024）が出土した（第20図）。(1023)は外面を上にして口縁部を東側にむけて出土し、(1024)は内面を上にして二重に重なって出土した。この3点以外に土器のまとまった出土ではなく、小片ばかりであった。

完掘後のSB 2の平面形は、長径4.5m、短径4.2mでやや楕円ぎみの円形を呈し、中央部や奥（北東側）に石圓炉が組まれている。この石圓炉の位置および形よりSB 2の主軸はN-54°-Eで、入り口は南西側と考えられる。

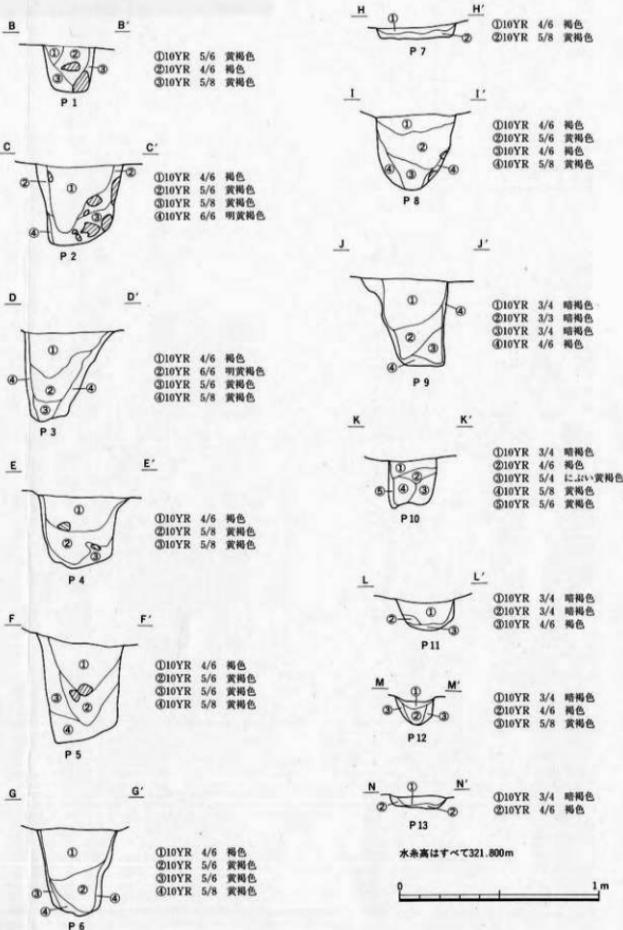
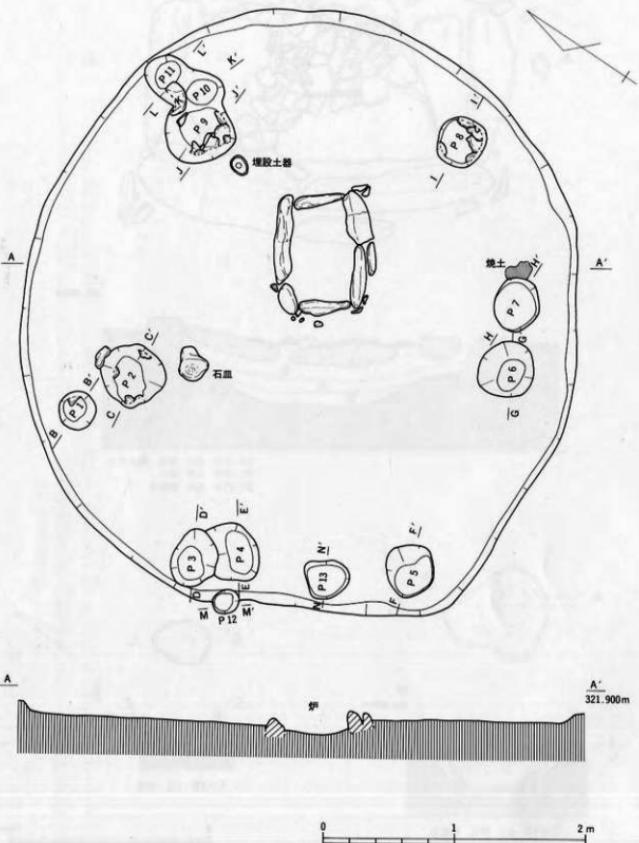
ピットは13基検出した。このうち、P 2・4・5・6・8・9の6本が主柱穴と考えられ、その大きさは、径約40cm、深さ約30~50cmである。なお、P 7の北東には焼土が認められた。

石圓炉は7個の川原石で長方形に組まれ、その規模は長径約90cm、短径約75cmである（第18図）。

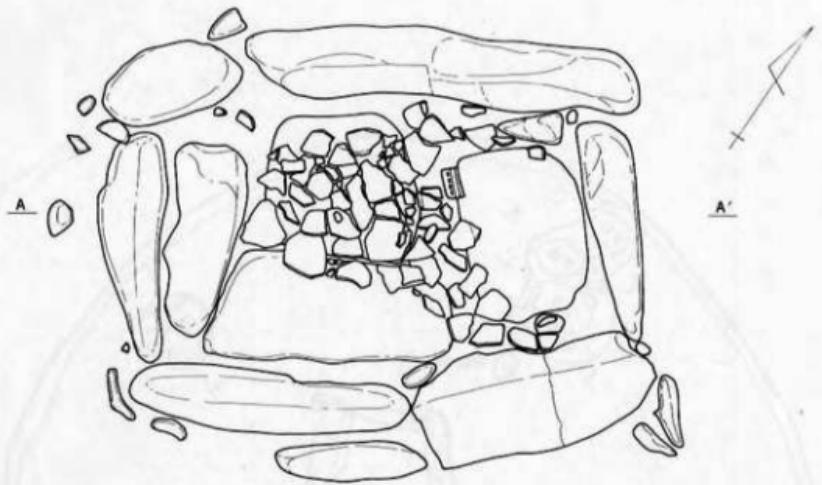
南東部分には、一部石が二重に並べられた所もみられる。石圓炉の中には、土器が敷かれていた。土器は、胴下半部（1028）と口縁部片（1025~1027）がみられる。これらは同一個体と考えられる。土器の下には、扁平円碟が敷かれており、その石の下には、焼土も堆積していた。炉穴の深さは土器の敷かれていた面から約15cmを測る。

石圓炉の西約80cmの地点には、砂岩製の中央に凹をもつ石皿が床面に埋設されていた。また、石圓炉の北約40cmの地点にも床面に土器が埋設されていた。土器は、底部から胴下半部にかけて約5cmを測る。

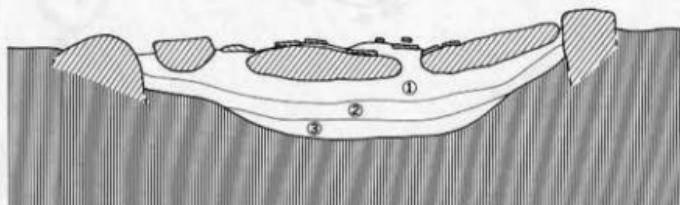
なお、SB 2は黄褐色土面を浅く掘り込んでおり、その検出時の掘り方は10cm程度であるが、覆土中の土器（1022）の出土地点から想定すると住居は暗褐色土中から掘り込まれており、当時はもう少し深かったと考えられる。



第17図 第2号住居跡 (SB 2)



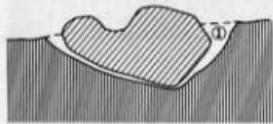
A
A'
321.800m



①7.5YR 4/4 褐色 烧土混入
②7.5YR 4/6 褐色
③7.5YR 5/8 明褐色



B
B'
321.800m



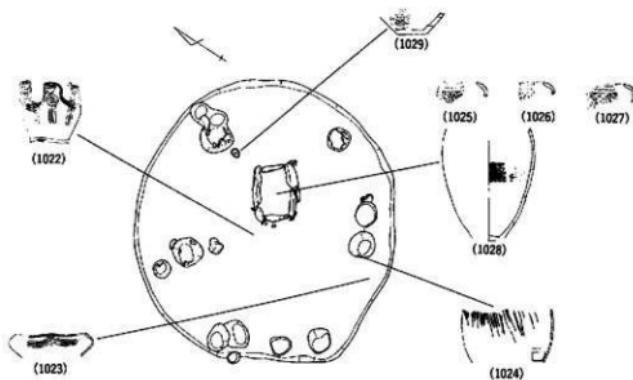
①10YR 4/4 褐色、粘質土

C
C'
321.700m

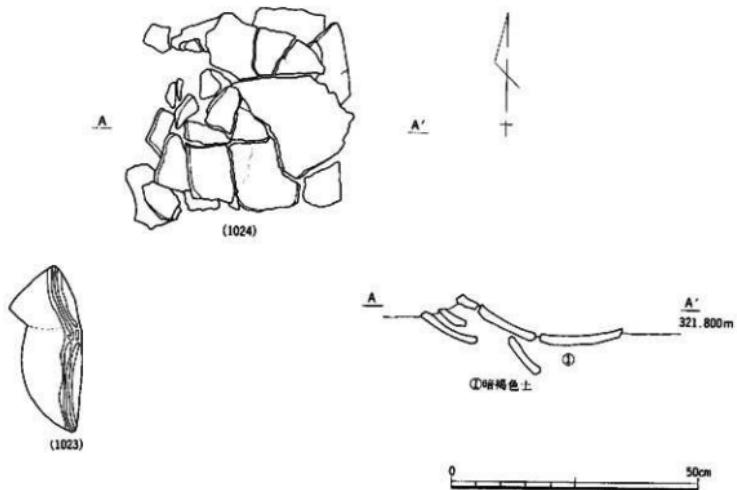
①10YR 4/4 褐色

0 50cm

第18図 第2号住居跡石圓炉・石皿・埋設土器



第19図 第2号住居跡土器出土地点



第20図 第2号住居跡土器（1023・1024）出土状況

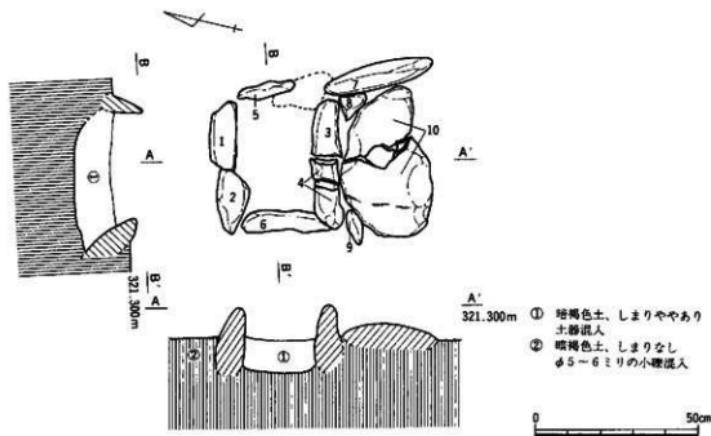
3. 第3号住居跡（SB3）

SB3は2丁グリッドに位置する。方形の石圓炉の検出のみで、柱穴やプランの検出はできなかった。すぐ東側には現代の井戸が掘られ、井戸の構築の際に炉石の一部も抜き取られていた。井戸の上面の石とSB3の炉石のレベル差はほとんどなく、炉石の一部は調査前から現地表面に顔を出していた可能性もある。SB3は暗褐色土に掘り込まれており、掘り方は後世の改変等で削平されてしまったと考えられる。

石圓炉は、扁平円礎を立てて方形を2つ作る意図がみえ、複式炉であったと考えられる。¹³⁾ 残存する炉の規模は、長径約65cm×短径約55cmで、南側の炉には、炉内に扁平円礎（第21図の10）が敷かれており、この石は被熱のために割れている。北側の炉には、4個の扁平円礎を横に立てて並べ約45cm×約35cmの方形の炉を作っている。北側の石（1・2）は被熱により割れしており、割れた上に西側の半分（2）が180°回転している。北側の炉の南側の石（3・4）は被熱により割れて2つになっており、一番高い所には磨ったような跡がみられた。西側の石（6）はかなり斜めに立った状態で検出された。もともと斜めに立てて作られていたのか、後世の人為的な影響で斜めになったものはっきりしない。残存状況より判断して北側の炉が小さく、炉内に石の敷かれた南側の炉が大きかった可能性も考えられる。

なお、北側の炉内の土より土器の小片が出土し、この中には前期後葉から末葉の土器も含まれていた。炉の付近から出土した土器には、前期後葉から末葉の土器と里木II式土器がみられた。SB3の時期は中期後葉であり、そこへ前期の遺物が混入したものと考えたい。

1) 德山地区の調査で複式炉の検出は初めてである。



第21図 第3号住居跡石圓炉

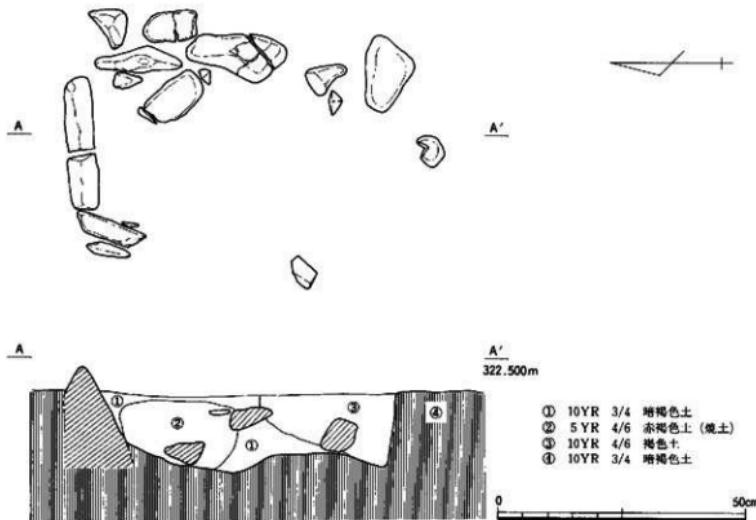
4. 第4号住居跡 (SB 4)

SB 4は4Nグリッドに位置する。石圓炉のみを検出し、柱穴やプランについては確認できなかった。石圓炉は扁平円礫を(長)方形に組んだと考えられるが、約2分の1が失われており、全体の形は不明である。残存する炉石より北側の長さは約50cm、東側の長さは50~70cmと考えられ、石圓炉の主軸は、南北方向を向いている。

炉石は8~25cm前後のやや小型の川原石を用いて構築しており、被熱によるひび割れの認められるものもある。炉内には厚さ12~13cmの焼土が堆積しており、焼土内からは小片ながら土器も出土した。また、炉内には5~10cm大の円礫多數が認められた。

SB 4炉跡のすぐ北側からはSB 6を検出しており、SB 4の平面形が不明なため積極的な根拠はないが、SB 6の遺存状態などよりSB 4の方が古いと考えたい。

なお、炉跡だけをくらべると、SB 4の炉石はSB 6の炉石よりも約25cm高いレベルで検出した。出土した土器より、SB 4の時期は、中期後葉と考えられる。



第22図 第4号住居跡石圓炉

5. 第5号住居跡 (SB 5)

SB 5は3Qグリッドに位置する。段丘の川側端部あたり、遺跡の北端付近に位置する。現生活面から20~30cm下で検出したが、開墾等により搅乱を受けており、掘り方の検出はできなかった。黒色土を掘削し、黄褐色土まで達した段階で石窯炉を検出した。石窯炉は直径95~100cmの円形で、北側及び西側には、炉石（15~35cm大の川原石）が残るもの、東側と南側の炉石は残っておらず、炉石の抜き取り痕と考えられる凹みを6ヶ所検出した。礫には被熱による割れも認められた。炉穴は深さ約20cmを測り、下部に数センチの焼土堆積がみられた。この焼土の上面には炭化物もみられ、小片ながら土器も含んでいた。

南東の一角を近現代の井戸により削平されるが、石窯炉の周辺からは、11基のピット（P 1~P 11）を検出した。このうちP 3・P 6・P 8は主柱穴と考えられ、その規模は径40~60cm、深さ15~20cmである。もう1基の主柱穴は南東の井戸の部分にあり主柱穴の数は4本であったと考えられる。P 9・P 11は土色などによりSB 5には関係しない、後世のものである可能性が高い。

石窯炉の南側のP 2からは埋甕（1076）が出土した。埋甕のある方が入り口部と仮定するとSB 5の入り口は南側であり、主軸はN-9°-Wである。埋甕は、径約60cm、深さ約45cmのピット内に逆位で埋められており、底部は穿孔されていた。埋甕内には、すきまなく土がつまっており、この土の中には炭化物と少々の骨片が含まれていた。また、P 2の埋土の埋甕の外の土からも炭化物を検出した。分析の結果、これらの炭化物はブナ属、クリ・カエデ属など複数の樹種を含んでいることが判明した。また、これらの炭化物から測定された放射性炭素年代測定値は 4150 ± 140 yrBPであった（第6章）。

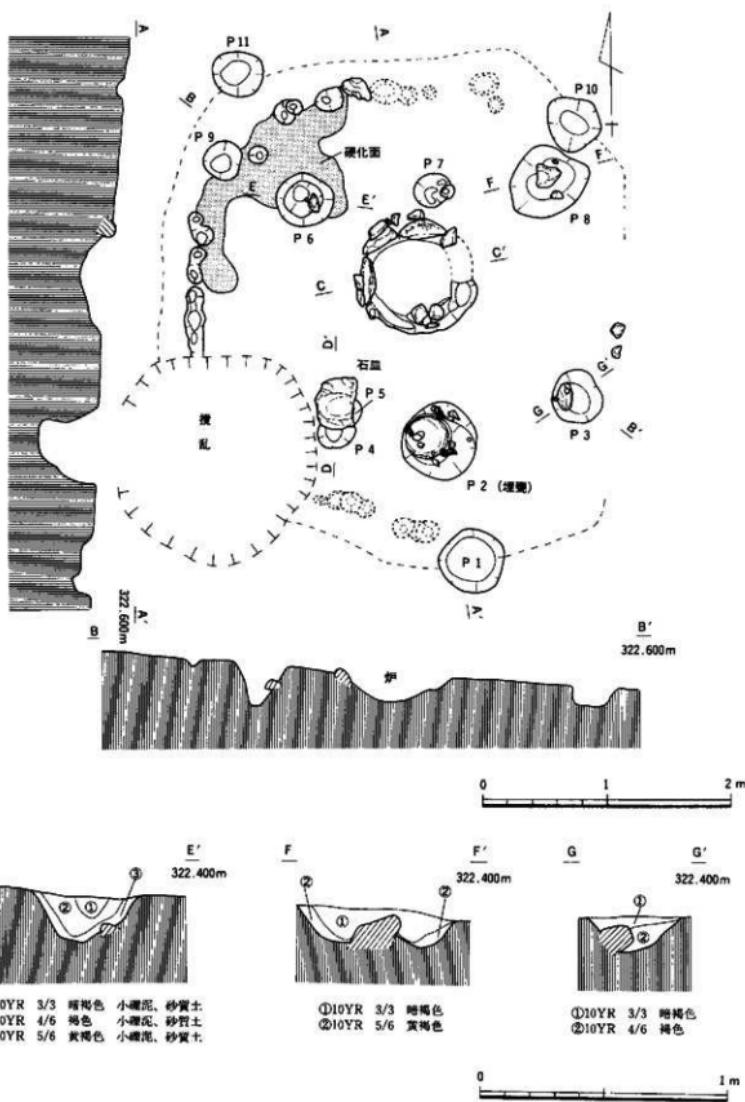
なお、P 2の埋土上層（①層・②層）より、土器片（1077）が出土した。

埋甕の西、やや炉よりの地点からは、床面に埋設された約30×40cmの大型の石皿（764）を検出した。砂岩製で中央部には深い凹みをもち、質量50kgを測る。石皿は大型で、底部も不安定であり、それを安定させるために掘り方は約25cmを測る。なお、石皿の南にあるP 4は、後世のものと考えられる。

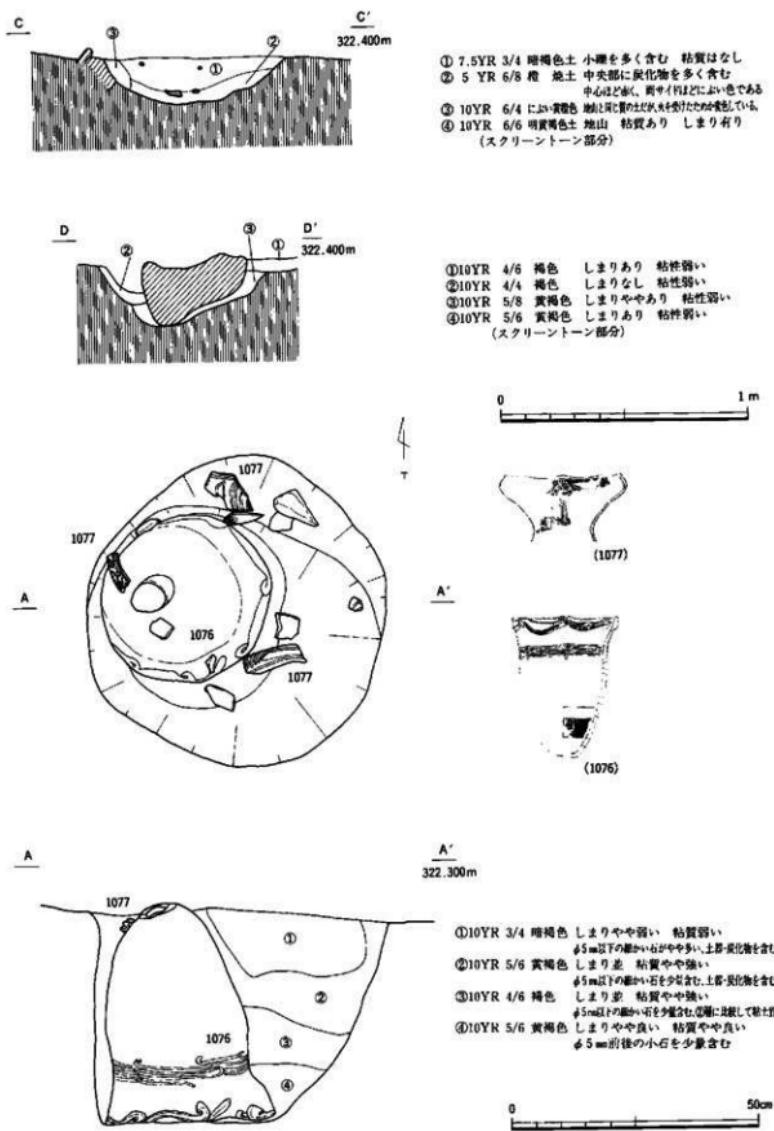
また、SB 5の床の北、西そして南側周辺部からは径10~30cm、深さ5~30cmの連続する小ピット状の遺構を検出した。22ヶ所を確認したが、一部は重複したり切り合ったりする。東側からは検出できなかったが、本来は住居の床の周辺部を一巡した柱穴群の可能性がある。

なお、微妙な土質の変化から、床の端と考えられるラインを平面図（第23図）に破線で示した。こうした小ピットの配置や土質の変化からみると、SB 5の平面形は隅丸方形の可能性が高く、その規模は約4m四方と考えられる。床面については明瞭に識別できなかったが、北西の一部にて岡くしまった土間状の土（明黄褐色）を認めた。検出した床（黄褐色土）の面は、北側と西側が高く、東（川）側と南（下流）側が低い。これは段丘の地形によると考えられ、東側や南側は、本来もう少し上の暗褐色土中に床を設けていたことも考えられる。いずれにしても、検出した面までは搅乱が加わり、東側や南側の炉石が抜き取られていたのもその為と考えられる。

埋甕として転用されていた土器や炉内から出土した土器（1083・1085）から考えて、SB 5の時期は中期後葉である。



第23図 第5号住居跡 (SB 5) (1)



第24図 第5号住居跡 (SB 5) (2)

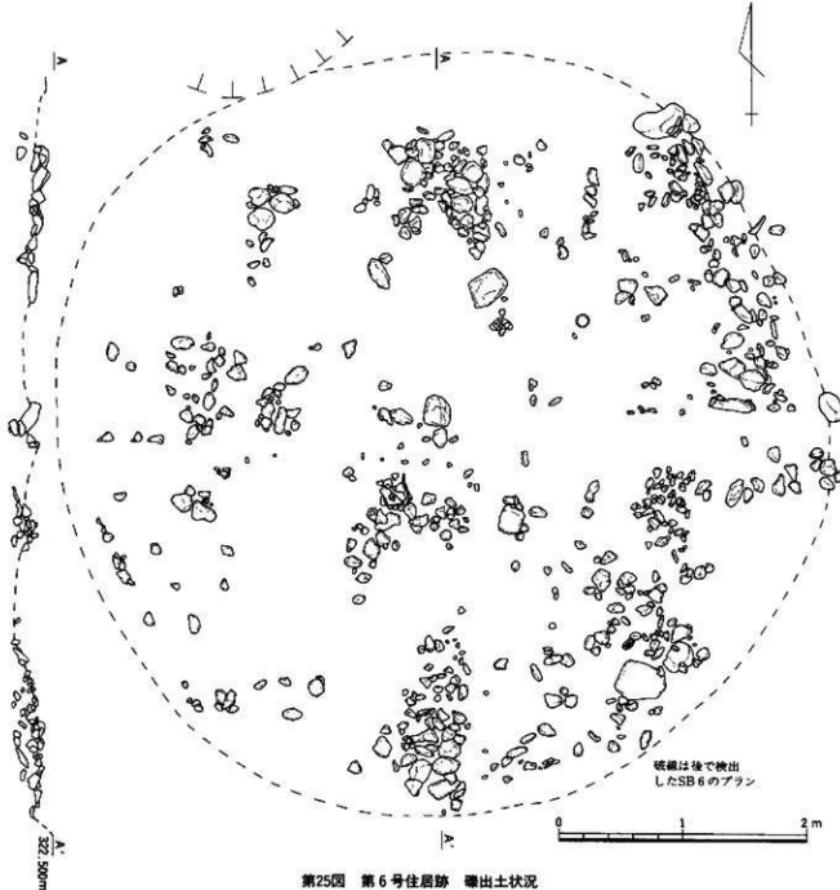
6. 第6号住居跡 (SB 6)

第6号住居跡は、4Nから4Oグリッドに位置する。暗褐色土を掘削し、黄褐色土に達した面で、直径約6mの大型の円形プランを検出した。すぐ南側には、SB4の石圍炉が存在し、北西は近現代の井戸により一部がカットされている。

以下、SB6についての記述を進めていく。

覆土の礫

SB6の覆土のうち、上層(第27図D-D'セクションの①層)からは、多くの礫を検出した(第25図)。



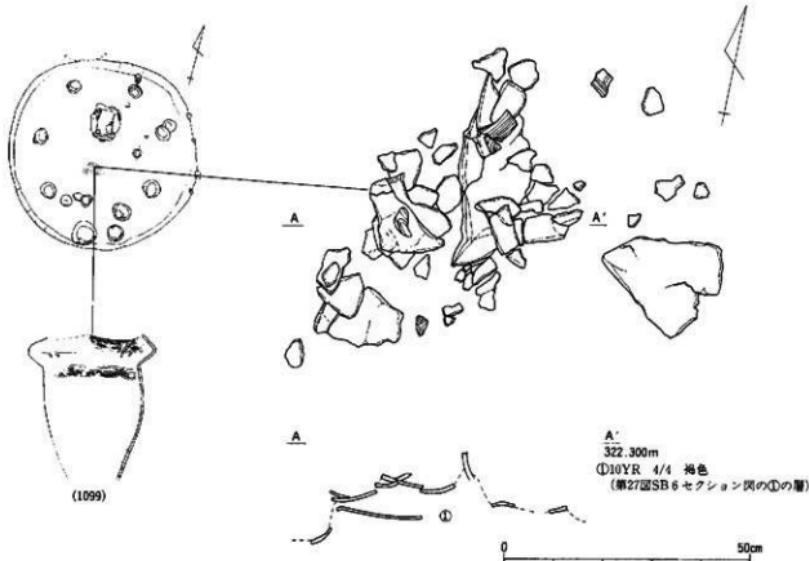
第25図 第6号住居跡 磯出土状況

5~35cmほどの川原石状の円礫、亜円礫ばかりで角礫はほとんど認められなかった。これらの礫に焼化による変色、ヒビの認められるものはなかった。またそれらの中には土器も含まれていた。礫の分布状況は堅穴住居跡の周辺に多く、中央付近においては少ない。なお住居の東部は地形の傾斜もあって段丘礫が一部見られる。また南部に見られる礫群は、この直下で検出したP8に関連する可能性も考えられる。しかし、ほとんどの礫は、単純に流れ込みなどの自然堆積とも考え難い。畦のセクションの観察では、比較的短期間に住居跡が埋没したとも考えられ、また石窯炉内にも礫が投棄されたような形跡も見られたこと、覆土に比較的時期差のない遺物が出土したこと等より、これらの礫は、住居の廃絶後に廃棄された可能性が考えられる。

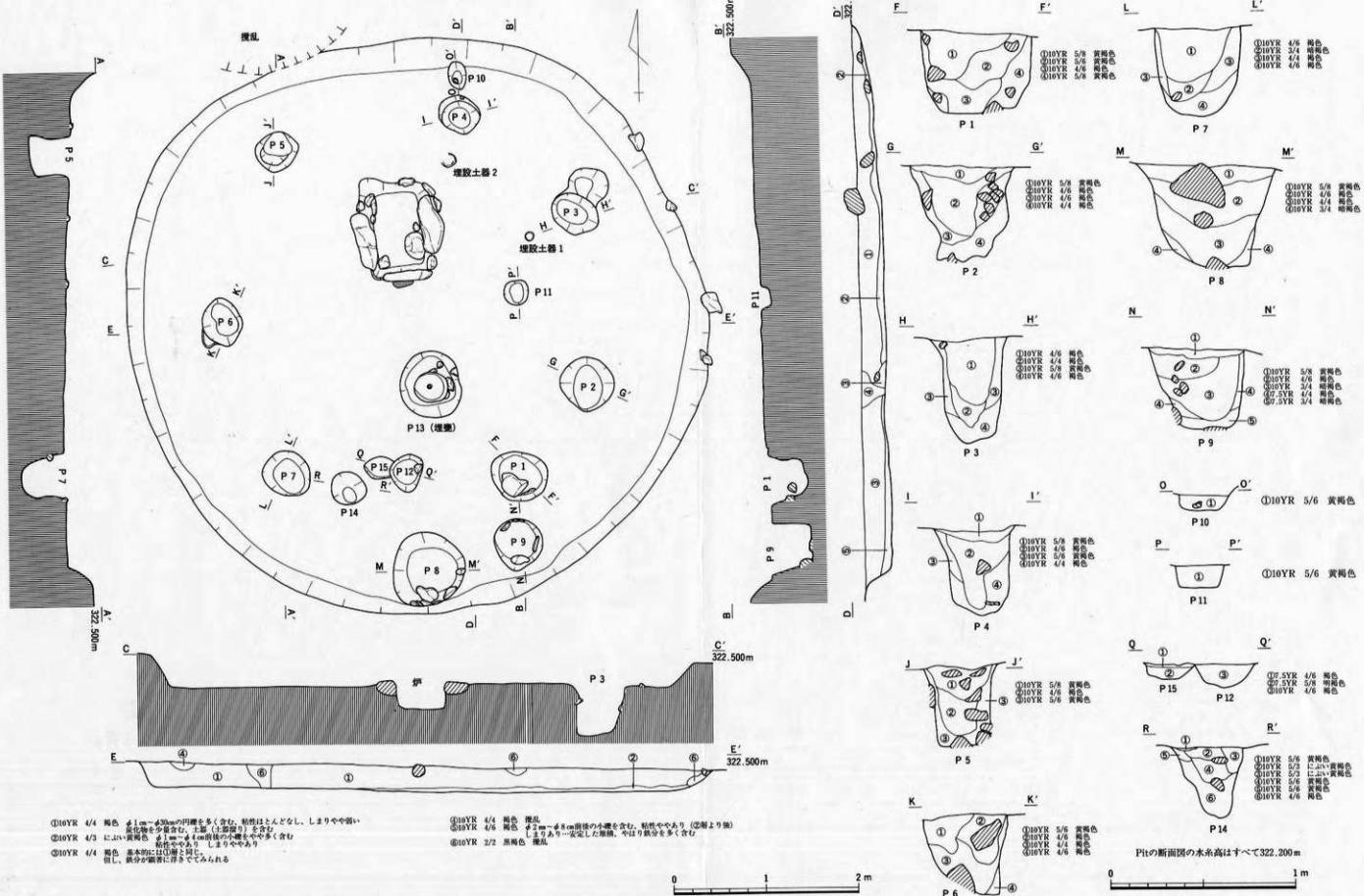
覆土内の土器

SB6の覆土は、大きく2層に別れる(第27図)。覆土の大部分が①層褐色土で、前述の礫も、この層より出土した。その下には、やや粘性の高い②層が見られた。以上のセクションよりSB6は、比較的短期間に埋没した可能性が考えられる。なお、覆土の①層より、黒曜石片9点が近接して出土している。

SB6の南側の覆土下層より、深鉢1個体分(1099)が出土した(第26図)。土器の周辺には礫も散在し、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。土器は口縁部を南にして、横倒しの状態で出土した。底部をのぞいてほぼ完形に復元できた。なお石窯炉内部より出土した口縁部片(1088)が、この土器と同一個体の可能性がある。また(1099)の下やや東よりの地点で埋甕(1090)を検出した。



第26図 第6号住居跡 土器(1099)出土状況



第27図 第6号住居跡 (SB 6)

平面形

SB 6 の平面形は円形で東西6.1m、南北6.6mを測り、本遺跡では最大規模の住居である。現存壁高は27~30cm前後で、その傾斜角は35~55°、平均45°前後になる。主軸方位は炉跡と埋甕とを結んだラインで考えると、N-9°-Wとなり、入り口は、南側と考えられる。掘り込みは黄褐色土層付近より行なわれているが、上端は暗褐色土層中にあった可能性もある。他の住居が黒色土層中から掘り込まれ、黄褐色土上部に床面を持つのにたいして、黄褐色土層を掘り抜いて構築されるという特徴を持つ本遺跡最大規模のSB 6 の存在は注意を払うべきであろう。床面は礫(段丘礫)が目立ち、特に東部においては地形の傾斜の関係で顕著である。明確な貼り床などは認められなかったが、炉の西側付近は若干硬化していた。

また、住居跡に対して炉の位置がかなり北(奥壁)によっており、また後で述べるように埋甕の位置も炉に近く住居の中央付近である。さらに、柱穴も複数みられ、増築等の可能性もある。

ピット

SB 6 からは計15個のピットが確認できた。(P13は埋甕のピット、埋設土器のピットはカウントせず。)

ピットの検出は比較的容易であったが、半割セクションにあるように住居跡と同様にピット内にも多くの礫が混入していた。平面図に見られる下場の礫などは人為的なものでなく、自然のものである可能性が高い。遺存状況は住居跡の掘り込みが深いこと等により良好であった。ピット内から若干の遺物が検出された(1090~1095)。各ピットの平面形は概ね円~楕円形を呈し、直径20~79cm、断面形状は円筒~掘り鉢形で深さ8~55cmとなる。

主柱穴としてはP 1~7で直径45~60cm前後、深さ45~55cmである。セクション図においても柱痕状の堆積がP 2、3、4、5、7に認められる。他のピットについての性格は不明。中には柱穴になるものもあるのかもしれない。P 14の北側には小さな焼土がみられた。住居の掘り込み自体が深いので大半のピットは本住居に関係するものと考えられるが、P 8は床面より上から掘り込まれており、一部住居跡の壁面をもカットする。また、埋土の堆積の様子も他のピットとは異なる。SB 6 とは関係のない、もしくは時期の異なるものと判断する。

石圓炉

SB 6 の炉跡は住居跡の中心からやや北（奥壁）よりの地点に位置し、扁平円碟で方形の石圓炉を組んでいる。北側の一部の石が抜き取られるが、その規模は約105×110cmと大型である。残存する石は7個で15~60cm前後の大きさで完形、欠損した川原石の腹面(1、2、4)、側面(3、7)、端面(6)を用いて構築する。焼化によると思われるヒビ、割れは1、5、7に認められるが、赤化はさほど顕著ではない。2、3、4は側石に相当し、一部二重囲いになる可能性がある。また5には小さな凹みや、やや磨ったような痕跡が認められ作業台として使用された可能性が高い。

炉内には比較的多くの土器、碟が認められた。土器・碟ともに敷かれた様子がなく散在する。また、径5~45cm前後の碟が比較的多く含まれていた(A、B、C、D他)。Aの下にも土器(1089)が押し潰されたようにあり、Aは焼化によるヒビなども見られないこと、Aの下に焼土が広がることなどを考慮して、炉廃絶時に土器、碟が投棄された可能性が高いと考える。また、それらよりやや下位(5cmほど)の炉南部にて、同一個体の土器(1087)が敷き詰められたように出土した。遺存状況は上部のものより悪い。炉は、段丘碟層に掘り込まれ、炉の深さは25cmほどで中心付近に焼土が見られた。炉内からは炭化物も出土した(分析結果については第6章)。

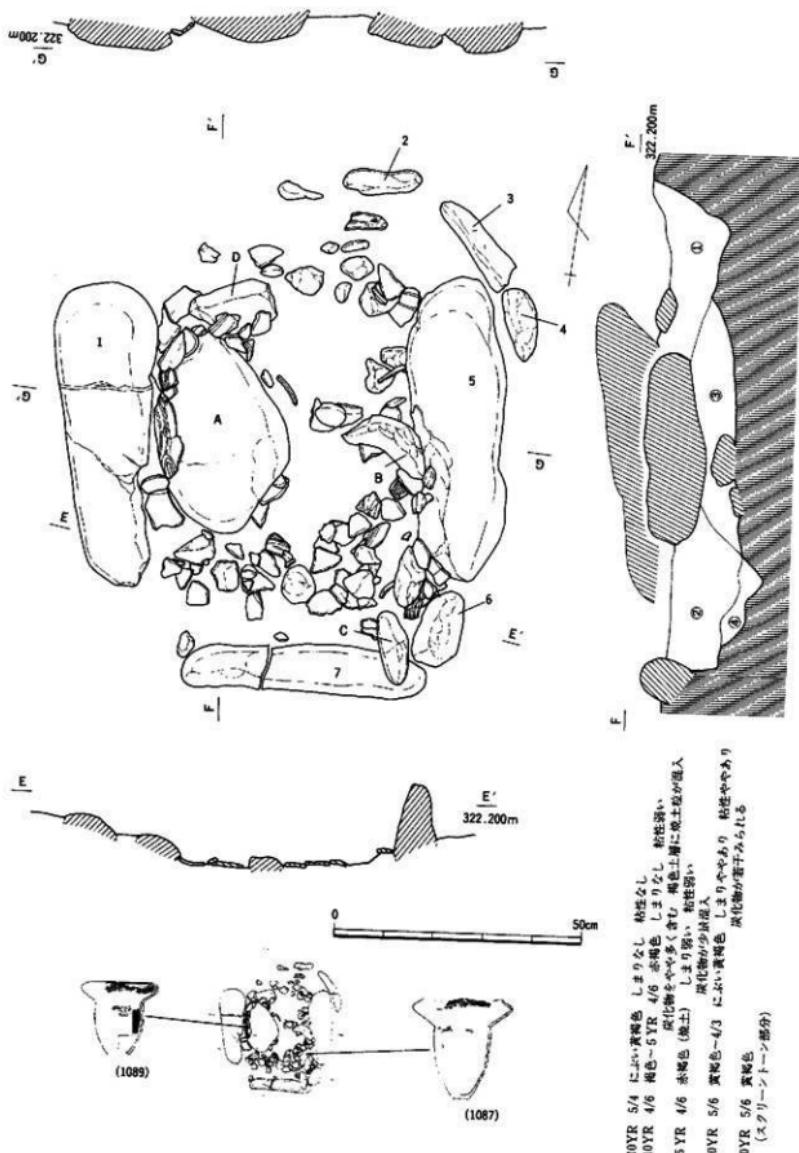
南西の一角を除いて、明確な石の抜き取り痕は確認できなかった。

埋甕 (P13)

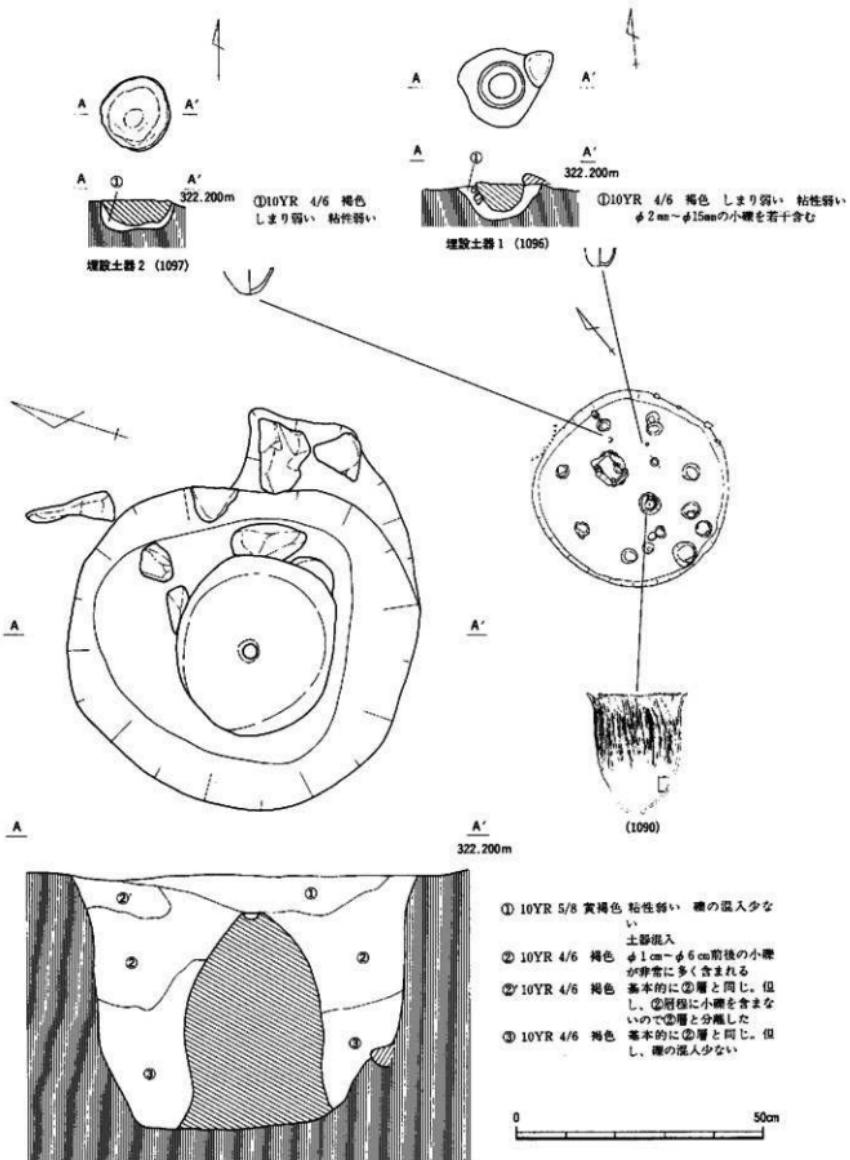
石圓炉の南、約70cmのところで埋甕(1090)を埋設するピット(P13)を検出した(第29図)。

ピットの平面形は若干の張り出し部分があるが、ほぼ円形で下場はやや北に偏る。壁面は急である。検出時の上端で東西約79cm、南北70cm、下場東西54cm、南北52cm、深さ51cmを測り、土器との間には若干の隙間がみられた。土器はピットの中央にやや傾いた逆位で埋設され、底部は穿孔されていた。土器口縁部付近(ピット下場)で極少量の炭化物(分析結果は第6章)を検出した以外は、焼土などは認められなかった。蓋石などについても認められなかった。

ピットの覆土は、3層に分かれ。ピット中央付近に黄褐色(10YR 5/8)土層(①層)がみられた。また穿孔部付近には土器片も1点含まれていた。なお、埋甕内に土がほとんど入ることなく、口縁付近を除いて空洞であった。ピットは段丘碟層にかけて堀り込まれたため、埋土・壁面にかけて多数の碟が認められた。同様にピットの下場に碟が見られたが、段丘碟と考えられる。



第28図 第6号住居跡 石圓炉



第29図 第6号住居跡 埋設土器・埋甌

埋設土器 (第29図)

SB 6 の石囲炉の北東20cm、東部80cmの床面に埋設された土器を2点（埋設土器1・1096、埋設土器2・1097）確認した。

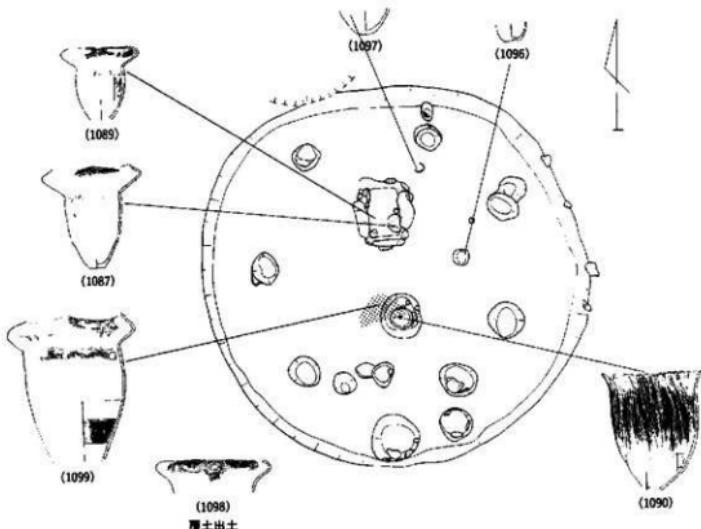
埋設土器1は、石囲炉の東部80cmほどに位置し、土器を埋設するための掘り方を明らかに持つ。東西17cm、南北16cmほどのやや不定形ながら円形となる。覆土は1層である。土器にコゲなども見られず、ピット周辺や内部にも炭化物、焼土は認められなかった。伴出遺物もなかった。特に蓋石などの配石も見られなかった。土器の遺存状況は良好で、器面もほとんど荒れていない。底部に穿孔はない。

埋設土器2は、炉の北東20cmほどのところに位置する。埋設のための掘り方は、ほぼ土器の大きさに合わせた直径15cm、深さは6cmである。埋設の様子は埋設土器1と概ね同様である。

埋設土器内の土には炭化物が含まれており、分析の結果クリと判明した（第6章）。

以上のように、SB 6 はその規模もさることながら、石囲炉、埋甕そして2つの埋設土器を持ち、この時期の徳山地区の住居の好資料を提供した。

また、炉内や覆土からは土器がかなりまとまって出土しているが、多数の礫とともに出土したことにより、住居の廃絶後に一括して廃棄された可能性も考えられる（SB 6 関係の文章は、現場を担当した小坂宗和の文章および遺構カードを小谷が加筆・修正した）。

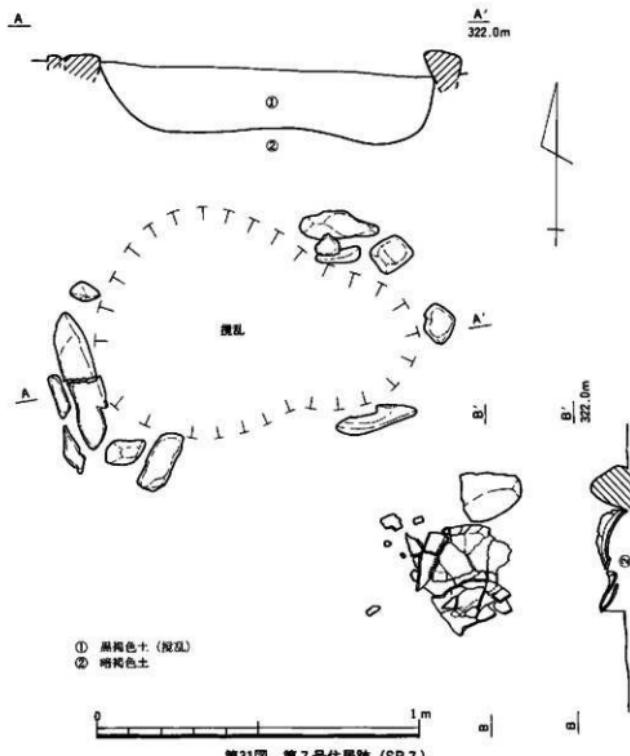


第30図 第6号住居跡 土器出土地点

7. 第7号住居跡 (SB 7)

SB 7は2Kグリッドに位置する。石圓炉のみを検出し、柱穴やプランは確認できなかった。石圓炉は第II層暗褐色土中で検出した。中央部に搅乱を受け、炉石の残りは2分の1程度である。残存する炉石より縦約60cm、横約120cmの長方形の大型石圓炉であったと考えられる。主軸は東西方向である。西側の40cm程の細長い川原石は、被熱により中央で割れている。この石の北と南、さらには炉の北東の隅には、厚さ約10cmの細長い川原石を立てており、これらの石の上の面は、他の炉石よりも若干高くなっている。構築当初は四隅に立石を伴っていたものと考えられる。南北の辺の東側部分にも25cm程の川原石が東西方向に組まれている。

SB 7の石圓炉の南東約50cmの地点で、土器1個体分(1146)を検出した。この土器は、炉石よりも若干高いレベルで検出し、口縁部を西側と南側に向け横位につぶれた状態で出土した(第31図)。



なお、口縁部は意図的に打ち欠かれたと考えられる。出土した位置やレベルから考えて、SB 7 の覆土出土土器と判断した。(1146) のすぐ西より土器数点(1144・1145)が出土している。

出土遺物よりSB 7 の時期は、中期後葉と考えられる。

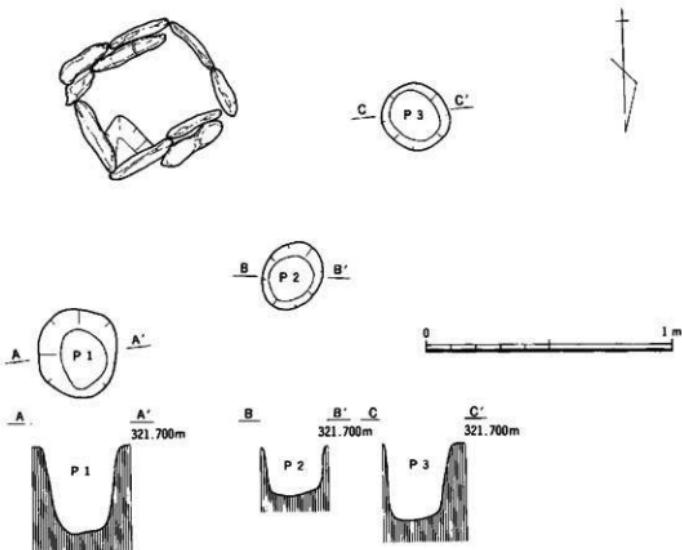
8. 第8号住居跡 (SB 8)

SB 8 は 3 E グリッドに位置する。石圓炉と柱穴の可能性のある 3 基のピットを検出した。石圓炉のすぐ南側には、近現代の井戸があり、また、北側は水分を含んだ粘質土が広がり、住居跡のプランの検出はできなかった。石圓炉は、黄褐色粘質土中に掘り込まれ、15~35cm 大の細長い川原石 10 個を使って 55×60cm 程の長方形に組まれており、残存状態は良好である。

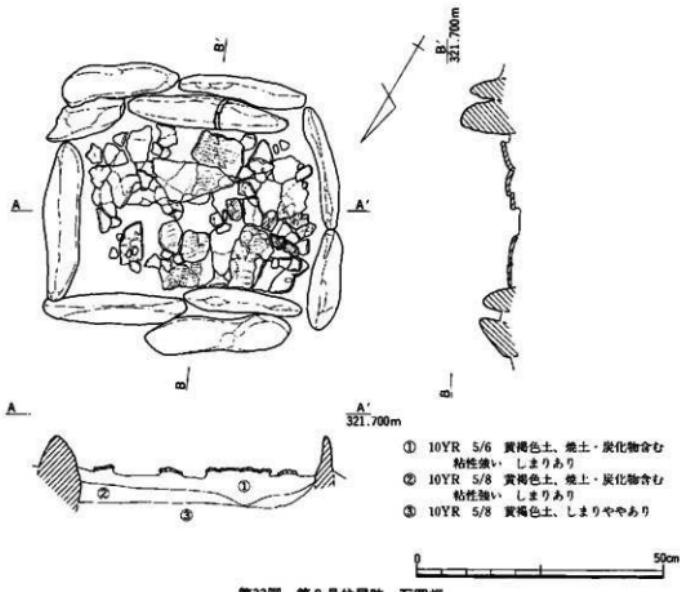
長辺にあたる北側と南側には、石を二重に並べている。一部の石には被熱による割れも認められた。炉内には、土器片がびっしりと敷かれていた。これらは、すべて同一個体の胴部片(1147~1149)で口縁部や底部は欠如していた。また、土器は多量の湿気を含みボロボロの状態であった。土器は並べるようにして炉内に敷かれ、所々に重ねたところもみられた。

なお、炉内の北東の隅には土器はみられず、少し凹地状になっていた。土器の下には、厚さ 5cm 程の焼土がみられ、炭化物も含まれていた。

炉の付近からは、3 基のピットを検出した。径 25~35cm、深さ 20~35cm を測り、柱穴の可能性も考えられる。



第32図 第8号住居跡 (SB 8)



第33図 第8号住居跡 石圓炉

SB 8では、石圓炉内以外には土器の出土はなかった。SB 8の時期は、炉内出土土器より中期後葉と考えられる。

9. 配石土坑（壙）群（北）

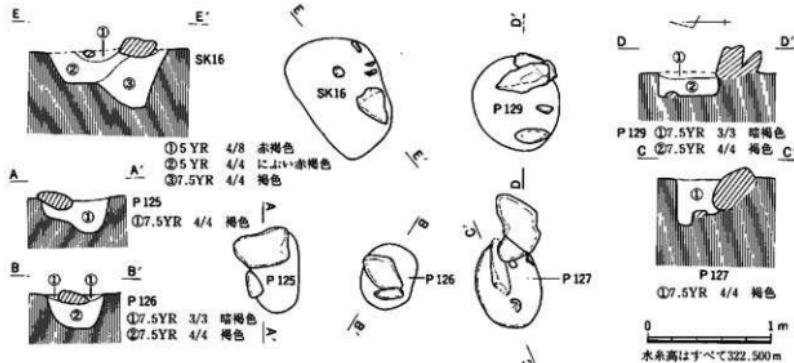
5Mグリッドに位置する。P125～P127・P129・SK16の5基のピット・土坑（壙）群からなる。平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は長径50～100cm、短径40～70cm、深さ20～50cmを測る。これらのピット・土坑群の上の面や縁の部分には、扁平円礫が配されている。出土遺物は、いずれも土器の小片が數点から數十点（66頁、第7表）、剝片がみられた（115頁、第8表）。

これらのピット・土坑群の性格としては、配石の様子より墓（土壙墓）の可能性が高い。なお、出土した土器には第III群3類（里木II式類似）、4類（呪煙式）の小片が多数みられることから、これらの配石土坑（壙）群の時期は中期後葉と考えられる。

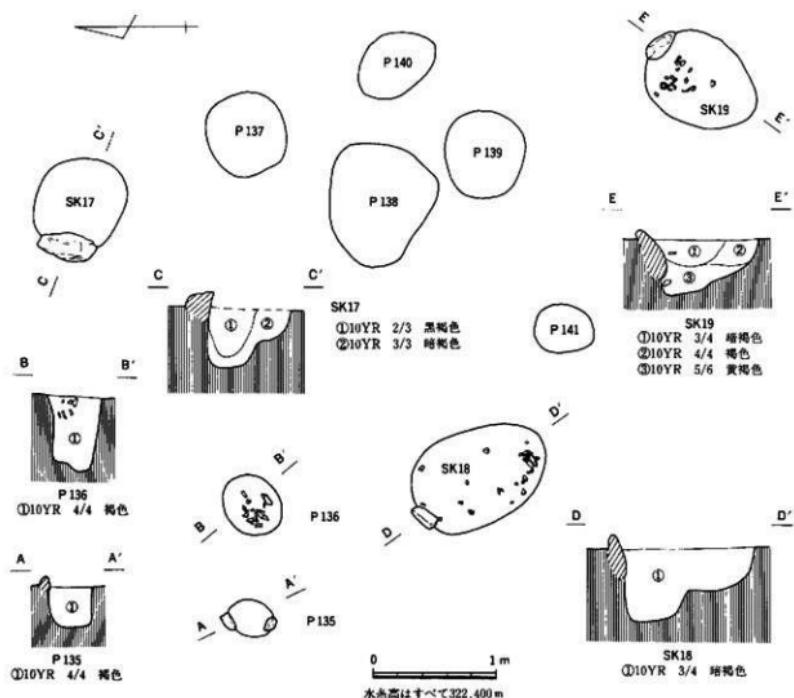
10. 配石土坑（壙）群（南）

5Lグリッドに位置する。P135とSK17～SK19の4基のピット・土坑（壙）群からなる。平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は長径40～110cm、短径30～80cm、深さ30～60cmを測る。これらのピットや土坑の縁には、扁平円礫が配されている。

出土遺物は、P135から土器小片13点、SK17～19からは土器小片50～100点（第7表）、SK17から石



第34図 配石土坑（塙）群（北）



第35図 配石土坑（塙）群（南）

鐵1点・切目石錐9点・打欠石錐1点、SK18から切目石錐3点などが出土している（第8表）。SK17からの切目石錐9点の出土が目立つ。これらの切目石錐の中には、被熱によって割れており、切目にかけられていた「糸巻きの帶状痕跡」の認められるもの（534～537）もみられた。またSK17をはじめ、SK18・19・P135の覆土中には炭化物も少量含まれており、分析の結果クリヒと判明した（第6章）。

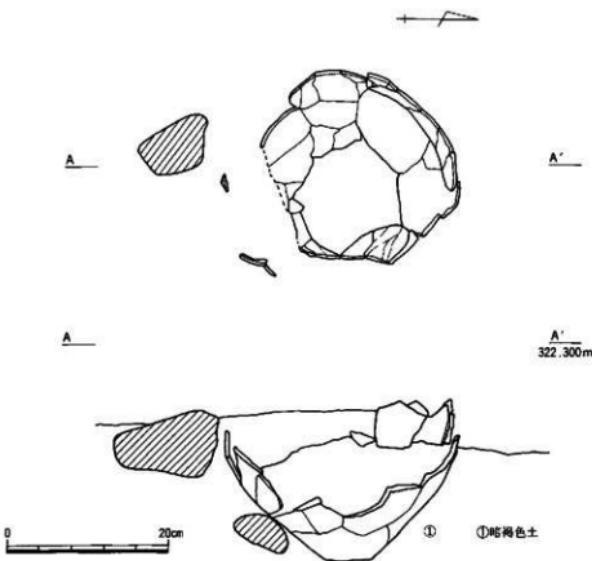
遺構の性格としては、配石がみられることより墓（土壙墓）の可能性が考えられるが、前述の配石土坑（壙）群（北）と比べて、出土した遺物の量が多く、また炭化物が含まれるなどの違いもあり、断定はできない。

なお、出土遺物（1165・1166・1170・1171）よりこれらのピット・土坑（壙）群の時期は中期後葉と考えられる。

11. 土器埋設遺構

3Lグリッドで第II層暗褐色土を掘削中に、土器（1150）を検出した。土器は、底部を下にして胴下半部から底部にかけてを丸ごと検出し、掘り方こそ検出できなかったものの何らかの意図で埋設されていたものと考えられることから土器埋設遺構とした。

土器の南側には10cm大の円礫が認められた。現代の地表面のすぐ下で検出し、土器の上半分は後世の搅乱によって失われたものと考えられる。



第36図 土器埋設遺構

12. 石器類の集積遺構

石器類の集積遺構としては、P585、P586、SK17がある。ここではその出土状況について述べ、個々の遺物については第3節で述べる。

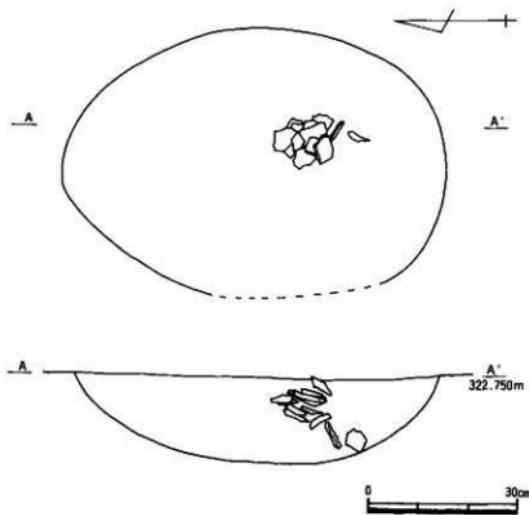
(1) 刺片の集積 (P585)¹¹⁾

40グリッドで長径約75cm、短径約55cmの南北にやや長い橢円形の土坑を検出した。土坑底部近くの南よりの地点より、チャートの刺片20点(501~520)が折り重なるように出土した。これらはすべて同一の石材で、一つの母岩から作られたと考えられる。近接して出土した2点(501と505)に接合関係が認められた。刺片の保管場所か、一括して埋めたものと考えられる。(501~513)は水平に重なるように、(514~515)はそれらの南側やや低いレベルで立位で出土している。このことからこれらの刺片は、何らかの容器に入れて埋納されていたものが容器及び南側にあった何らかの埋納物の崩壊により(514~515)が崩落したようにみられる。

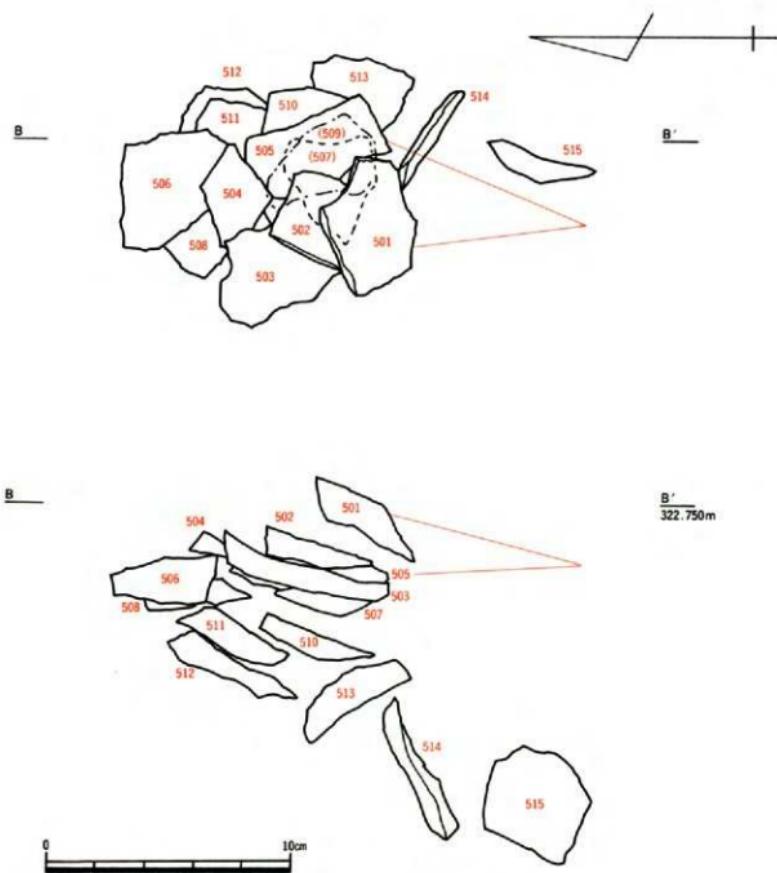
なお、20点の内、15点(501~515)の出土状況を第37・38図に示した。図示されていない5点(516~520)は、これらの東側で出土している。

土坑は、第II層暗褐色土中に掘り込まれており、断面形は浅いすり鉢状を呈するが、もう少し上面から掘り込まれていたことも考えられる。第III層(明)黄褐色土までは掘り込まれていない。

1) 現場作業においてはピットとして取り上げたが、ここでは土坑として取り扱う。



第37図 刺片の集積 (P585) 出土状況(1)



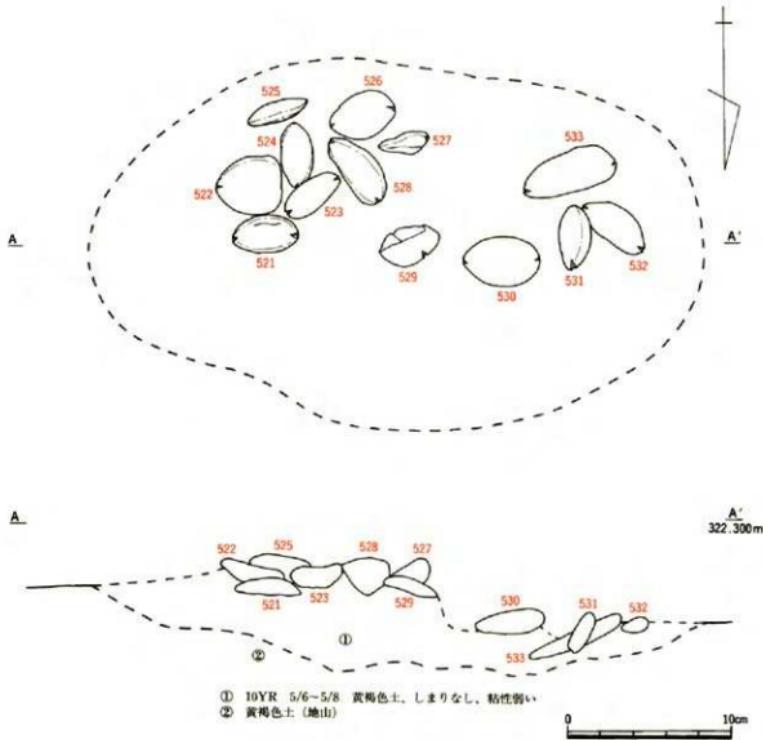
第38図 刺片の集積（P585）出土状況(2)

(2) 切目石錘の集積 (P 586)¹¹⁾

4Mグリッドで検出した。III層(明)黄褐色土より8個の切目石錘が集中して出土した。辺りを精査したが、この時点ではプランの検出はできなかった。写真撮影・実測後に遺物を取り上げ、さらに掘り下げたところ、10cmほど西に離れた所の3~4cm下からさらに5個の切目石錘が出土した。合計13個の切目石錘が若干のレベル差はあるものの、ほとんど1ヶ所より集中して出土したのである。

2度目の出土の後、サブトレンチを入れると若干の土色の違いが認められた。よって切目石錘は長径約37cm、短径約23cmの楕円形で深さが約5cmの土坑の底部付近から出土したと考えられる。しかし、土坑のプランは明確には検出できなかった。

出土した切目石錘は第10表(123頁)のように大きさ、質量のほぼ同じものがそろっており、特に上部の8個は石材も泥岩ばかりであった。石錘の出土状況をみると、平らな面を下にしたものが多い中、横位に立った状態で出土したものもみられた。また、長軸方向をそろえたものや、切り目の部分を隣



第39図 切目石錘の集積 (P 586) 出土状況

り合わせにしたものもみられることから、これらの石錐が糸や網につながっていた状態を考えることも可能である。²³しかし、それを完全に復元することは難しい。ただ、5点（521・523・525・528・531）には『糸巻きの帯状痕跡』²⁴が認められ、切目を利用して糸状のものが巻かれていた可能性がある。なお、伴出土器はなく時期は不明である。

- 1) 現場作業においてはピットとして取り上げたが、ここでは土坑として取り扱う。
- 2) 帝釈峠遺跡（広島県）では、岸壁のくはんでいる部分の20cm四方の狭い範囲から、14点の切目石錐が出土し、その出土状態から、網につけられたまま置かれていたのではないかと推測されている。（広島大学文学部 帝釈峠遺跡群発掘調査室年報X 1995）
- 3) 石錐の表面は摩滅するが、長軸中央部に摩滅を受けない部分が帯状に残る。これを吉田英敏氏は、『糸巻きの帯状痕跡』と称している。（吉田 1989）

（3）切目石錐が多数出土した土坑（塙）（SK17）

5Lグリッドで検出した。前述の配石土坑群（南）の中の1基で、長径約90cm×短径約70cmの平面形が橢円形の土坑である（第35図）。土坑内からは切目石錐9点（534～542）、打欠石錐1点（543）、石錐の未製品1点、剝片2点が出土しており、中でも（534）には、被熱による『糸巻きの帯状痕跡』の認められるものもあり、注目される。

なお、土器は約50点が出土し、中期後葉と考えられるが、ほとんどがローリングを受けておりはっきりしない。

13. その他 繩文時代のピット・土坑

本遺跡からは、多数のピットや土坑を検出した。このうち、遺物の出土より縄文時代のピット・土坑と考えられるものについて第4表にまとめた。その総数は、ピット65基、土坑23基である。

出土遺物よりほとんどが住居跡と同じ中期後葉と考えられるが、P580は前期後葉から末葉、SK87は晩期から弥生時代前期と考えられる。

なお、P136からはピットの上層より多数の土器（1157～1162）が出土した（第52図、図版15・21）。

第4表 繡文時代のピット・土坑一覧表(1)

No.	グリッド	大きさ(cm) 長軸×短軸	平面形	出土遺物		時期	切り合ひ他
				土器	石器		
P31	4 O	40×25	楕円形	1点	1点		
34	5 O	(35)×30	不整形	3	1	中期	> P572
38	5 O	55×45	楕円形	2			
39	5 N	60×55	円形	8		中期	
52	5 N	25×20	楕円形		2		
106	5 N	60×40	楕円形	2	1	中期	
109	5 N	60×30	不整形	1			
113	5 N	70×45	隅丸方形	3		中期	
116	5 N	(45)×45	(不整形)	1			< P117
118	5 M	45×40	円形	1			
125	5 M	90×45	楕円形	5		中期	配石を伴う
126	5 M	50×50	円形	9		中期	配石を伴う
127	5 M	110×50	楕円形	50		中期	配石を伴う
128	5 M	40×40	円形	3	1	中期	配石を伴う
129	5 M	70×70	円形	17	1	中期	配石を伴う
135	5 L	40×35	円形	13			配石を伴う
136	5 L	55×50	円形	48	2	中期	
137	5 L	70×65	円形	10	2	中期	
138	5 L	100×80	不整形	32	5	中期	
139	5 L	70×65	円形	21	1	中期	
140	5 L	70×50	楕円形	2			
141	5 L	45×40	円形	1	1		
148	5 L	35×35	円形	10			
149	5 L	35×25	隅丸方形		1		
150	4 L	30×25	円形		1		
152	4 K	60×(40)	(楕円形)	3	1		< P151
157	4 L	50×45	円形	4			
158	4 L	50×45	円形	1			
159	4 L	50×45	円形	4		中期	
160	4 L	55×40	楕円形	3			
161	4 L	50×50	円形		1		
162	3 M	70×50	楕円形	3			
186	3 L	65×55	円形	4			
192	5 K	70×60	円形	14	1		
201	2 J	80×(80)	(隅丸方形)		2		
205	2 J	60×55	円形	1		中期	

※グリッド：複数にかかる場合は面積の広い方のグリッドとした。

()：残存部の大きさ・形

切り合ひ：>切る、<切られる

第5表 繩文時代のピット・土坑一覧表(2)

No.	グリッド	大きさ(cm) 長軸×短軸	平面形	出土 遺物		時期	切り合い他
				土器	石器		
P208	2 J	70×45	不整形	1			
211	2 J	80×(70)	(不整形)	5		中期	< P210, < P212
213	2 J	60×(60)	(円形)	3			
216	2 J	70×50	楕円形	1			
233	2 J	(50)×45	不整形	2		中期	< SK31
325	3 F	60×(40)	不整形	2			< P324
334	4 F	(40)×(40)	(不整形)		1		< P335
342	4 F	60×(40)	(楕円形)		1		< P344
412	3 C	40×35	円形		1		
510	2 B	65×60	円形		1		
542	1 A	55×30	楕円形	2		中期	
543	4 L	55×40	不整形	3	1	中期	
545	4 L	35×30	円形	1			
555	3 O	(60)×60	(不整形)	5		中期	
558	3 O	35×35	円形	1		中期	
559	3 O	65×(40)	不整形	3		中期	< SK87
560	3 O	(90)×85	(円形)	23		中期	< P561
561	3 O	130×100	隅丸方形	16	2	中期	> P560
575	3 L	60×55	円形	2			
576	3 L	65×55	円形	1	1		
577	3 L	80×70	円形	2			
580	3 K	120×100	楕円形	61		前期	
584	3 L	80×65	楕円形	5		中期	
585	4 O	80×55	楕円形		20		剥片集積
586	4 M	40×25	楕円形		13		石錐集積
587	4 L	60×42	楕円形	7	1	中期	
588	2 J	32×30	円形	4			
593	2 K	30×25	円形	1		中期	
595	2 I	50×45	円形	3			< P234

※グリッド：複数にかかる場合は面積の広い方のグリッドとした。

（ ）：残存部の大きさ、形

切り合い：>切る、<切られる

第6表 繩文時代のピット・土坑一覧表(3)

No	グリッド	大きさ(cm) 長軸×短軸	平面形	出土遺物		時期	切り合い他
				土器	石器		
SK6	5 Q	160×150	円形	4			
10	4 O	110×95	隅丸方形		1		
11	4 N	100×60	不整形	7	1	中期	
12	3 N	150×90	楕円形	12		中期	
14	5 M	100×50	楕円形	30	1	中期	
15	5 M	100×50	不整形	25	1	中期	
16	5 M	100×60	隅丸方形	25	1		配石を伴う
17	5 L	85×60	隅丸方形	50	13	中期	配石を伴う 切目石錐9点出土
18	5 L	120×80	楕円形	99	3	中期	配石を伴う
19	5 L	100×80	楕円形	75	1	中期	配石を伴う
26	2 K	200×(110)	不整形	3	2	中期	<SK27
27	2 K	130×70	不整形	6	1	中期	>SK26
28	2 J	150×(70)	不整形	1		中期	< P209, < P210
31	2 J	130×90	不整形	1		中期	<SK32, >P233
32	2 J	120×100	隅丸方形	1			>SK31
39	3 E	130×100	不整形	8	1		< P360
43	2 D	160×160	円形		1		
56	1 B	150×140	不整形		1		>SK57
71	2 A	160×70	不整形		1		>SK72
73	2 B	(60)×50	不整形		1		< P521
82	1 A	(270)×220	不整形		3		
84	2 A	85×75	隅丸方形		1		
87	3 O	60×55	円形	4	1	晩期～弥生	> P559

※グリッド：複数にかかる場合は面積の広い方のグリッドとした。

()：残存部の大きさ・形

切り合い：>切る、<切られる

第3節 遺 物

第1項 土 器

1. 土器類の概要

今回の調査において7,562点の土器が出土した。その分類ごとの点数は第7表(66頁)の通りである。これらの土器は、遺構内からの出土2,194点、包含層からの出土5,368点である。

遺構からは、第6号住居跡(SB6)と第2号住居跡(SB2)からの出土が多い。いずれも中期後葉の住居跡である。包含層からは、4Oグリッドや5L・5N・5Mおよび4L・2Jグリッドからの出土が多く、これらは検出された遺構とも重なる。

土器の時期としては、中期後葉の第III群3類土器(38.9%)及び4類土器(11.6%)が多く、両者を合わせると約50%を占める。¹⁾一方、第II群土器(前期)や第I群土器(早期)も比較的まとまって出土した。

以下に、まず遺構から出土した土器について触れたのち、包含層から出土した土器について分類ごとに述べていく。

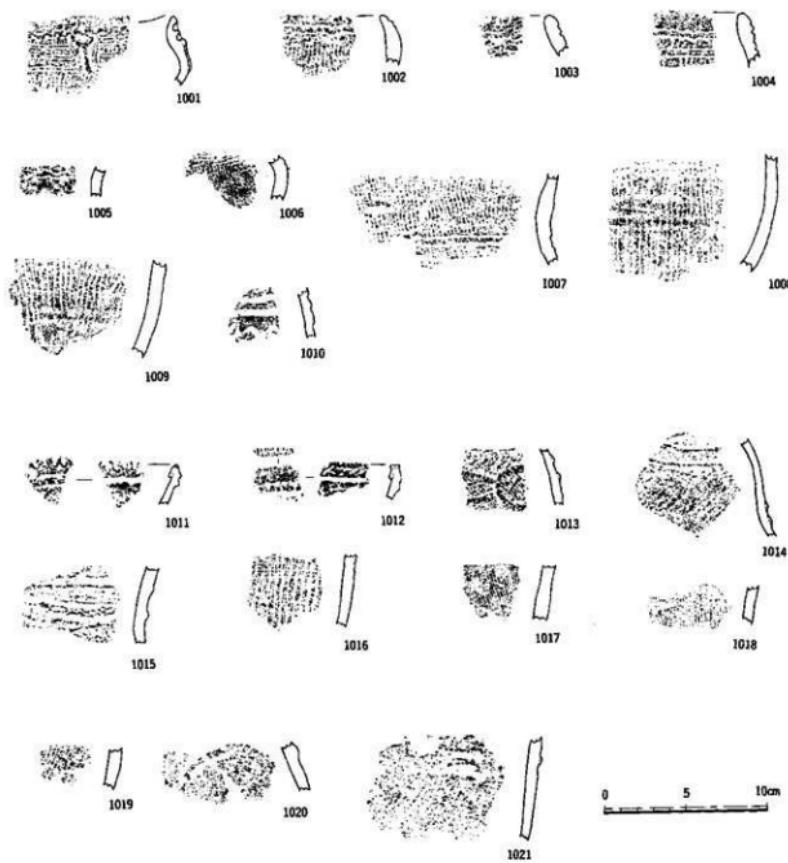
1) 細片・一括品を除いて算出した。

2. 遺構から出土した土器

(1) 第1号住居跡(SB1) (第40図 1001~1010 図版13)

第1号住居跡からは、59点の土器が出土した。いずれも覆土からの出土で、小片がほとんどである。このうち10点(1001~1010)を図示した。

(1001)は、撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線で文様を描き、II線上端部には、2本の平行沈線間を交互に刺突して波状文風の文様を施している。小波状口縁を呈し、波頂部には、竹管状工具による刺突と、細い粘土紐をY字状に貼り付けた文様がみられる。(1002~1004)にも、撚糸文地に半截竹管状工具によるコンパス文がみられる。(1007)は、撚糸文地に半截竹管状工具による横位の沈線を引いている。(1008・1009)には、撚糸文がみられる。(1010)は、棒状工具による横位の沈線と波状文がみられる。(1001)~(1009)は第III群3類、(1010)は第III群4類の土器である。



第40図 SB 1、3、4、覆土出土土器

第7表 山手宮前遺跡出土土器一覽表

遺構分類	I		II		III			IV		V		VI							VII	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
SB1 2 3 4 5 6 7 8	12 27 7			34	1					6	2							16	59	
				99	49	6				3	110	13						221	521	
				12							6							8	53	
				1		2				1	3							7	7	
				4	7	2					7							15	35	
				116	56	8				2	145	8						335	684	
				2	1						3							6	6	
				1														1	1	
P31 34 38 39 106 109 113 116 118 125 126 127 128 129 135 136 137 138 139 140 141 148 152 157 158 159 160 162 186 192 205 208 211 213 216 233 325 542 543 545	P31 34 38 39 106 109 113 116 118 125 126 127 128 129 135 136 137 138 139 140 141 148 152 157 158 159 160 162 186 192 205 208 211 213 216 233 325 542 543 545	60			1						2							1	1	
				2							2							2	3	
				1							2							2	2	
				1							1							4	8	
				1							1							1	1	
				5														5	5	
				2														9	9	
				13	2	1				1	15							21	52	
																		3	3	
																		11	17	
				1	1	2												6	10	
				1														20	32	
				7	5	1					17	1						15	32	
				1	3	3	1					6	2					1	2	
				12							5							1	1	
				1														9	10	
				1														3	3	
				1														4	4	
				1														1	1	
				1														9	9	
				1														3	3	
				1														4	4	
				1														1	1	
				1														2	2	
				1														3	3	
				1														4	4	
				7		2					2							4	14	
				1														3	3	
				1														1	1	
				1														2	2	
				1														3	3	
				1														4	4	
				1														3	3	
				1														1	1	
				1														2	2	
				1														1	1	
				1														2	2	
				1														3	3	
				1														4	4	
				3														1	1	
				1														5	5	
				3														1	1	
				17		2												2	22	
				10														2	16	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	
																		4	4	
																		3	3	
																		2	2	
																		1	1	
																		6	6	
																		3	3	
																		4	4	

分類 造構	I	II	III					IV	V	VI							VII	計
			1	2	3	4	5			1	2	3	4	5	6	7		
SK6	1				3		1			4		2					2	3
11					11					3		1					1	7
12					3					8								12
14					10		1			10							23	30
15					1		2			8							6	25
16					9	1	2			8	1						13	26
17					23	5				23							30	51
18					10	4				18	4						62	113
19					3												48	84
26					6												3	
27					1												6	
28					2												1	
31																	1	
32																	1	
39																	7	10
87																	4	
土 壤					1													
遺構分計	8	99	2	1	454	142	33	0	1	19	439	37	0	18	0	0	941	2194

※土壤は土壌埋設造構

包含層 分	分類 造構	I	II	III					IV	V	VI							VII	計
				1	2	3	4	5			1	2	3	4	5	6	7		
B-D					5						1	1	7	1				15	
2 E					2								2					2	
4 E													10	1				11	
5 F																		9	
2 I		2		1	11													0	
3 I		1		1	1	1												13	28
4 I					2													13	18
2 J		30		11	122	2	2						5	34	3	1	5	4	157 376
3 J		7			3	1							1	3	1		1	10	23
4 J		18		1	12								2	32	3			63	98
2 K		1			40	13							2	40	4			96	189
3 K		18	1		66	12	5						2	40	4			125	273
4 K		2		3									7	5				53	70
5 K		2	1		8	3							1	18	1		1	79	114
3 L		1		1	8								1	6	3			8	28
4 L		11	41	4	38	20	1						3	40	10			191	364
5 L		105	3	1	69	26	1						2	66	3			281	561
6 L		1			19	1							1	9	1			57	89
3 M			3										3					4	10
4 M		2			12		3	1					9			1	3	40	71
5 M			1		56	16							33	1		2		233	342
6 M					11								4					12	27
3 N		1	1	2	8	1							1	1				5	18
4 N		6	1	2	47	7	1						18		1	2		103	187
5 N		1		3	41	34	1						15	10	1		1	245	351
2 O		1		1									4	14	5	1	3	2	
3 O			2		84	9							22	105	20	4		101	224
4 O		2	8	2	196	84	3						11	3		2		503	949
5 O		9	4		14	7							1	1				52	103
3 P		1			6	11	1						2	5	2	1		14	44
4 P		1	1	6	4	33	7						1	52	6	2		137	250
5 P					10	2							9					19	40
3 Q		1	1	6	54	30							2	73	10	2	1	100	279
4 Q		2		1	12	3							2	3	2	1		42	68
3 R													3					5	5
4 R													9	2		1	1	6	11
表採			1			23	4										51	92	
包含層分計	124	159	32	34	1016	295	20	9	5	53	635	99	4	34	4	4	2841	5368	
総 計	132	258	34	35	1470	437	53	9	6	72	1074	136	4	52	4	4	3782	7562	

※VIは細片・一括品の点数

(2) 第2号住居跡(SB2) (第41~43図 1022~1075 図版14~16)

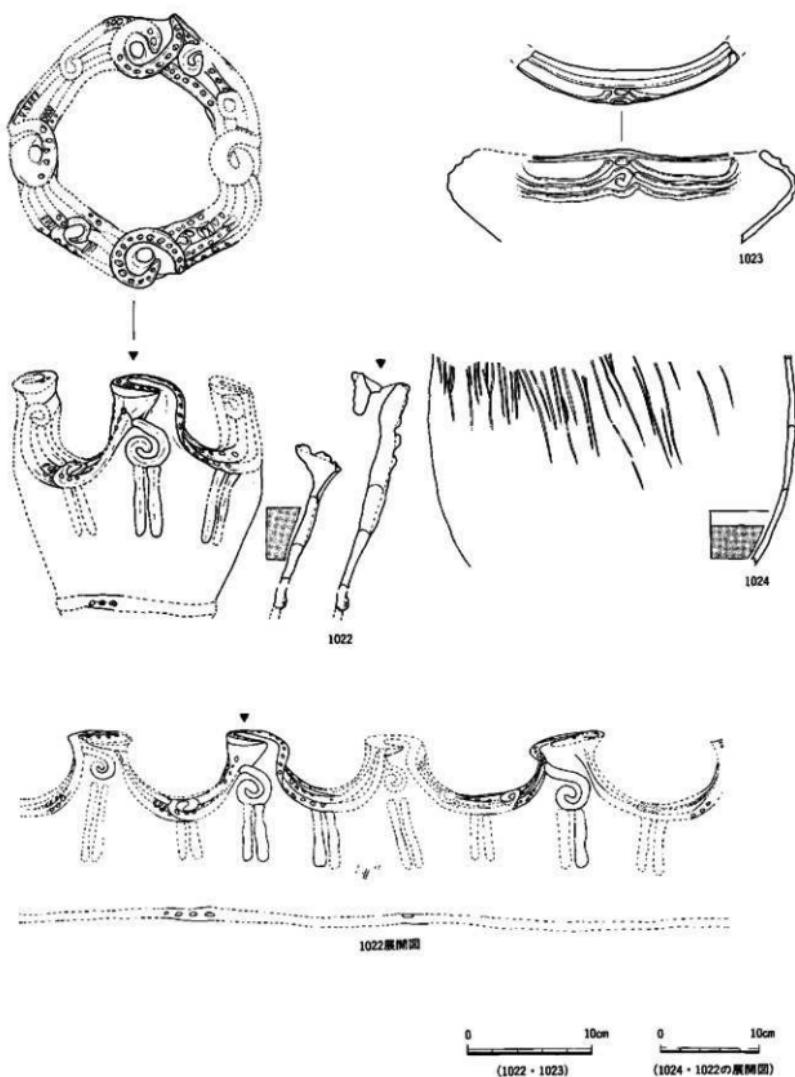
(1022)はSB2の覆土上層の中央部より出土した。4単位の波状口縁の深鉢で、残存高19.5cm、口径は20~22cmと推定される。胴部から口縁部にかけて緩やかに開く器形で、口縁部は内側に折り曲げられ面を作り出している。波頂部では、口縁部に作り出された幅約4cmの面が渦巻き状(右巻き)に競り上がり、中央には棒状工具による径約1cmの穴を持つ筒状の突起を作り出している。口縁部に作り出された面には、幅広の粘土紐による隆帯を口縁に平行して外側と内側に2条貼り付け、その間に同じ粘土紐による隆帯で波頂部から垂下する渦巻文と、波底部に渦巻文(左巻き)を貼り付け、各渦巻文の間にも隆帯を貼り付けている。そして、隆帯上は、棒状工具による連続刺突を施し、隆帯と隆帯の間の残りの面には、同じ工具による連続刺突や、少し幅の広い工具による刃み状の連続刺突を施している。胴部文様は、無文地(ほとんどは無文地だが、胴部の一部には、やや斜行する細い平行な沈線らしき線もみられる)に、各波頂より粘土紐を貼り付けた隆帯で、渦巻文(左巻き)を作り出し、その下には、同じ隆帯2本をたてに貼り付けて垂下(5~6cm)させている。波底部からも同様に隆帯2本を垂下させている。胴下半部には、粘土紐を横位に(土器のまわりを一周するように)貼り付けた隆帯上に、棒状工具による連続刺突を施している。(この部分は、戸入村平遺跡SB4出土C8群土器(1589)の胴下半部の表現とよく似ている。)器厚は、6~14mmと幅があり、薄い所と厚い所がある。内面には、約4cmの幅で炭化物の付着がみられる。なお底部については不明である。色調が白く、明らかに他の土器とは胎土が異なり、搬入の可能性も考えられる。本遺跡からは、この1点のみの出土である。渦巻文や、渦巻文から下に垂下する隆帯、さらには胴下半部の隆帯等より、いわゆる咲烟式(以下咲烟式とする)のその他の土器(第III群4類d種)と考えたい。なお、近畿地方の北白川C式土器と器形が近似しており、その関連が注目される。

(1023)はSB2の覆土上層の南端付近より出土した。第III群4類b種咲烟式土器の口縁部で、4単位の波状口縁を呈し、径6mm程度の円棒状工具による沈線で文様を描いている。口縁に沿って1条の沈線を横位に引き、波頂部の沈線の下に点状に刺突を施し、その左右に3条の沈線による楕円形区画を作り出している。2条目の沈線は、波頂部の刺突の下に左から右へ伸びる横位の渦巻文を伴い、3条目の沈線は、波頂部の渦巻文の下で小さな弧を描くように引かれている。3条の沈線の下には無文帯が続く。地および区画内は無文である。口径約23cm、口縁部最大径約28cmである。

(1024)も、SB2の覆土上層南端付近の(1023)のすぐ東隣より出土した。胴部片で、口縁部と底部を欠くが、最大径約37cmとかなり大型である。胴部文様は、無文地に車状工具による条線を縱方向(左上から右下)に引いている。条線の幅は1mm程度で、先端部(下の方)は細くなっている。条線は胴上部から中央にかけて施され、胴下半部には認められない。器厚は5~8mmと比較的薄手である。内面、下部に炭化物の付着がみられる。第III群3類e種、地文が条線文の土器である。

(1025~1028)は同一個体で、SB2の石圓炉内に敷かれた状態で出土した。(1025~1027)は内湾する口縁部片で、径約5mmの円棒状工具による沈線が口縁部に平行して2条認められる。沈線の下(区画内か)には、同様の工具による刺突列が2段にわたって施されている。

(1028)は、胴部から底部にかけての破片で、胴部最大径19.7cm、底部6.3cmである。胴部は無文、底部は平底である。内面には、幅約5cmにわたって炭化物の付着がみられる。輪積み痕がよく観察でき、その幅は約6cmである。炉内に敷かれていたためか、外面は被熱を受け赤色化している。第III群



第41図 SB 2 棚土上層出土土器

4類b種と考えられる。

(1029) は、SB 2 の床面に埋設されていた土器で、胴下半から底部片である。外面は無文で、残存高4.5cm、底部径6.0cmで、底部は平底である。

(1030・1031) は、SB 2 のP 9より出土した土器で、(1030) は、内湾する口縁部で燃糸文を地文とし、口縁上端部に棒状工具による沈線1条を横位に引き、その下に交互刺突を施している。そして、その下には棒状工具による2本の平行した弧状沈線が引かれている。

(1031) は胴部片で、地文には少し粗い燃糸文を左上から右下へ斜めに施している。径5mm程度の円棒状工具による連弧状沈線3条が引かれている。第三群3類の里木II式に類似する土器で、(1030) はc種、(1031) はb種である。

(1032~1075) はSB 2 の覆土より出土した土器で、このうち(1032~1048) は地文に燃糸文を施す。第三群3類の里木II式に類似する土器である。(1032~1041) は口縁部片で、(1032~1034) には半截竹管状工具による平行沈線文(a種)が施され、(1035) には、細い粘土紐を貼付し、2本の平行沈線間に斜格子目を作り出している(f種)。(1036) は燃糸文だけがみられる(d種)。

(1037) と(1038) は同一個体で、磨耗が激しく明瞭ではないが、平行した2本の沈線間に交互刺突が施されている。(1041) も同様である。(1039) は棒状工具による1条の沈線の下に交互刺突が施され、(1040) は平行沈線の間に刺突列がみられる。

(1042~1048) は胴部片で、(1042~1046) には半截竹管状工具による平行沈線文やコンパス文がみられ(a種)、(1047~1048) には左上から右下へやや斜行する燃糸文が施されている。

(1049~1069) は第三群4類、呪煙式土器で、(1049~1064、1068~1069) は口縁部片である。(1049) は棒状工具による2条の平行線とその下に刺突がみられ、SB 2 の炉内に敷かれていた土器(1025~1027) と同一個体の可能性が強い。

(1050~1051) は隆帯によって渦巻文等を描いており(a種)、半截竹管状工具の押引きによる連続爪形文が施されている。(1050) には素糸状の粘土紐による格子目文もみられる。

(1053~1058) は沈線によって渦巻文等を表現しており(b種)、(1053~1054) には半截竹管状工具による連続刺突や押引き沈線文がみられる。(1059~1063) には棒状工具や円管状工具による交互刺突および刺突列が施され(b種)、このうち(1059) は平行沈線間に交互刺突が、(1060) は口縁上端部に刺突列を施し、その下に沈線で表現された渦巻文も認められる。

(1061) は口縁上端部に刺突列を施し、その下に沈線3条が引かれている。

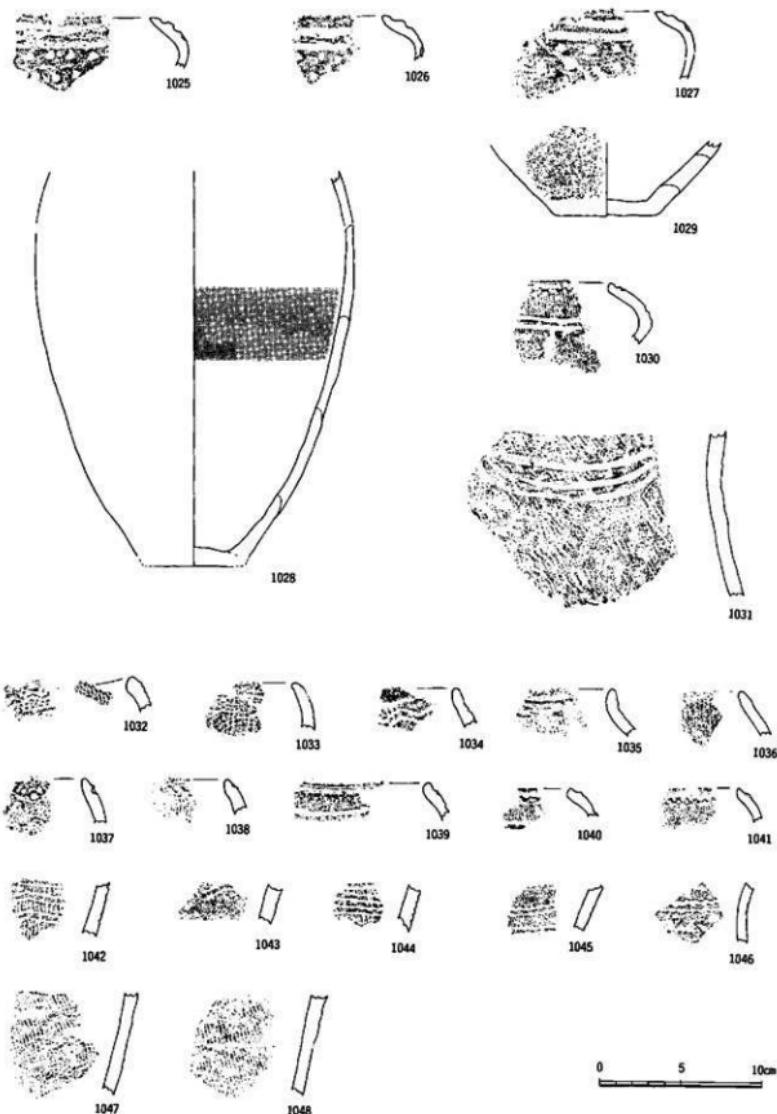
(1062) は1条の沈線の下に竹管状工具による刺突列を施している。

(1063) は平行沈線間に刺突列を施している。(1059~1063) はいずれも地文および区画内は無文で、燃糸を地文とする(1037~1041) とは異なる。

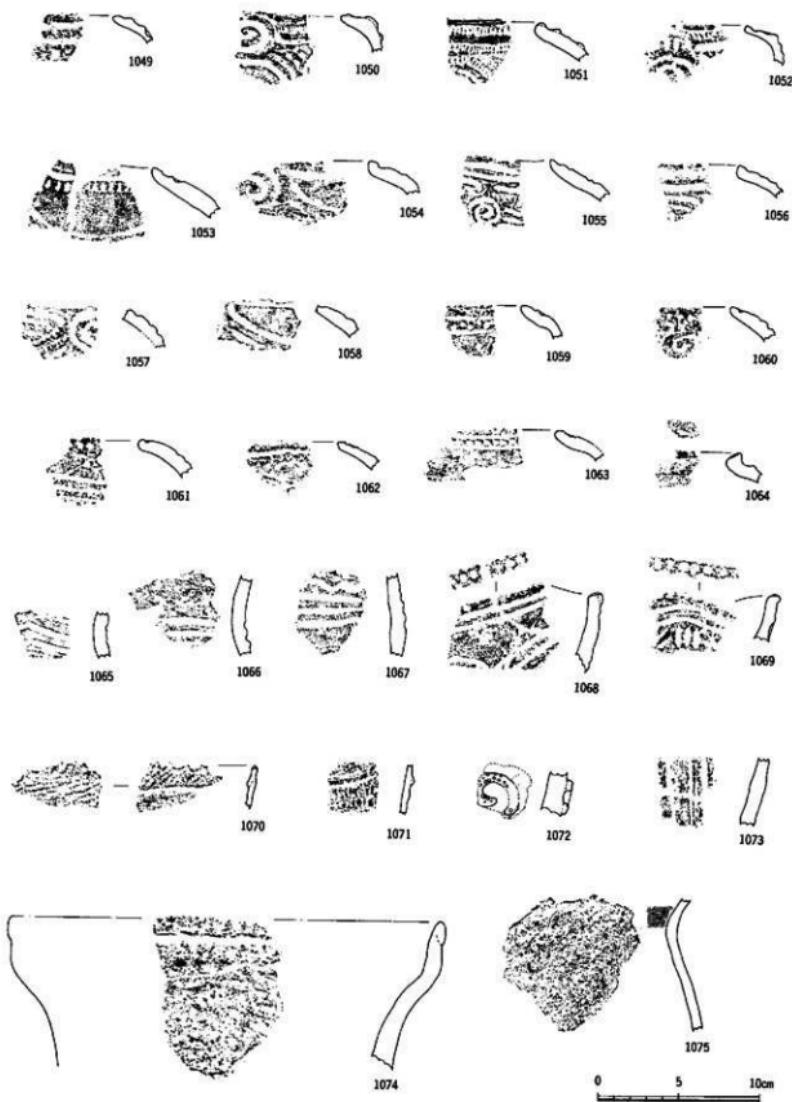
(1064~1068・1069) は口唇部に刺突を施しており(d種)、(1068~1069 同一個体か) は波状口縁で、口縁に平行して2条の沈線を引き、さらに波頂部の下には、同様の工具による縫に引かれた3本の単沈線がみられる。炉煙遺跡第II群1類土器¹⁰に類例がある。

(1065~1067) は胴部片で、棒状工具による波状文や連弧状沈線が引かれている。

(1070~1075) はそれ以外の土器で、このうち(1070~1071) は前期後葉から末葉の土器(第二群1類)である。(1070) は口縁部内面を肥厚させ、その上に繩文を充填している。外面にも繩文を施し、



第42図 SB 2 炉内・埋設・ピット出土土器
SB 2 覆土出土土器



第43図 SB 2 覆土出土土器

口唇部は刻み状に連続刺突している。

(1071) は地文が繩文で一部に爪の跡が残る。細い粘土紐を貼付し、その上から断面V字状の工具による連続刺突を施した特殊突帯文もみられる。SB 2の周辺からは、比較的多くの前期後葉から末葉の土器が出土しており、それらの一部がSB 2の覆土に混入したものと考えられる。

(1072) は、幅約5mmの貼付隆帯で渦巻文を作り、その上を径約1mmの細い棒状工具で密な刺突を施している。

(1073) は半截竹管状工具による半隆起線を縦に引いており、北陸の上山田式土器と考えられる。²⁾

(1074) は無文の粗製土器で、キャリバー形の器形を呈する口縁部片である。口縁端部は、折り返し気味に仕上げられている。やや厚手である。

(1075) はキャリバー形器形を呈する土器の頸部から胴部片で、外面は無文であるが、黒褐色の薄手の土器である。内面の頸部付近には、黒褐色の有機質の付着がみられ、その中の上部には一部赤褐色の部分もみられる。内容物の可能性も考えられる。

1) 「炉烟遺跡発掘報告書」各務原市教育委員会 1973年 図版18

2) 南久和氏のご教示による。

(3) 第3号住居跡(SB 3) (第40図 1011~1018 図版13)

第3号住居跡からは、60点の土器が出土した。炉内から13点が出土した以外は、覆土からの出土でほとんどが小片である。このうち8点を図示した。

(1012) は炉内からの出土で、口縁端部内外面を肥厚させ、繩文を充填し、さらに口唇部に粘土紐を貼り、断面V字状の工具で内と外からZ状に密な刺突を施している。前期末葉の大歳山式土器に比定される。他は覆土からの出土で、(1011)は口縁端部内外面を肥厚させ、繩文を充填し、口唇部に刻みを施している。(1013)は繩文地に細い粘土紐を貼り付けて、その上を断面V字状の工具で比較的密な連続刺突を施す。特殊突帯文が認められる。焼成良好で薄手の土器である。(1014~1015)は繩文地に細い粘土紐を貼り付けて、指でつまんで断面三角形状の突帯を作り出し、(1015)は突帯上に繩文を転がしている。(1011~1015)は第II群、前期後葉から末葉の土器である。

(1016~1018) は、撚糸文地で、(1016)・(1017)は半截竹管状工具による平行沈線が施されており、第III群3類、黒木II式に類似する土器である。

(4) 第4号住居跡(SB 4) (第40図 1019~1021 図版13)

第4号住居跡から、炉内および炉の付近で床に近いと考えられる層位から土器の小片7点が出土した。このうち3点を図示した。

(1019) は小片ながら、撚糸文地がみられる。(1020~1021) は同一個体で、貼付隆帯による曲線文様を描いている。隆帯の両サイドには、幅2~3mm程度の沈線もみられる。胎土には、雲母を含んでいる。(1021) が炉内からの出土で、他の2点は炉付近の床に近い層位からの出土である。

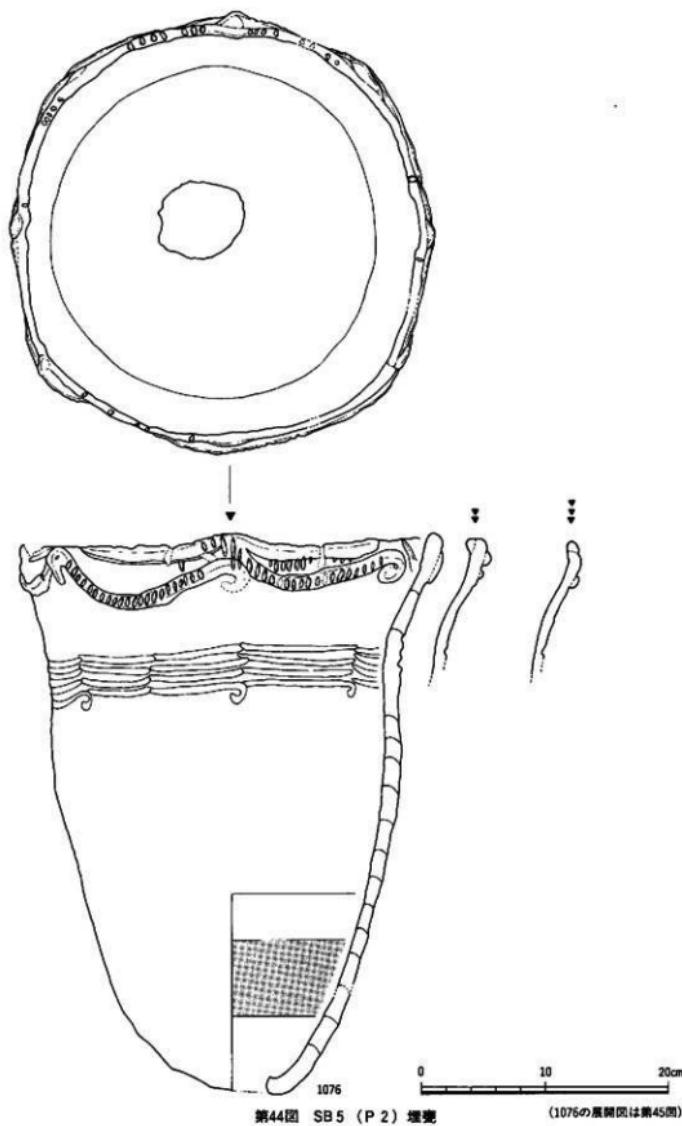
(5) 第5号住居跡(SB5) (第44・45図 1076~1086 図版13・17)

(1076)は埋甕として転用されていた土器で、完形で出土した。高さ45.4cm、口径33cm、底径11cmで、底部には約7cmの穿孔がみられる。器形は緩いキャリバー形器形をしている。8単位の小波状口縁で、上から見ると円形ではなく、四ないしは八角形状をしてる。口縁部には、太めの粘土紐による隆帯を貼付して、溝巻文や楕円形区画を作り出している。溝巻文は波頂部の下に位置するが、楕円形区画を形成する隆帯の右端にくるものと、左端にくるもの、左右にくるものがある。波頂部から縦に垂下する溝巻文もみられる。隆帯上は、径3mm程度の円棒状工具で縱および少し斜めに刻んでいる。縦の刻みは区画内に全部に及ぶものではなく、部分的である。口縁端部にも粘土紐を貼付し、口唇部への刻みも一部にみられるが、埋甕として逆位に立てられた口唇部の磨耗が激しいために不明瞭である。波頂部の口唇は、少し厚手で面をもたせ、平坦に仕上げられたところもみられる。頸部には無文帯があり、くびれ部には径5mm程度の円棒状工具による連弧文4条が引かれている。一番下の連弧文の右端は、小さな渦巻文となっている。胴部以下は、無文である。胴部以下が長く、すんどうな感じを受ける。非常に厚手の土器で器厚は、1.0~1.4cmである。土器の内面には、粘土輪積み痕が明瞭に残り、粘土の幅は1.5~2.5cmである。内面胴下半部には、炭化物が付着し、外面にも煤がみられる。底部は平底である。第III群4類a種、呪煙式土器である。

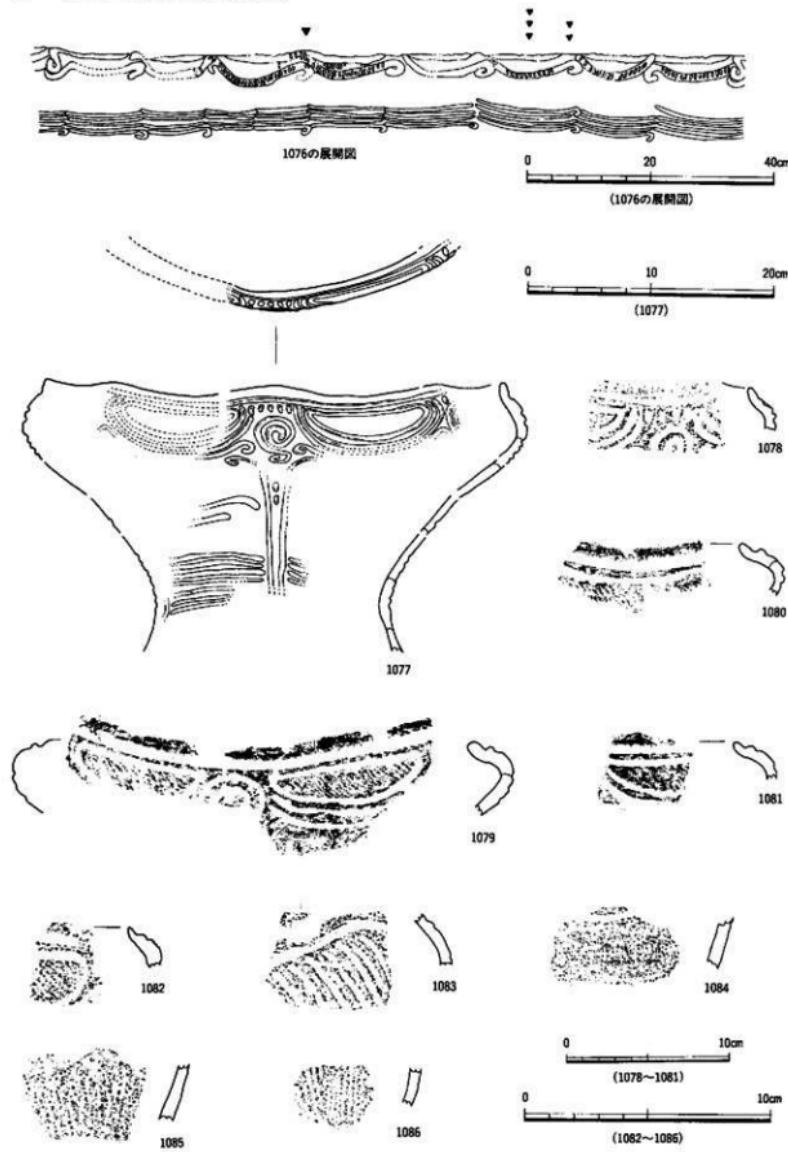
(1077~1078)は同一個体で、(1076)の出土したP2より出土した。キャリバー形の器形で、小波状口縁を呈する。8単位で上からみると(1076)同様に四ないしは八角形になると考えられる。径5mm程度の円棒状工具による沈線で文様を描き、口縁に平行に1条の沈線を引き、波頂部には短沈線5本を縦に雨垂れ状に引いている。そしてその下に溝巻文を縦にS字状に(上方が渦が大きく2重に)引いている。渦巻文と溝巻文の間には、3本の沈線(3本のうち、内側の一本は閉じており、外側の2本は口縁の方に開いている)による楕円形区画を描いており、その下にも横位の沈線2条を引き、この沈線の端は蘇手状(小渦巻状)になっている。頸部には無文帯がみられるが、その上には、縦の縁で区画された中に横位の沈線2本がみられ、その下側には、7条の横位の沈線を連弧状に引いている。7条の沈線の間には、波頂部溝巻文の下から垂下する2本の沈線を引き区画している。この2本の沈線は、口縁部方向が少し聞き気味に広くなり、その間に同様の工具による雨垂れ状の刺突を施している。残存部では刺突が2ヶ所みられる。地は無文で、器厚5~8mmと比較的薄手である。第III群4類b種、呪煙式七器である。

(1079~1086)はSB5の覆土より出土したもので、(1079~1081)は同一個体である。(1079)はキャリバー形器形の口縁部で、文様は棒状工具による沈線で描かれている。まず、口縁に平行して横位に1条の沈線を引き、その下に6単位で溝巻文を描き、その間には楕円形区画を描いている。楕円形区画内には縄文を充填し、区画の下には弧状沈線2本が引かれている。焼成は良好で、胎土には雲母もみられる。第III群4類b種、呪煙式土器である。

(1082~1083)は呪煙式の口縁部で、棒状工具による沈線で楕円形区画を描き、区画内にそれぞれ縄文・斜行沈線を充填している。(1084~1086)は地文に撚糸文がみられ、(1084)には横位の沈線もみられる。第III群3類土器である。



第44図 SB 5 (P 2) 墓窓
(1076の展開図は第45図)



SB 5 墓堀展開図
第45図 墓壙ビット(P 2)出土土器
覆土出土土器

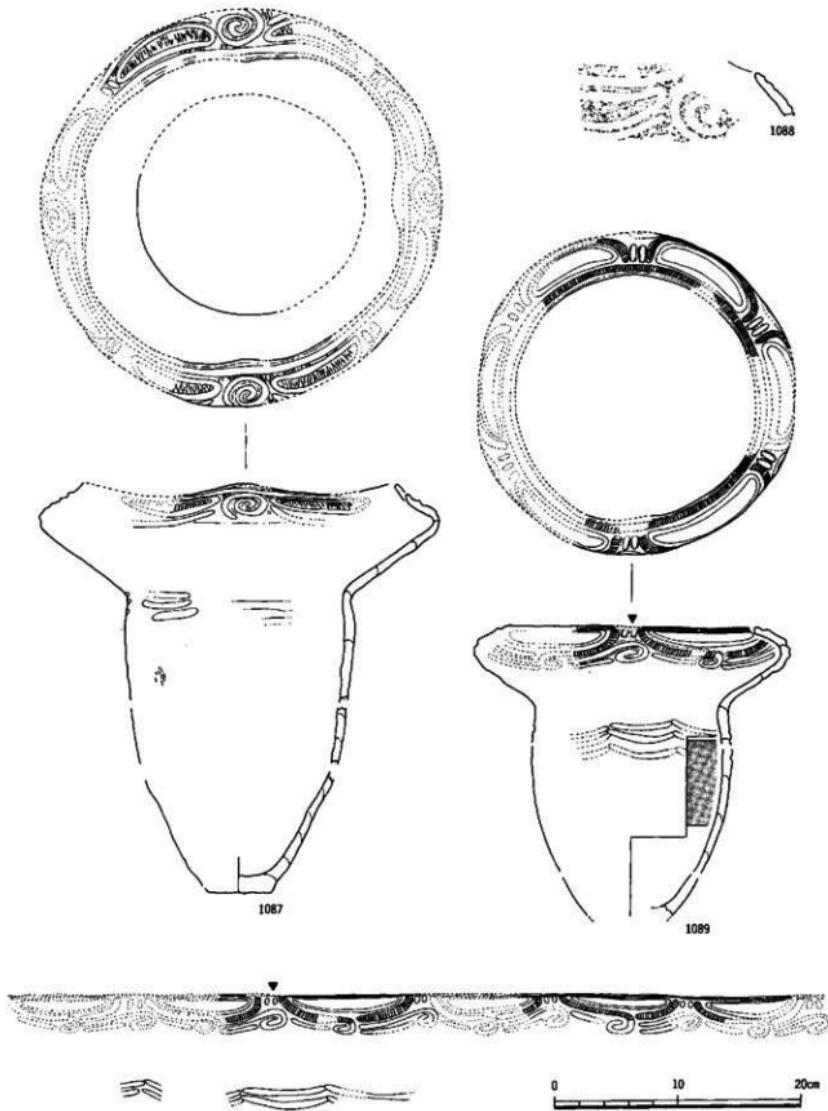
(6) 第6号住居跡(SB 6) (第46~50図 1087~1143 図版18~20)

(1087~1089)はSB 6の石圓炉内に散かれていた土器である。(1087)は極端なキャリバー形口縁をもつ器形を呈し、口縁部は約45°の角度で内側へ立ち上がり、4単位の波状口縁である。地に撚糸文(と考えられる文様)を充填し、その上に幅約6mmの円棒状工具による沈線で文様を描いている。撚糸文は、楕円形区画内を中心に、渦巻文の辺りや胴部にもわずかにみられる。沈線による文様は、口縁部に1本横位に引き、波頂部には縱に2本以上の短い沈線を含む(残存部からはこれ以上は不明)文様を描き、それらの間に楕円形区画を描いている。頸部には無文帯をもち、くびれ部には、やはり円棒状工具による3条の連弧状の沈線を描いている。復元による高さは約33cm、口径25.5cm、口縁部最大径32.4cm、胴部最大径18.6cm、底径5.2cmである。底部は平底。なお、胴部の粘土輪積み痕はよく残り、幅2~2.5cmを測る。(1087)は器形や文様の構成からは、第III群4類の喫煙式土器と考えたい。しかし、地文に撚糸文が認められることから第III群3類里木II式に類似する土器との関連も否定できない。

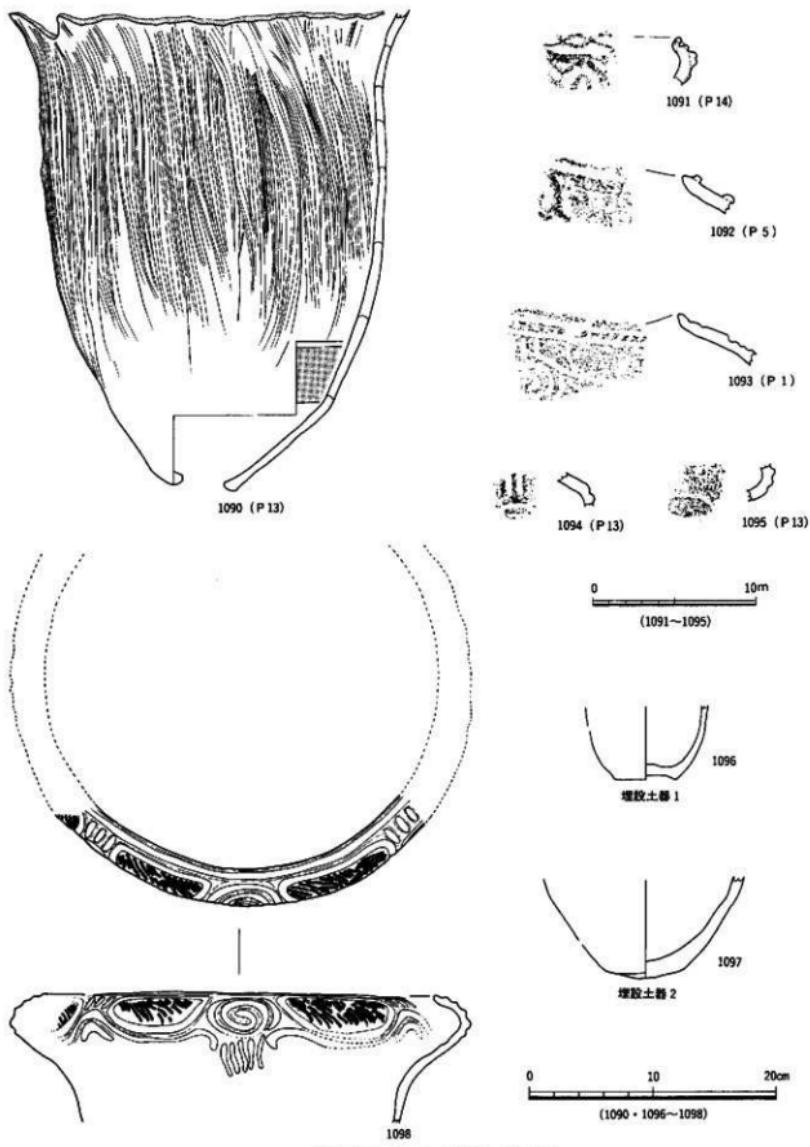
(1088)は口縁部片で、(1087)とよく似ているが別固体である。波状口縁を呈し、棒状工具による沈線で渦巻文・楕円形区画を描いている。すなわち、口縁に平行して横位に1条の沈線を引き、その下に楕円形区画を描き、さらにその下には弧状沈線2条を横位に引いている。波頂部の下には、渦巻文が描かれている。(1088)は、後で述べる(1099)と同一個体の可能性がある。(1099)はSB 6の床面直上に近い覆土最下層で出土しており、その破片が炉内に入った可能性も高い。

(1089)はキャリバー形口縁をもち、沈線で文様を描いており、第III群4類b種、喫煙式土器である。口縁部は平口縁である。無文地に幅5mm程度の円棒状工具による沈線で文様を描いており、文様はまず口縁に平行に1本の沈線を引き、その中を半截竹管状工具による爪型の連続刺突で充填している。その沈線の下から縦に約1.5cmの長さで垂下する2本の沈線と楕円形区画を描いている。楕円形区画を描く沈線のうち、内側の沈線は閉じていているのに対して、外側の沈線は口縁に平行する沈線の下から引かれ閉じていない。この沈線は、楕円形区画の下で左から右巻きの渦巻文となり、沈線内には半截竹管状工具による爪型の連続刺突が施されている。楕円形区画外側の沈線のさらに外側にも沈線が引かれ、この沈線は縦に垂下する2本の沈線の下で左から右巻きの渦巻文を描いている。2本の沈線の下の渦巻文と、楕円形区画の下の渦巻文の間にも、1条の沈線が横位に引かれている。無文帯を挟んで、頸部の下に同じ円棒状工具による3条の連弧文を、左から右へと引いている。復元による高さは約23cmと(1087)と比べて小さい。なお、胴部内面には、幅約7cmにわたっての炭化物の付着がみられる。(1089)は口縁部がかなりの角度で内湾し、上から俯瞰した感じなど、炉烟遺跡の第I群土器と酷似している。

(1090)はSB 6のP13より出土した埋甕で、現存する高さは38.9cm、口径32.5cm、底径5.2cmである。器形は、緩いキャリバー形をしており、口縁部は欠損している。逆位で埋められていたことから、口縁部は意図的に打ち欠かれたことが考えられる。胴部には、胴下半部を除く全面に幅の狭い棒状工具による条線を縦(口縁部は少し斜め)に引いている。条線の単位についてははっきりしないが、明瞭な線と弱い線とがみられる。底部は凹み底であったものに、埋甕として利用する際に穿孔した径約3.5cmの円形の穴がみられる。外面には下半部をのぞき、全面に煤の付着がみられる。下半部は煮炊きの際の被熱のために残存状況が不良である。内面には、下半部に幅約4.5cmにわたっての炭化物の付着



1089の展開図
第46図 SB 6 炉内出土土器



第47図 SB 6 墓壺、ピット (P 13) 出土土器
覆土出土土器、埋設土器

がみられる。器形や底部の特徴、また、胸部文様（地が条線文）等より、第III群3類e種の里木II式に類似する土器と考えられる。

(1091)はSB6のP14より出土した。口縁部片で、内溝する口縁上端部の貼付隆帯に刺突を加えて眼鏡状の浮線文を作り出している。その下にも貼付隆帯による文様を描いている。これは、第III群1類b種の船元III式が在地化したものと考えられる。なお、(1240、94頁)とよく似ており、同一個体の可能性もある。

(1092・1093)はそれぞれSB6のP5・P1、(1094・1095)はSB6のP13（埋甕の出土したピット）より出土し、第III群4類の呪煙式土器である。(1092)は貼付隆帯により渦巻文・楕円形区画を描いている。楕円形区画の上側の隆帯の下側には径4mm程度の棒状工具による刺突列を施している。区内は無文である。波状口縁を呈し、口縁端部は、断面三角形状に先端部を尖らせている。

(1093)は棒状工具による沈線で渦巻文等の文様を描いており、口縁上端部には、2本の平行な沈線を引き、その間に同様の工具による連続刺突を施している。波状口縁を呈し、波頂部には、3本の縦の沈線を引き、その下に渦巻文を描いている。渦巻文の隣には楕円形区画もみられる。

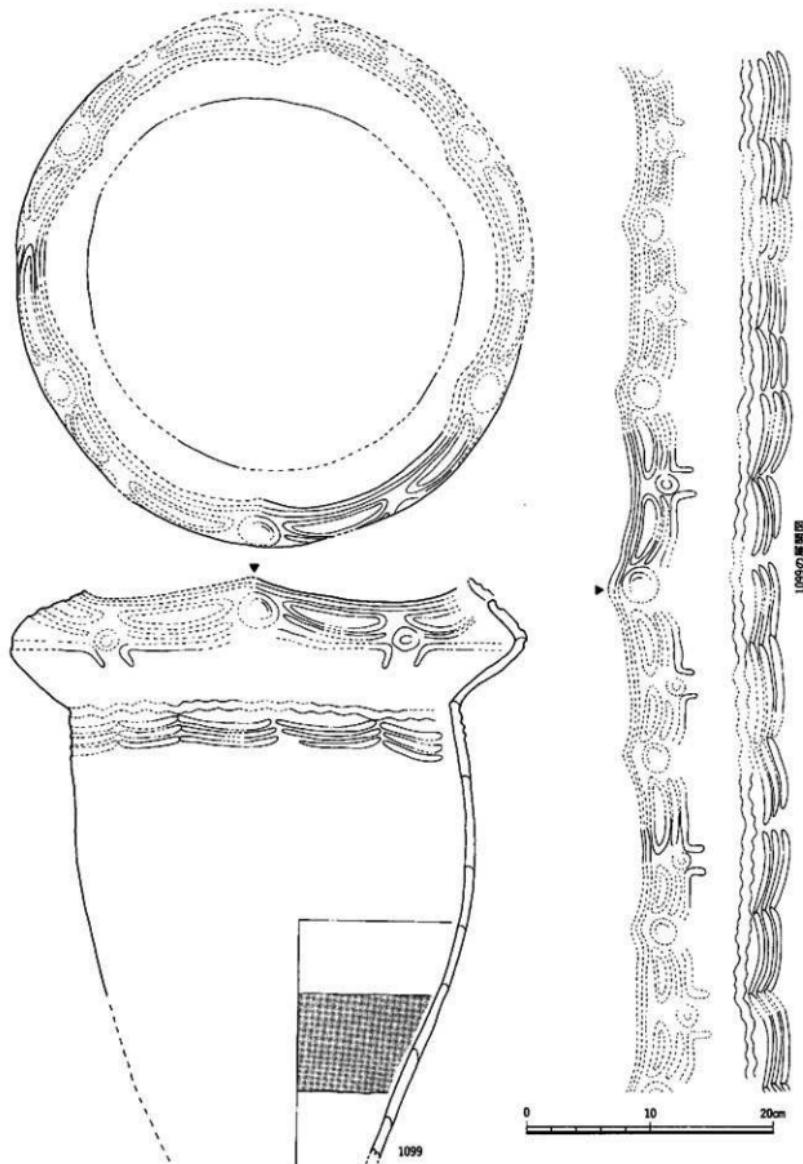
(1094・1095)は口縁部片で、先端部を欠損しているが、棒状工具による沈線で文様を描いており、半截竹管状工具の連続刺突による爪形文もみられる。

(1096・1097)はSB6の床面に埋設されていた土器で、いずれも胴下半から底部のみである。(1096)は残存高5.9cm、胴部最大径9.9cm、底径4.8cmと小さく、底部は凹み底である。胴部は無文であるが、底部の特徴より第III群3類の里木II式に類似する土器と考えたい。器厚は4~5mmとかなり薄い。

(1097)は器厚8~9mmとかなり厚手で、残存高8.1cm、胴部最大径16.2cm、底径6.0cmである。胴部は無文で、緩い尖底状であるが途中に一段をつくる。床面に埋設するために意図的にこのような底部の形状に作った可能性も考えられる。

(1098)はSB6の覆土より出土した土器でキャリバー形器形の口縁部片である。復元による口径は31.4cm、口縁部最大径37.4cm、残存高10.5cmである。径5~6mmの円棒状工具による沈線で口縁部に口縁に平行して1条の沈線を引き、右巻きの渦巻文を4単位で描き、その下には雨垂れ状の沈線を5本縦に引いている。4単位の渦巻文の中間点には、3本の縦の沈線を引き、この沈線と渦巻文の間に楕円形区画を描いている。区内は、縄文を充填している。楕円形区画と3本の沈線の下には、3本の沈線の下で山状に盛り上がり、渦巻文の下へと回り込む1条の沈線を引き、3本沈線の下には、同様の短い沈線1条を引いている。頸部には無文帯がくる。焼成良好、色調は黄橙から明黄褐色である。

(1099)はSB6の覆土最下層の床面直上付近で出土したもので、底部を除いてほぼ完全に復元できた。底部を除いた高さ47cm、口径33.4cm、口縁部最大径41.8cm、頸部径31.8cm、胴部最大径32.4cmである。キャリバー形の器形を呈するが、胴部が太く、頸部のくびれも緩やかである。口縁部はSB6の炉内に敷かれていた(1087)と同じように、約45°の角度で斜めに立ち上がる。波状口縁を呈し6ヶ所に波頂部をもつ。このような器形の類例としては、柳川遺跡（福井県朝日町）出土呪煙・醜醜様式の土器¹¹⁴や、少ヶ野遺跡（岐阜県下呂町）の土器¹¹⁵があげられる。文様は、無文地に径5mm程度の円棒状工具による沈線で描かれており、まず口縁部には、口縁に沿って1条の沈線を引き、波頂部と波底部には渦巻文（波底部の文様は円形の可能性も考えられる）を描き、その間に楕円形区画文および楕円



第48図 SB 6 覆土下層出土土器

文の下の弧状沈線を入れている。さらにその下には、波底部の渦巻文の両サイドで下へ垂下する1条の沈線を引いている。無文帯を挟んで頸部のすぐ下には、小波状の沈線文1条と、その下に3条の連弧文を引いている。土器の外面、胴中央部から口縁の最大外反部まではかなりの煤が付着している。内面、胴下半部には、幅約8cmの炭化物の付着がみられる。(1099)はSB6の炉内で出土した(1088)と同一個体の可能性もあり、そうだとしたら、(1099)ではつかめなかった波頂部の渦巻文は(1088)のように右巻き3重の渦巻文と考えられる。

(1100~1143)はSB6の覆土中より出土した土器で、このうち(1100~1101)は第I群1類の高山寺式土器、(1102~1122)は第III群3類の里木II式類似土器、(1123~1142)は第III群4類の呪煙式土器、(1143)は第III群5類その他の中期の土器である。以下、個々について簡単に述べる。

(1100~1101)の外面には楕円形の押型文がみられ、(1100)の内面には幅広の斜行沈線が左上から右下へ引かれている。次に、(1102~1122)は、地文に燃糸文の施されたもので、(1102~1108、1113~1114)は口縁部片である。(1102)は小波状口縁を呈し、波頂部には半截竹管状工具による平行沈線2本が縦に引かれ、その間には刺突列を施している。(1103~1106・1107)にはコンパス文や平行沈線文がみられ、(1107)の口縁端部には内傾する平坦面がみられる。

波状口縁を呈すると考えられる(1104~1105)は同一個体で棒状工具による沈線で波状文や弧状線を引いている。(1108)は口縁端部を欠損するが、平行沈線文がみられる。

(1113~1114)はキャリバー形の器形を呈する土器の口縁部で、(1114)の口縁端部は少し立ち上がり気味に仕上げられている。棒状工具による沈線で楕円形区画などの文様を描いているが、区画の内外に燃糸文が施され、ここでは、第III群3類の里木II式に類似する土器とした。しかし、器形や文様に第III群4類の呪煙式との関連もみられる。

(1109~1112)は胴部片で半截竹管状工具による平行沈線文で弧状文や波状文を引いている。

(1115~1122)も胴部片で(1115~1118)には燃糸文のみがみられる。(1119~1122)は同一個体で、7本の歯をもつ横歯状工具で、波状文や弧状文を引いている。(1119)には、頸部無文帯もみられる。

(1123~1142)は、第III群4類の呪煙式土器で、(1141~1142)以外は口縁部片である。(1123~1128)は隆帯によって渦巻文やそれに連なる弧状文を描くもの(a種)で、(1123~1125)の沈線内には、半截竹管状工具の連続刺突や押引きによる爪形文がみられる。(1126)は2本の隆帯で渦巻文を描いている。(1127~1128)の楕円形区画の下には、小さな(椭)円形の文様もみられる。

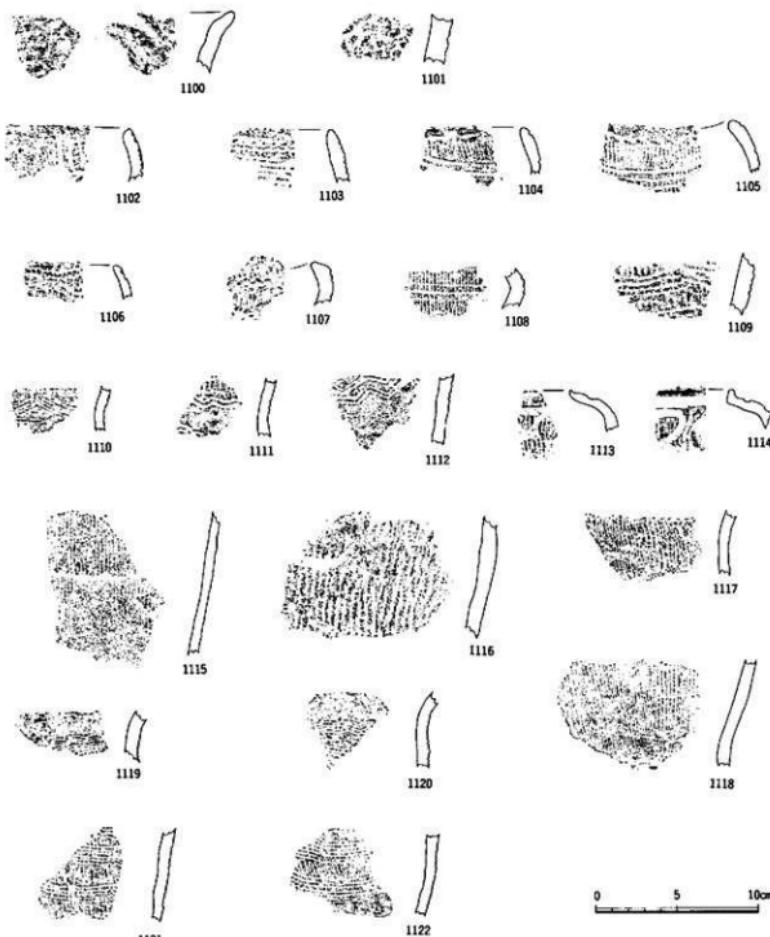
(1129~1134)は楕円形区画や渦巻文を沈線で表現しているもの(b種)で、(1129)には沈線内に刺突列もみられる。(1135~1136)は隆帯の下部に棒状工具による刺突列のみられるもので同一個体と考えられる。SB6のP5出土の(1092)とも同一個体の可能性がある。(1137~1138)にも刺突列がみられ、(1137)は隆帯上に刺突を施している。(1139)は波状口縁を呈し、波頂部には横状把手がつき、その上と下の面には横からうがる棒状工具による沈線で渦巻文が描かれている。

(1140)には繩文が充填されている。(1141~1142)には、棒状工具による連弧状沈線が引かれている。(1143)は胴部片で、左上から右下へ斜行する燃糸文とみられる地文が施されている。その上に径5mm程の半截竹管状工具による半隆起線で同心円状の曲線文様を描いている。右端には、同様の工具の背によると考えられる沈線もみられる。器厚1.2~1.3cmとかなり厚手である。色調は橙からよい黄橙色で、胎土も他の土器とは異なり搬入品の可能性も考えられる。内面には一面に炭化物の付着が

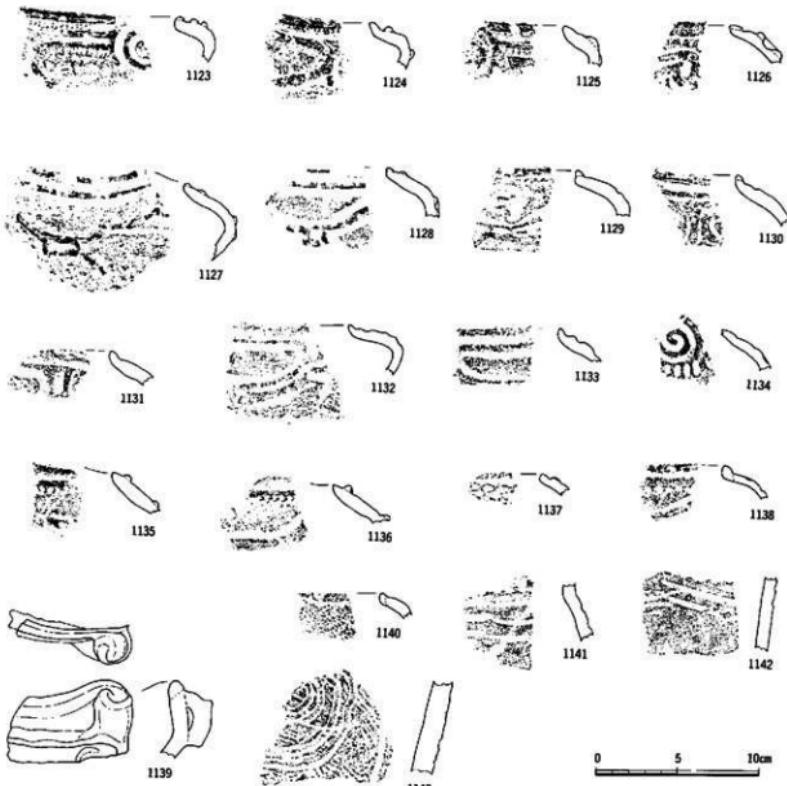
みられる。

1) 縄文土器大觀 3 813

2) 縄文土器大觀 3 810



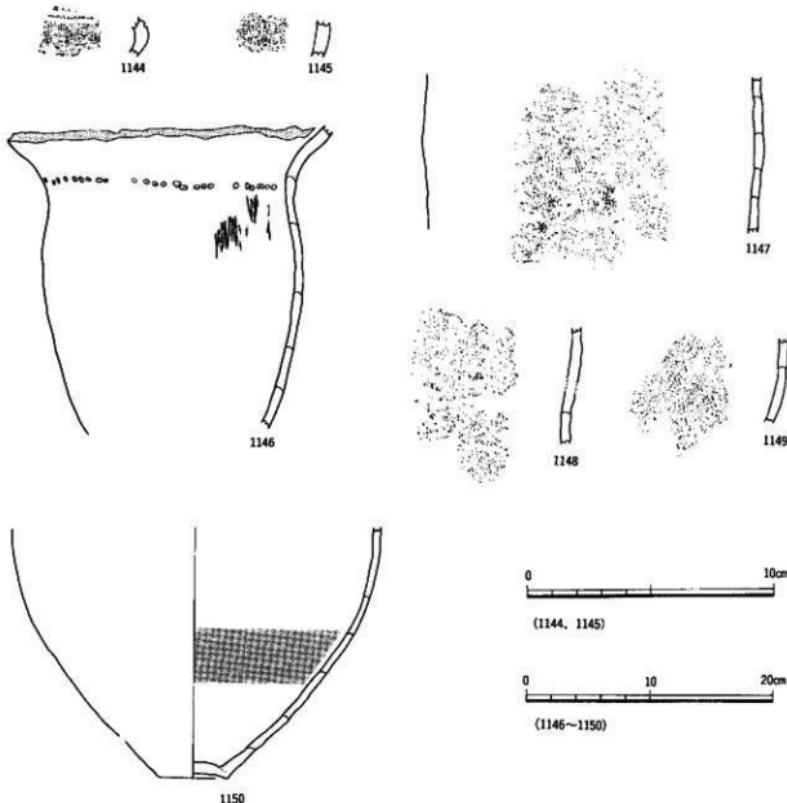
第49図 SB 6 棚土出土土器



第50図 SB 6 置土出土土器

(7) 第7号住居跡 (SB 7) (第51図 1144~1146 図版20)

(1146)はSB 7の石圓炉の南東50cm程の地点で横位につぶれた状態で出土した。口縁端部と底部を欠く。残存高は24.5cmである。頸部がくびれ、頸部から口縁部にかけて外反する器形である。口縁端部は欠損しているが、意図的に打ち欠いたような割れ方をしている。全体の器形は不明であるが、おそらく口縁部は内湾し、キャリバー形になると考えられる。地は無文であるが、一部条痕文（貝殻痕状の工具で縦に引いている）のみられる所もある。最初に条痕調整を施したのち、ナデ消したものと考えられる。頸部には、径3~4mm程度の円棒状工具による刺突を横位に列点状に入れている。刺



第51図 SB 7・SB 8 出土土器
土器埋設遺構出土土器

突の間隔はまちまちである。第III群4類d種の土器である。

(1144・1145) は、(1146) のすぐ隣(西)で出土した。2点とも地文に撚糸文が施され、(1144) は棒状工具による横位の沈線2本がみられる。第III群3類の土器である。

(8) 第8号住居跡(SB 8) (第51図 1147~1149 図版20)

(1147~1149) は、SB 8石圓炉内より出土し、同一個体である。(1147) は胴部片で、径約27.5cmである。地文には撚糸文が施されている。粘土輪積み痕が明瞭に残り、その幅は、約2.5cmである。第3群3類、里木II式に類似する土器である。

(9) 土器埋設遺構の土器について (第51図 1150 図版20)

(1150)は、土器埋設遺構より出土した土器で、胴下半から底部片である。地は無文で、残存高30.0cm、底径5.6cm、底部は里木II式にみられる凹み底で、第III群3類土器と考えられる。なお、内面に幅5cmほどの炭化物付着がみられる。

(10) ピット(P)・土坑(SK)出土土器 (第52図 1151~1180 図版21)

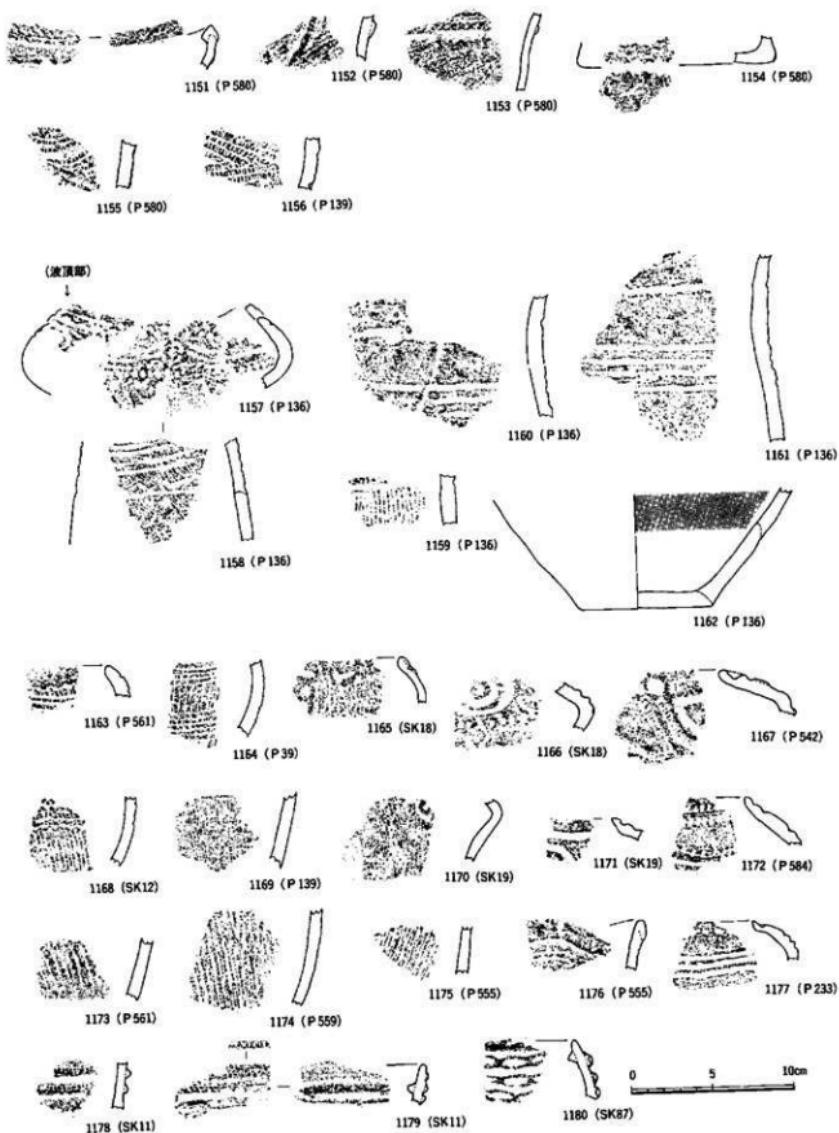
(1151~1180)は、ピット(P)・土坑(SK)出土土器である。以下、個々について簡単に触れていく。(1151~1155)はP580より出土した。すべて第II群の前期後葉から末葉にかけての土器である。

(1151)は口縁部片で、口縁端部内外面を肥厚させ、内面に縄文を充填している。(1152~1153)は胴部片で、(1152)は細い粘土紐を貼り付け、断面V字状の工具で比較的密に押し引いて特殊突帯文を作っている。(1153)は粘土紐を貼付し、その両側を指で押さえ、その上に縄文を充填している。地文にもその際につけた縄文がみられる。(1154)は底部片で、底部側縁に工具による刻みがみられる。(1155)は細い粘土紐を同心円状に貼付し、その上を半截竹管状工具で押し引いた結節浮線文がみられる。(1151~1154)は北白川下層III式から大歳山式土器(1類)、(1155)は諸磯C式から十三菩提式土器(2類)である。(1156)はP139より出土し、半截竹管状工具による押引き沈線や刺突がみられる。(1155) 同様第II群2類土器である。

(1157~1162)はP136より出土した。(1157~1158)は同一個体で、口径は約13cm、口縁部最大径は約16.7cmと小型で、キャリバー器形を呈する。小波状口縁で4単位と考えられる。口縁上端部には半截竹管状工具で平行沈線を引き、沈線内に棒状工具による交差刺突を施している。その下には、同様の工具による沈線で渦巻文や弧状沈線を描いている。沈線は2本が一組となり、2本がからむ形で渦巻文となる。渦巻文は波頂部・波底部にくる。さらにその下の一一番張り出した部分には、同様の工具による刺突列1条が施されている。口縁部(1157)はローリングが激しく地文についてははっきりしないが、同一個体の胴部と考えられる(1158)には地文として燃糸文が施され、棒状工具による横位の沈線4条と、その下に引かれた波状文1条がみられる。土器の色調は橙色を呈する。地文に燃糸文をもつことより、第III群3類C種、里木II式に類似する土器と考えられる。(1159)も胴部片で、燃糸文地に棒状工具による横位の沈線が引かれている。(1160~1161)は、無文地に棒状工具による沈線が引かれ、特に(1160)の頸部に引かれた沈線は右端に下向きの渦巻文がみられる。(1162)は底部および胴下半部で、底部は平底、底径9.2cmである。

(1163~1165、1168~1170、1173~1175)は地文に燃糸文をもつもので、第III群3類、里木II式に類似する土器である。(1163)には口縁上端部にコンバス文と平行沈線文が、(1164)には平行沈線文、(1168)にはコンバス文が施されている。(1165)には、貼付隆帯による文様が施されている。

(1166~1167、1171~1172、1177)は、第III群4類呪煙式の口縁部片で、(1166)には棒状工具の沈線による渦巻文とその下部に横位に施された刺突列がみられる。(1171)も棒状工具の沈線による渦巻文等の文様が施され、(1167~1172)には沈線内に半截竹管状工具による連続刺突や押引きが施されている。(1167)には円形の刺突もみられる。(1177)は口縁上端部に刺突列が施され、その下に棒状工具による沈線3条が引かれている。(1176)は波状口縁で丸く整形されており、口縁端部外面を肥厚させ、その下に、指頭によって撫で引いたと考えられる痕や、半截竹管状工具による半降起線上の押引



第52図 ピット・土坑出土土器

きがみられる。(1175)と共にP555より出土しており、中期後葉と考えられるが、型式名等不詳である。なお、(1165)と(1166)はSK18より出土しており、(1170)と(1171)はSK19より共に出土している。(1178)と(1179)は同一個体で、SK11からの出土である。(1179)は口縁部片で、外面に3条、内面に1条の貼付隆帯がみられる。そして、外面は上からの2本の隆帯の上に、内面はII縁端部の内面と口唇部にへら状工具による刻み状の沈線がみられる。時期・型式名等不詳である。

(1180)はSK87より出土した。眼鏡状の浮線文3条が横走するのが認められる。阿弥陀堂式に類似する浅鉢で、第V群、晩期から弥生時代前期の土器である。

3. 包含層から出土した土器

第I群土器 縄文時代早期の土器 (第53・54図 1181~1199、図版22・24)

縄文時代早期の土器は、124点出土した。そのほとんどは、外面に回転押型文(押型文は楕円形)の施された厚手の土器で、高山寺式土器である。その大半は、4L・4M・5Lグリッドの黄褐色土層(Ⅲ層)中より出土した。点数が多いが、個体数としてはそれほど多くないと思われる。ここでは、高山寺式土器のうち17点、その他の早期の土器2点を図示した。

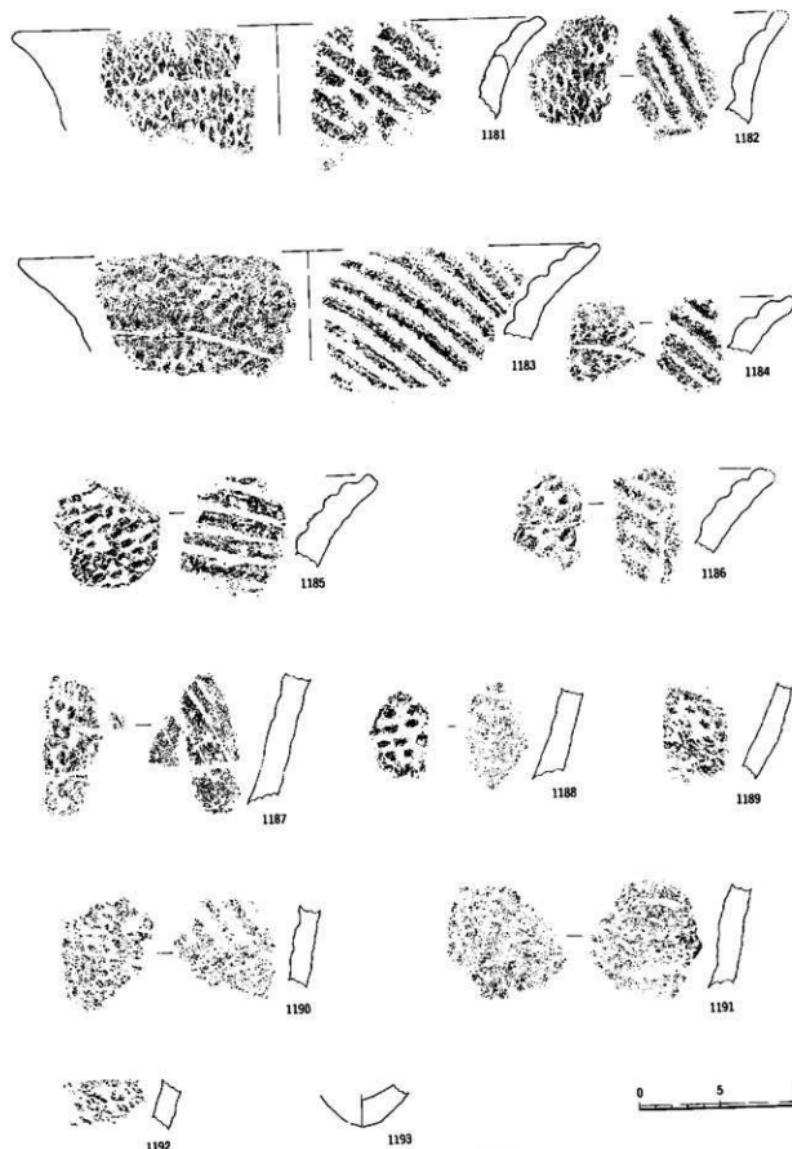
1類 高山寺式土器 (第53・54図 1181~1197、図版22・24)

(1181~1197)が高山寺式土器である。(1181~1182)は同一個体で、外面には、縦方向の楕円形(先端部が尖り、やや菱形気味の押型文)が、また内面には、幅広の斜行沈線が左上から右下に引かれている。口縁部がやや薄いものの、下へいくほど器壁は厚い。

(1183~1187)も同一個体と考えられる。外面には左上へ流れる大粒の楕円形の押型文が、また内面には、幅広の斜行沈線が左上から右下に引かれている。

(1183~1186)は、口縁部で(1181~1182)同様に外反する器形である。(1187)は、胴部片で、内面の斜行沈線が丁度なくなる部分である。いずれもかなり厚手である。なお、(1183~1186)の外面には横位の傷状の線がみられるが、これも焼成前につけられたものと思われる。(1188)の内面にも、上の端に斜行沈線がみられる。(1190・1191)も、内面の斜行沈線が丁度なくなる部分である。(1189・1192)の内面には斜行沈線がみられず、胴下半部と考えられる。(1193)は、底部片で尖底である。

(1194~1197)は、外反する口縁部で、外面には楕円形の押型文、内面には左上から右下に引かれた幅広の斜行沈線がみられる。(1194・1197)は、他と比べやや薄手である。

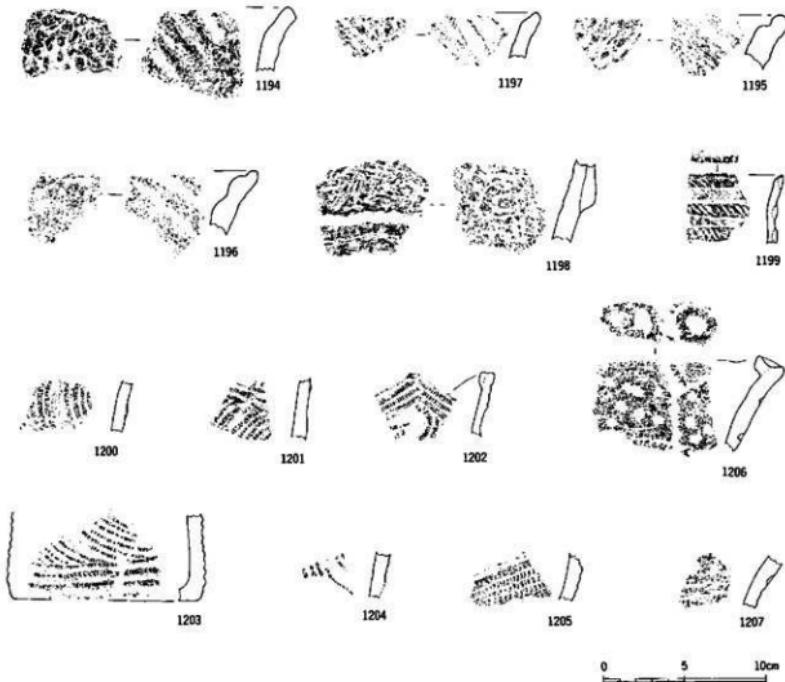


第53図 第Ⅰ群 1類土器

2類 その他の土器 (第54図 1198・1199、図版24)

(1198) は、厚手の繊維入り土器で、外面には肩曲がみられる。外面の上段には、縦条体の圧痕がみられる。

(1199) は、器厚約5mmと薄手の土器で、口縁部及びその下に粘土紐を貼り付けた幅7~9mmの低い隆帯3条がみられる。そして、隆帶上及びその下の地の部分にかけて、貝殻によると思われる条痕が施されている。また、口唇部にも、貝殻腹縁による刻みが施されており、内面には、粘土紐を貼り付ける際にできたと思われる指頭圧痕も観察できる。早期末葉の東海条痕文系の土器（塙屋式）と思われる。



第54図 第I群1・2類、第II群2類土器

第二群土器 縄文時代前期後葉から末葉の土器 (第54・55図 1200~1232 図版23・24)

1類 北白川下層III式から大歳山式土器 (第55図 1208~1232 図版23)

(1208~1213) は、口縁部で波状口縁を呈し、口縁端部内側を肥厚させ縄文帯を持つものである。外面には、細い粘土紐を貼付した突帯で文様を描き、(1208~1212) は、突帯上に縄文を転がしている。なお (1208~1210) は同一個体である。(1212) は口縁端部に面を持つ。(1213) は、山形になった波頂部の中央が、やや凹んだ面になっている。

(1214~1219) は、平口縁であり、口縁端部内側を肥厚させ、縄文帯を持つものである。(1214~1218) は、口唇部に刻み目を施している。(1219) は、口縁端部外面にも縄文帯をつくり、粘土紐を縦に貼付して、断面V字状の工具で押さえている。

(1214~1215) は、外面に縄文を施し、(1216~1218) は、外面に細い粘土紐を貼付して突帯をつくっている。(1216) は、突帯上に縄文を転がし、(1217) は、突帯をつまみだしており、(1218) は、突帯上を断面V字状の工具で押し引いている。

(1220~1227) は胸部片で、いずれも縄文もしくは無文地に細い粘土紐を貼り付けた突帯で円や曲線などの文様を描いている。(1220~1223) は、突帯が比較的低く、また、突帯上を押し引いた工具の幅が狭いので、粘土のはみ出しがみられる。それに対して (1224~1227) は、突帯が比較的高く、中でも (1225~1227) は、断面V字状の工具で押し引いた特殊突帯文がみられる。特に (1227) は、断面V字状の工具で密な押し引きを施しており、工具の幅も広くなり、粘土のはみ出しがみられない。

(1228~1232) は、底部片で、いずれも底部側縁に一定間隔で工具による刻みや指頭による押圧がみられる。特に (1232) は、指頭による押圧が深く残る。

2類 その他の土器 (第54図 1200~1207 図版24)

(1200~1207) は、結節浮線文や刺突のみられるもので、諸磯C式~十三菩提式土器と考えられる。(1200・1201・1203・1204) は、細い粘土紐を同心円状に貼付し、その上を半截竹管状工具で押し引いている。(1203) は、底部で胴最下部に横位の結節浮線3条がみられる。

(1202) は、波状口縁を呈し、端部内面を肥厚させるとともに、波頂部を小突起状に仕上げている。

(1206・1207) は、同一個体で、外反する口縁部片である。径7mm程度の半截竹管状工具による刺突列や押し引き沈線がみられる。口縁端部には、粘土紐を貼り付けて耳状突起のように仕上げている。

(1205・1206・1207) は、赤褐色で胎土・焼成も他と異なり搬入品の可能性も考えられる。



第55図 第II群 1類土器

第三群土器 繩文時代中期後半の土器 (第56~65図 1233~1438 図版24~33)

1類 船元III式土器

a種 繩文を地文とし、貼付隆帯の両側に半截竹管状工具による平行沈線文を施すもの

(第56図 1233~1235 図版25)

(1233)~(1234)は、繩文地に粘土紐を貼り付けた隆帯と、半截竹管状工具による平行沈線で文様を描いており、「船元III式」に比定できる。

(1235)は、捺糸文を地文としているが、隆帯上に半截竹管状工具による平行沈線を引いており、「船元III式」の範疇に入れた。

b種 隆帯や沈線を多用し船元III式土器が在地化したと考えられるもの

(第56図 1236~1243 図版25)

(1236)~(1240)は、貼付隆帯による施文を基調とするものである。(1236)~(1237)は、縦位の貼付隆帯を比較的密に施し、隆帯間に櫛描沈線を施している。(1238)は、隆帯間に櫛描沈線文が見られない。(1239)は、口縁部がやや内湾し、外側に貼付隆帯を縦・横・斜めに施している。

(1240)は、内湾する口縁上端部の貼付隆帯に刺突を加えて眼鏡状の浮線文を作り出している。これらは、島崎II式に分類されたものに類似し、船元III式が在地化したものと考えられる。

(1241)~(1243)は、太く短い沈線(短沈線)を施す、キャリバー形口縁をもつ土器である。

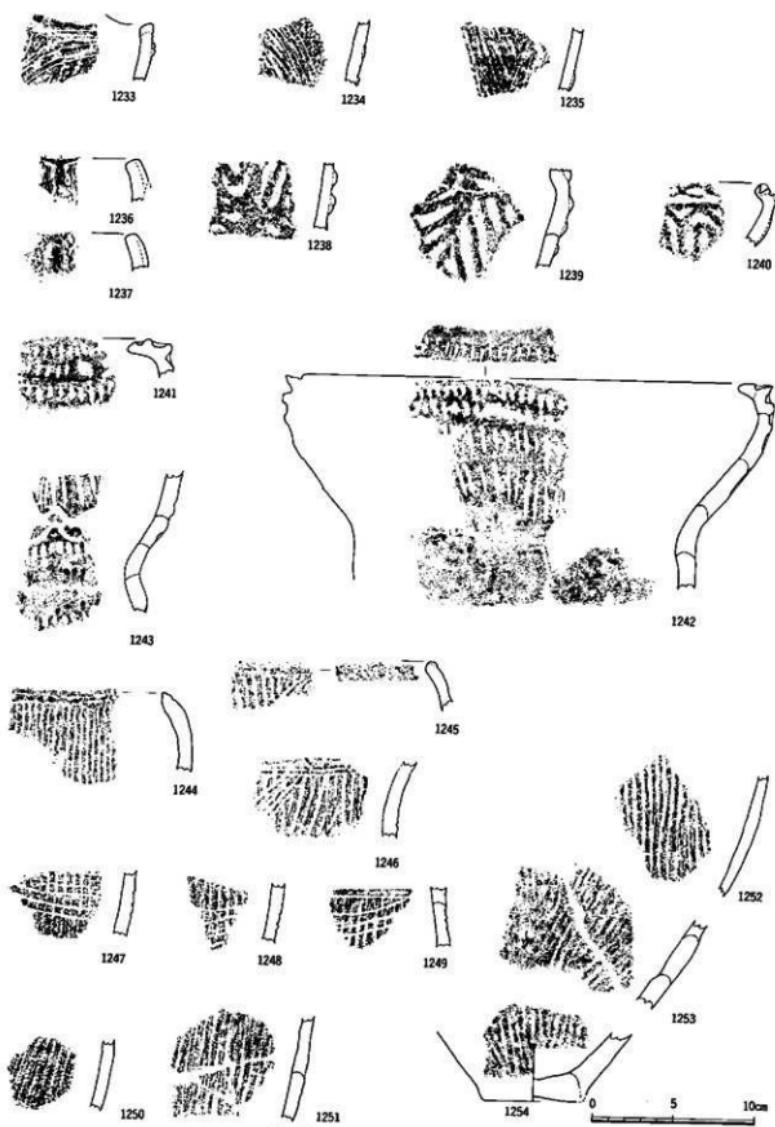
(1243)は、頸部無文帶をはさんで、円棒状工具による縦の沈線多数・波状文2条・横位の連続刺突文が見られる。

(1241)・(1242)は、同一個体で、内湾する口縁端部に作り出された面及び外面の上端部に先の尖った棒状工具による横位の刺突列を1~2条施し、その下には、先端部の丸い棒状工具による縦の短沈線を2段にわたって横位に連続して引いている。その下には頸部無文帶が見られる。口縁端部に作り出された面は、幅の狭いところと広いところがあり、狭いところには1条(列)の刺突列が、広いところには2条(列)の刺突列と、指頭によると考えられる円形の刺突が施されている。これらは、船元II式E類に分類されたものに類似している。

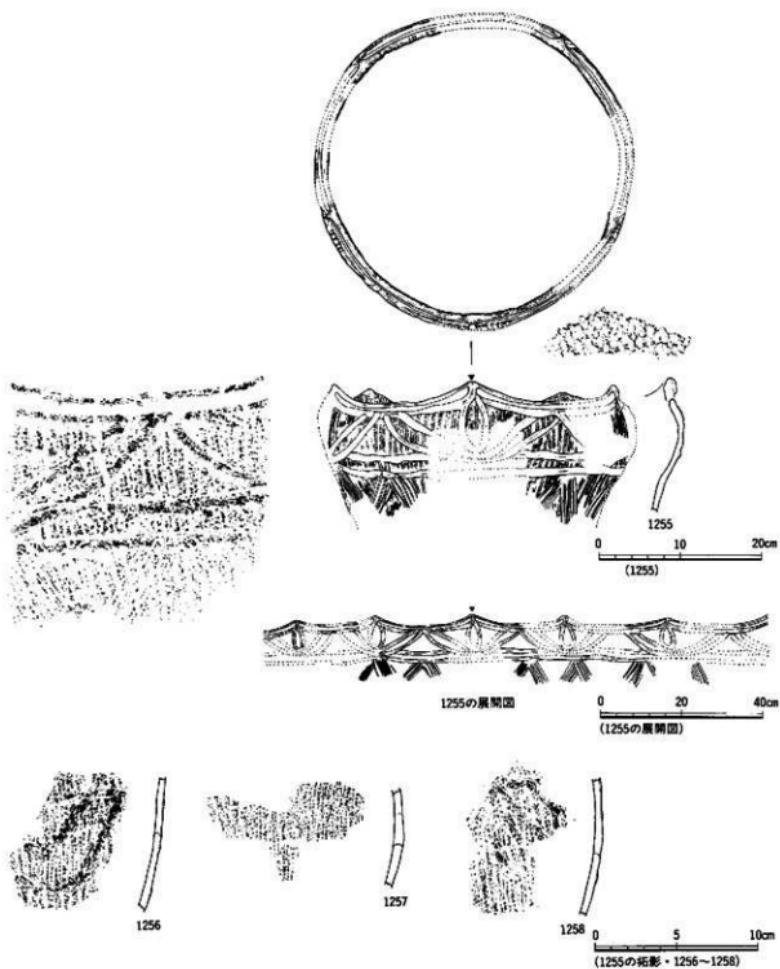
2類 繩巻繩文を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線を施すもの

(第56・57図 1244~1258 図版24・25)

(1255)~(1258)は、同一個体で、4Pグリッドでまとめて出土し、頸部から口縁部にかけてかなり復元することができた。器形は、頸部がくびれ、口縁部が外反しや内湾するゆるいキャリバー状を呈する。波状口縁で5単位である。口縁部内面には、約1cm(波頂部は約2cm)の面を作り、そこに粗い単節斜繩文を横位に転がしている。外面は、粗い繩巻繩文地に粘土紐による隆帯で文様を作り出している。まず、口縁部に口縁に平行に約1cmの間隔で隆帯2条を貼り付けて、その間を指で押さえている。波頂部からは、紡錘形を描き、波底部を始点とし、紡錘形の下をまわり込む2条の円弧状の隆帯を貼付している。そして、円弧状の隆帯の下を結ぶように横位の隆帯1本と、約2cm下に平行して隆帯1条を貼付している。この隆帯の下には、櫛描状の工具(7本単位)による条線を八の字状に引いている。



第56図 第1群 1・2類土器



第57図 第田群 2類土器

(1252)～(1254)（同一個体）は、粗い縄巻繩文を地文とし（ローリングが激しく、明瞭でない）、(1254)は、底部で凹み底である。

(1244)～(1251)は、粗い縄巻繩文を地文とする破片で、(1244)は、口縁上端部に細い棒状工具による波状沈線2条を施している。(1245)・(1246)は同一個体で、半截竹管状工具による平行沈線文が施されている。(1244)・(1245)は口縁端部を指でつまんで断面三角形状に整形している。

(1247)～(1249)は、半截竹管状工具による平行沈線文の施された胴部片であり、(1250)・(1251)は縄巻繩文地の胴部片である。

3類 地文に撚糸文・条線を施す里木II式に類似する土器

a種 撥糸文を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線文を施すもの

(第58・59図 1259～1305 図版26・27)

(1259)と(1260)は同一個体で、器形は緩いキャリバー形を呈する。口縁端部はやや内傾し、先端部を尖らせて断面三角形状に仕上げている。内面には幅約8mmの平坦な面を作り出しているが、縄文は見られない。口縁部と胴部に撚糸文を施し、その上に半截竹管状工具による文様を施す。口縁部には、コンパス文3条を横位に施し、頸部文様帯には縦の沈線を引いている。頸部と胴部には、2段にわたって弧状に沈線が引かれ、下の段には、3条の弧状沈線が引かれている。口径約34cm。頸部径約28cmである。

(1261)と(1262)も同一個体で、頸部無文帯と撚糸文地の胴部が見られ、半截竹管状工具による平行沈線でコンパス文を頸部と胴部の境に、また弧状沈線を胴部に引いている。弧状沈線は3段見られ、上から2条、3条、3条と引かれている。

(1263)と(1266)は同一個体で、撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線でコンパス文を施している。口縁端部は先端部を尖らせ、断面三角形状に仕上げた上、内面に面を作り出し、その上に撚糸文を施している。

(1264)と(1265)は同一個体で、撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線で文様を描いている。口唇部をやや平らに仕上げ、その上に撚糸文を転がしている。赤褐色で、胎土に長石・雲母を含んでいる。

(1268)は口縁端部を平らに整形し、先端部を尖らせている。(1269)は、横位の撚糸文とコンパス文が施されている。

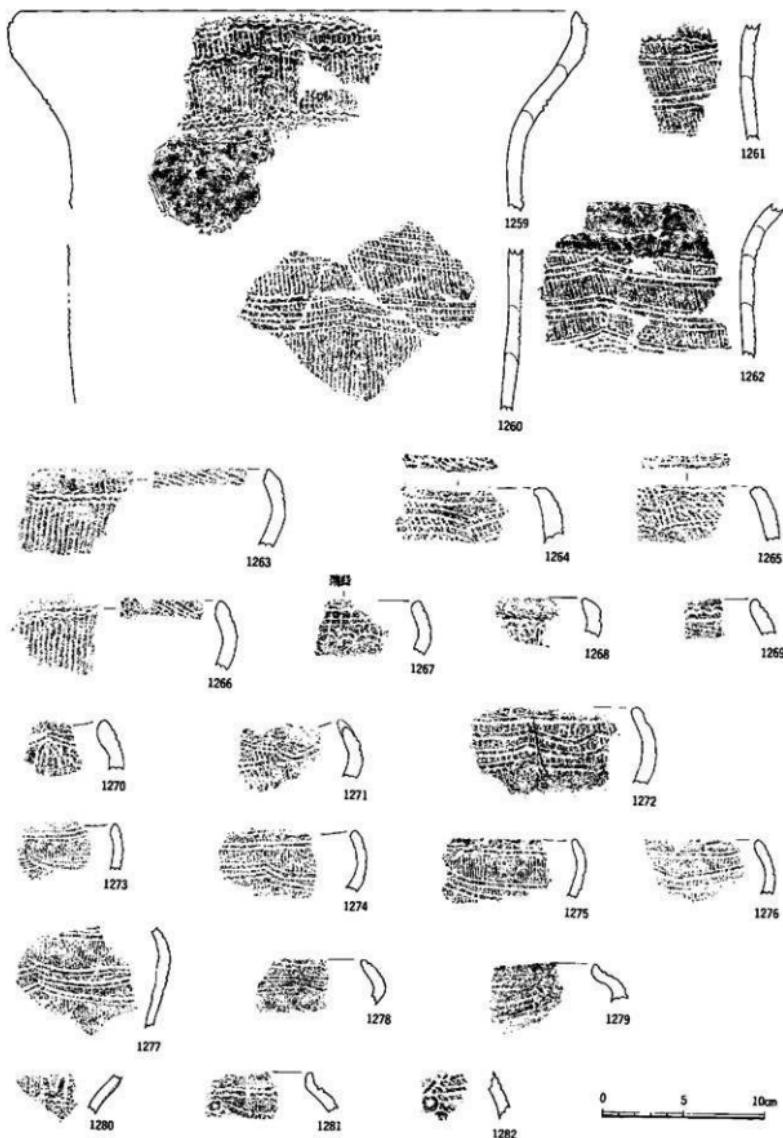
(1270)・(1271)は、小波状口縁の波頂部で、撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線で文様を描いている。

(1272)～(1278)は、撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線で弧状線を引いており、(1273)～(1277)は、同一個体で平口縁である。

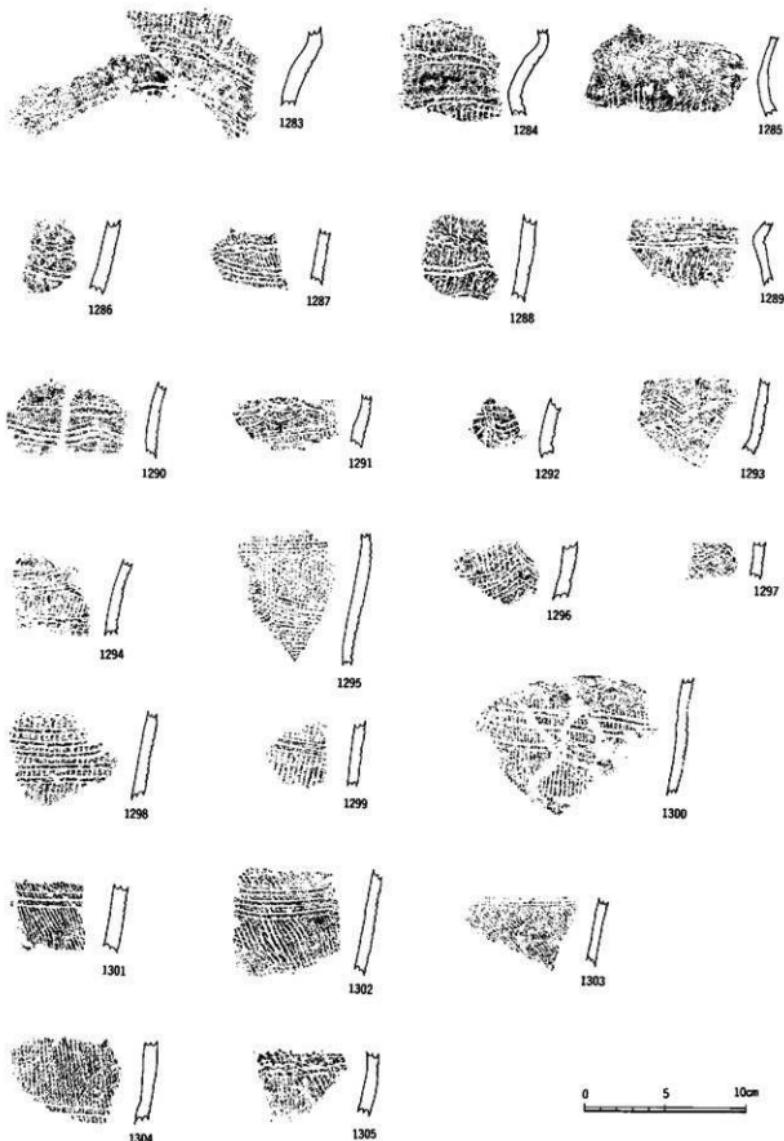
(1279)・(1281)は、口縁端部が少し立ち上がる。(1280)は撚糸文地に半截竹管状工具によるコンパス文と、貼付隆帯による文様が見られる。

(1282)は、(1281)同様に平行線で円形の文様を描いている。

(1283)・(1284)は同一個体で、口縁下半部から頸部にかけての破片である。頸部には約2cmの無文帯が見られる。口縁部と胴部には、地文に撚糸文が施され、半截竹管状工具による平行沈線で文様



第58図 第3群 3類土器 (a種) (1)



第59図 第III群 3 種土器 (a種) (2)

が描かれている。

(1285) は、頸部無文帯と口縁部・胴部に施された撚糸文が認められ、平行沈線も引かれているが、(1283)・(1284) が頸部との境目に平行沈線が引かれているのに対し、(1285) の境目には施されていない。

(1286)～(1288) は、撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線で、コンパス文や弧状沈線が引かれている。

(1289) も頸部片で、無文の頸部に半截竹管状工具による横位の平行沈線が引かれている。

(1290)～(1305) は、撚糸文地の上に、半截竹管状工具による平行沈線で文様を描いており(1290)には、コンパス文と弧状沈線が、(1291)には、長さ約 2cm と短い弧状沈線が引かれている。(1292)・(1293) は、撚糸文地に平行線でやや長めの波状文を引いている。

(1294)～(1298) には、横位の沈線や弧状沈線が引かれている。

(1299)～(1304) には、平行線で横位の沈線や、緩やかな弧状沈線を引いている。(1301)～(1303) の撚糸文地は、左上から右下へ斜行して施されている。(1305) は底部近くで、コンパス文による横位の沈線が引かれている。

b 種 撥糸文を地文とし、棒状工具による沈線文を施すもの

(第60図 1306～1326 図版28)

(1306)～(1326) は、撚糸文を地文とするか、もしくは区画内に撚糸文が施されたもので、棒状工具による沈線で文様を描いている。(1306)～(1309) は同一個体である。(1309) の底部は凹み底で、径約 3.7cm である。胴下半部・底部付近は、不規則に撚糸文を施している。(1310)・(1311) は、口縁部片で、(1310) は、撚糸文地に貼付隆帶と沈線で橢円形区画を作り出している。(1311) は、貼付隆帶と沈線で橢円形区画等を作り出し、区画内に撚糸文を施している。

(1312)・(1313) は同一個体で、沈線によって橢円形区画を作り、区画内に撚糸文を施している。

(1314)・(1315) も同一個体で、撚糸文地に沈線で波状文や弧状線を描いている。

(1316)・(1317) も同一個体で、沈線で橢円形区画を描き、区画内に撚糸文を施している。口縁端部はやや立ち上がる。

(1318) は、口縁端部に粘土をつぎ足して、先端部が尖り気味に立ち上がっている。

(1319) は、撚糸文地に沈線で文様を描いており、左端には渦巻文らしき文様も見られる。

(1320) は、撚糸文地に沈線で文様を描いており、口縁端部は粘土をついで、先端部が尖るように仕上げている。焼成良好である。

(1321)～(1323) は、頸部から胴部片で、撚糸文を地文とし、棒状工具による沈線で、多重沈線を引いている。(1322)・(1323) は同一個体である。

(1324) は、撚糸文地に沈線による波状文が見られる。

(1325)・(1326) は同一個体で、撚糸文地に棒状工具による横位の沈線・波状文が引かれている。

c 種 撥糸文を地文とし、棒状工具を使った交瓦刺突および刺突列のみられるもの¹¹⁾

(第61図 1330～1354 図版29)

(1330) は、撚糸文地に 2 本の貼付隆帶による横位の渦巻文が施され、隆帶の両側には沈線も引かれている。口縁部上端には、平行沈線内に棒状工具による交瓦刺突が施されている。

(1331) は、撚糸文地に沈線で渦巻文や弧状沈線が引かれ、口縁部上端には、平行沈線内に交互刺突が施されている。(1332)～(1338)は、口縁部上端の平行沈線内に棒状工具による交互刺突が施されており、このうち(1336)・(1337)は口縁先端部が尖り、(1338)は口縁端部がやや立ち上がる。

(1339) は、口縁部上端に平行沈線を引き、その中に棒状工具による交互刺突を施すとともに、さらにその上に同様の工具による刺突列を施している。

(1340) は、口縁部上端に 1 条の沈線を引き、その下に棒状工具による交互刺突を施している。

(1341)・(1342)も、口縁部上端に沈線を 1 条引き、その下に交互刺突を施している。(1341)と(1342)は同一個体と考えられる。

(1343)～(1346)・(1349)も棒状工具による交互刺突や刺突列が見られるが、径 5～6 mm と太めの棒状工具を使った比較的な粗い刺突が施されている。

(1343) は、平行沈線内に交互刺突を施し、(1344) は、沈線の上と下に刺突列を施している。(1345) は、1 条の沈線の上側に交互刺突を施し、(1346) は、口縁部上端に交互刺突のみを施し、さらに口唇部も連続して刺突している。(1349) も口縁部上端に交互刺突を施している。

(1347)・(1348) は、同一個体で、口縁端部を外側に折り返し、その下に円管状工具による刺突列 2 条を施している。

(1350)・(1351) は、口縁部上端の平行沈線間の隆背上を棒状工具で連続して刺突している。(1350) は、その下に半截竹管状工具による平行沈線 2 条も引かれている。

(1352) は、1 条の沈線の上と下に連続刺突を施し、(1353)・(1354) は、口縁部上端に引かれた 1 条の沈線の下に棒状工具による連続刺突を施している。(1353) の口縁端部はやや立ち上がる。

1) 第Ⅲ群 3 類 c 種の口縁部上端に見られる平行沈線や沈線と交互刺突・刺突については、平行沈線内に交互刺突を施すもの (1330～1339) の方が古く、これが平行沈線内に刺突を施すもの (1350・1351)、1 条の沈線の下や沈線上に刺突を施すもの (1340・1353・1354)、さらには、単に刺突列のみを施すもの (1347・1348) へと変化していく。すなわち沈線もしくは刺突の省略化と考えている(春日井恒氏のご教示による。春日井 (1996))。

d 種 撥糸文を施すだけのもの

(第61図 1355～1364 図版29)

(1355)～(1364) は、地文に撚糸文を施すだけのもので、(1355) は口縁部、(1356)～(1362) は胴部片、(1363)・(1364) は胴下半部から底部にかけての破片である。

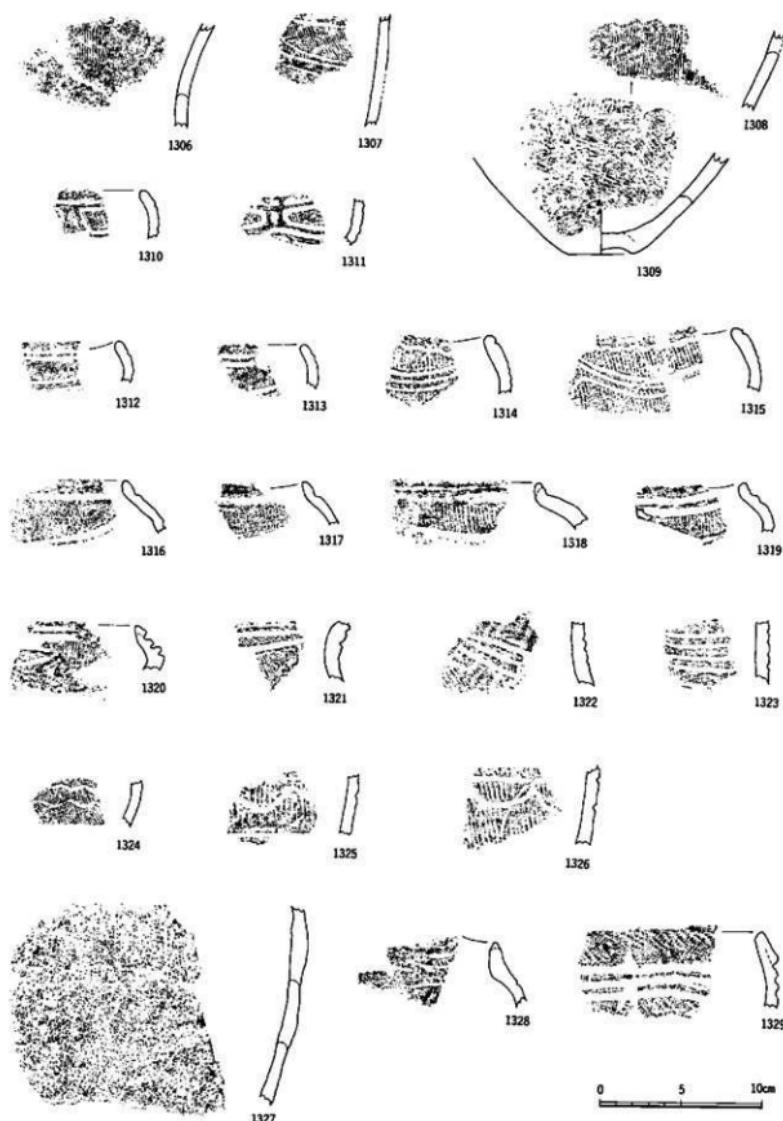
(1363) の下半分は撚糸文が施されていないのに対して、(1364) は下端まで撚糸文が施されている。

e 種 地文が条線文のもの (第60図 1327 図版28)

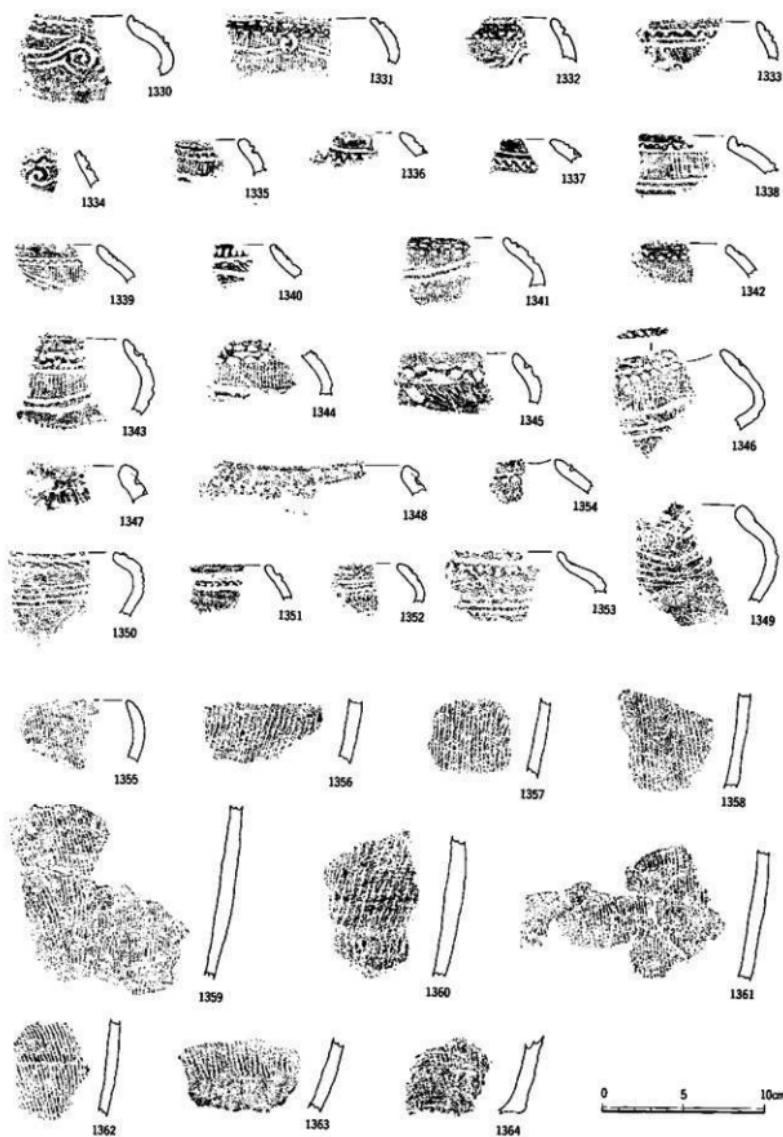
(1327) は、胴部から胴下半部片で、地文には条線文が施文されている。条線の単位は約 2 cm である。胴下半部は無文である。

f 種 その他 (第60図 1328～1329 図版28)

(1328) は、撚糸文地に半截竹管状工具による沈線が引かれているが、不明瞭である。波状口縁で、やや立ち上がる。



第60図 第III群 3類土器 (b、e、f種)



第61図 第三群 3類土器 (c, d種)

(1329) は、内湾する口縁部片で、口縁端部を外側に折り返し、その上に地文を充填している。その下には縄文地に棒状工具による沈線3条を引いている。

4類 極端なキャリバー形口縁をもつ器形を呈し、口縁部には渦巻文や楕円形区画文を配して、胴上半には棒状工具による連弧文を施す土器で、中富IV・V式、炉烟式などの型式名をもつが、いわゆる咲烟式土器

a種 口縁部文様を隆帯によって、渦巻文とそれに連なる弧状文を描く土器で、素面状の粘土紐による格子目文のみられるものもある (第62図 1365~1381 図版30)

(1365) は、波状口縁(四単位か)で、波頂部と波底部に貼付隆帯による渦巻文が施され、渦巻文の中及び口縁部には、半截竹管状工具の押し引きによる連続爪形文もみられる。渦巻文と渦巻文の間には、素面状の粘土紐による格子目文も施され、その中には、貼付隆帯と押し引きによる円形の文様もみられる。

(1366)~(1368)、(1370)~(1372) にも素面状の粘土紐による格子目文が施されている。

(1369) は貼付隆帯によって渦巻文等を描き、区画内には縄文を充填している。

(1373) は、貼付隆帯と沈線で区画を作り、区画内の沈線及び口縁部の沈線内には、半截竹管状工具の連続刺突による連続爪形文が施されている。

(1372) と (1373) は同一個体と考えられる。(1366)~(1369) は20グリッドで出土し、同一個体の可能性も考えられる。

(1374)~(1376) は、貼付隆帯と沈線によって渦巻文や楕円形区画が描かれ、沈線内には、半截竹管状工具の押し引きによる連続爪形文が見られる。(1374)と(1375)は同一個体と考えられる。(1376)は、渦巻文の上に横位の短い沈線2条が施されている。

(1377) と (1378) は、貼付隆帯で渦巻文と楕円形区画を描き、(1378) は、区画の中は無文で、渦巻文の上には短い縦の隆帯2条を貼付している。

(1379) と (1380) は、貼付隆帯で区画を作り、その中に刺突を充填するもので、(1379) は、幅2mm程度の棒状工具でやや横位に刺突をしており、(1380) はさらに細い棒状工具で刺突を施している。

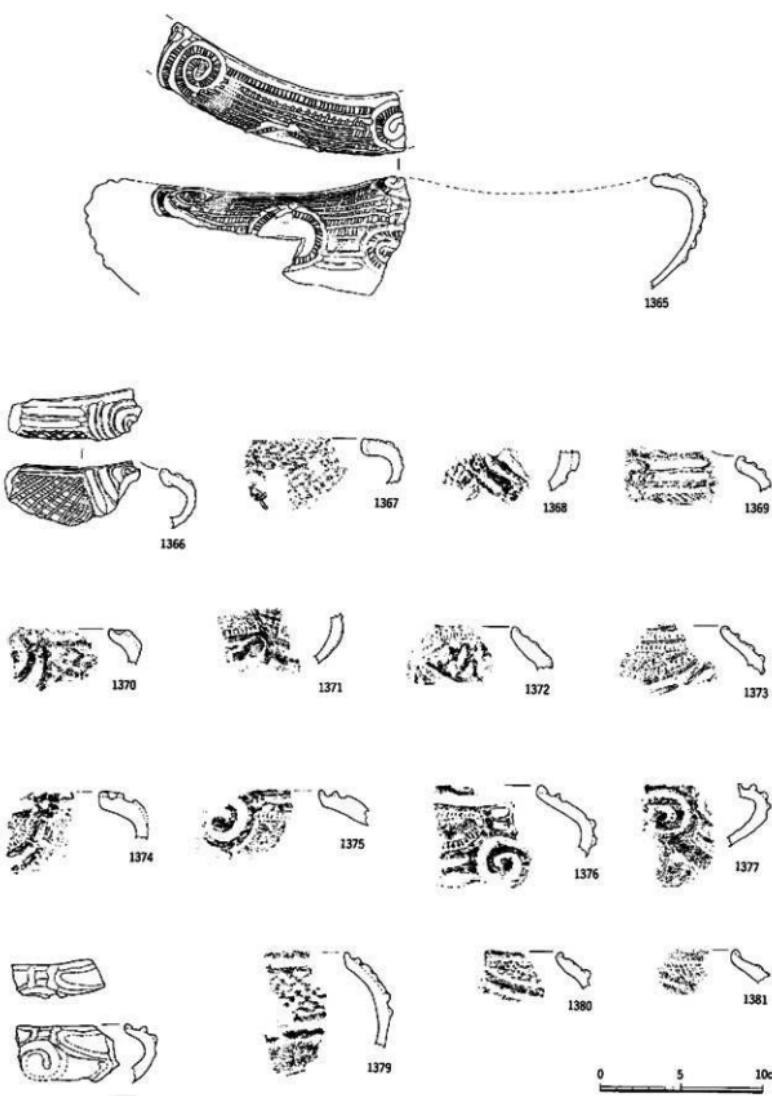
(1381) は、区画内に押し引き状の沈線を施している。

b種 口縁部文様である楕円形区画や渦巻文を沈線で表現しているもので、口縁部上端に棒状工具を使った互交刺突や刺突列のみられるものもある。 (第63図 1382~1408 図版31)

(1382)~(1388) は、口縁部上端に口縁に平行して引かれた沈線や、楕円形区画内に半截竹管状工具の押し引きや連続刺突による連続爪形文のみられるものである。このうち (1382)~(1385) は同一個体で波状口縁を呈し、口縁部上端には押し引きによる沈線3条が引かれ、楕円形区画内には縄文が充填されている。

(1387) は、口縁部上端に口縁に平行して引かれた沈線及び楕円形区画の横に引かれた沈線内に半截竹管状工具の連続刺突による連続爪形文が施されており、文様構成は、第6号住居跡の炉内出土土器(1090)に近い。(1388) は、波状口縁を呈し、口縁端部が少し立ち上がる。波頂部の下に描かれた渦巻文の下には、縦に引かれた3本の沈線がみられる。

(1389)~(1393) は、棒状工具による沈線で楕円形区画や渦巻文を描いており、小波状口縁を呈し、波頂部に渦巻文を描いている。このうち (1390) は、波頂部に縦の沈線3本と渦巻文の下に縦の沈線



第62図 第三群 4 縄土器 (a種)



第63図 第III群 4類土器（b種）

4本が引かれている。また(1393)は、波頂部の渦巻文の上に縦の刺突6条が施されている。(1394)は口縁端部を欠くが、沈線で棒円形区画や渦巻文が描かれている。(1395)は、波状口縁を呈し、波頂部に渦巻文と縦の沈線4本が引かれている。

(1396)～(1403)は、棒状工具による沈線で棒円形区画や渦巻文を描いており、平口縁である。

(1397)・(1398)は、口縁端部がわずかに立ち上がる。(1403)は、口縁部が強く内湾する。棒円形区画には、縄文が充填されている。

(1404)～(1408)は、口縁下に棒状工具を使った刺突列のみられるもので、このうち(1404)は、波状口縁を呈し、口縁に沿って引かれた2条の沈線のうち、2本目の線の中に連続刺突が施され、(1405)は、口縁部上端に口縁に沿って引かれた1条の沈線の下に連続刺突が施されている。(1406)は、口縁部上端に円管状工具による刺突が施され、その下には半截竹管状工具による横位の沈線が引かれている。(1407)は、口縁端部を欠くが、口縁部上端に細い棒状工具による密な連続刺突が施されている。(1408)は、口縁下に棒状工具による刺突列が施され、その下には縄文や渦巻文もみられる。口縁端部はやや立ち上がる。

c類 胸部 (第64図 1409～1416 図版32)

(1409)～(1416)は、III群3類の胸部の破片で、連弧文沈線や波状文を頸部から胸部に施すものである。(1409)は、頸部のすぐ下に波状文を施している。(1410)は、連弧文3条がみられる。(1411)は、連弧文2条の下に波状文1条が施されているが、連弧文というよりも水平な線とL字状に曲がる線が引かれている。(1412)は連弧文3条と波状文2条を施している。(1413)は、上に波状文2条、下に連弧文3条を施している。(1414)は3条、(1415)は4条の連弧文を施しているが、(1414)は連弧文の少し上には水平な沈線を引いている。(1416)は、縄文地に径の小さい棒状の工具による沈線を連弧状に引いている。

d類 その他の土器 (第64図 1417～1425 図版32)

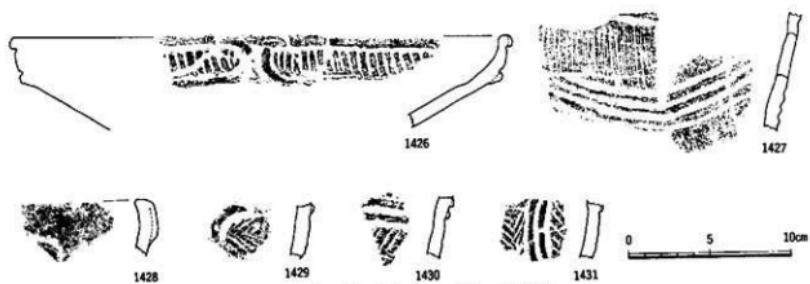
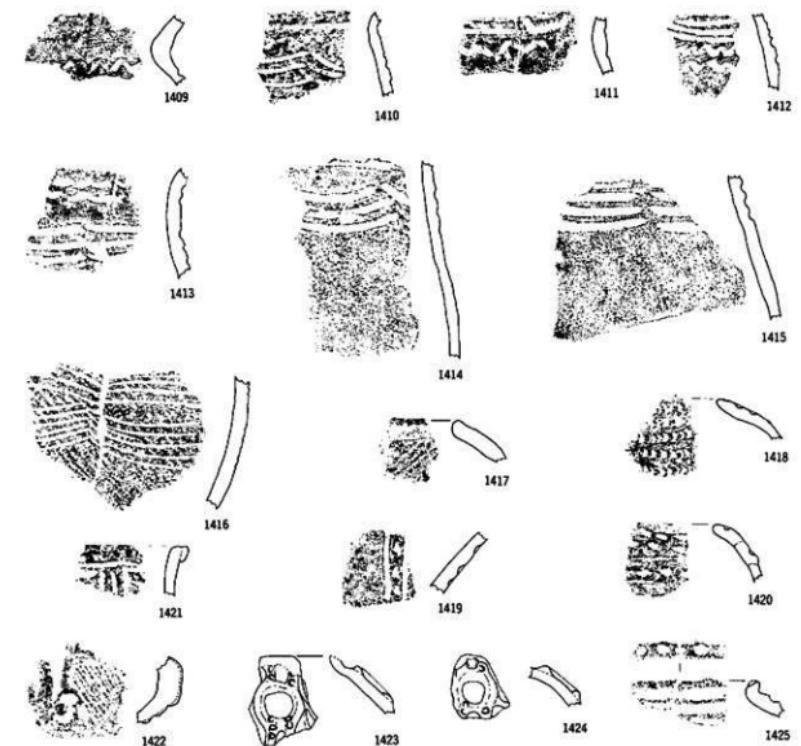
キャリバー形の器形を呈し、咲畠式の範疇に入ると思われるが、a～c類にあてはまらないものをd種とした。

(1417)は、口縁部に縄文を充填した後、口縁部上端を指で横位に撫でて整形している。隆帯や沈線による区画はみられない。(1418)と(1420)は、口縁部を横位に連続する刺突で充填するタイプで、(1418)は半截竹管状工具による連続刺突が5段みられる。(1420)は、棒状工具による刺突列が3段みられ、このうち上の2段は近接し、少し間を開けて3段目が引かれている。その下には緩い屈曲がみられる。

(1419)は、棒状工具による縦の沈線2本を約1cmの間隔で平行に引き、その間に同様の工具による刺突を雨垂れ状に施している。頸部から口縁部にかけて外反していく部分と考えられる。¹¹

(1421)は、口縁部がやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は、外側に折り返されている。

(1422)は、口縁部の外反し内湾していく部分で、手前へ突き出るように厚く作られた部分の上に貼付隆帯による縦位の渦巻文や区画文を施し、縦位の渦巻文を作る2本の貼付隆帯の間には棒状工具による沈線を引き、区画内は斜行沈線を充填している。(1421)や(1422)は、戸入村平遺跡(財团法人岐阜県文化財保護センター 1994)の第4号住居跡出土土器に多くみられたC7群B類(内湾した口縁部がさらに外反気味に立ち上がるもの)のような土器の破片と考えられる。本遺跡ではこのタイプの土器は他には見当らない。



第64図 第山群 4類(c, d種)、5類土器

(1423) と (1424) は同一個体で、口縁部に貼付隆帯による円形の文様と、その上下に各々 2 条ずつ伸びる隆帯の上に円管状工具による刺突を施している。本遺跡の第 2 号住居跡の覆土からも、同様に貼付隆帯上に刺突を施す土器片が出土している。(1425) は、口縁部に棒状工具による横位の沈線を 3 条（以上）引き、さらに同様の工具で口唇部に押圧を加えて刻み状に仕上げている。

1) 桶川遺跡（福井県）出土中期後葉の土器に類例がある。

5 類 その他の中期の土器 （第64・65図 1426～1438 図版32・33）

(1426) は、口縁部及び約 3cm 下に粘土紐を貼り付けて平行な区画を作り、さらに貼付隆帯により梢円形区画を作り出しており、口径は約 31cm である。浅鉢の可能性も考えられる。梢円形区画の内側は、径 2mm 程度の棒状工具で梢円形を描いた上で、区画内を縦の沈線で充填している。

(1427) は、胴部で全体の器形は不明であるが、棒状の工具による連弧状沈線 4 条が引かれ、その上と下には縱方向に条線が引かれている。なお、破片の上端にも同様の工具による沈線が横位に引かれている。

(1428)～(1433) は、キャリバー形器形の深鉢で、口縁部に隆帯によって梢円形区画を作るもので、中期後葉に比定される。(1428) は、かなり厚手で、口縁端部は平坦に整形されている。

(1429)～(1431) は区画内を緩杉状の斜行沈線で充填し、(1433) は縄文を充填している。

(1430)・(1431) は、平行する 2 本の貼付隆帯で区画を作り出しており、同一個体と考えられる。

(1428) と (1432) も同一個体の可能性がある。

(1434) は、信州系の土器の胴部片で、隆帯と沈線によって渦巻文をダイナミックに描き出している。曾利III式併行あたりと考えられる。

(1435)～(1438) は、北陸系の土器の胴部片で、半截竹管状工具による半隆起線で文様を描いている。(1435)～(1437) は、同一個体である。(1438) は、縄文地に半截竹管状工具による半隆起線などの文様を描いており、中期後葉の古府II式に類例が求められる。¹⁾

1) 南久和氏のご教示による。

第IV群土器 縄文時代後期の土器 （第65図 1439～1443 図版33）

縄文時代後期の土器は 5 点出土し、5 点とも図示した。(1439～1441) は同一個体で、中津式に類似する口縁部である。波状口縁を呈し、端部は内側に肥厚している。口縁下には太い沈線が口縁にそって横走し、この沈線の上下に縄文が施文される。内側は無文である。(1442) は、朝顔形の深鉢の破片で、三角形状の磨消縄文帯が認められる。

(1443) は、口縁部が大きく内湾する深鉢形の土器。内湾部に平行する沈線で飾られ、その区画内には一部縄文が施文されている。沈線の端には、刺突が施されている。また、上下の沈線が「ノ」の字状の沈線によって連結されている。口縁は波状口縁を呈する。一乗寺K～元住吉山 I 式に併行するものと考えられる。



第65図 第Ⅴ群 5類、IV群、V群土器

第V群土器 繩文時代晚期から弥生時代前期の土器 (第65図 1444~1448 図版33)

繩文時代晚期から弥生時代前期にかけての土器は5点出土した。(1444・1445)は、板製土器で、器形は、(1444)は無突帯の深鉢、(1445)は、浅鉢形になると思われる。時期は、晚期後葉であろう。

(1446)は、渦文系壺の胴部片と考えられる。時期的には大洞A'式併行か。

(1447・1448)は同一個体で、櫛王式の土器である。2点とも大型壺の口縁部片で、口縁直下に袋状の突帯を有する。突帯下には半截竹管による条痕が横走し、口縁端部は平坦に仕上げられている。

第VI群土器 その他の土器 (第66・67図 1449~1481 図版34・35)

1類 繩文のみ (第66図 1449~1455 図版34)

(1449)・(1450)は、RL、(1453)と(1454)は同一個体で LR 繩文である。

(1451)・(1452)は、複節繩文である。

2類 無文

無文の土器片は653点出土している。この中には第IV群4類の胴部片も含まれていると考えられるが、その判別は難しく、また、時期等も不明の為、ここでは点数のみの記載とする。

3類 時期・型式名等不明の土器 (第66図 1456~1459 図版34)

(1456)は、幅広の隆帯を2~3cmの間隔で横位に貼付し、隆帯の両側を指で撫でており、隆帯の間に繩文を充填している。

(1457)は、7本の櫛状工具で曲線・直線を引いて文様を描いている胴部片で、屈曲部である。

(1458)・(1459)は、キャリバー形口縁の張り出し部で、同一個体である。外反したあと、「く」の字型に内湾する。外反していく部分の外側の面は真っ平らで、底の部分と間違えるほどである。貼付隆帯と沈線によって格円区画や満巻文を作成しており、満巻文の上には、刺突が施されている。満巻文の所はぐっと外へ突き出すように作られている。区画の中には撚糸らしき文様もみられる。

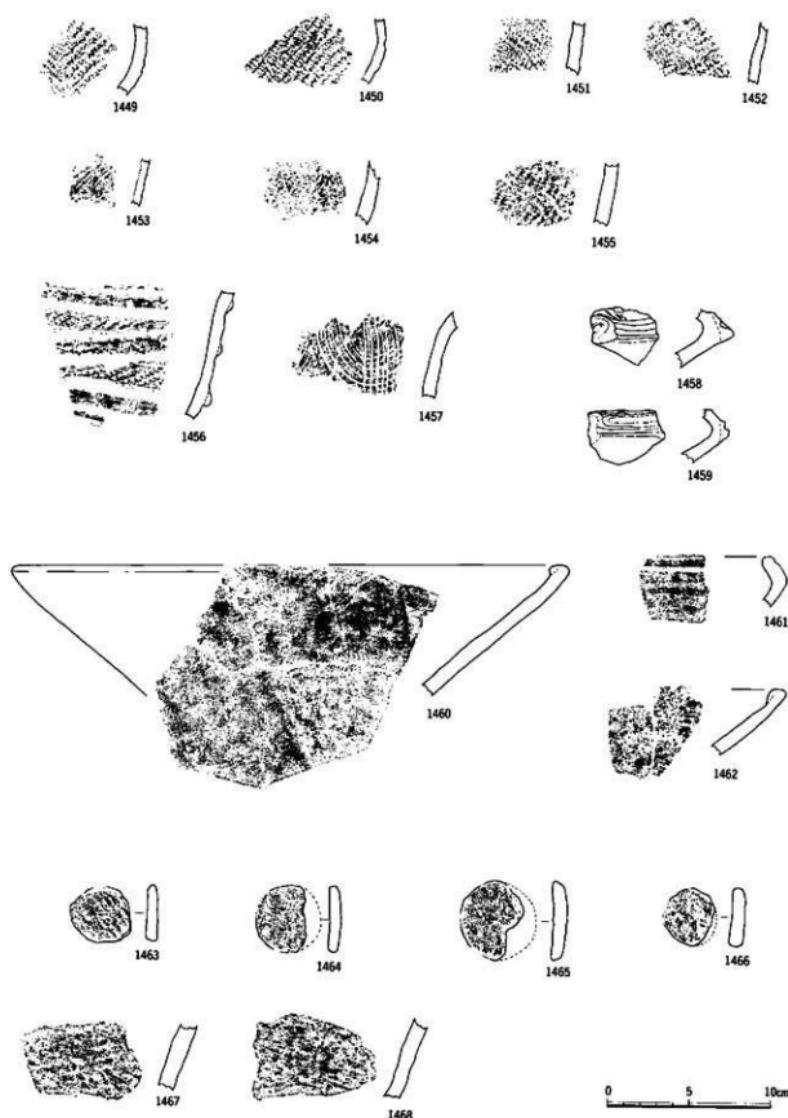
4類 浅鉢 (第66図 1460~1462 図版34)

浅鉢は4点出土し、3点図示した。(1460)と(1462)は同一個体と考えられ、口径約34cmで、口縁部内面にふくらみを持つ。(1461)は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、上端部には横位の沈線が引かれている。

5類 底部および脚台 (第67図 1469~1481 図版35)

包含層から出土した底部29点中、13点を図示した。

(1469~1476)及び(1481)は平底、(1477~1480)は卑木II式に特徴的な凹み底である。図示しなかったものも含めると、29点中平底24点、凹み底5点である。ほとんどは、本遺跡出土土器の主体を占める中期後半の土器の底部と考えられるが、ここでは底部としてまとめた。



第66図 第VI群 1、3、4、6、7類土器

(1474)には撚糸文、(1475)には、縄文が胴下半部底部付近に施文されている。(1480)にもわずかに撚糸文がみられるが、他は無文である。(1480)の内面底の中央部には、先端部の尖ったヘラ状の工具による刻みが施されている。

(1476)と(1479)の底部には各々網代彫痕が残る。(1476)は、「2本越え、1本潜り、1本送り」、(1479)は、「1本越え、1本潜り、1本送り」である。

(1475)は、底径3.5cmと極端に小さく、(1476)は、11.1cmと大きいが、他は5~8cmである。

(1476)は、底部からやや内傾して立ち上がり、他と異なる。

6類 土製品 (第66図 1463~1466 図版34)

土製円盤 (第66図 1463~1466)

土器片を円盤状に打ち欠き、側縁を磨き整えたもので、4点(1463~1466)出土している。

(1463)は、最大長3.5cm、最大幅3.6cm、最大厚0.7cm、質量10.4gで、使用している土器の外面に縄文がみられる。

(1464)は、最大長4.1cm、最大幅3.0cm、最大厚0.7cm、質量9.8gで、一部を欠損している。側縁はよく磨き整えられている。

(1465)は、最大長5.0cm、最大幅3.8cm、最大厚0.8cm、質量13.8gで、一部を欠損している。側縁はよく磨き整えられている。

(1466)は、最大長3.6cm、最大幅3.2cm、最大厚0.8cm、質量8.8gで、一部を欠損している。

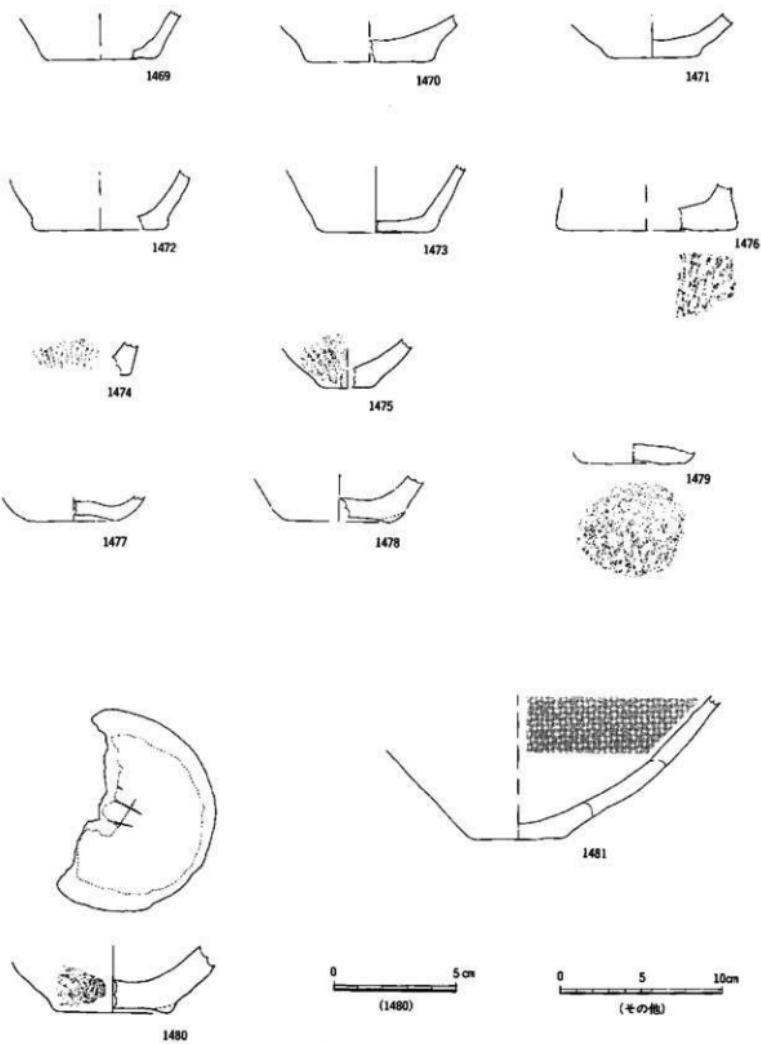
使用している土器は、(1463)が外面に縄文がみられる他は、(1464)~(1466)は無文である。

7類 赤色物の付着した土器 (第66図 1467・1468 図版34)

(1467)・(1468)は、土器の内面に赤色の物質が付着したものである。(1467)・(1468)は、同一個体で、(1468)は、胴下半部底部のすぐ上辺りである。外面は無文で時期は不明である。

赤色の物質は、分析の結果、ベンガラと判明した(第6章)。

土器の内側に意図的に彩色したか、もしくは、土器の内部にベンガラを入れておいたのが付着したものと考えられる。



第67図 第VI群 5 類 土 器

第2項 石 器

1. 石器類の概要

今回の調査において、1,292点の石器、及び剝片・石核類が出土した。その種類と点数は第8表の通りである。

これらの石器類は、遺構内からの出土310点、包含層からの出土982点である。遺構は、住居跡及びピット・土坑で、そのほとんどが繩文時代中期後葉のものである。それに対して包含層から出土した石器については、伴出している土器からみて、その多くが繩文時代中期後葉を中心とするものの早期・前期・後期・晩期にかけて製作・使用・廃棄されたものも含まれておらず、各石器の時期的な限定はできなかった。

石器の組成グラフは第68図の通りである。なお剝片石器のうちスクレイバー、石核、2次加工のある剝片（RF、以下RFとする）、使用痕のある剝片（UF、以下UFとする）、剝片、分割縫については組成資料から省いた。これを見ると、本遺跡では石錐と石鎌の割合が多く、中でも切目石錐は46.5%（181点）と、製品のうちの約半数を占める。

以下にまず主な遺構から出土した石器について触れたのち、各器種ごとに分類を中心に説明する。

2. 遺構から出土した石器

本遺跡で出土した石器のうち遺構内から出土した石器は310点で、その内訳は第8表の通りである。住居跡関係では、SB2、SB6から多数の石器が出土しているが、中でもSB6からは133点出土している。一方、ピット（P）・土坑（SK）関係では、第2節遺構において述べたようにP585より剝片20点が、またP586より切目石錐が13点、SK17より切目石錐が9点とまとめて出土している。ここでは、SB2、SB6、P585、P586、SK17から出土した石器について述べていく。なお、それ以外の遺構から出土した石器については、次の器種ごとの説明の中でまとめて触れる。

(1) SB2から出土した石器

石錐2点（544、545）、スクレイバー1点、ノッチド・スクレイバー1点、打製石斧1点（635）、RF5点、UF3点、剝片20点、打欠石錐2点（672、674）、切目石錐9点（690～692、694、701、703、705）、石皿1点（766）の合計45点が出土した。切目石錐が9点出土しているのが目につく。石皿（766）はSB2の床に埋設されていたものである。

(2) SB6から出土した石器

石錐15点（547～557）、石錐2点（598、599）、石匙1点（615）、スクレイバー1点（620）、ノッチド・スクレイバー1点（634）、ビエス・エスキュー1点（607）、石核1点、RF5点、UF3点、剝片88点、打欠石錐2点（671、673）、切目石錐11点（693、695～698、702、704）、磨石1点（749）の合計133点が出土した。SB2同様、切目石錐が11点と多数出土したのが目につく。SB6から出土した石器のもう一つの特長は、黒曜石製の石器9点が出土した事である。9点の内訳は石錐（未製品）3点、ビエス・エスキュー1点（607）、ノッチド・スクレイバー1点（634）、剝片4点である。9点中6点は比較的近くからまとめて出土しており、一括廃棄された可能性がある。なお、本遺跡で黒曜石製の石器が出土したのはこのSB6の9点のみである。これらの黒曜石の産地は分析の結果、霧ヶ峰や和田岬という事である（第6章）。

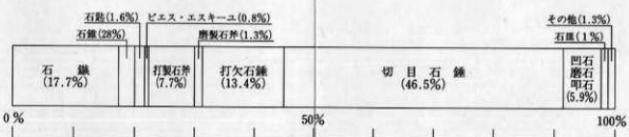
第8表 山手宮前遺跡出土石器一覧表(1)

器種 遺構	石鎌	石錐	石匙	スクリーパー	ビエス・エスキュー	打製石斧	磨製石斧	石核	RF	UF	剥片	分割縫	打欠石錐	切目石錐	凹石磨石印石	石皿	その他	計
SB1											3		1					4
SB2	2		2		1			5	3	20			2	9		1		45
SB3		1	1	1							5							8
SB4	1										1							2
SB5											1	1				2		5
SB6	15	2	1	2	1			1	5	3	88		2	11	1			133
SB7											7							7
SB8											5							5
P31											1							1
P34											1							1
P52									1		1							2
P106											1							1
P128												1						1
P129											1							1
P136	1											1						2
P137	1										1							2
P138	1										2		2					5
P139												1						1
P141												1						1
P149										1								1
P150											1							1
P152											1							1
P161			1															1
P192			1															1
P201										2								2
P334										1								1
P342										1								1
P412				1														1
P510									1									1
P543	1																	1
P561										1		1						2
P576										1								1
P585											20							20
P586												13						13
P587										1								1

器種 遺構	石鎌	石錐	石匙	スクリーパー	ビエス・エスキュー	打製石斧	磨製石斧	石核	RF	UF	剥片	分割縫	打欠石錐	切目石錐	凹石磨石印石	石皿	その他	計
SK10																1		1
SK11																1		1
SK14																1		1
SK15	1																	1
SK16																1		1
SK17	1														1	1	9	13
SK18																3		3
SK19															1			1
SK26															1	1		2
SK27																1		1
SK39															1			1
SK43															1			1
SK56															1			1
SK71															1			1
SK73															1			1
SK82											1				2			3
SK84																1		1
SK87															1			1
計	23	3	2	5	2	4	1	2	14	9	176	1	7	56	2	3	310	
包含割	46	8	4	12	1	26	4	28	44	49	548	15	45	125	21	1	5	982
総合計	69	11	6	17	3	30	5	30	58	58	724	16	52	181	23	4	5	1292

その他 [異形部分磨製石器、異形石器
有舌尖頭器、块状耳飾]

第8表 山手宮前遺跡出土石器一覧表(2)



* 剥片石器のうちスクリーパー、石核、RF、UF、剥片
分割縫については組成資料から省いた

(3) P585(剥片の集積がみられたピット)から出土した石器

P585からはチャートの剥片20点(501~520)が集積された状態で出土した(57頁)。若干の節理もみられるが、特有の脂肪光沢を持つ緻密で米雑物がごく少ない良質な黒色のチャートで、全て同一母岩より作出されたと考えられる。しかし接合関係が確認できたのは(501)と(505)の1組のみである。この接合例も打面転移を経た連続しない行程の剥片同士であり、これらの集積された剥片は、一連の剥片剥離の中から選択された一部のものであることがわかる。剥片20点の合計質量は493.8gであるが、母岩はかなり大きなものであったと考えられる。

集積中の剥片の観察表を第9表に示した。長さ幅とも5cm前後、厚さ1cm前後、平面形が方形に近くやや肉厚の類似した形態の剥片を選択している。石核の素材とするには小さすぎ、何らかの石器を製作するための素材剥片であろうと考えられる。在地的な石材としてとらえられるチャートであるが、素材剥片の作出が時間的に一つの段階として独立しており、選択された素材剥片の形で移動し得たことが推測される。¹⁾これらの素材剥片が、どのような石器製作を目的として選択されたのかは明らかではないが、石材の大きさからスクレイバーの類が候補に挙げられる。

次に、これらの剥片の剥離のあり方について概観する。20点中打点を残すものが17点、そのほとんどが広く打面を残す。節理面を打面とするものが11点、剥離面を打面とするものが6点と、節理面を打面とするものが目立つ。剥離面を打面とするものは、打面の剥離方向が横に走るものが2点、背面側から腹面方向に走るものが1点、その逆が3点とさまざまである。背面構成面については、(503・507・509・512・518・520)には主要剥離面とは異なる方向からの剥離痕が見られる。これらのことから、ランダムに打面・作業面を転移する剥片作出のありかたが復元できる。

また、打面・側面・末端に節理面・剥離面が取り込まれるものが目立つか、目的とする石器の特徴を考慮したものであろうか、剥片の厚さを確保するためのものであろうか。剥片の厚さに起因して腹面末端はヒンジやステップフレイキングを起こしているものが多く、シャープなエッジよりも厚さに留意していた様子がうかがえる。

打面転移・背面の不齊一から、定型化した剥片を意図して連続的に剥離する「技法」は存在しないと考えられる。たまたま形状の揃った剥片を集めただけのようである。それは、接合率の低さから類推される選択されなかった剥片の多さからも明らかである。

1) ただし、当資料はかなり良質のチャートであり、すべてのチャートについて同様のとらえ方ができるとは限らない。

(P585から出土した石器について 長屋 幸二)

(4) P586(切目石錐の集積がみられたピット)から出土した石器

P586からは、13点(521~533)の切目石錐が出土した(59頁)。これらの切目石錐の計測表は第10表の通りである。

大きさ、質量ともに同じ位のものがみられる。なお、欠損品を除いた完形品11点の平均値は全長39mm、全幅27mm、全厚10.1mm、質量18.4gである。

石材は砂岩11点、安山岩1点、凝灰岩1点である。13点中、砂岩製の4点(521、523、525、528)

第9表 刺片集積(P 585)出土刺片観察表

No.	遺物番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	質量(g)	刺離角	末端形 ヒンジの有無	バルブの 発達度	自然面 有無	筋理面 有無	長幅比
1	501	52	50	14	29.8	—	ヒンジ	—	無	有	1.04
2	502	33	39	13	19.6	—	ヒンジ	—	有	無	0.85
3	503	74	41	10	28.1	93	ステップ	弱	無	有	1.80
4	504	35	32	7	5.8	114	ステップ	中	有	有	1.09
5	505	39	55	13	30.0	—	フェザー	—	無	有	0.71
6	506	49	48	13	31.0	—	ヒンジ	—	無	有	1.02
7	507	41	42	13	21.3	113	ヒンジ	強	有	有	0.98
8	508	50	48	10	23.8	—	フェザー	—	有	有	1.04
9	509	44	28	8	9.8	124	ステップ	強	無	有	1.57
10	510	36	47	11	18.7	95	フェザー	強	有	有	0.77
11	511	44	44	11	30.6	116	ステップ	強	有	有	1.00
12	512	55	41	12	23.3	107	(フェザー (ヒンジも有)	中	無	有	1.34
13	513	50	35	13	23.4	—	フェザー	—	有	無	1.43
14	514	61	52	11	26.8	105	ヒンジ	強	有	有	1.17
15	515	43	41	11	20.2	100	ヒンジ	中	有	有	1.05
16	516	52	36	20	38.1	115	ステップ	弱	有	有	1.44
17	517	36	59	12	24.4	117	ヒンジ	中	有	有	0.61
18	518	46	52	13	34.0	107	ヒンジ	強	有	有	0.88
19	519	53	46	14	24.5	112	フェザー	強	有	有	1.15
20	520	56	44	12	30.6	—	ステップ	—	無	有	1.27
合計		—	—	—	493.8	—	フェザー 6 ヒンジ 8 ステップ 6	強 7 中 4 弱 2 他 7	有 13 無 7	有 18 無 2	平均
平均		47	44	12	24.7	109					1.11

注1 刺離角

色々な計測位置があるようだが、ここでは打面と「バルブの頂点」との角度を測る

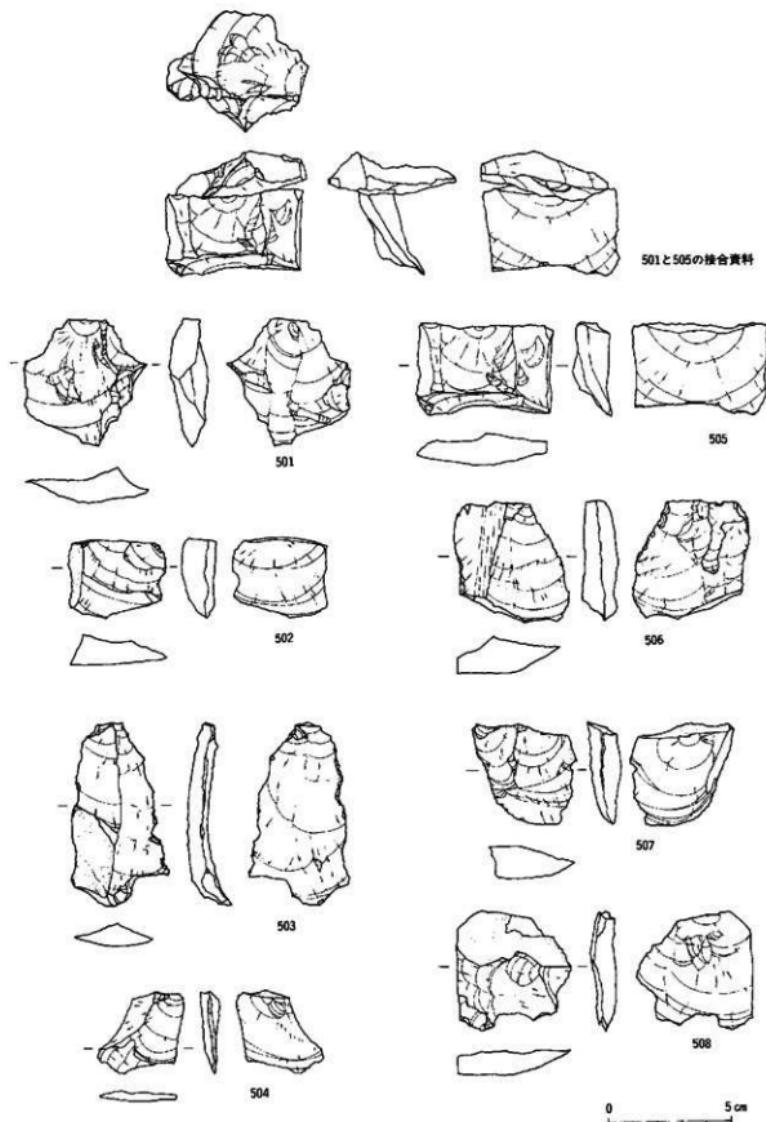
注2 末端形

フェザー(通常)
ヒンジ(ちゅうつかい状)
ステップ(階段状)

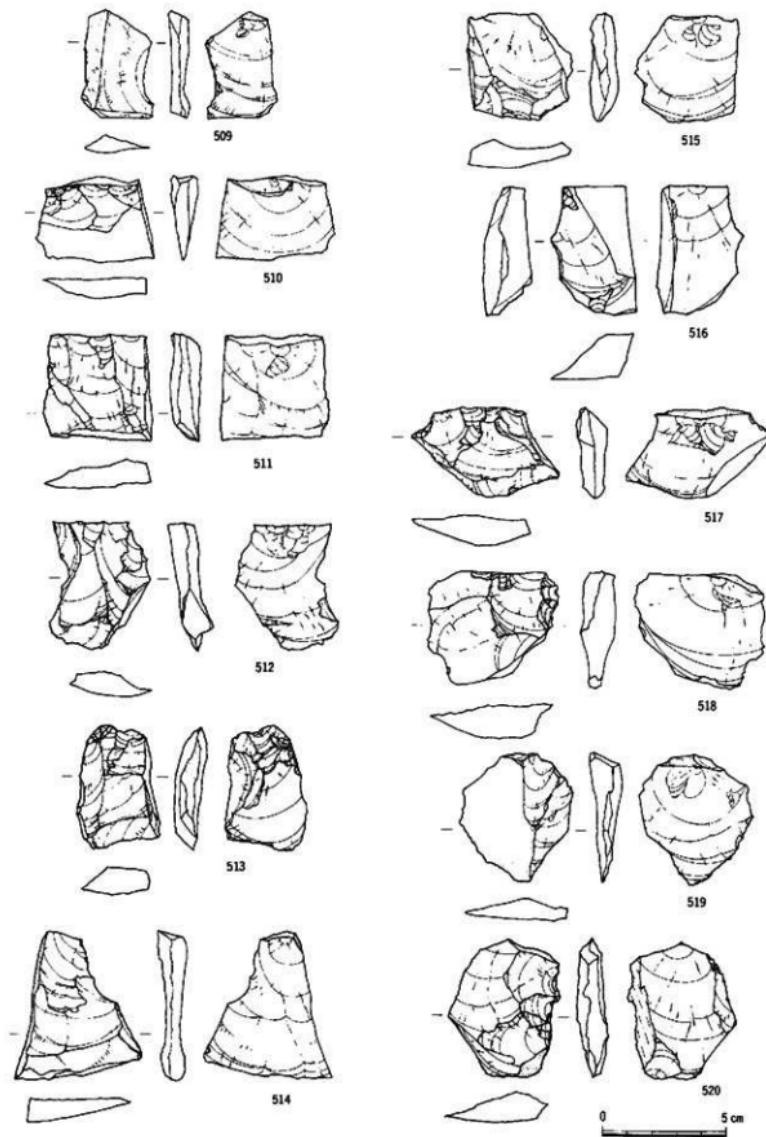
注3 バルブの発達度基準

強一側面、打面から見て、大きくなきり丸みがある
中一側面からは明確でないが打面から見ると丸みがある
弱一側面、打面から見て丸みがはっきりしない

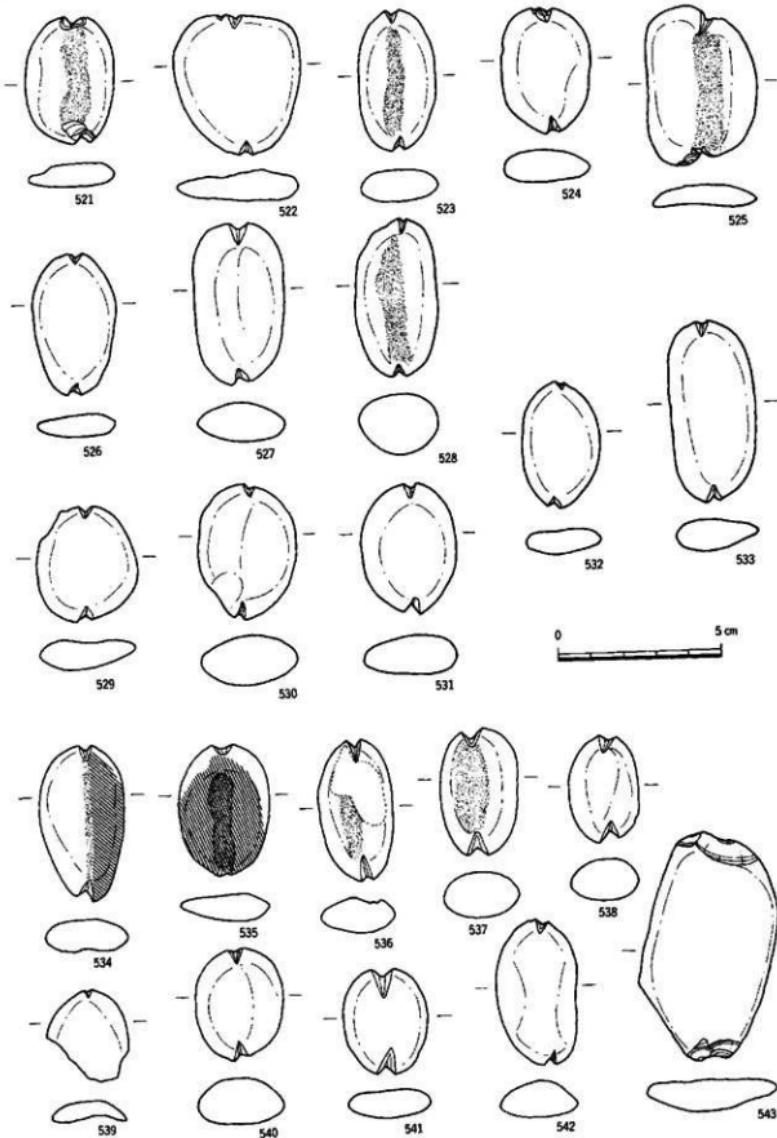
注4 長幅比=全長/最大幅



第69図 P 585出土剣片(1)



第70図 P 585出土剣片(2)



SK17出土切目・打欠石錐
第71図 P 586・SK17出土石錐

には前述(60頁)の「糸巻きの帯状痕跡」が観察できる。

「糸巻きの帯状痕跡」については、第4節まとめの中(164頁)で考察を試みた。

(5) SK17(切目石錐が多数出土した土坑)から出土した石器

SK17からも9点の切目石錐(534~542)と打欠石錐1点(543)が出土している(60頁)。これらの切目石錐および打欠石錐の計測表は第11表の通りである。

切目石錐はほぼ大きさ、質量がそろっているのに対して、打欠石錐はかなり大きく異なる感じである。なお、切目石錐7点(欠損品を除く)の平均値は全長37mm、全幅24mm、全厚11.7mm、質量14.8gである。石材も切目石錐がすべて砂岩であるのに対して、打欠石錐は泥岩である。

切目石錐9点中、6点(534~539)は被熱しており、それに伴って割れたり、表面が剝がれるようにならざっているものもみられる。そして、この被熱した6点のうち4点(534~537)には、前述の「糸巻きの帯状痕跡」が観察でき、特に(534)は片面ではあるが被熱による変色が、「糸巻きの帯状痕跡」の左右(特に実測図の右側が明瞭に残る)にみられ、このことからも中央の切目に糸状のものが巻かれていた事がうかがえる好資料である(写真図版36参照)。

第10表 P586出土切目石錐観察表

No.	出土区	層位	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	折損	備考	挿図
1	P586		砂岩	36	26	7.5	12.3		帶痕(片)	521
2	"		"	43	38	8.8	23.5			522
3	"		"	42	23	10.1	15.1		帶痕(片)	523
4	"		"	36	26	10.3	15.9			524
5	"		"	47	33	7.7	19.3		帶痕(片)	525
6	"		"	41	24	7.5	12.4			526
7	"		"	48	26	11.5	24.1			527
8	"		"	47	23	17.2	29.7		帶痕(両)	528
9	"		"	34	29	9	(12.5)	a		529
10	"		凝灰岩	39	29	14.4	(22.3)	a		530
11	"		安山岩	38	28	11.7	16.8			531
12	"		砂岩	37	23	7.6	9.5			532
13	"		"	54	24	11.5	23.5			533
平均				39	27	10.1	18.4			

*荷重:糸巻きの帯状痕跡

第11表 SK17出土石錐観察表

No.	出土区	層位	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	折損	備考	挿図
1	SK17		砂岩	46	25	10.9	18.1		帶痕(片)-荒	534
2	"		"	38	26	9.5	13.4		"	535
3	"		"	42	22	11.7	(16.1)	a	"	536
4	"		"	38	22	13.7	17		"	537
5	"		"	31	20	13.1	10.4		焼	538
6	"		"	(27)	(23)	(5.9)	(3.6)	b, d	"	539
7	"		"	33	26	14.7	18.4			540
8	"		"	32	25	8.3	8.9			541
9	"		"	44	23	11.7	17.5			542
平均				37	24	11.7	14.8			
10	SK17		泥岩	68	37	9.2	36.8			543

(534~542 切目石錐、543 打欠石錐)

3. 器種ごとの分類

(1) 石鎚 (544~597)

69点出土した。石材はチャート60点・粘板岩4点・黒曜石3点・下呂石1点・不明1点で、徳山地域で手に入りやすいチャートや粘板岩が断然多いが、下呂石、黒曜石といった、他地域から搬入された石材のものも少量ながら存在する。

石鎚の矢先としての機能から、尖頭部と矢柄との装着部である基部に着目して、それぞれ以下のように分類した(第72図)。¹¹⁾ そして、それぞれの石鎚を尖頭部と基部との組合せで分類した。

尖頭部の分類

- 1類：鋭角な尖頭部を持つもの。
- 2類：1類と同じだが、全長が長い(全長が全幅の1.5倍以上)もの。
- 3類：鈍角な尖頭部を持つもの。
- 4類：先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状を持つもの。

基部の分類

- A類：基部の中央部がU字型にえぐられているもの。
- B類：凹状のわずかなえぐりの入るもの。
- C類：深いえぐりの入るもの。
- D類：いわゆる平基鎚で、基部が直線状になるもの。
- E類：いわゆる円基鎚で、基部が丸みを帯びて突出するもの。
- F類：いわゆる有茎鎚で、基部に茎を持つもの。

尖頭部の分類



基部の分類



破損、折損の部位による分類



第72図 石鎚の分類

折損等で形態がわからないものをのぞいた各類の点数を第12表に示した。

- 1 A類1点(562)出土。
- 1 B類20点(547~550、559、560、563~574)出土。
- 1 C類4点(575~578)出土。
- 1 D類4点(579~582)出土。
- 2 B類10点(546、551、552、558、583~588)出土。
- 2 D類4点(544、553、589、590)出土。
- 2 F類1点(554)出土。
- 3 B類3点(591、592)出土。
- 3 D類2点(593)出土。
- 3 E類4点(556、594~596)出土。
- 3 F類1点(597)出土。
- 4 B類1点(557)出土。

破損や折損の見られるものは総計21点であった。破損、折損の部位によって第72図のように分類した。

それぞれの点数は次の通りである。

a 6点、b 6点、c 2点、d 5点、e 1点、f 1点、

なお、未製品が12点あった。

第12表 石錐の分類別出土点数

	A	B	C	D	E	F	計
1類	1	20	4	4			29
2類		10		4		1	15
3類		3		2	4	1	10
4類		1					1
計	1	34	4	10	4	2	55

1) 石器の分類については、戸入村平遺跡(1994千藤)の石器の分類を参考とした。第72・79・92・93図も戸入村平遺跡(1994千藤)より引用した。

(2) 石錐(598~605)

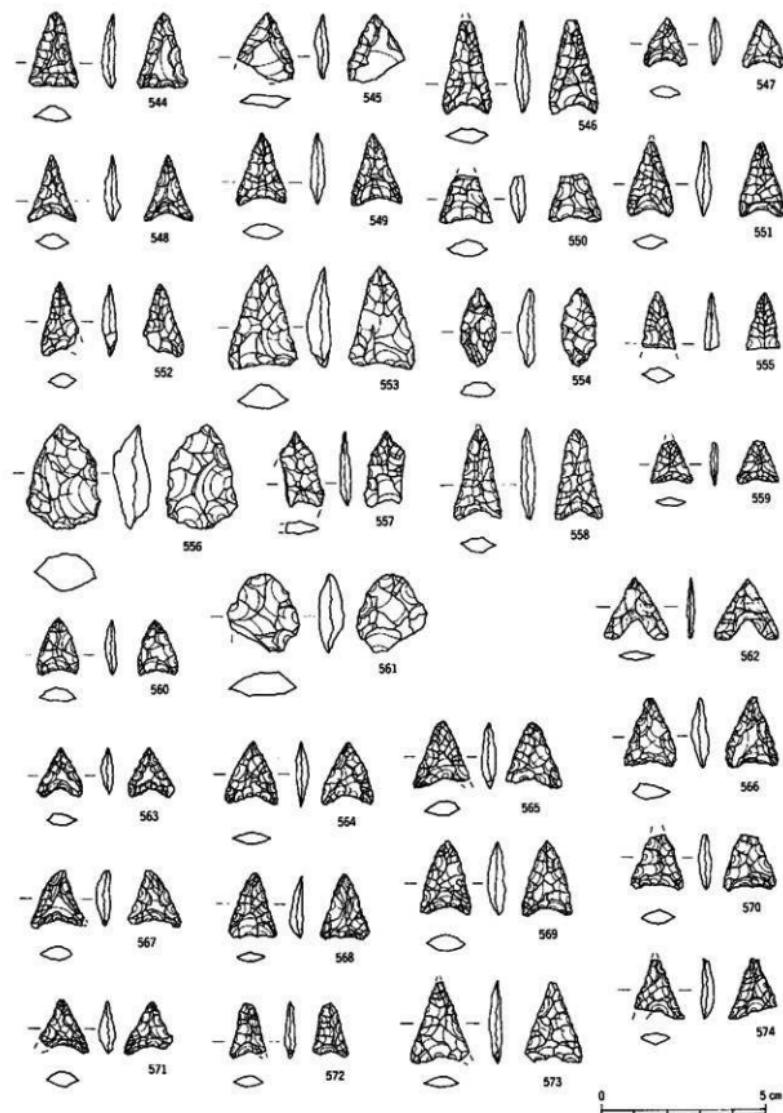
11点出土した。遺構より3点(SB6より2点、P543より1点)、包含層より8点出土している。石材は全てチャートである。形態と尖頭部の数により、次の3つに分類した。

- 1類：剥片の一端を尖らせて尖頭部を作り出したもの。素材の形を大きく変えることがなく多様な形態となり、他と比較して尖頭部が短い。5点(599、600、602、604)出土した。
- 2類：剥片の全体を整形して尖頭部を作り出したもの。基部と尖頭部の区分ははっきりしている。尖頭部は一端にある。4点(598、601、605)出土した。
- 3類：長い棒状の形態を呈し、基部と尖頭部の区分が不明瞭なもの。調整が全体に及び、形態が統一性がみられる。尖頭部が一端にある。2点(603)出土した。

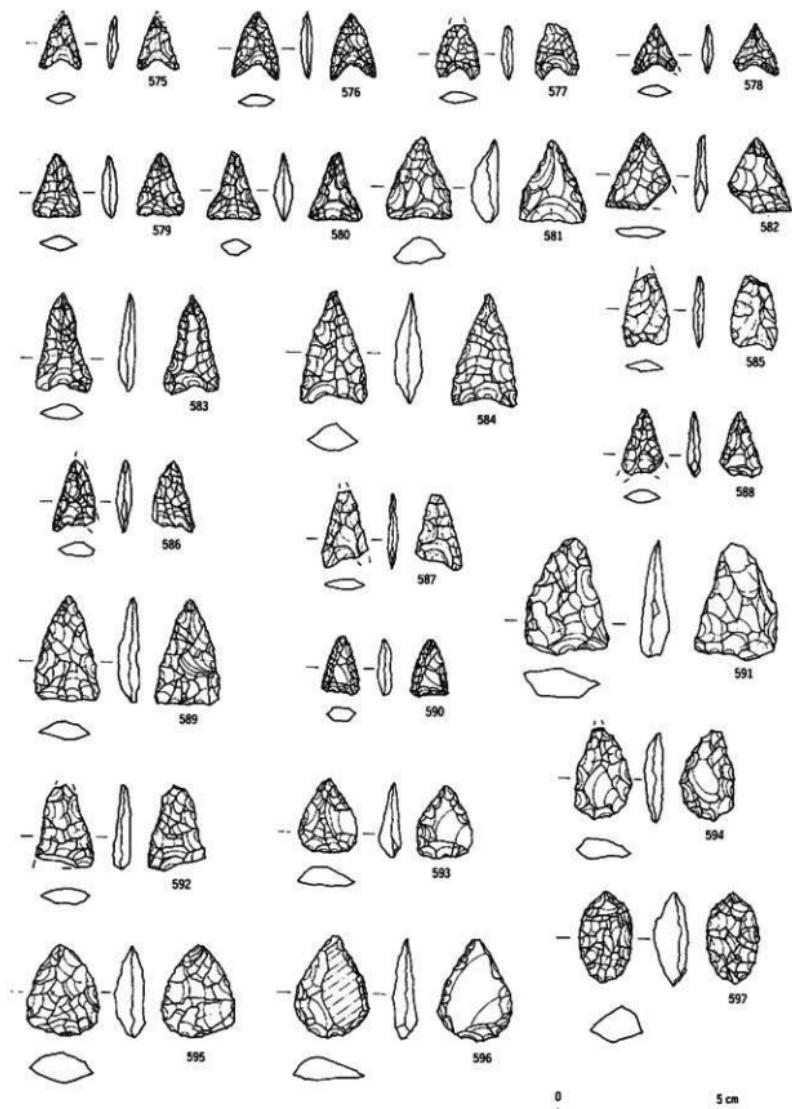
(3) 石匙(614~619)

6点出土した。遺構より2点(SB3より1点、SB6より1点)、包含層より4点である。石材はチャートが5点、粘板岩が1点である。つまみ部分と刃部との位置関係により次の2つに分類した。

- 1類：つまみを上方においたとき、平行する側縁が刃部となるもの。いわゆる縦形。2点(614、616)出土。

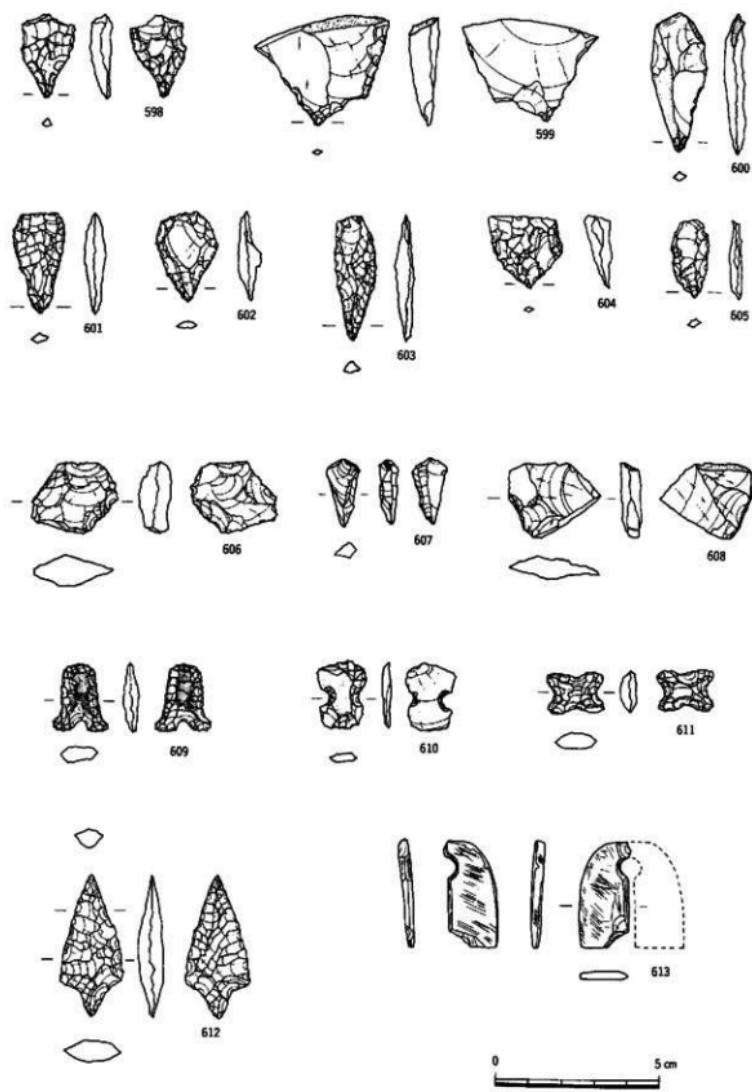


第73図 石 鋒 (1)

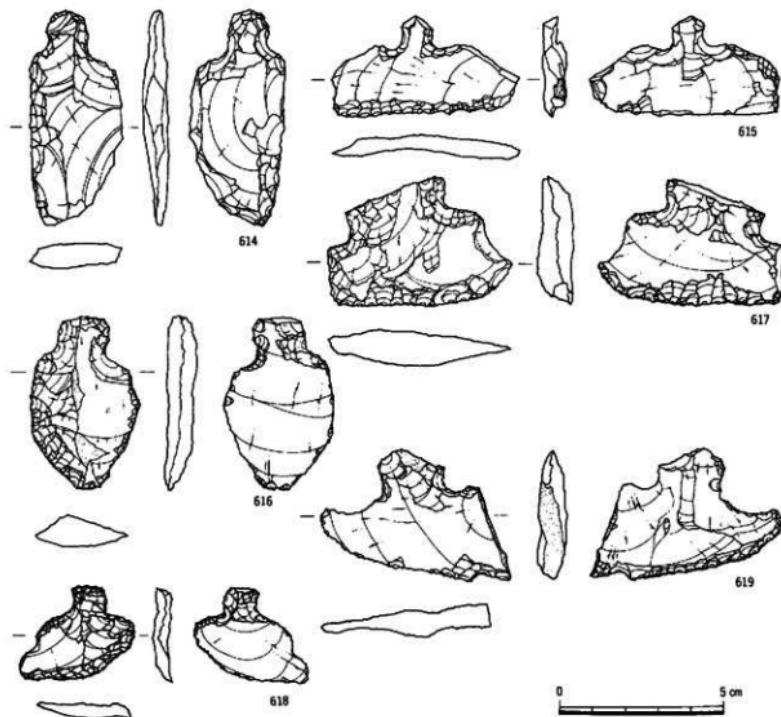


第74図 石 做 (2)

0 5 cm



第75図 石錐、ピエス・エスキュー、その他の石器



第76図 石匙

2類：つまみを上方のおいたとき、直交するその下端の縁部が刃部となるもの。いわゆる横形。

4点（615、617～619）出土。

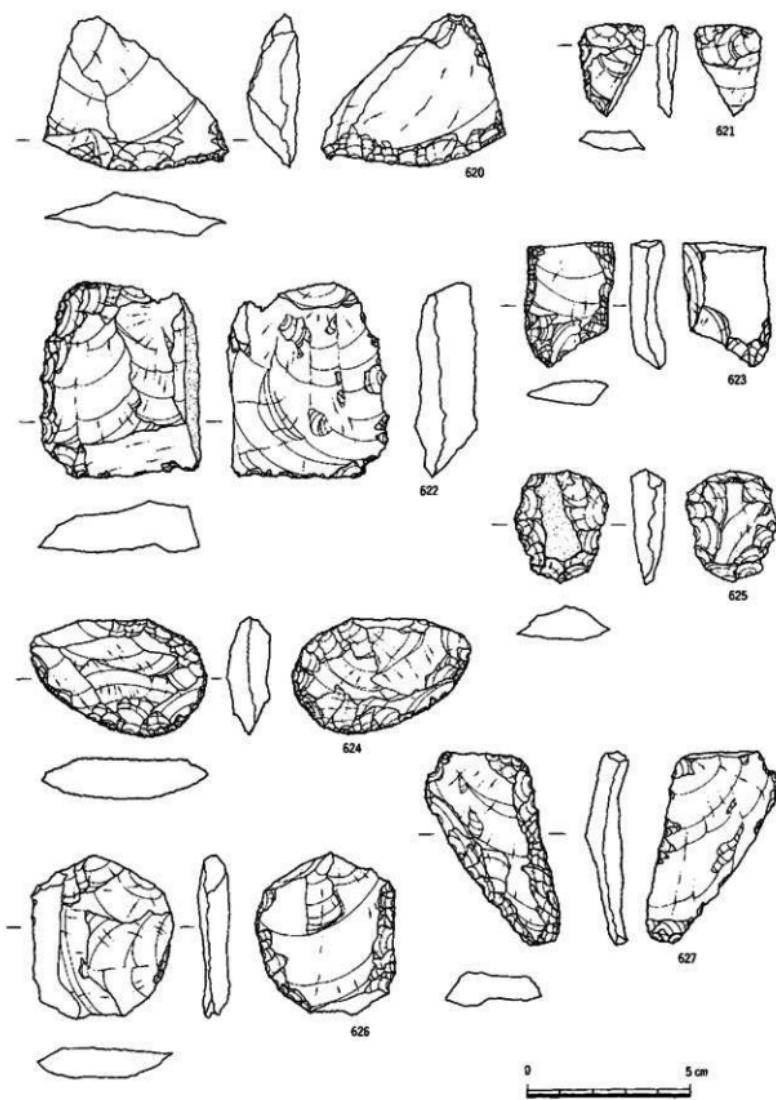
(4) スクレイパー

① 搗器（620～627）

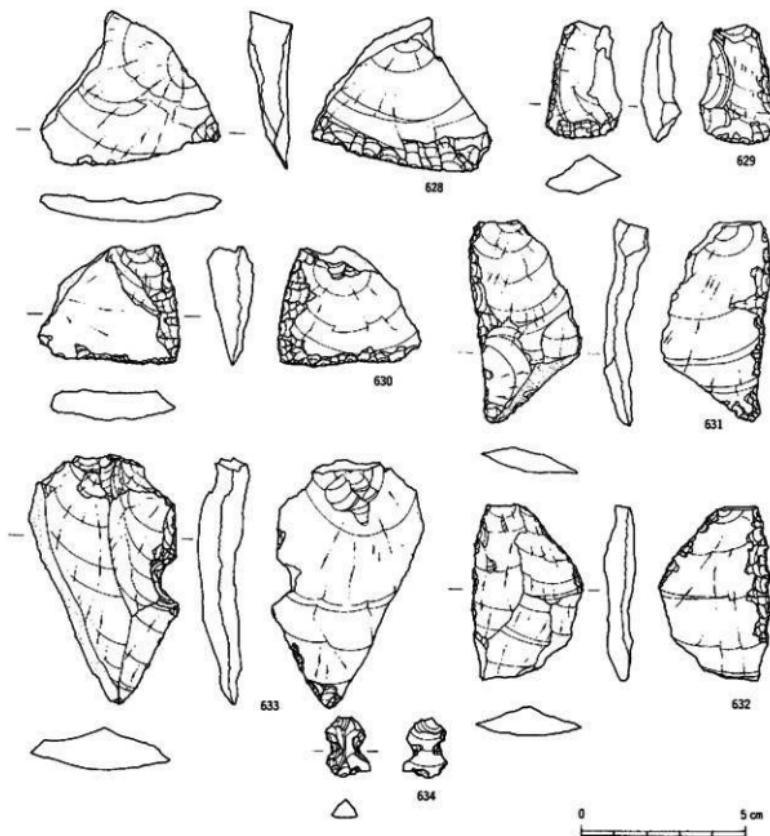
急角度に調整された刃部を持つ石器を搗器とした。8点出土しているがすべてチャート製である。どれも剥片の1～2辺の、片方の面に刃部を作り出している。通常の剥離によるものが多いが、楕状剥離によって作り出されたものもある。刃部の位置により、次の2つに分類した。

1類：片面の1ヶ所に刃部をつけたもの。6点（620～623、626～627）出土している。なお（626）は一辺に削器的調整がみられ、（627）は一辺が楕状剥離によって作出されている。

2類：表裏に1ヶ所ずつ反対側の位置になるように刃部がつけられたもの。2点（624、625）出土している。



第77図 搢 器



第78図 刮削器、ノッチド・スクレイパー

② 刮削器 (628~632)

剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出した石器を刮削器とした。6点出土している。石材はすべてチャートである。素材となった剥片は不定形なものが多く、刃部を作り出している調整加工もさまざまである。刃部の作出方法により、次のように分類する。

1類：縦長（横長）剥片を素材とし、片面加工により刃部を作り出したもの。3点（628、631、632）出土。

2類：縦長（横長）剥片を素材とし、両面加工により刃部を作り出したもの。3点（629、630）出土。

(3) ノッチド・スクレイパー（抉入石器）(633、634)

3点出土した。遺構から2点(SB2、SB6より各1点)、包含層から1点出土している。SB6から出土した(634)は黒曜石製で、小型ながら両サイドに、ノッチがみられる。他の2点はチャート製である。

なお、スクレイパーの実測図は素材となる剥片の主要剝離面の打点を上にして実測した。

(5) ピエス・エスキュー（楔形石器）(606～608)

向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に、階段状の剝離痕やつぶれが認められる石器をピエス・エスキューとした。3点出土した。遺構から2点(SB3、SB6より各1点)、包含層から1点である。SB6出土の(607)は黒曜石製で、他の2点はチャート製である。

剝離痕のみられる部位と長さ・幅を比較して次の2つに分類した。

1類：縦長で縦に一对の剝離痕のみられるもの。2点(607、608)出土。

2類：1類以外で、一对の剝離痕のみられるもの。1点(606)出土。

(6) 打製石斧（石製土掘り具）(635～645)

30点出土している。遺構から4点(SB2より1点、P192、P587より各1点、SK82より1点)、包含層より26点出土している。各石材ごとの点数は、粘板岩21点、砂岩7点、安山岩1点、結晶片岩1点で、粘板岩・砂岩が多い。

砂岩や安山岩を用いたものは、川原石を用いたとわかる表皮（自然面）を残しているものがある。どの石材も、徳山地域で普通にみられる石材で、在地のものを使っていると考えられる。

打製石斧の形状から次の3つに分類した。

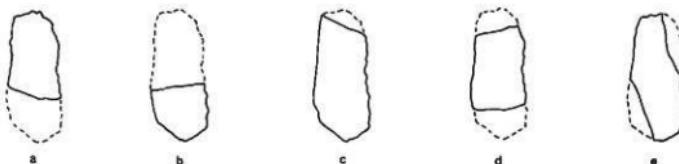
1類：胸部がほぼ平行な、いわゆる短冊型と呼ばれるもの。12点(635、636、638～643)出土。

2類：胸部がくびれる、いわゆる分銅型と呼ばれるもの。1点(637)出土。

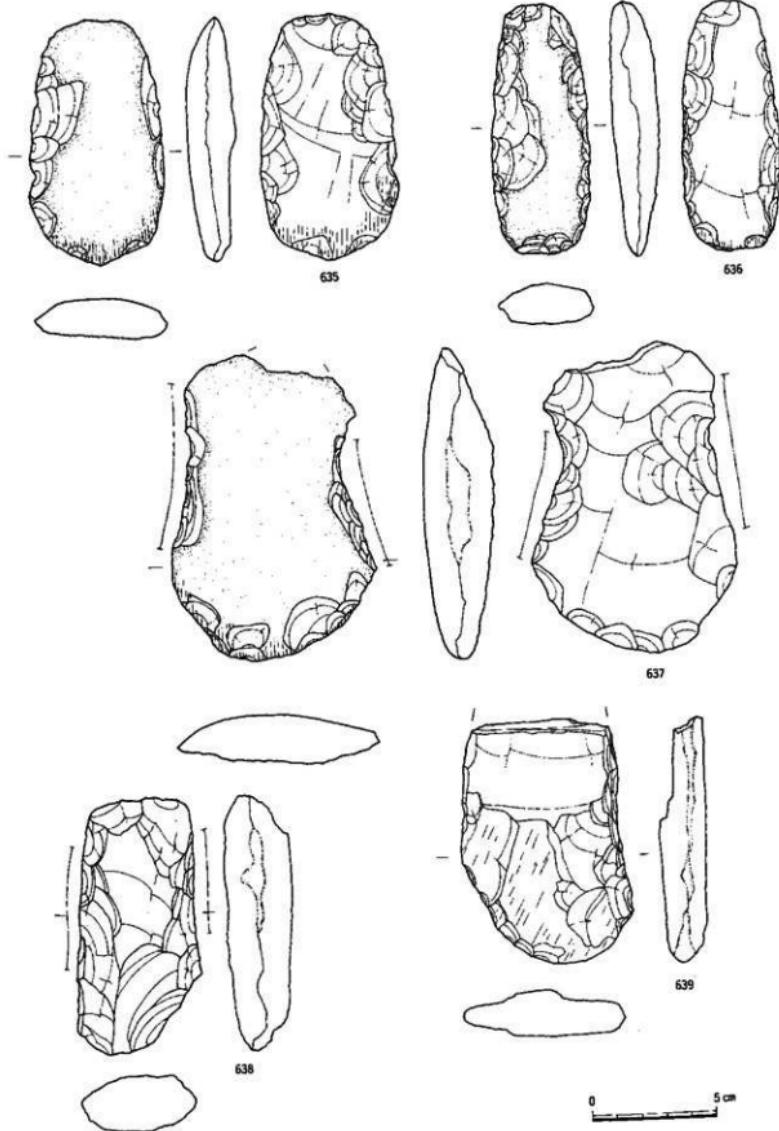
3類：形状が基部に向かってやや収束する。いわゆるバチ型と呼ばれるもの。2点(644、645)出土刃部に擦痕（使用痕）のみられるもの9点。基部に装着痕のみられるもの3点。

30点のうち18点は、明らかに折損していると思われる。その折損の部位によって第79図のように分類した。それぞれの点数は、次の通りである。

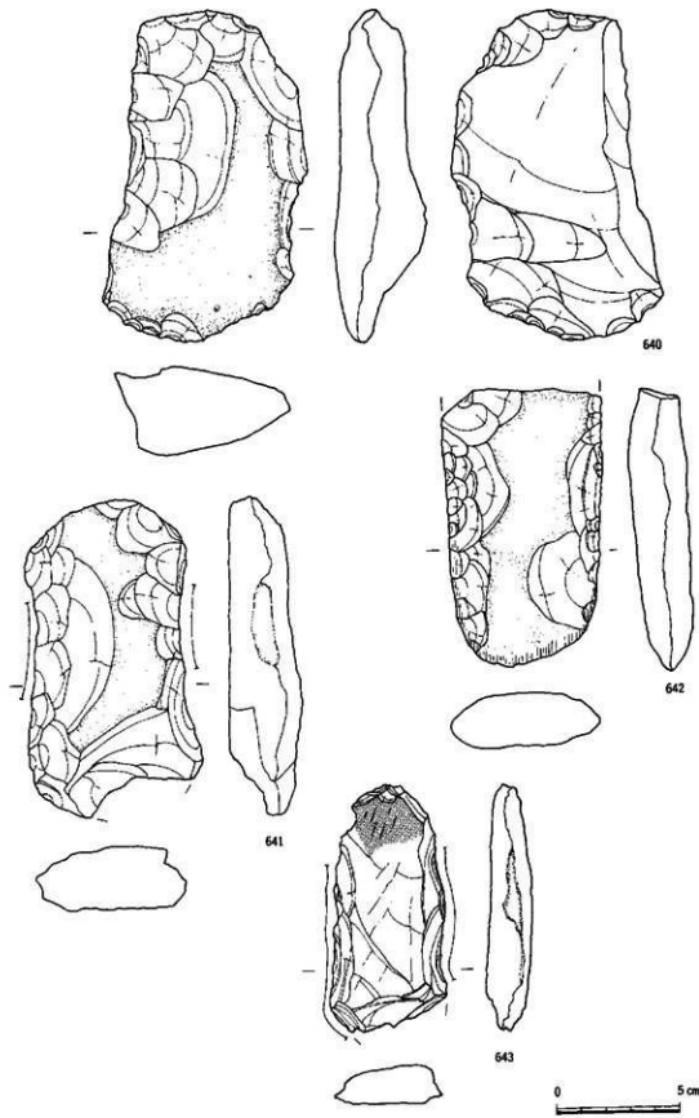
a 2点、b 4点、c 4点、d 4点、e 4点。



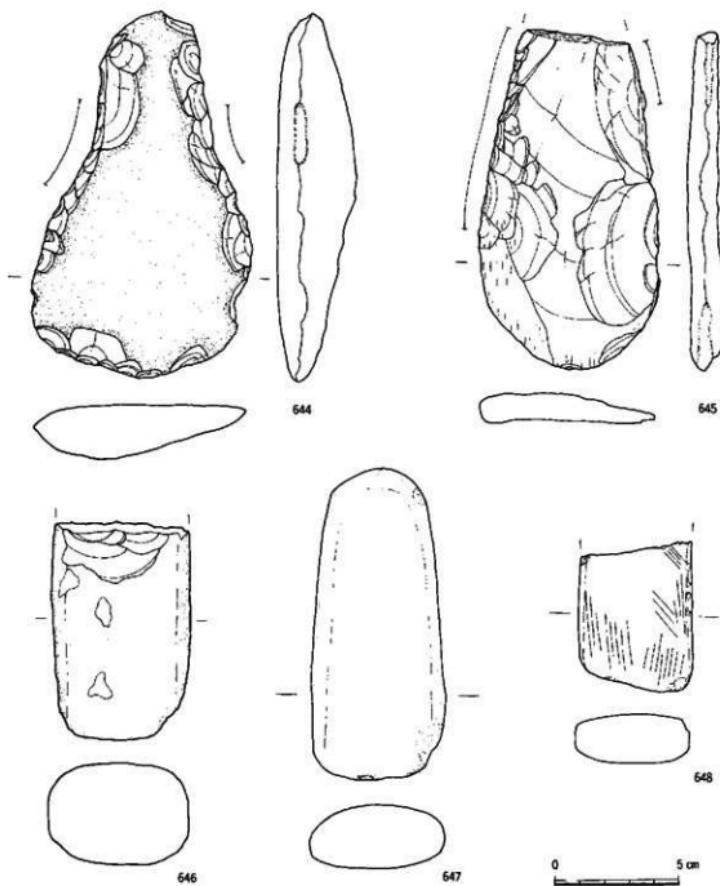
第79図 打製石斧の折損の部位による分類



第80図 打製石斧(1)



第81図 打製石斧(2)



第82図 打製石斧(3)、磨製石斧

(7) 磨製石斧 (646~648)

5点出土した。P412より1点、包含層より4点出土している。石材は、結晶片岩3点、安山岩2点である。4点は折損しており、刃部のみである。

(8) 石核 (658~661)

30点出土した。SB 6より1点、P161より1点、包含層より28点である。石材は、チャート28点、流紋岩1点(658)、粘板岩1点である(第38表)。

(9) 2次加工のある剥片 (662~668)

剥片の側縁に大小の剥離痕を連続して施したもの2次加工のある剥片(RF)とした。合計58点出土した。遺構より14点(SB 2より5点、SB 5より1点、SB 6より5点、P52より1点、P129より1点、SK17より1点)、包含層より44点出土している。石材はすべてチャートである(第38表)。

(10) 使用痕のある剥片 (649~657)

剥片の側縁に微細な剥離痕が密接して、あるいは不規則に観察されるものを使用痕のある剥片(UF)とした。合計58点出土した。遺構より9点(SB 2より3点、SB 6より3点、P510より1点、SK26より1点、SK73より1点)、包含層より49点出土している。石材はすべてチャートである(第38表)。

(11) 剥片・碎片 (669)

总数は724点出土した。石片の内、第一次剥離の打点部の残るもの剥片(フレイク)、打点部が欠落したものを碎片(チップ)とした。

石材はチャートが最も多く、全体の90%以上を占める。その他には、粘板岩35点、石英5点、凝灰岩5点、黒曜石4点、砂岩2点、流紋岩2点(669)、石英斑岩2点、泥岩1点、安山岩1点である(第38表)。

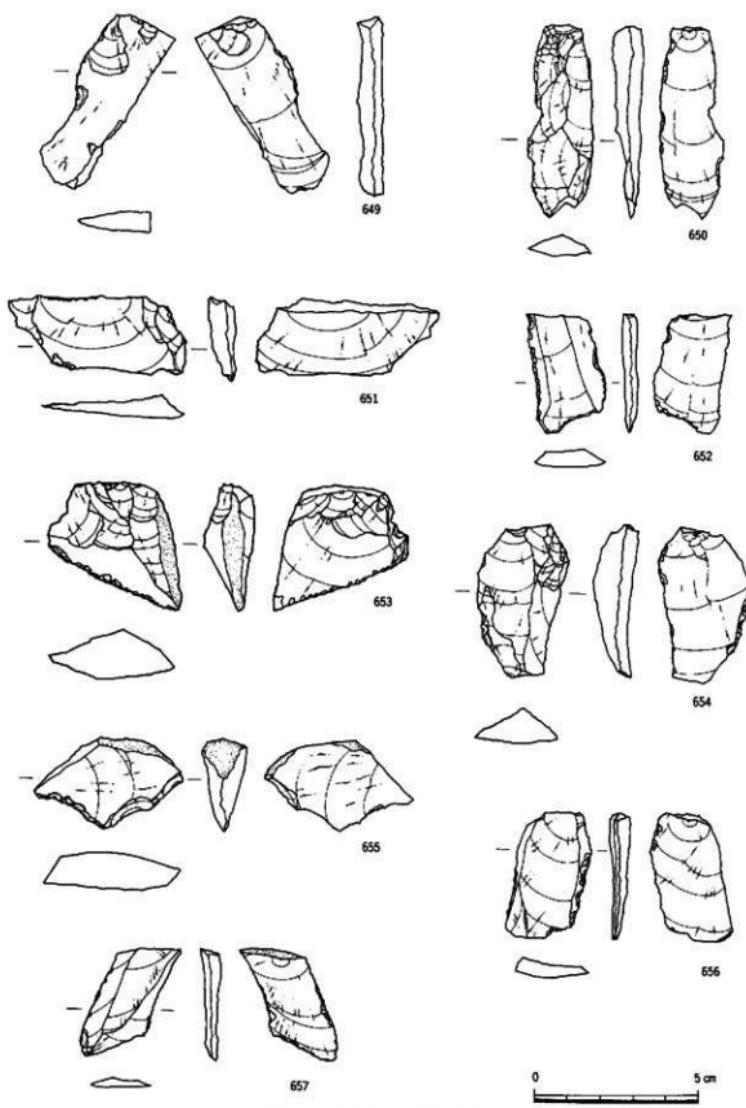
(12) 打欠石錐 (670~689)

52点出土している。遺構より7点(SB 1より1点、SB 2より2点、SB 6より2点、SKより2点)、包含層より45点である。

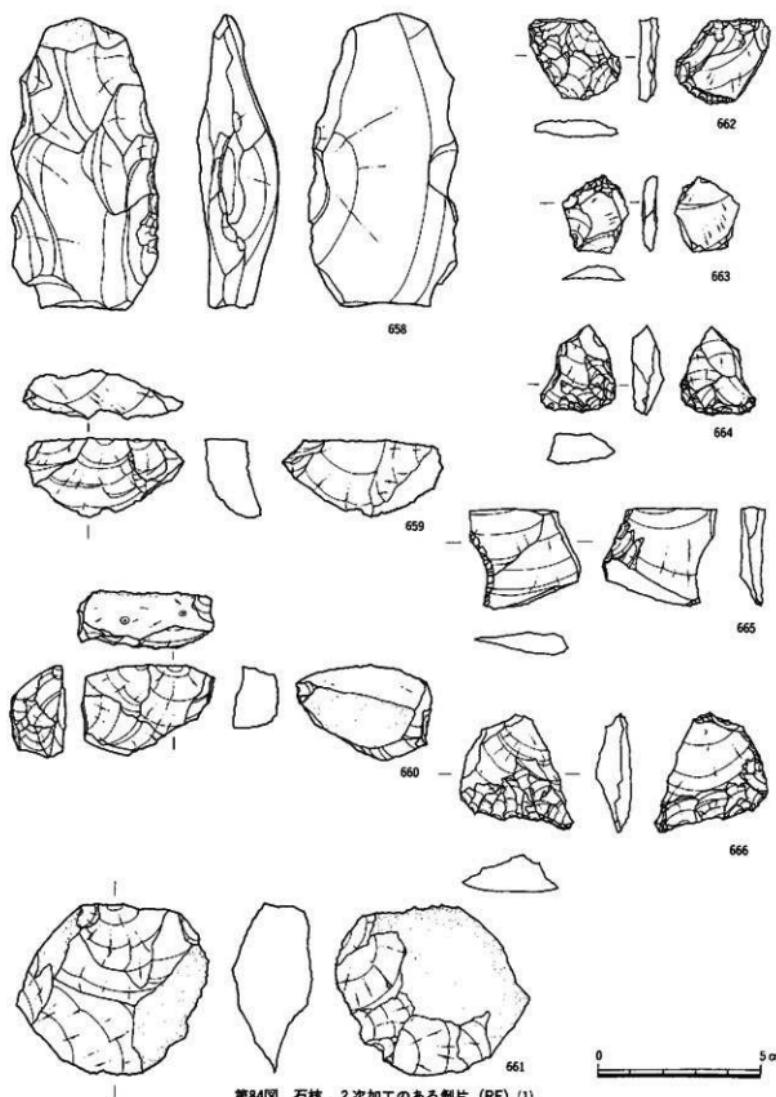
石材は、砂岩29点(55.8%)、泥岩15点(28.8%)、安山岩1点(1.9%)、粘板岩7点(13.5%)と砂岩が多く、泥岩がこれに続く。いずれも徳山地域の川原でよくみられる石材である。

52点中、22点は欠損しているか一部欠損が多く、横割・表裏剥離もみられる。このうち7点(676~682)の打欠石錐には「糸巻きの帯状痕跡」がみられた。(片面にみられるもの4点、両面にみられるもの3点がある。)(第26表)

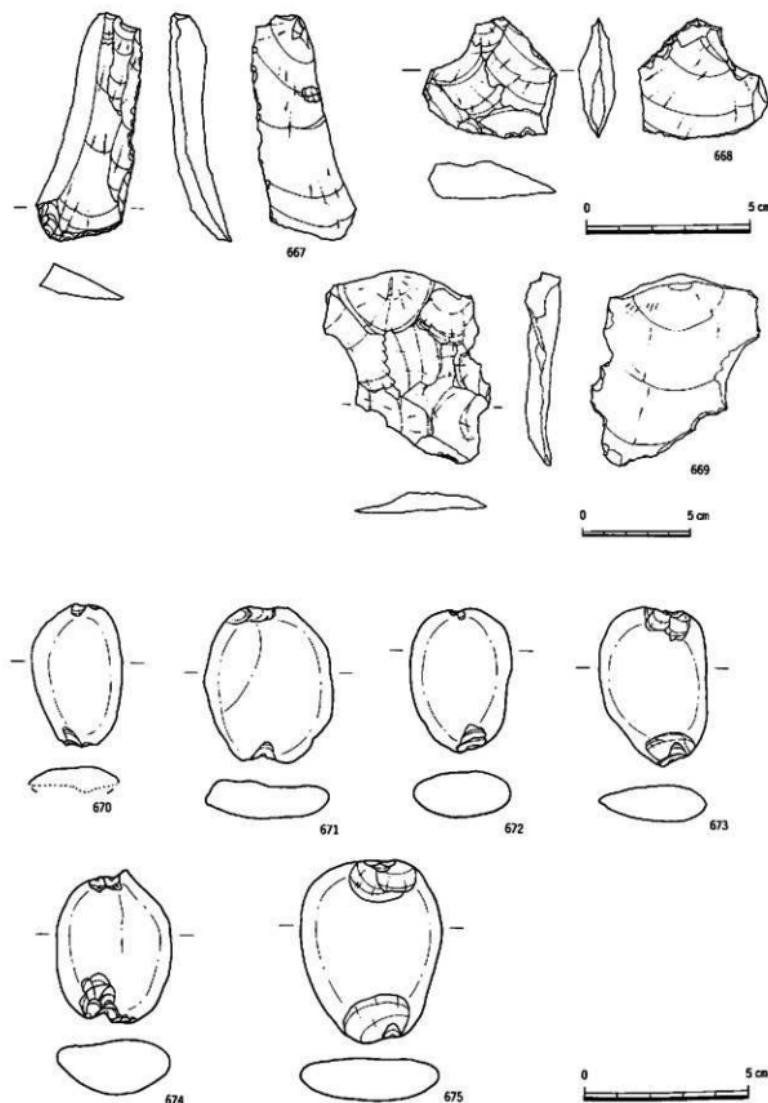
打欠石錐の質量分布を見ると21~50gのものが多く、平均質量(完形品)は40.4gである(第87図)。中には60g以上のものもみられる。用途の違いも考えられるが、「糸巻きの帯状痕跡」のみられる7点のうち完形のもの5点の質量は14.5g、21.2g、31.1g、49.2g、60.1gと一様ではない。



第83図 使用痕のある剣片 (UF)



第84図 石核、2次加工のある剝片 (RF) (1)



第85図 2次加工のある剝片 (RF) (2)、剝片、打欠石錐(1)

(13) 切目石錐 (690~748)

181点出土している。遺構から56点 (SB 2より9点、SB 6より11点、ピットより22点、土坑より14点)、包含層より125点である。

このうちSB 2から9点、SB 6から11点、中にはSK17から9点、P586から13点出土しているのが注目される。各々については前述 (遺構出土石器) のとおりである。

石材は、砂岩139点 (76.8%)、泥岩28点 (15.5%)、安山岩13点 (7.2%)、凝灰岩1点 (0.5%)で打欠石錐と同様に砂岩が多い。泥岩、安山岩がこれに続き、やはり徳山地域の川原でよくみかける石材を利用している。

181点中、66点は欠損しており、このうち一部欠損・横割が多いが、縦割や表裏剥離もみられる。(第13表、第86図)

また「糸巻きの帯状痕跡」についてみてみると59点 (32.6%) にみられ (690~699、712~720)、このうち片面にみられるもの36点、両面にみられるもの23点である。

切目石錐の質量分布をみてみると、11~30gのものがほとんどで、平均質量22.5gと打欠石錐と比べてかなり軽量である。(第87図)

しかし、中には56.9g・63.1g・82.3g・142.3gという重いものもあり、他との用途の違いも考えられる。

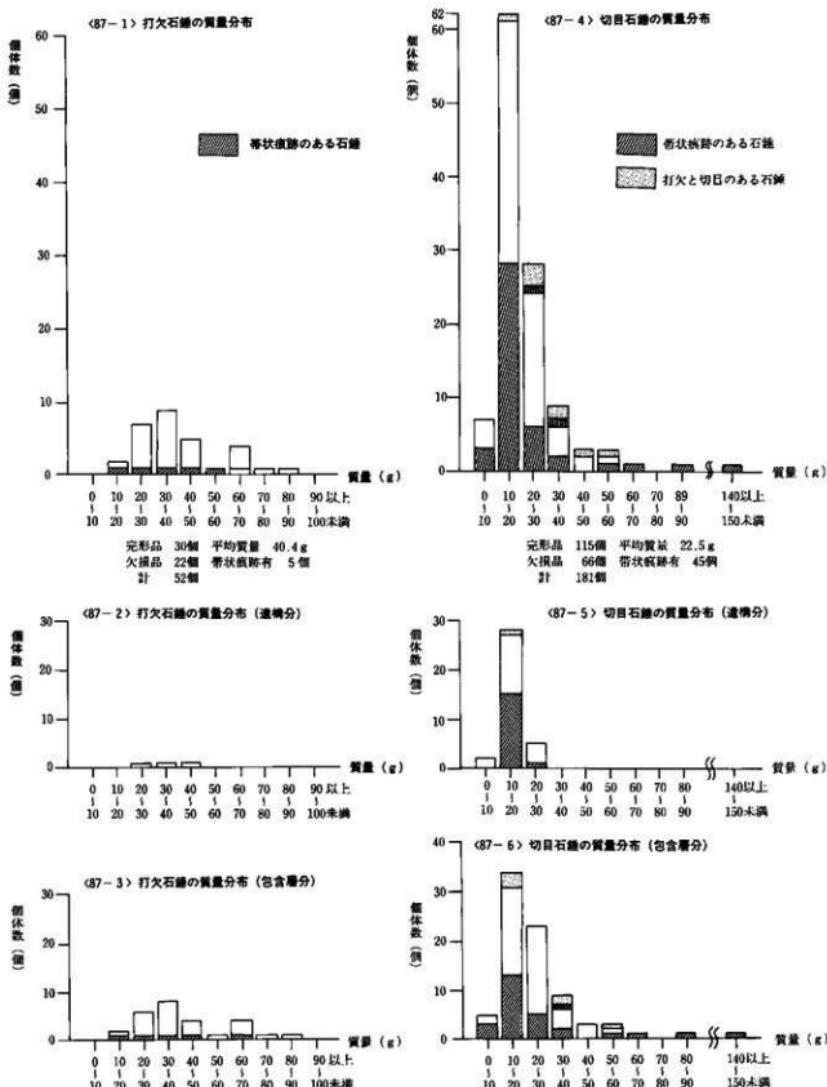
なお、打ち欠きと切り目の両方がみられるもの (はじめに打ち欠き、その上に切り目を入れたもの 12点、744~748) については、切目石錐に含めた。打ち欠きと切り目の両方が見られる石錐の平均質量は31.5g、切り目のみのものの平均質量は21.6gである。

第13表 石錐欠損状態別表

	A	B	C	D	A・B	A・C	B・C	B・D	A・B・D	計
切目石錐	(8) 31	(5) 16	(3) 3	(1) 3	4	1	(1) 2	(3) 5	1	(21) 66
打欠石錐	(3) 13	6		(1) 3						(4) 22

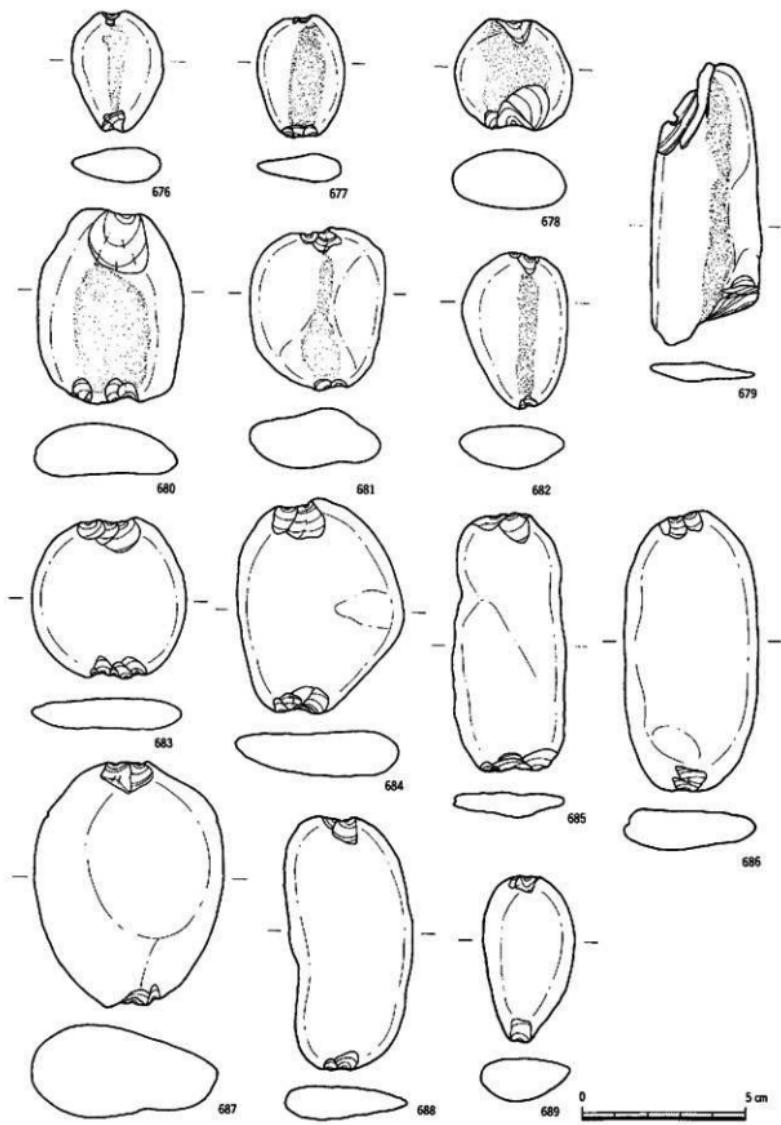


第86図 石錐欠損状態模式図

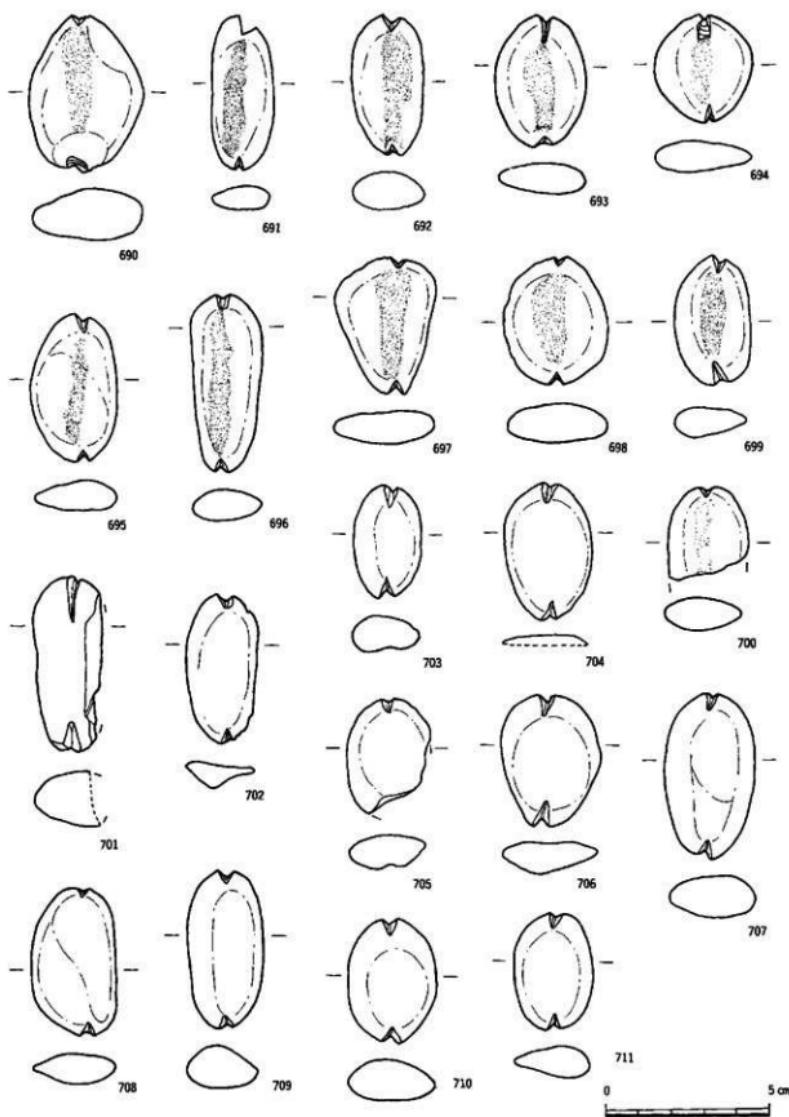


* グラフは完成品のみを用い、元の質量のわからない欠損品は除いて作成した。各々の平均質量も完成品より算出した。

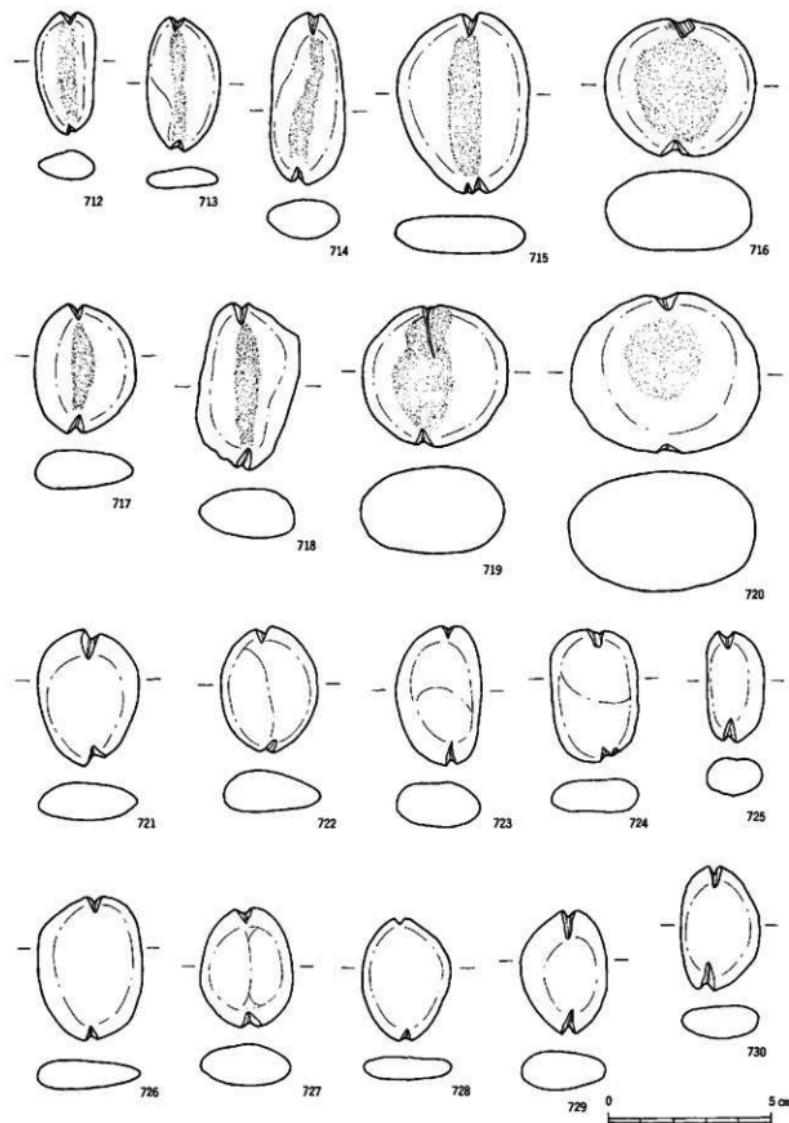
第87図 石錐の質量分布表



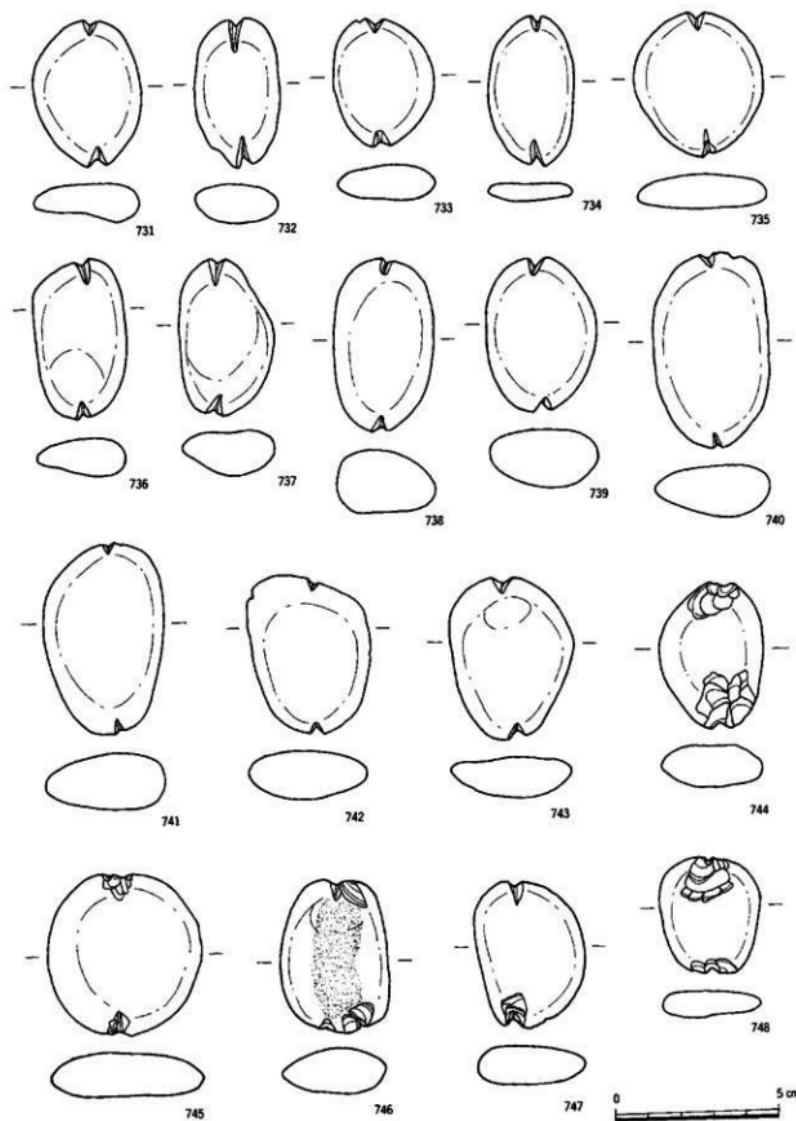
第88図 打欠石鏟(2)



第89図 切目石綿(1)



第90図 切目石鏃(2)



第91図 切目石綿(3)

(1) 凹石・磨石・叩石 (749~763)

合わせて23点出土している。遺構から2点(SB6より磨石、SK84より凹石)、包含層から21点である。これらの石器は円形や楕円形を基本とし、やや扁平な川原石を利用しておらず、複数の機能を併せもつものもある。分類に当たっては単一の機能ごとで分類した。

そのため石器によっては、複数の分類群に入るものも存在する。

① 凹石の分類

川原石の片面あるいは両面に凹みを持つものを凹石とした。凹石は14点出土した。

凹みの形状と、凹みの位置を(第92図)のように分類した。

形状による分類 (実測図での凹みの表現は基本的にこの模式図に合わせた)

I類：細かい敲打痕が集中して凹みをつくっているもの。

II類：すり鉢状に凹みができるものの、敲打によるものでなくすられたものと思われる。

III類：径が4cmの大きな凹みを有し、凹みの表面に磨痕が見られるもの。

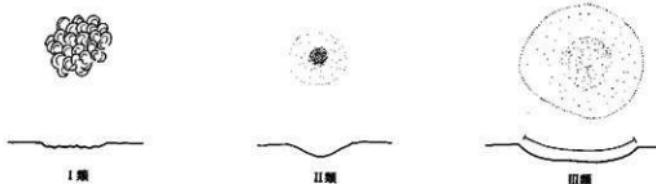
凹みの位置による分類

a類：中心に凹みが1つあるもの。

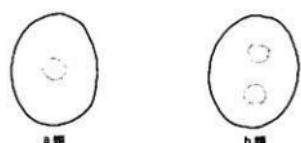
b類：2つ以上の凹みが中心付近で離れてあるもの。

それぞれの分類の凹みを1面でも持っている個体表を(第14表)に示した。表裏に凹みを持っているものは別々に数えた。これを見るとa類が多い。複数の凹みを持つものは1点だけである。表裏に凹みを持つものは5点ある。また凹みと共に磨面もみられるものが4点(756~758)ある。

凹みの形状による分類



凹みの位置による分類



第92図 凹石の分類

第14表 凹石の分類別出土点数

	a類	b類
I類	13	
II類	3	1
III類	2	

② 磨石の分類

川原石の表面のどこかに明瞭な磨面のあるものを磨石とした。磨面の種類と、磨面の位置によりそれぞれ第93図のように分類した。

磨面の種類の分類（実測図での磨面の表現は基本的にこの模式図に合わせた。）

1類：敲打によって一定の面を作出した後に使用され、ザラザラとした感触のある磨面。

2類：自然面を加工することなくそのまま使用し、ツルツルした磨面。

3類：面の作出は1類と同じであるが、面の中央部分が凹んでいるもの。

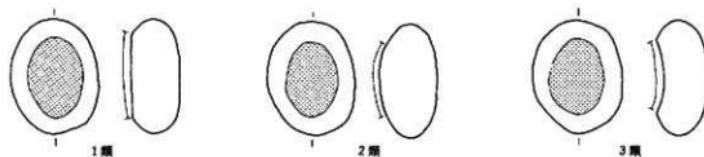
磨面の位置による分類

a類：川原石の片面もしくは両面のほぼ全面を使用しているもの。

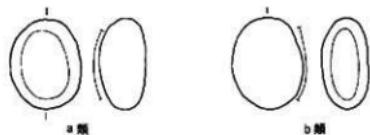
b類：石の長軸側側面を使用しているもの。

図示したもののは（第15表）の通りである。磨石は13点出土した。このうち両面に磨面のみられるものが9点、片面に磨面のみられるものが4点である。（759）は石の長軸側側面に磨面がみられる。凹みのみられるものが4点ある。（763）は叩きもみられる。

磨面の種類の分類



磨面の位置による分類



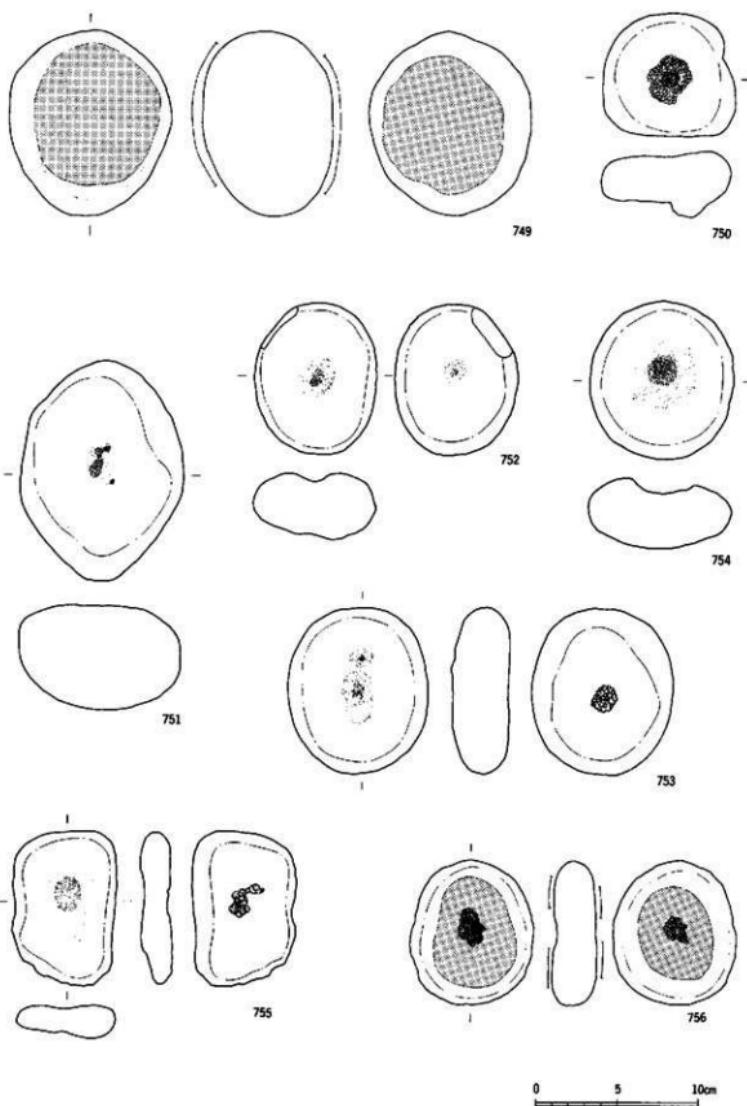
第93図 磨石の分類

第15表 磨石の分類別出土点数

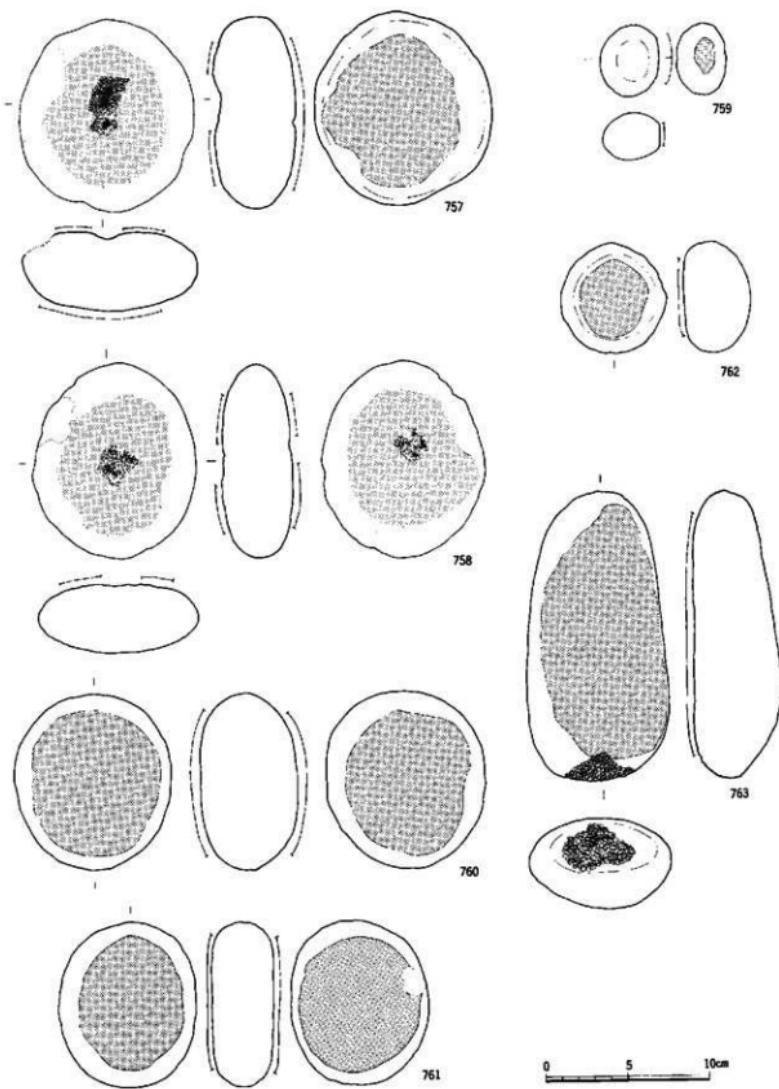
	a類	b類
1類	5	1
2類	15	-
3類	1	-

③ 叩石

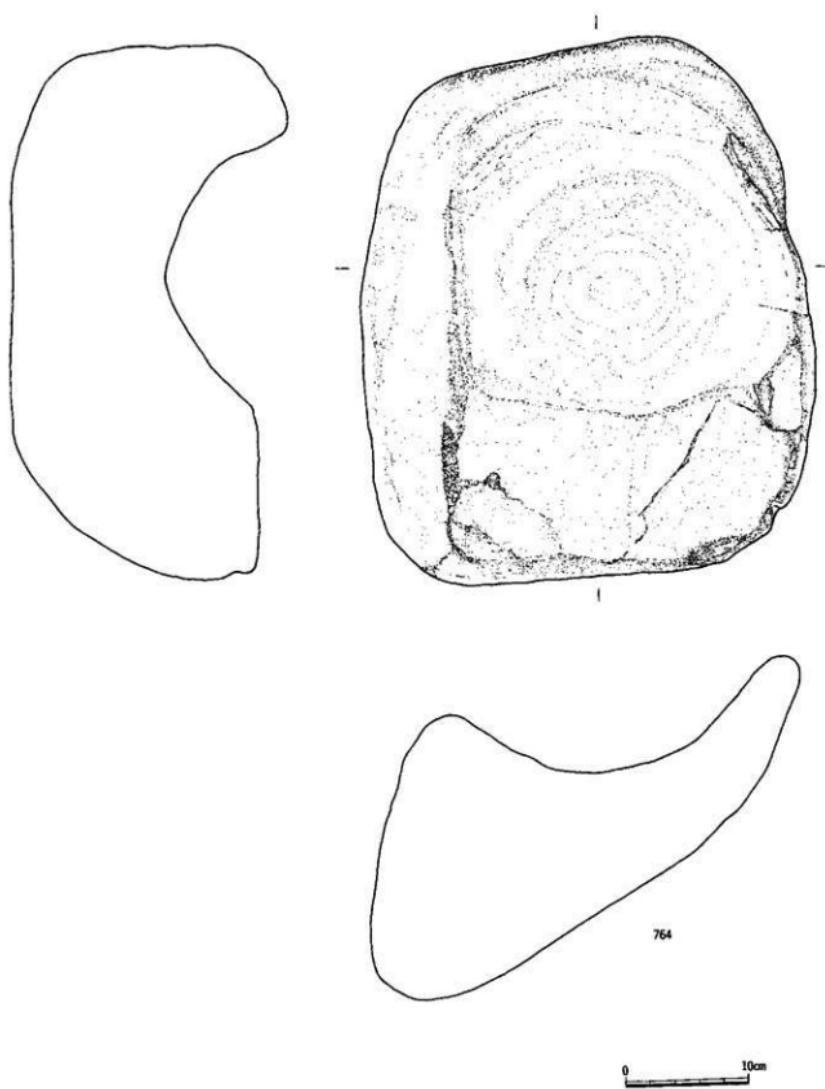
川原石の側面に、敲打痕を持つもので、打痕が一部に集中しているものを叩石とした。叩石はハンマーのようなものを叩く使用が想定される。叩石は1点（763）出土した。



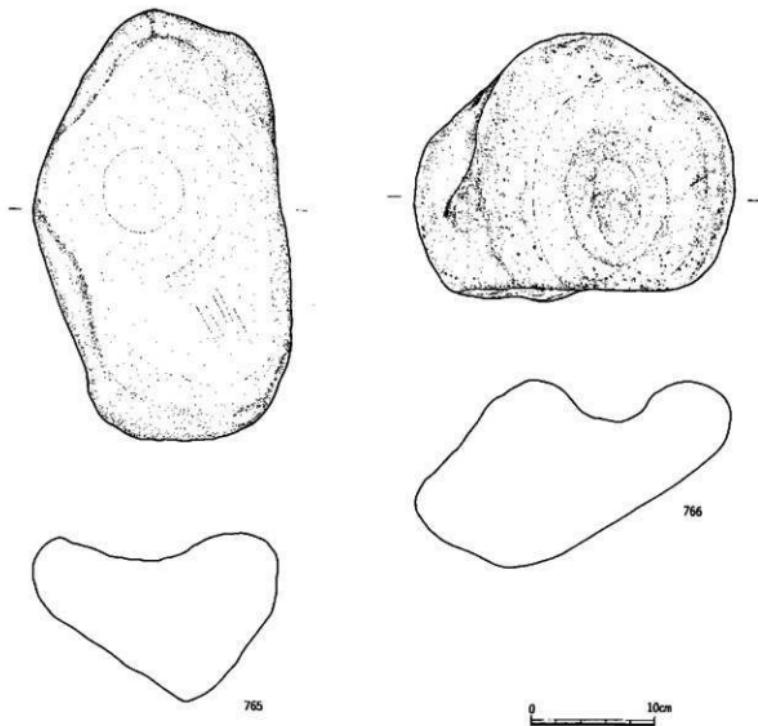
第94図 凹石、凸石、叩石(1)



第95圖 凹石、凸石、叩石(2)



第96図 石　皿　(1)



第97図 石皿 (2)

(15) 石皿 (764~766)

4点出土した。遺構から3点(SB2から1点、SB5から2点)、包含層から1点である。

住居跡から出土した3点は、砂岩製で中央部がすり鉢状に凹んでおり、よく使い込まれた感じであるが、元来自然の凹みのある石を利用した可能性も考えられる。

(766)と(764)は各々、SB2及びSB5の床面に埋め込まれる形で、各1点出土し、各住居内で使用されていたことがうかがえる。

(1) その他の石器

① 有舌尖頭器 (612)

4 L グリッドIV層上面より出土している。黒色のチャート製、節理もあるが、緻密でチャートの中では良い石質といえる。大きさは全長43mm、全幅19mm、全厚6.3mmである。基部は8~9mmと長く、舌がよく発達している。逆刺も発達しているが、やや左右対称性に欠ける。表面は桶状剥離が連続し、みごとな調整である。素材の面はほとんど残らず、背面に一部見られるのみで腹面は全面二次調整による剥離面で被われる。わずかに残る素材の面から、やや分厚い横長剝片を使用していると考えられる。

② 異形部分磨製石器 (609)

4 Q グリッドIV層上面より1点出土している。チャート製で全長20mm、全幅16mm、全厚3.9mmである。先端部が丸く調整されており基部には抉りが入っており、腹部は両面とも磨ってある。

③ 塊状耳飾 (613)

1点出土した。粘板岩製である。半分に割れているが縦長でつりがね型をしていたと考えられる。残存部では全長32mm、全幅14mm、全厚2.4mmと大変薄手である。表裏ともに磨った痕が明瞭にみられる。

④ 異形石器 (610、611)

2点出土している。1点(611)はチャート製で短辺11mm、長辺17mm、厚さ5mmの小型のものである。四辺に抉りが入り、四隅が突出する作りである。

もう1点(610)は粘板岩製で短辺14mm、長辺21mm、厚さ2.5mmで両サイドに抉りが入る。

用途については不明であるが、最近装飾品ではないかという見解が示されている。¹⁾

1) 桑野遺跡(福井県金津町)では出土状況からみて、異形石器を石製装飾品の範疇で取り扱っている。(1993桑野遺跡発掘調査概要 金津町教育委員会)

第16表 石錐計測表(1)

No	出土区	層位	石 材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	形 狩	折 損	遺物番号
1	SB 2	a ベルト	チャート	23	15	3.1	1.2	2 D		544
2	SB 2	s トレ	チャート	(20)	(16)	3	(1.1)	未製品		545
3	SB 4	a 1	チャート	(29)	14	3.3	(1.3)	2 B	a	546
4	SB 6	SE	チャート	15	12	2.6	0.5	1 B		547
5	SB 6	SE	チャート	23	13	3	0.9	2 B		551
6	SB 6	SW	チャート	(15)	15	2.7	(0.9)	1 B	a	550
7	SB 6	SW	チャート	22	(13)	3.7	(0.8)	2 B	b	552
8	SB 6	SW	チャート	31	20	6.8	3.6	2 D		553
9	SB 6	SW	チャート	31	22	10.1	6.9	3 E		556
10	SB 6	SW	チャート	23	(11)	2.7	(0.9)	4 B	e	557
11	SB 6	NE	チャート	23	11	3.9	1.4	2 F		554
12	SB 6	NW	チャート	(21)	(18)	(4)	(2.3)	未製品		
13	SB 6		チャート	20	14	2.9	0.8	1 B		548
14	SB 6		チャート	22	15	2.8	1	1 B		549
15	SB 6		不明	(18)	(10)	(2.6)	(0.5)	2	c	555
16	SB 6		黒曜石	(7)	(14)	(2)	(0.3)	未製品		
17	SB 6		黒曜石	(11)	(17)	(2)	(0.5)	未製品		
18	SB 6		黒曜石	(13)	(16)	(3)	(0.6)	未製品		
19	P136		チャート	(13)	12	1.3	(0.4)	1 B	a	559
20	P137		チャート	17	12	2.4	0.7	1 B		560
21	P138		チャート	28	14	3.6	1.5	2 B		558
22	SK15		チャート	(22)	(19)	6.2	(3.6)	未製品		561
23	SK17		チャート	(19)	(14)	(2.5)	(0.8)	未製品		
24	2 B	III	チャート	20	14	2.3	0.7	1 C		576
25	2 I	II	粘板岩	(22)	14	2.3	(1.1)	2 B	a	585
26	2 J	I	チャート	(15)	(11)	(1.9)	(0.5)	未製品		
27	2 J	I	チャート	(19)	(13)	(4.5)	(1.1)	未製品		
28	2 J	I	粘板岩	(23)	(14)	2.6	(0.9)	2 B	d	587
29	2 J	I	チャート	24	19	7.2	3.4	1 D		581
30	2 J	I	チャート	19	14	2.5	0.8	1 B		568
31	2 J	I	チャート	18	16	3.5	1	1 B		567
32	2 J	II	チャート	36	25	7.9	7.4	3 B		591
33	2 J	II	チャート	22	15	4.1	1.5	1 B		569
34	2 J	II	チャート	19	16	3.3	0.8	1 B		564
35	2 J	II	チャート	28	16	9	4.7	3 F		597
36	2 J	II	チャート	31	22	5.8	4.7	3 E		596
37	2 K	II	チャート	16	(11)	2.5	(0.5)	1 B	b	572
38	2 K	II	粘板岩	16	12	1.7	0.4	1 C		575
39	3 E	IV	粘板岩	(20)	(9)	(1.9)	(0.5)	2	c	
40	3 K	II	チャート	29	16	4	1.8	2 B		583
41	3 Q	III	チャート	31	19	5.8	3.8	2 D		589
42	4 D	II	チャート	19	14	3.6	0.9	1 B		
43	4 I	III	チャート	(27)	(17)	(6.8)	(3.4)	未製品		
44	4 I	a トレ	チャート	(18)	(14)	2.5	(0.7)	1 B	d	574
45	4 J	II	チャート	(20)	(17)	(4.3)	(1.9)	未製品		
46	4 K	II	チャート	27	16	3.9	3	3 E		594

第17表 石鎚計測表(2)

No.	出土区	層位	石 材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	形 態	折 損	遺物番号
47	4 K	II	チャート	16	(15)	(3.6)	(0.7)	1 B	b	571
48	4 K	III	チャート	34	19	6.6	4.3	2 B		584
49	4 L	III	チャート	28	22	7.6	5.5	3 E		595
50	4 L	III	チャート	22	17	4.4	2.2	3 D		593
51	4 L	III	チャート	23	(20)	2.6	(1.3)	1 D	b	582
52	4 L	IV	チャート	22	18	4.5	2.7	3 D		
53	4 M	IV	チャート	25	(17)	2.6	(1.3)	1 B	d	573
54	4 N	III	チャート	15	(13)	2.5	(0.5)	1 C	b	578
55	4 O	III	チャート	(19)	(12)	2.9	(0.8)	2 B	f	588
56	4 O	III	チャート	19	14	4	1.1	1 D		579
57	4 P	III	下呂石	18	19	1.5	0.5	1 A		562
58	5 L	III	チャート	18	14	2.6	0.8	1 B		
59	5 L	IV	チャート	(31)	(15)	(4.8)	(3.1)	未製品		
60	5 M	III	チャート	(16)	13	2.4	(0.7)	1 C	a	577
61	5 N	III	チャート	26	(18)	6.5	(3.2)	3 B	b	
62	5 N	IV	チャート	20	17	4	1.1	1 B		565
63	5 O	III	チャート	20	15	4.1	1	1 D		580
64	5 O	III	チャート	26	(17)	4.3	(2.3)	3 B	d	592
65	5 P	III	チャート	21	(12)	3.1	(1.1)	2 B	d	586
66	6 N	Eアゼ	チャート	17	11	3.1	0.9	2 D		590
67	表採		チャート	21	16	3.3	1.2	1 B		566
68	表採		チャート	14	13	3.4	0.5	1 B		563
69	表採		チャート	(16)	15	3.3	(0.9)	1 B	a	570

第18表 石錐計測表

No.	出土区	層位	石 材	大きさ(mm)			質量(g)	尖頭部(mm)			断面図	折 損	分 類	遺物番号
				全長	全幅	全厚		長	幅	厚				
1	SB 6	SE	チャート	31	40	8.4	9.5	2.8	3.1	2	三角		1	599
2	SB 6		チャート	25	15	5.3	2.4	5	6.1	3.3	菱形		2	598
3	P543		チャート	41	16	4.2	3.3	2.9	3.4	1.1	菱形		1	600
4	2 J	II	チャート	38	13	5.8	(4)	6.3	5.8	4.1	三角	有	3	
5	3 I	IV	チャート	30	15	6.2	3	2.1	2.6	1.5	菱形		2	601
6	4 J	III	チャート	28	12	6.5	2.3	2.5	3.8	2.3	三角		1	
7	4 J	III	チャート	26	18	(5.8)	(2.7)	3.4	4.8	1.6	三角	有	1	602
8	4 L	IV	チャート	37	11	5.3	2.5	5	4.4	2.7	三角		3	603
9	4 N	I	チャート	22	20	7.7	3.9	2.8	3.2	1.7	菱形		1	604
10	4 O	III	チャート	(29)	13	4.3	(2.4)				有	2		
11	表採		チャート	22	10	3.3	1.1	2.3	2.8	2	菱形		2	605

第19表 石匙計測表

No.	出土区	層位	石 材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	分類	遺物番号
1	SB 3	SW	粘板岩	65	29	7	16.3	1	614
2	SB 6	NW	チャート	30	56	4.2	10.5	2	615
3	3 E	IV	チャート	39	57	10.2	24.1	2	617
4	4 O	E	チャート	35	60	6.5	14.2	2	619
5	5 L	IV	チャート	52	33	9	14.7	1	616
6	5 O	III	チャート	27	37	3.6	3.9	2	618

第20表 振器計測表

No	出土区	層位	石 材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	分類	遺物番号	備 考
1	SB 6		チャート	55	42	12.9	32.8	1	620	
2	2 J	II	チャート	33	25	9.8	11.6	2	625	
3	2 J	I	チャート	37	26	9.1	11.4	1	623	
4	3 M	III	チャート	61	48	15.1	67.7	1	622	
5	3 D	IV	チャート	65	31	9.8	18.8	1	627	-辺は括状剥離調整
6	4 M	III	チャート	59	42	9.3	25.7	1	626	-辺は削器の調整
7	4 M	IV	チャート	27	18	5.4	3.6	1	621	
8	4 P	不明	チャート	55	34	10.8	27	2	624	ラウンド・スクレイバー

第21表 削器計測表

No	出土区	層位	石 材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	分類	遺物番号	備 考
1	SB 2	P 5	チャート	40	21	7.8	7.9	2		
2	SB 3	SW	チャート	35	21	10	7.9	2	629	-辺は振器の調整
3	3 I	IV	チャート	43	36	12.5	18.3	2	630	
4	4 O	III	チャート	53	32	7.9	14.4	1	632	
5	L	III	チャート	62	30	6.7	13.7	1	631	
6	5 L	IV	チャート	54	46	12.4	23.8	1	628	

第22表 ノッチド・スクレイバー計測表

No	出土区	層位	石 材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	遺物番号
1	SB 2	Cトレ	チャート	36	22	5.5	4.6	
2	SB 6		黒曜石	18	13	7	1.3	634
3	4 L	N	チャート	75	43	11.8	37.4	633

第23表 ピエス・エスキュー計測表

No	出土区	層位	石 材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	分類	遺物番号
1	SB 3		チャート21	24	8.3	5.1	2	606	
2	SB 6	SW	黒曜石20	10	4.2	0.6	1	607	
3	4 J トレ	N7セ	チャート	25	22	5.6	4.4	1	608

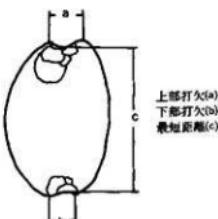
第24表 磨製石斧計測表

No	出土区	層位	石 材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	折損	遺物番号
1	P 412		安山岩	(87)	57	(38)	(314)	b	646
2	4 O	III	結晶片岩	(19)	(39)	(10)	(9)	b	
3	4 O	III	安山岩	126	53	24	265		647
4	5 M	III	結晶片岩	(60)	47	(19)	(104)	b	648
5	5 Q	III	結晶片岩	(42)	(34)	(19)	(34)	b	

折損 b は第7986による

第25表 打製石斧計測表

No.	出土区	層位	石 材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	分類	折損	遺物番号	備 考
1	SB 2	NW	砂岩	98	55	17	117	1		635	使用痕有
2	P 192		粘板岩	(67)	51	9	(50)		b		
3	P 587		砂岩	124	83	25	296	2		637	使用痕・装着痕有
4	SK 82		砂岩	101	38	16	88	1		636	使用痕有
5	2 A	II	砂岩	147	86	30	366	3		644	使用痕・装着痕有
6	2 I	II	粘板岩	74	(35)	7	(32)	e			
7	2 I	IV	粘板岩	(57)	31	4	(11)		b		
8	2 J	III	粘板岩	80	(26)	6	(18)	e			
9	3 B	IV	安山岩	(128)	(70)	(25)	(328)	1	a	641	装着痕有
10	3 C	II	粘板岩	(69)	(40)	17	(72)	d			
11	3 E	II	粘板岩	79	(39)	6	(24)	e			
12	3 I	I	砂岩	137	76	33	397	1		640	
13	4 J	III	砂岩	(111)	64	23	(238)	1	c	642	使用痕有
14	4 J	I	粘板岩	(64)	(29)	5	(16)	d			
15	4 J	Cトレ	粘板岩	(98)	63	17	(159)	1	c	639	使用痕有
16	4 J	Nアセ	砂岩	(86)	(52)	(24)	(149)	a			
17	4 L	III	粘板岩	70	43	14	54	1			使用痕有
18	4 L	III	粘板岩	76	24	4	13	1			使用痕有
19	4 L	III	粘板岩	(46)	26	4	(8)	c			
20	4 L	IV	粘板岩	62	29	10	24	1			
21	5 K	III	結晶安岩		(62)	(45)	(13)	(56)		b	
22	5 M	III	粘板岩	(59)	34	3	(10)		c		
23	5 N	III	粘板岩	107	53	19	133	1			
24	6 M	III	粘板岩	101	44	15	104	1		643	
25	6 M	III	粘板岩	(39)	(41)	(9)	(23)				
26	6 M	E	粘板岩	105	50	24	173	1		638	
27	6 M		粘板岩	74	42	16	(54)	e			
28	6 N	III	粘板岩	(51)	(52)	(8)	(38)	d			
29	表探		粘板岩	(57)	(56)	(12)	(60)	b			
30	表探		粘板岩	136	70	10	165	3		645	使用痕有



打欠石錐(櫛石錐)の計測部位については渡辺誠氏の掲唱を参考とした。¹¹⁾

1) 渡辺誠、1991「石錐ピット出土の櫛石錐について」『境内遺跡発掘調査報告書』(高山市教育委員会) 他

第98図 打欠石錐計測部位説明図

第26表 打欠石錐計測表

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	欠損	備考	遺物番号	打ち欠き部の 最短距離(mm)	
											上	下
1	SB1	周辺	粘板岩	43	27	(8)	(13)	d		670	42	6
2	SB2	III	粘板岩	42	29	13.4	(23.2)	a	焼	672	39	8
3	SB2	SE	泥岩	47	35	16.6	(36.5)	a		674	41	10
4	SB6	SE	砂岩	48	31	11.5	25.4			673	45	8
5	SB6	SE	砂岩	49	39	12.4	(29.9)	a		671	44	13
6	SK27		砂岩	55	42	13.8	46			675	52	10
7	3 J	II	泥岩	85	40	11	60.1			686	83	8
8	3 J	II	砂岩	51	40	13.7	45.8				48	15
9	3 J	III	砂岩	44	29	11.1	20.4				42	11
10	3 J	III	泥岩	(51)	32	9.1	(17)	b				
11	3 J	IV	粘板岩	95	36	8.5	33.2					
12	3 K	II	粘板岩	(65)	32	10.3	(32.3)	b				
13	3 K	II	粘板岩	78	33	7.2	27.1			685	75	10
14	3 K	III	砂岩	48	46	9.7	34.7			683	44	18
15	3 O	III	泥岩	53	30	14.5	33.4				51	6
16	3 Q	III	砂岩	55	29	18.1	41.5				53	5
17	4 C	II	泥岩	93	43	17.5	87.7				86	17
18	4 I	III	砂岩	52	35	13.4	28.8				49	8
19	4 I	Cトレ	砂岩	48	45	14.8	39.4				47	10
20	4 J	III	泥岩	103	41	10.4	67.1				99	11
21	4 J	III	砂岩	75	58	27.7	(161.6)	a		687	71	13
22	4 J	III	砂岩	76	36	17.7	77.7				72	8
23	4 K	I	泥岩	(64)	21	8.8	(17.9)	b				
24	4 K	III	砂岩	65	50	13.2	60.5			684	60	10
25	4 L	III	砂岩	59	45	16.1	60.1		帯痕(片)	680	55	10
26	4 L	III	砂岩	49	41	17.6	49.2		帯痕(片)	681	45	11
27	4 L	III	粘板岩	(86)	33	6.1	(23.7)	a	帯痕(両)	679		
28	4 L	IV	砂岩	53	39	15.9	(40.3)	a				
29	4 L	IV	砂岩	33	35	17.8	31.1		帯痕(両)	678	32	12
30	4 L	IV	粘板岩	80	28	5.7	19.3				77	4
31	4 L	IV	砂岩	68	33	17.1	57.2				67	11
32	4 L	IV	泥岩	41	31	12.3	(18.5)	a			39	8
33	4 L	IV	泥岩	(63)	38	19.5	(67.2)	a			59	17
34	4 N	IV	砂岩	44	35	10.2	24.3				41	8
35	4 O	III	砂岩	44	27	10.4	(13.7)	d				
36	4 O	III	砂岩	42	32	11.9	(23.2)	a				
37	4 O	III	砂岩	50	29	13.4	(28.1)	a				
38	4 P	II	泥岩	(52)	32	18.8	(43.7)	b				
39	4 Q	I	砂岩	67	35	11.9	(33.2)	d			64	8
40	4 Q	I	泥岩	(55)	34	13.9	(28.8)	b				
41	4 Q	I	砂岩	35	28	10.4	14.5		帯痕(両)	676	34	5
42	4 Q	II	砂岩	63	36	10.9	37.9				61	7
43	4 Q	II	泥岩	44	33	10.8	(21.3)	a			42	11
44	4 Q	III	砂岩	50	32	10.3	(22)	a			47	6
45	4 Q	III	砂岩	54	33	10.6	32.1				52	10
46	5 N	III	砂岩	46	31	11.9	21.6		帯痕(片)	682	44	6
47	5 N	III	砂岩	50	27	12	21.5			689	48	7
48	6 L	III	砂岩	(42)	32	8.1	(13.6)	b				5
49	表採		泥岩	36	26	7.8	(9.5)	a	帯痕(片)	677	34	7
50	表採		泥岩	61	34	14.2	34.2				58	8
51	表採		安山岩	78	37	10.4	44.1			688	75	10

SK17については第11表に掲載

欠損は第86回による

第27表 切目石錠計測表(1)

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	欠損	備考	遺物番号
1	SB 2	NE	安山岩	33	29	10	13.3		帶痕(片)	694
2	SB 2	NE	砂岩	41	25	(3.4)	(5.3)	d		
3	SB 2	Nトレ	砂岩	47	18	8.1	11.4		帶痕(両)	691
4	SB 2	SW	砂岩	(35)	(24)	9.6	(11.1)	a	焼	705
5	SB 2	SW	泥岩	(38)	(14)	(10.5)	(7.5)	c		
6	SB 2	SE	泥岩	47	35	18.2	(37.8)	a	帶痕(片)	690
7	SB 2	SE	砂岩	42	22	11.7	17.3		帶痕(片)	692
8	SB 2	SE	砂岩	53	(20)	(16.5)	(26.8)	c		701
9	SB 2	SE	砂岩	34	21	10.5	11.5			703
10	SB 6	NW	泥岩	43	29	13	(25.4)	a		
11	SB 6	NW	泥岩	40	26	9.8	15.5		帶痕(両)	693
12	SB 6	NW	泥岩	42	31	10.4	17		帶痕(片)	697
13	SB 6	NW	泥岩	(41)	(22)	10.7	(11.9)	b · c		
14	SB 6	NW	砂岩	49	41	15.9	(46.2)	a		704
15	SB 6	NE	泥岩	45	26	9.3	15.4		帶痕(片)	695
16	SB 6	NE	安山岩	39	30	11.9	19.7		帶痕(片)	698
17	SB 6	SW	砂岩	54	21	10.2	19.2		帶痕(片)	696
18	SB 6	SE	砂岩	(38)	25	15.6	(17.7)	b		
19	SB 6	アゼ	砂岩	44	22	8.2	(10.4)	a		702
20	SB 6		砂岩	(27)	27	7	(8.1)	b		
21	P128		安山岩	(34)	38	11.1	(13.9)	b		
22	P136		砂岩	47	21	13.1	21			709
23	P138		砂岩	(25)	(21)	(9.6)	(6.1)	b · d		
24	P138		砂岩	(12)	(25)	10	(3.9)	b		
25	P139		泥岩	44	25	9.2	14.5			708
26	P150		泥岩	(28)	23	9.8	(8.5)	b	帶痕(片)	700
27	P152		砂岩	38	22	9.9	12.3		帶痕(片)	699
28	P561		砂岩	55	(21)	13	(20.7)	c	焼	
29	SK18		泥岩	35	23	9.1	11.3			711
30	SK18		砂岩	37	26	12.7	16.8			710
31	SK18		砂岩	(25)	(24)	(7.1)	(5.1)	b · d		
32	2 I	III	砂岩	56	30	15.4	37			
33	2 J	I	安山岩	51	30	10.1	23.8		帶痕(片)	
34	2 J	II	砂岩	42	27	10.1	(17.9)	a	帶痕(片)	
35	2 K	II	砂岩	41	46	24.2	56.9		帶痕(両)	716
36	2 K	III	泥岩	(24)	21	(8.8)	(6)	b		
37	3 E	III	砂岩	45	27	6.7	12.6			
38	3 F	I	安山岩	42	45	26.2	63.1		帶痕(両)	719
39	3 I	III	砂岩	(37)	31	10.9	(15.2)	b		
40	3 J	II	安山岩	59	34	15.5	45.7			740
41	3 K	II	砂岩	36	31	10.3	15.4			
42	3 K	II	砂岩	52	30	18.1	41.8			738
43	3 L	IV	泥岩	49	21	13.7	(19.6)	a		
44	3 L	IV	泥岩	36	17	9.9	8		帶痕(両)	712
45	3 L	IV	砂岩	49	36	14.4	34.6			742
46	3 L	IV	砂岩	36	27	11.3	15.4		帶痕(片)	
47	3 L	IV	砂岩	44	25	12.4	20.9			
48	3 N	II	砂岩	(51)	25	12.7	(24.2)	b		
49	3 N	II	砂岩	35	28	9.9	(12.6)	a	帶痕(両)	
50	3 O	II	砂岩	48	29	10.5	21.2			
51	3 O	III	砂岩	39	28	9.5	15.7			
52	3 O	III	砂岩	(27)	14	(5)	(3)	b · d		
53	3 P	II	砂岩	49	(21)	16.3	(23.2)	a · c		

第28表 切目石鑑計測表(2)

No.	出上区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (g)	欠損	備考	遺物番号
54	3 P	III	泥岩	40	26	12.3	(15.1)	a		
55	3 P	IV	砂岩	42	26	14	21.7			723
56	3 Q	II	泥岩	(29)	(22)	(13.6)	(11.2)	b	帯痕(片)	
57	3 Q	III	泥岩	36	27	12.6	19.3			727
58	3 Q	III	砂岩	(29)	31	12.1	(17)	b		
59	3 Q	III	砂岩	51	29	13.9	33.3		帯痕(両)・焼	718
60	4 D	III	砂岩	44	24	11.1	16		帯痕(片)	
61	4 D		砂岩	44	49	26.4	82.3		帯痕(両)	
62	4 E	II	泥岩	46	25	12.2	18.3			
63	4 F		砂岩	47	24	15.6	(22.5)	a		
64	4 F		砂岩	42	19	14.1	17.2		帯痕(両)	
65	4 J	III	砂岩	46	33	17.9	37.6			739
66	4 J	III	砂岩	36	25	15	18.4		帯痕(片)	
67	4 J	III	砂岩	39	26	11	18.1			724
68	4 K	E	砂岩	(47)	18	12.4	(13.3)	b		
69	4 L	III	砂岩	39	29	9	12.4			
70	4 L	III	砂岩	(26)	24	(10)	(7.6)	b · d	帯痕(片)	
71	4 L	III	砂岩	38	26	14.8	20.2			
72	4 L	IV	砂岩	58	36	18.3	52.4			741
73	4 L	IV	泥岩	62	26	8.4	16.5			
74	4 L	IV	泥岩	(30)	24	12	(9.8)	b	焼	
75	4 L	IV	砂岩	45	36	14.3	29.1			
76	4 L	IV	砂岩	41	22	6.7	8.5		帯痕(片)	713
77	4 L	IV	砂岩	(25)	(23)	(10.6)	(6.6)	b		
78	4 L	V	砂岩	(21)	(19)	(7.7)	(4)	a · b		
79	4 N	III	砂岩	(30)	22	(7.8)	(5.2)	b	帯痕(両)	
80	4 O	II	砂岩	43	32	9.2	20.8			726
81	4 O	III	砂岩	49	36	13.7	31.5			743
82	4 O	III	砂岩	43	26	18.7	25.4		帯痕(両)	
83	4 O	III	砂岩	42	21	12.4	16.1		帯痕(両)	
84	4 O	III	砂岩	38	31	13.7	23.2		帯痕(片)	
85	4 O	III	砂岩	37	25	11.8	14.8			729
86	4 O	III	砂岩	49	39	14.2	(31.9)	a	帯痕(片)	
87	4 O	III	安山岩	53	28	16.9	(36.1)	a		
88	4 O	III	泥岩	46	29	15.6	(24.6)	a		
89	4 O	III	泥岩	41	29	14.5	(21)	a		
90	4 O	III	砂岩	52	24	(7.3)	(13.1)	d		
91	4 O	III	砂岩	(29)	27	(9.8)	(9.4)	a · b		
92	4 O	III	砂岩	35	22	9.4	(10.2)	a		
93	4 O	III	砂岩	37	23	10.3	13.4			
94	4 O	III	泥岩	42	27	10.3	(16.4)	a		
95	4 O	III	砂岩	38	36	13.5	(20.6)	a	帯痕(両)	
96	4 O	III	砂岩	(35)	25	12.3	(14.5)	b		
97	4 O	III	泥岩	(36)	(21)	12	(10.1)	a · b		
98	4 O	III	砂岩	40	17	8	8.8		帯痕(両)	
99	4 O	Nトレ	泥岩	33	18	12.7	9.6			725
100	4 P	II	砂岩	39	26	9.2	(13.3)	a		
101	4 P	II	砂岩	30	24	10.2	10.1			
102	4 P	III	砂岩	43	39	10.3	22.6			735
103	4 P	IV	砂岩	47	27	11.5	(20.1)	a		
104	4 Q	I	砂岩	54	25	13.8	(25.1)	a		
105	4 Q	I	砂岩	46	26	10.7	17			
106	4 Q	II	砂岩	40	21	13.1	16.3		帯痕(両)	

第29表 切目石鉈計測表(3)

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (kg)	欠損	備考	遺物番号
107	4 Q	II	砂岩	44	22	14.2	18.7		帯痕(両)	
108	4 Q	III	砂岩	54	38	12.4	(32.4)	a		
109	4 Q	III	砂岩	39	30	9.7	16.5			733
110	5 K	IV	砂岩	52	32	10.2	(22.8)	a	帯痕(片)	
111	5 L	III	砂岩	38	19	8.4	8.9		焼	
112	5 L	III	砂岩	38	31	12	20.2		帯痕(片)	717
113	5 L	IV	砂岩	38	23	11.9	13.6		帯痕(両)	
114	5 L	IV	泥岩	37	22	12.5	14.5			
115	5 L	IV	砂岩	38	24	7.4	(9.3)	a	帯痕(片)	
116	5 L	IV	砂岩	(22)	20	(6.1)	(3.2)	a b d		
117	5 L	IV	砂岩	40	29	11.5	17.1			721
118	5 M	III	砂岩	44	32	12.7	24.6			731
119	5 M	III	砂岩	49	21	17.6	27.1			
120	5 M	IV	砂岩	54	(28)	(12.1)	(23.5)	d		
121	5 M	IV	砂岩	(31)	(23)	(10)	(7.1)	b		
122	5 M	IV	砂岩	35	20	(11.3)	(12.7)	a	帯痕(片)	
123	5 N	III	砂岩	49	57	35.7	142		帯痕(片)	720
124	5 N	III	砂岩	41	24	11.9	15.7		帯痕(両)	
125	5 N	III	砂岩	41	26	15.1	23.6			
126	5 N	III	砂岩	43	34	13.6	28.3			
127	5 N	III	砂岩	47	28	11.2	23.2			736
128	5 N	III	砂岩	51	22	11.8	19.1		帯痕(両)	714
129	5 N	III	砂岩	(32)	(26)	(12.7)	(9.6)	a · b		
130	5 N	III	安山岩	34	26	12.4	(11.6)	a		
131	5 N	III	砂岩	36	28	10	14		帯痕(両)	
132	5 N	III	泥岩	45	25	11.9	19.7			732
133	5 O	III	砂岩	32	28	9.5	(11.5)	a	帯痕(片) · 焼	
134	5 O	III	砂岩	45	26	5.6	10.6			734
135	5 O	III	砂岩	31	24	10.1	10.6			
136	5 O	III	砂岩	38	25	9.1	15.2		帯痕(片)	
137	5 O	III	砂岩	55	40	11.6	32.2		帯痕(両)	718
138	5 P	IV	安山岩	47	29	14.1	20.7			737
139	6 L	III	砂岩	49	39	11.4	25.7			
140	6 M		砂岩	37	29	13.1	19.5			722
141	6 M		砂岩	37	27	7.3	10.4			728
142	表採		砂岩	54	25	14.2	29.3		帯痕(片)	
143	表採		泥岩	(41)	(22)	6.8	(8.5)	b · c		
144	表採		砂岩	40	26	9.4	13.6		帯痕(片)	
145	表採		砂岩	36	26	8	12.8			
146	P141		砂岩	43	30	12.6	21.6			744
147	4 C	III	泥岩	58	25	8.1	(16.6)	a		
148	4 K	II	安山岩	58	28	10.7	30.5			
149	4 K	E	砂岩	59	43	15.6	54.8			
150	4 L	IV	砂岩	44	29	20.4	35.2			
151	4 O	II	安山岩	47	32	13.8	30.4		帯痕(片)	746
152	4 O	III	砂岩	45	32	12.2	27			747
153	4 Q	I	砂岩	51	40	13.6	(38.3)	a		
154	4 Q	I	砂岩	49	47	13	46.3			745
155	5 K	II	砂岩	64	24	10.5	26.4		帯痕(片)	
156	表採		砂岩	46	31	14.3	29.9			
157	表採		砂岩	35	30	8	12.6			

P586とSK17については第10・11表に掲載

第30表 凹・磨・叩石類計測表

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (kg)	凹部分類		磨面		分類	備考	遺物番号
								表	裏	表	裏			
1	SB 6	SE	安山岩	110	102	77	1220			2 a	2 a			749
2	SK84		安山岩	80	73	38	312	I a						750
3	2 C	II	砂岩	94	82	59	599	II a						欠損
4	2 J	I	砂岩	89	74	27	274	I a	I a	1 a	1 a			756
5	2 J	III	安山岩	107	87	59	1180			2 a	2 a			760
6	3 E	I	安山岩	94	86	42	495	III a						754
7	3 Q	III	安山岩	94	63	22	193	III a	I a					欠損 755
8	4 E	II	砂岩	115	107	46	811	I a		2 a	2 a			欠損 757
9	4 E	II	安山岩	116	96	40	709	I a	I a	2 a	2 a			欠損 758
10	4 E	II	砂岩	87	78	48	481			2 a	2 a			
11	4 F	II	砂岩	65	62	40	226			1 a				762
12	4 F	II	砂岩	41	34	28	55			1 b				759
13	4 I	Aトレ	砂岩	172	84	50	1024			3 a		叩		763
14	4 I	III	安山岩	98	92	58	820			2 a	2 a			
15	4 I	III	砂岩	81	63	26	196	I a						
16	4 I	Wアゼ	安山岩	110	73	45	459	I a						
17	4 J	III	安山岩	134	99	66	1138	I a						751
18	4 J	Nアゼ	砂岩	92	75	42	392	II a	II a					752
19	4 J	Nアゼ	安山岩	114	76	47	539	I a						
20	4 Q	III	安山岩	89	82	46	514			2 a	2 a			
21	5 C	III	砂岩	101	86	37	468	II b	I a					753
22	5 M	III	砂岩	110	90	67	919	I a			2 a			
23	表採		安山岩	99	84	37	555			1 a	1 a			761

表裏面の決定は、片面だけに凹み、磨面のある場合はその面を表とした。

両面ある場合は任意で決定した。

第31表 石皿計測表

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (kg)	遺物番号
1	SB 2		砂岩	206	260	150	9.6	766
2	SB 5		砂岩	367	442	280	51	764
3	SB 5		砂岩	347	208	137	13.5	765
4	4 E		安山岩	483	417	101	35.5	

第32表 有舌尖頭器計測表

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (kg)	遺物番号
1	4 L	IV	チャート	43	19	6.3	5.1	612

第33表 異形部分磨製石器計測表

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (kg)	遺物番号
1	4 Q	IV	チャート	20	16	3.9	1.4	609

第34表 塊状耳飾計測表

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (kg)	遺物番号
1	4 D	II	粘板岩	(32)	(14)	(2.4)	(2.3)	613

第35表 異形石器計測表

No.	出土区	層位	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	質量 (kg)	遺物番号
1	5 L	IV	粘板岩	21	14	2.5	0.8	610
2	表採		チャート	17	11	5	1.1	611

第4節 まとめと考察

1. 山手宮前遺跡で検出した住居跡について

本遺跡では、8軒（基）の住居跡（炉跡）を検出した（SB1～SB8、第36表）。

近現代の削平や搅乱の為に、かろうじて炉跡を検出したものが多く、住居全体の平面形がほぼ判明した住居跡は3軒である。しかしながら、この3軒の床面及びその下には、石圓炉だけではなく、埋設土器や石皿さらには埋甕といった住居に伴う施設が残されていたので、以下に記述する。

石圓炉については、SB5が円形である以外は、すべて方形もしくは長方形である。なお、（長）方形の炉をもつSB2とSB6のプランが円形であるのに対して、円形の炉をもつSB5の平面形は隅丸方形であり他と異なる様相をみせている。SB2とSB8の炉内には土器が敷かれており、SB6の炉内にも一部土器が敷かれていた可能性が考えられる。さらにSB2には土器の下に石も敷かれていた。SB3は複式炉と考えられるが、このうち東側の炉内には、扁平円礫が敷かれていた。SB7の石圓炉の四隅には立柱状の立石を伴っていたと考えられる。

埋甕については、SB5とSB6で1基づつ検出した。2基とも石圓炉の南側に位置する。このことから住居は南側が入り口であった可能性が高い。SB2も南西側が入り口と考えられ、プランの判明した3軒の住居は皆南側に入り口をもつ。埋甕は2基とも逆位で埋められ、底部は穿孔されていた。SB5の埋甕が入り口の近くに埋設されているのに対して、SB6の埋甕は入り口よりかなり中に入った石圓炉に近い位置に埋められており、拡張の可能性や、住居構築の際の儀礼的な性格¹⁾による可能性も考える必要がある。

第36表 縄文時代の住居跡一覧表

項目 番号	位置 (グリッド)	規模(m) 半圓形 長径×短径	主軸方向 主柱穴 (本)	炉			その他の 埋甕 埋設 土器 石皿				時期
				半圓形 長径×短径	規格(m) 長径×短径	その他の 土器敷き 石敷き	埋甕	埋設 土器	石皿	その他の SB6に切ら れる(?)	
1	3 O				方形 0.7×0.65						中期 後葉
2	2 K～ 3 O	円形 4.5×4.2	N54°E 6	長方形	0.9×0.75	土器敷き 石敷き	○	○			中期 後葉
3	2 J				長方形 0.65×0.55 (?)	複式炉 -一部石敷き					中期 後葉(?)
4	4 N				長方形 0.7×0.5 (?)					SB6に切ら れる(?)	中期 後葉
5	3 Q	隅丸方 形(?) 4.0×4.0 (?)	N 9°W 4(?)	円形	1.0×0.95		○		○		中期 後葉
6	4 N～ 4 O	円形 6.6×6.1	N 9°W 7	方形	1.1×1.05	土器・被設置(?) 上器敷き(?)	○	○○ 2基		多数の被設置 施設の可能性有	中期 後葉
7	2 J				長方形 1.2×0.6 (?)	四隅に立石 (?)					中期 後葉
8	3 E				長方形 0.6×0.55	土器敷き					中期 後葉

床面に埋設されていた小型土器の底部（埋設土器）もSB2とSB6の2軒にみられ、特にSB6では、2基の埋設土器を検出した。位置としては、SB2では入り口方向からみて石門戸の左奥に、SB6では石門戸の右側と右奥に埋設されていた。そして、SB6で検出した埋設土器2（1097）の中の土に残っていた炭化物はすべてクリという分析結果が得られた。（第6章）

石皿については、SB2とSB5の2軒で床面に埋設された状態で検出し、どちらも入り口を入ってすぐ左側の石門戸のやや手前の位置に埋設されていた。²³ 住居内の利用区分が認められる。

以上のように、本遺跡で検出した住居跡や炉跡には多くの共通点がみられる反面、それぞれに異なった点も備えている。これらの1つ1つが中期後半における徳山地区山手宮前遺跡でみられた住居跡の姿である。

なお、SB6の覆土及び石門戸内でみられた多数の礫や土器は住居跡の廃絶後の住居の在り方について考える資料と評価できる。

1) 埋甕については、これまで小児埋葬容器説（後藤守一氏・後藤1933、渡辺誠氏・渡辺1970）や胎盤収納容器説（桐原健氏・桐原1967、木下忠氏・木下1970）が唱えられ有力な説とされてきた。その一方で水野正好氏は、埋甕は住居の新築、建て替えにあたり、出入口部に設けられたとする建築供儀容器説を唱え（水野1978）、八幡一郎氏・神村透氏は、信仰的・宗教的な性格をもつとする信仰関連施設説を唱えている（八幡1940、神村1973）。また、百瀬忠之氏・桜井秀雄氏は、埋甕は出入口部という境界的領域に対して行なわれた儀礼であるとする境界祭祀其説を唱えている（百瀬1987、桜井1995）。本遺跡出土の2基の埋甕はどちらも石門戸の南側に設けられ、逆位に埋設されて、底部が穿孔されているという共通点をもつ一方で、SB5の埋甕が出土部近くに設けられ、埋甕内には土がいっぱいいつまっていたのに対して、SB6の埋甕は出入口部より中に入った石門戸のすぐ南に設けられ、埋甕の内部は空洞であるという相違点をもつ。また、SB5の埋甕の内外の土には多くの炭化物や少量骨片が含まれており、炭化物の樹種は多岐にわたっていたという分析結果（第6章参照）も埋甕について考えていく上での貴重な資料になると考える。

2) 徳山地区的戸内村平遺跡（第4集）の第4号住居跡でも床面のほぼ同じ位置に石皿が埋設されている。

（武藤他 1994）

2. 住居跡の先後関係について

山手宮前遺跡で検出した8軒の住居跡（炉跡）の先後関係について簡単に述べておく。

8軒はいずれも中期後葉と考えられるが、プランが確認でき比較的多くの遺物が出土した住居跡はSB2・SB5・SB6の3軒である。この3軒の中では土器型式の微妙な違い、すなわち、SB5の埋甕に転用されていた土器（1076）のキャリバー形器形のくずれや、口縁部文様の簡略化、さらには（1076）と共に埋甕ピットより出土した（1077）の頸部にみられる縦の沈線と、雨垂れ状の刺突などより、SB5がやや新しい段階に下がると考えられる。

SB2とSB6については、SB6の炉内より出土した土器（1087～1089）に対して、SB2の炉内に敷かれていた土器（1025～1027）の口縁部に刺突が充填されていることよりSB6→SB2の可能性を考えたい。なお、覆土出土土器をみてみると、第III群3類土器（地文に捺糸文の施された里木II式類似土器）において、SB6ではほとんどみられない口縁部への交差刺突がSB2では比較的多数あるこ

とや、SB2の覆土上層より出土した土器(1022)がより新しいと考えられることもSB6→SB2と矛盾しない。

一方、SB6がSB4を切って掘り込まれていると考えられることからSB4→SB6もいえる。以上より、SB4→SB6→SB2→SB5という順序を考えることができる。

しかし、大きな型式差はなく、比較的短期間に継続して営まれたものと考えたい。

なお、SB6とSB2のプランが円形を呈し、石圓炉が長方形であるのに対してSB5のプランは隅丸方形と考えられ、円形の石圓炉をもつという違いがみられ、円形プラン→隅丸方形へ、そして、(長)方形の石圓炉→円形の石圓炉へという流れも推定される。

3. 住居跡および土坑(壙)群の配置について

本遺跡で検出した中期後葉の8軒の住居跡(か跡)および配石土坑(壙)群の配置には、概論でも述べたように環状構造がみられる。遺物の出土状況をみるとより一層はっきりし、中央の広場と考えられる場所を避けるようにして遺構・遺物が分布している。¹⁾(第12・14図)

すなわち、上流(北)側にはSB5・SB1・SB6・SB4、下流(南)側にはSB2・SB7・SB3と大きく2つの住居群がみられ、その間の山(西)側には墓壙と考えられる配石土坑(壙)群が、そして川(東)側には遺構・遺物の空白地帯がみられる。

以上のことより山手宮前遺跡では、中央の広場状の空間を避けながら、北側と南東側には住居を、また西側には配石土坑群を営んでいたと考えられる。その時期としては中期後半と考えられ、SB6とSB4およびSB7とSB3はその距離が近すぎて同時に存在しないことより、近接した場所で建て替えたながら住居を構えていたことが考えられる。

1) 徳山地区の戸入村平遺跡(第4集)でも、住居跡およびピット・土坑の配置に馬蹄形に分布する傾向がみられると報告されている。(武藤他 1994)

4. 山手宮前遺跡で出土した中期後葉の土器について

(1) 咬烟式土器について

本遺跡では、極端なキャリバー形口縁をもつ器形を呈し、口縁部には渦巻文や楕円形区画文を配して、胴部には棒状工具による連弧文を施す、いわゆる咬烟式土器が多数出土した。中でもSB6の炉内や覆土中より出土した(1087・1089・1099・1098)などは、この地域の咬烟式土器を考える上でも、貴重な資料である。特に、SB6の覆土下層(床に近いレベル)より出土した(1099)は、頭部でくびれ口縁部が外反し、内湾するキャリバー形の口縁部をもつものの、頭部径はかなり太く、外傾し、そして急角度で屈曲して内傾するという特殊なキャリバー形器形をもっている。SB5の埋蔵に転用されていた(1076)も胴部に連弧文がみられるものの、形はかなり緩やかなキャリバー形となり、口縁部も渦巻文と楕円形区画文が崩れたような隆帯による横位の文様が貼付されており、咬烟式の最終段階の姿と考えられる。また、SB2の覆土上層から出土した(1022)も、渦巻文や、渦巻文の下の垂下隆

帶、さらには、口縁部や胴部の隆帯上に施された刺突等より、第III群4類の一種と考えたいが、4つの渦巻き状の突起をもち、特異な器形をしており、中期後葉から末葉にかけて近畿地方でみられる北白川C式土器の深鉢C類¹⁾との関連が注目されるところである。

1) 泉拓良 1985 京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ『北白川追分町繩文遺跡の調査』

(2) 第III群3類土器と第III群4類土器について

本遺跡出土土器の中でその多数を占めたのは第III群3類土器（地文に燃糸文・条線文を施す里木II式に類似する土器）と、同4類土器（いわゆる喫煙式土器）である。なお、破片数では、3類土器1,470点に対して4類土器437点と、その比は3：1であった。しかし、第VI群2類とした無文のものの中にも、第III群4類土器の胴部片がかなり含まれていると考えられ、第III群4類土器の割合はもう少しだ大きいなると考えられる。

第III群3類土器と4類土器の出土状況については、SB6の炉内から4類土器（1087～1089）が出土し、埋設土器には3類土器（1096）が使われていた。また、SB6の埋甕（1096）が3類土器で、埋甕の埋設されていたP13からは4類土器（1094・1095）の破片が出土している。

さらには、ピット・土坑からもP136（1158・1159と1160・1161）、SK18（1165と1166）、SK19（1170と1171）などから3類土器と4類土器が併出している。

SB2・SB6の覆土出土土器（第42・43図、第49・50図）も、3類土器と4類土器がほとんどであった。以上のような出土状況より第III群3類土器と第4類土器とは、同時に存在したと考えられる。¹⁾

SB6の炉内から出土した（1087）のように、第3群4類土器でありながら、橢円形区画内や、地文に燃糸文と考えられる文様も認められ、3類と4類の両方の要素をもつものがある。こうした要素の混在からも、3類土器と4類土器の併行関係が示唆される。

1) 里木II式と喫煙式については、両者が共存するとする泉拓良氏の説（泉 1982）と、喫煙式（中富IV・V式）が、里木II式（中富II・III式）に後続するとする増子康真氏の説（1978）とがある。

5. 石器群の考察

本遺跡より出土した縄文時代の石器群についての若干の考察を加えてみたい。

(1) 石器の組成について

まず、本遺跡出土の縄文時代の石器の組成は（第68図）の通りである。これを見ると切目石錐の多さ(46.5%、181点)が目につく。切目石錐は漁網錐と考えられ、本遺跡では眼下を流れる揖斐川において、さかんに漁撈活動が行なわれたことが想定される。打欠石錐も13.4% (52点)と比較的多く出土している。打欠石錐については、もじり編みの錐ではないかとする説¹⁾と、徳山地域では漁網錐として使われたとする説²⁾がある。本遺跡は河岸段丘上に立地する中期後半の遺跡であり、また打ち欠いたうえに切り口をいたるもの(12点 744~748)、切目石錐同様の「糸巻きの帯状痕跡」の認められる打欠石錐(7点 676~682)も存在しており、漁網錐として使用された可能性がある。打欠石錐では52点中22点(42.3%)に切目石錐では181点中66点(36.5%)に欠損品がみられる。このことが用途と関係があると考えるならば、切目石錐と打欠石錐を合わせると約6割(233点)となり、この数字は特筆すべきものである。その他組成グラフを見ると、石錐17.7%(69点)、打製石斧7.7%(30点)、四石・磨石・叩石5.9%(23点)が比較的多く出土している。

以上より、漁撈・狩猟や根茎類の採集を中心とした本遺跡の生業の様子が浮かび上がってくる。

(2) 石錐について

次に、本遺跡より多数出土した切目石錐・打欠石錐について、もう少し考えてみたい。

①「糸巻きの帯状痕跡」について

本遺跡より出土した切目石錐・打欠石錐の何点かには、表面は摩滅するが、長軸中央部に摩滅を受けない部分が帯状に残る「糸巻きの帯状痕跡」の認められる。すなわち、切目石錐181点中60点(33%)、打欠石錐52点中7点(13%)である。

中でも(719)は「糸巻きの帯状痕跡」が明瞭に残り、肉眼でも観察できる（図版36）。また、SK17より出土した(534)は、被熱により黒く変色しているが中央の切り口を結ぶ部分が白く残り、この部分に糸状のものがかけられていたと考えられる（第71図、図版36）³⁾。

のことから切目石錐や打欠石錐には、上下の切り口や、打ち欠きを利用して糸状のものがかけられて（結ばれて）いたと考えられる。

SK17からは(534)を含めて9点の切目石錐と、1点の打欠石錐が出土しているが、P586からは13点の切目石錐がまとまって出土している。その状況から、石錐が糸か網状のものにつながっていた状態を考えることも可能である（59頁）⁴⁾。

吉田英敏氏は切目石錐が漁網錐として使用され、漁場での作業中ローリングによって表皮が摩滅・変化したことにより糸を巻いた部分にのみ当初の表皮面が残ったものが「糸巻きの帯状痕跡」であろうとしている（吉田 1994）。この説をうけて、徳山地区「戸入村平遺跡」でも切目石錐の27% (95点)、打欠石錐の15% (22点) に「糸巻きの帯状痕跡」が観察できると報告されている（千葉 1994）。

本遺跡で切目石錐・打欠石錐に認められた「糸巻きの帯状痕跡」についても、吉田氏が考えたように、漁網錐として使用され、川底でローリングを受けたことによって中央部の糸状のものがかかるて

いた部分以外の面が摩滅し、中央部に元の面が残ったことによると考えたい。

なお、後で述べるように藤橋村徳山地区に残る民具の中の「ハバキ編み」のおもりにも同様の「糸巻きの帯状痕跡」が認められ（第112図、図版56）、主に手すれによってついたものと考えられることから、「もじりあみ」のような編み物の鍔具の可能性も捨てきれない。

②切目石錐と打欠石錐の質量分布について

切目石錐と打欠石錐の質量分布をグラフにしたもの（第87図）である。

これを見ると、切目石錐では11~30gのものが多いのに対して打欠石錐では21~50gのものが多く、両者でそのピークがずれている。欠損品を除いた平均質量も切目石錐22.5g（なお、打ち欠いたうえに切り目を入れたものも10点出土しており、平均質量は31.5gであった）に対して打欠石錐40.4gと、打欠石錐の方が約2倍の質量を持っている。また切目石錐の長径平均42.9mm・短径平均27.8mm・厚さ平均12.2mmに対し、打欠石錐は長径平均61.2mm・短径平均36.2mm・厚さ平均12.7mmと長径平均・短径平均においてかなりの開きが見られる。

これらの点から考えると、切目石錐と打欠石錐には、素材を選択する際にその大きさ、質量を意図的に選択した様子がうかがえ、その用途も異なっていた可能性がある。

（3）石器の石材について

最後に本遺跡より出土した石器の石材についてみてみたい。まず剥片石器については石錐・石錐・石匙・スクレイパーでは、チャートの利用が圧倒的に多いのに対し礫石器である切目石錐・打欠石錐では、砂岩や泥岩が多く利用されている。

打製石斧では粘板岩の70%が目につき、砂岩の23.4%がこれに続く。磨製石斧では結晶片岩や安山岩が、四・磨・叩石では安山岩・砂岩、石皿では砂岩が利用されている。このように器種ごとに石材を選択している。そして、その石材の多くは、徳山地域で入手できるもので、石核・RF・UF・剥片・分割礫類の石材についてみてみると、圧倒的にチャートが多い（第37表）。なお、石核・剥片・分割礫類の点数と質量については第38表のとおりである。本遺跡からは、886点、8,123gの石核・剥片・分割礫が出土し、その大半がチャートである。P585より剥片が集積された状態で出土したが、その石材もチャートであった。本遺跡の剥片石器の石材の中心が徳山地域で採取可能なチャートであり、手近な石材であったと同時にいい石材は大切にしていたであろうことが考えられる。しかしながら、黒曜石もSB6の種土より剥片等9点が出土しており、また下呂石製の石錐も1点みられる。黒曜石の剥片は分析の結果、霧ヶ峰産及び和田岬産であった（第6章）。

1) 渡辺誠 1973『縄文時代の漁業』

2) 渡辺氏も岐阜県下で切目石錐程度に軽い打欠石錐が、中期後半以降に河岸段丘で出現することに注目しており、漁網鍔である可能性を否定していない。前註(1)

3) 『鳴鹿手島遺跡』（福井県永平寺町）でも装着状態のまま焼けたと考えられる打欠石錐が出土しているが（第119図 11）装着痕は、剥離により作出した紐掛に紐を掛けた痕跡が認められ、さらに石錐中央部において、これとはば直行して紐を掛けた痕跡が認められる。また『塙原遺跡』（岐阜県関市）では土坑より打

欠石錐26点がまとまって出土し、ほとんどに焼化の痕跡が観察されるのみでなく、表面に付着した黒色のタールが明瞭に残るものが多く、なかに長軸中央に糸巻き痕の観察できる12例を含んでいる。

4) 切目石錐がまとまって出土した例としては、帝釈峠遺跡(広島県東広島市)において岩壁の凹んでいる部分から14点出土し、出土の状態からすると網につけられたまま置かれていたのではないかと推測されている。(帝釈峠遺跡群発掘調査室年報X 1995)

第37表 石器の器種別石材一覧表

石材 器種	チャート	砂岩	泥岩	粘板岩	安山岩	黒曜石	結晶変岩	凝灰岩	下呂石	不明	計
石錐	60(87)			4(5.8)		3(4.4)			1(1.4)	1(1.4)	69
石錐	11(100)										11
石匙	5(88.3)			1(16.7)							6
スクレイバー	16(94.1)					1(5.9)					17
ビエス・エスキュー	2(66.7)					1(33.3)					3
打製石斧		7(23.4)		21(70)	1(3.3)		1(3.3)				30
磨製石斧					2(40)		3(60)				5
打欠石錐	29(55.8)	15(28.8)	7(13.5)	1(1.9)							52
帯状痕跡有		5(72)	1(14)	1(14)							
切目石錐	139(76.8)	28(15.5)		13(7.2)				1(0.5)			181
帯状痕跡有		47(78)	7(13)		5(9)						
凹石・磨石・叩石		11(47.8)			12(52.5)						23
石皿		3(75)			1(25)						4
異形部分形磨製石器	1(100)										1
異形石器	1(50)			1(50)							2
有舌尖頭器	1(100)										1
块状耳飾				1(100)							1
計	97(23.9)	189(46.6)	43(10.6)	35(8.6)	30(7.5)	5(1.2)	4(1)	1(0.2)	1(0.2)	1(0.2)	406

()内の数字は%

第38表 石核、剥片類の石材と質量

石材 種類	石核	RF	UF	剥 片 片	分割 砾	計	割合(%)
チャート	28	58	58	667	16	827	93.5
粘板岩	1			35		36	4.0
石英				5		5	0.6
凝灰岩				5		5	0.6
黒曜石				4		4	0.4
流紋岩	1			2		3	0.3
砂岩				2		2	0.2
石英斑岩				2		2	0.2
泥岩				1		1	0.1
安山岩				1		1	0.1
計	30	58	58	724	16	886	
合計質量(kg)	877	468	642	5378	758	8123	
割合(%)	10.8	5.8	7.9	66.2	9.3		

第5章 その他の時代の遺構と遺物

第1節 概 略

本遺跡からは、縄文時代以外にも、古代・中近世・そして近現代の遺構や遺物を検出した。主な遺構としては、掘立柱建物跡15棟を検出し、このうち、第1号掘立柱建物跡からは木柱根7本を検出した。遺物は670余点出土し、中でも多くの中近世陶磁器類が出土している。このなかには、越前産の擂鉢も何点かみられた。また、81枚の渡来銭がさし銭の状態で出土し、一部ではあるが紐も残存していた。

第2節 遺 構

1. 掘立柱建物跡

本遺跡では、15棟の掘立柱建物跡を検出した。以下に各々について述べていく。

(1) 第1号掘立柱建物跡 (SH 1) について

第1号掘立柱建物跡は、調査区西 (III) 側の4 K ~ 5 Lグリッドにかけて位置する。桁行3間×梁行2間に南北に長い掘立柱建物跡である。建物の規模は、6.4m × 5.0mで、柱間距離は南北方向が2.3m、2.9m、1.2m、東西方向が2.3m、2.7mである。建物全体の形は、はっきりとしているものの、柱の配置および柱間距離はばらばらといった感がある。柱穴の大きさは、径0.5~0.75m、深さ0.4~0.65mと同じぐらいの規模である。9基の柱穴のうち、7基には木柱根 (201頁) が残っていた。遺構のすぐ南には、背後 (西) の山からの谷水が流れしており、こうした水の影響で木柱が残ったものと考えられる。残存する木柱の中には、P191から出土した長さ59cm、太さ (径) 29cmの木柱も見られ、SH 1の規模をうかがうことができる。木柱の材は、分析の結果クリ材と判明した。また、放射性炭素年代測定により、 220 ± 90 yr BP (AD 1,730年) という結果が得られた。(第6章参照) なお、柱の下部には、鋸によると考えられる加工痕 (切削面) も観察できた。¹⁾

なお、12基の柱穴以外にも、東側と南側そして北側に柱穴が並び、特に東側の柱穴は、建物から約2m離れたところに北より2.0m、3.0m、3.0mの間隔で並ぶ。これらの柱穴は、平面形こそ主柱穴と変わらぬものの、深さが10~30cmと浅く、P155、P196、そして南側のP193、P596には根石と考えられる平たい石が中央に入っていた。第1号掘立柱建物跡は茅葺の掘立小屋のようなもので、P155~P157、P193、P196、P596の柱は、柱下に礎石が埋めてあることから見て周囲に廻した土庇の柱の可能性、藁掛けの外廻りや雪廻いの可能性もある。また、宮前の地名より、ここに神社があったとすれば小さな社殿が置かれ、それに架けた覆屋の茅葺小屋の可能性も考えられる。²⁾

この建物の時期についてであるが、主柱穴であるP146より古瀬戸 (14~15C)、P194より青磁 (16C)、瀬戸美濃 (18C後半以降) が出土しており、18世紀後半以降の可能性を考えられるが、これは放射性炭素年代測定の結果とも符合する。

- 1) 放射性炭素年代測定に出す前に山田昌久氏に見て頂いたところ、加工痕からみて鎌倉時代以降のものだろうとの助言をいただいた。
- 2) 愛知工業大学助教授 岡野清先生のご教授による。しかし根拠はなく、断定はできないとのことである。

(2) 第2号掘立柱建物跡（SH2）について

第2号掘立柱建物跡は、3M～3Nグリッドにかけて位置する。桁行4間×梁行2間の南北掘立柱建物である。（第102図の破線部分）この建物を構成する柱穴群は、径0.4～0.8m、深さ0.1～0.4mを測る。建物の規模は、桁行9.5m×梁行5.85mであり、柱間は、1.1m～3.85mと不規則である。根石は、P61、P76で検出し支え石と考えられる石もP69、P83で検出した。桁行の方向はN-4°-Wとほぼ南北方向を向いている。なお、西側には、幅約2mの間隔で平行して並ぶ対になれた柱穴が見られ（第102図の実線部分）、ここに別の施設があった可能性も考えられる。出土遺物はなかった。

(3) 第3号掘立柱建物跡（SH3）について

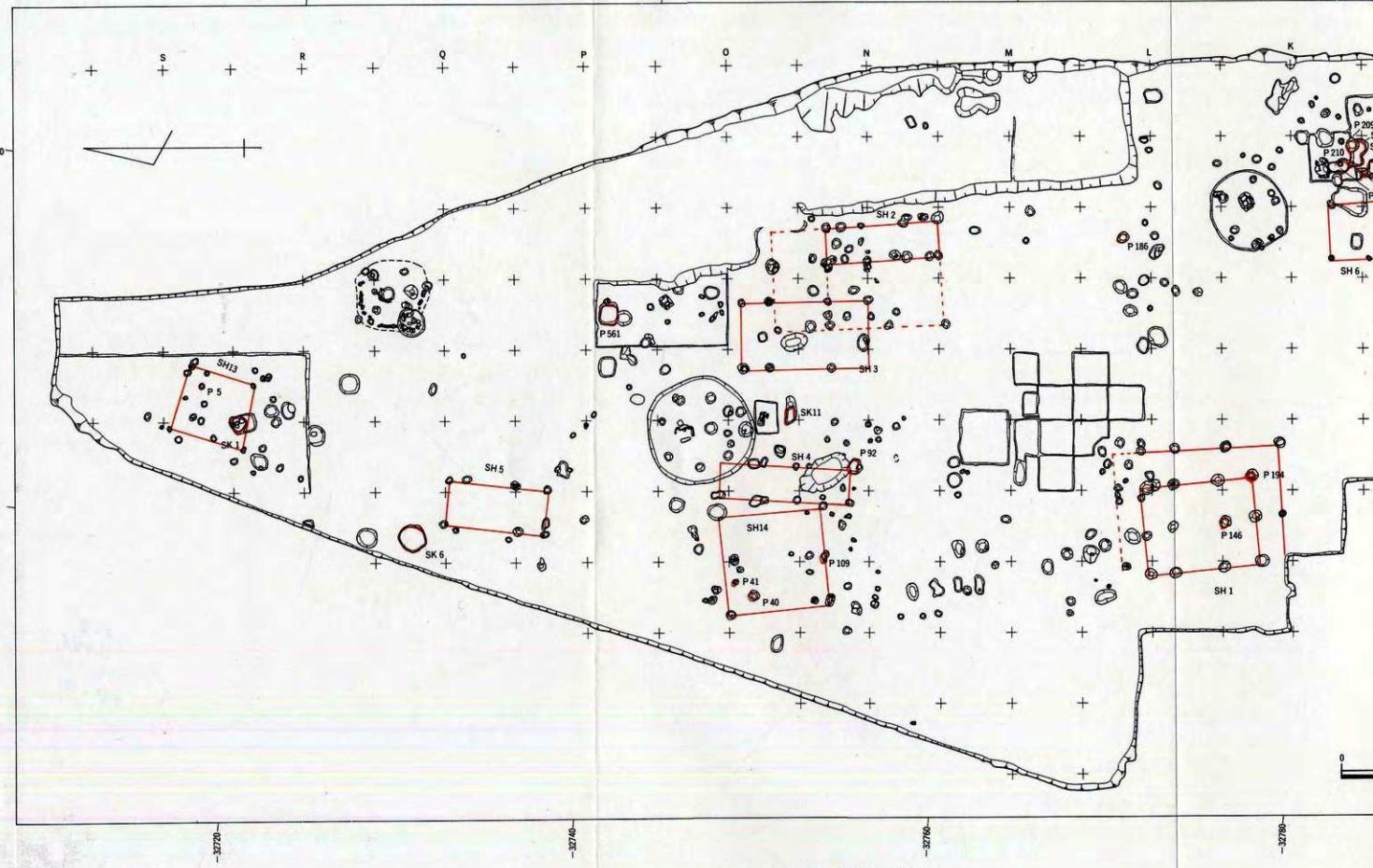
第3号掘立柱建物跡は、3N～4Nグリッドにかけて位置する。桁行3間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.4～0.7m、深さ0.3～0.4mを測る。建物の規模は桁行7.35m×梁行3.75mであり、北側の東西方向の柱間距離は、3.75m、東側の南北方向の柱間距離は、南から2.4m、3.35m、1.6mを測る。根石は、P57で確認され、支え石と考えられる石もP58、P62で検出した。桁行の方向は、N-2°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。

(4) 第4号掘立柱建物跡（SH4）について

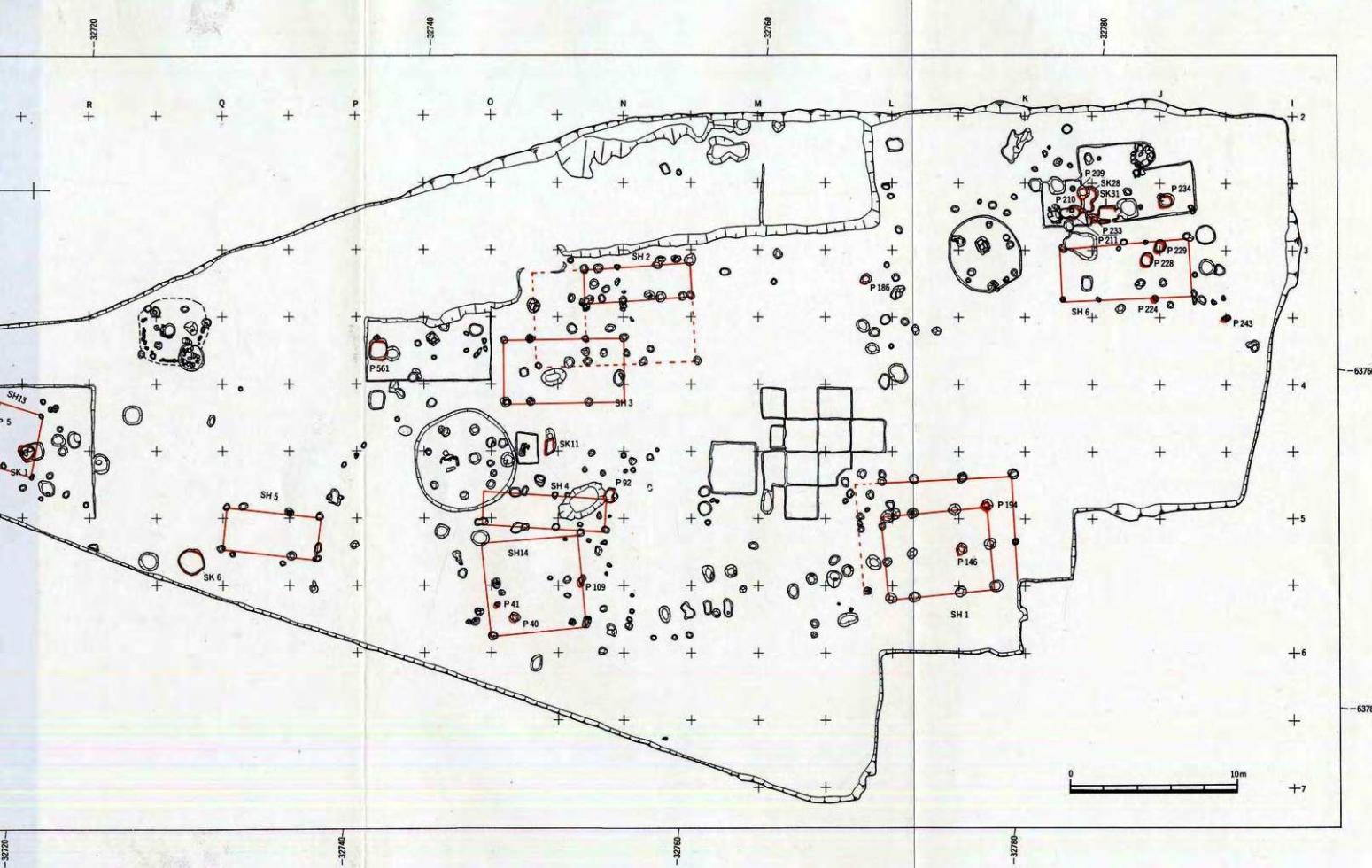
第4号掘立柱建物跡は、4N～5Oグリッドにかけて位置する。桁行3間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.4～0.6m、深さ0.25～0.5mを測る。建物の規模は桁行7.35m×梁行1.95mであり、南側の東西方向の柱間距離は、1.95m、西側の南北方向の柱間距離は、南から3.0m、1.85m、2.5mを測る。柱穴内に根石・支え石は存在しなかった。桁行の方向は、N-5°-Eであり、ほぼ南北方向を向いている。出土遺物は、P92より、古瀬戸（壺）の小片1点が出土している。しかし、P92は他の柱穴よりも大きく、明確にSH4の柱穴であるとはいがたい。したがってP92の遺物より、SH4の時期を決定することは、得策ではないと考える。

(5) 第5号掘立柱建物跡（SH5）について

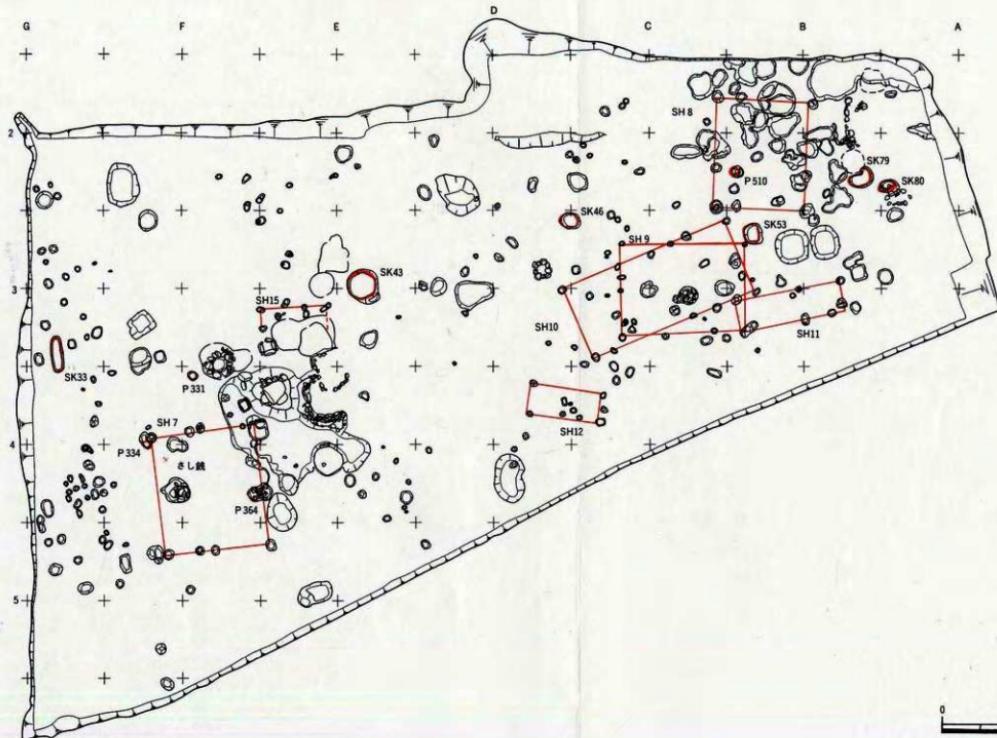
第5号掘立柱建物跡は、4P～5Qグリッドにかけて位置する。桁行3間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.4～0.6m、深さ0.2～0.4mを測る。建物の規模は桁行5.65m×梁行2.55mであり、南側の東西方向の柱間距離は、2.55m、東側の南北方向の柱間距離は、南から1.85m、2.8m、1.0mを測る。根石は、支え石と考えられる石はP18、P20、P23、P24、P27、P597で検出した。桁行の方向は、N-7°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。



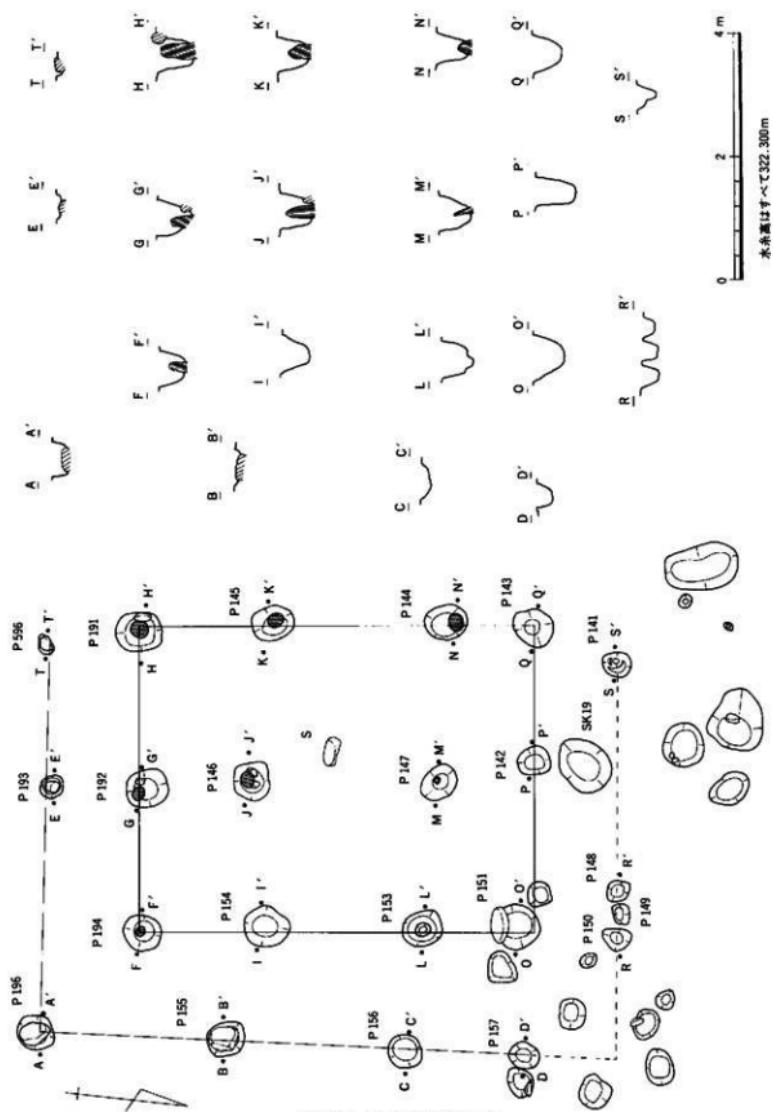
第99図 その他の時代の遺構配置図（B区）



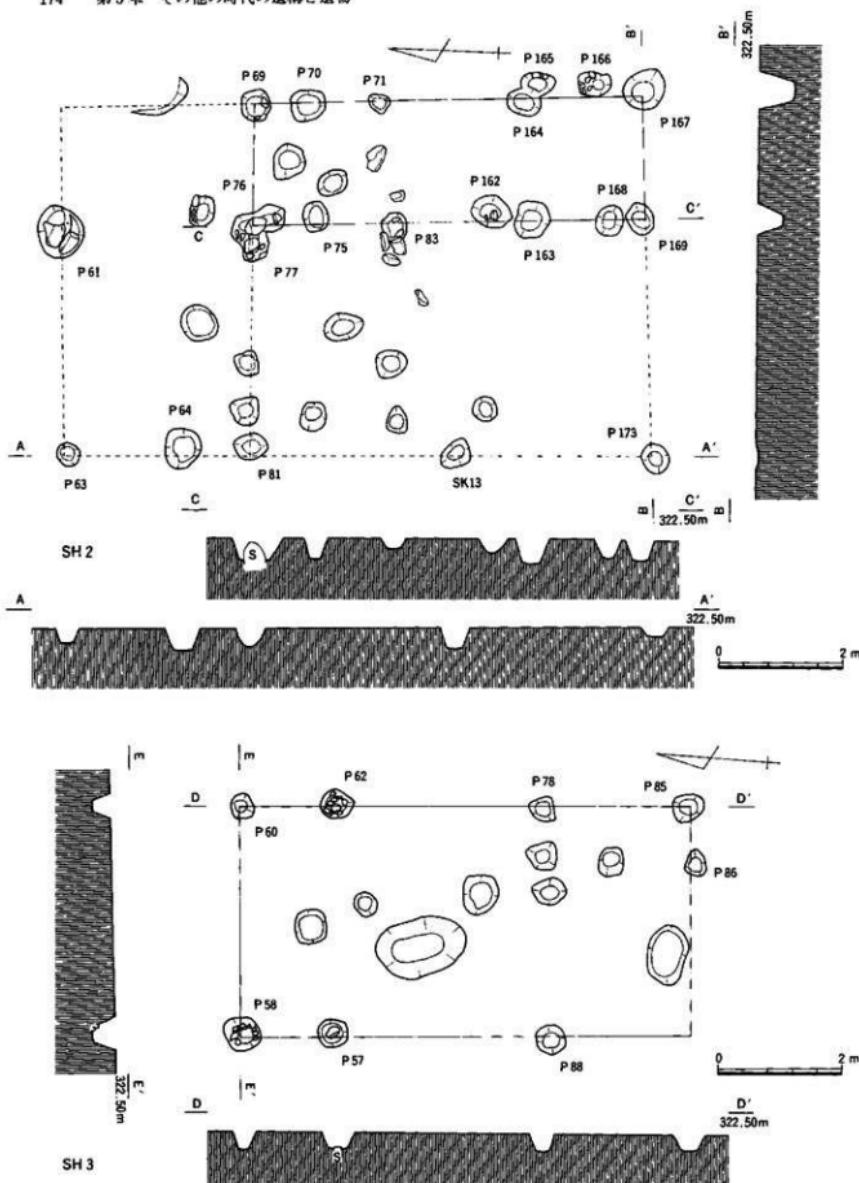
第99図 その他の時代の遺構配図 (B区)



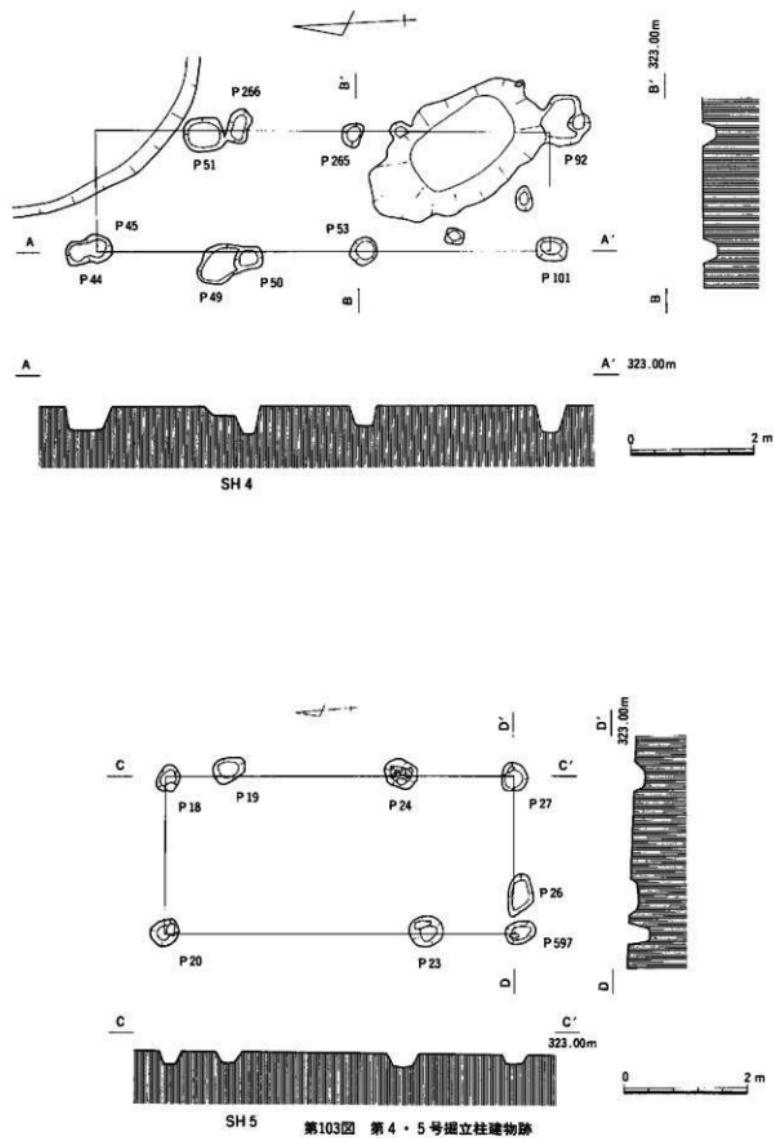
第100図 その他の時代の遺構配置図（A区）



第101図 第1号掘立柱建物跡



第102図 第2・3号掘立柱建物跡



第103図 第4・5号掘立柱建物跡

(6) 第6号掘立柱建物跡 (SH6) について

第6号掘立柱建物跡は、2I～3Jグリッドにかけて位置する。桁行3間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.3～0.7m、深さ0.15～0.25mを測る。建物の規模は桁行7.75m×梁行3.2～3.5mであり、北側の東西方向の柱間距離は、3.2m、西側の南北方向の柱間距離は、南から2.35m、3.4m、2.0mを測る。柱穴内に、根石・支え石と考えられる石は存在しなかった。桁行の方向は、N-5°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。出土遺物は、P224より、14-15Cの青磁端反碗（皿）が1点出土した。

(7) 第7号掘立柱建物跡 (SH7) について

第7号掘立柱建物跡は、3E～4Fグリッドにかけて位置する。桁行3間×梁行1間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.3～0.65m、深さ0.3～0.5mを測る。建物の規模は桁行5.3m×梁行6.1mであり、北側の東西方向の柱間距離は、6.1m、西側の南北方向の柱間距離は、南から2.85m、0.8m、1.65mを測る。根石は、P335、P349、P356で検出した。桁行の方向はN-5°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。

(8) 第8号掘立柱建物跡 (SH8) について

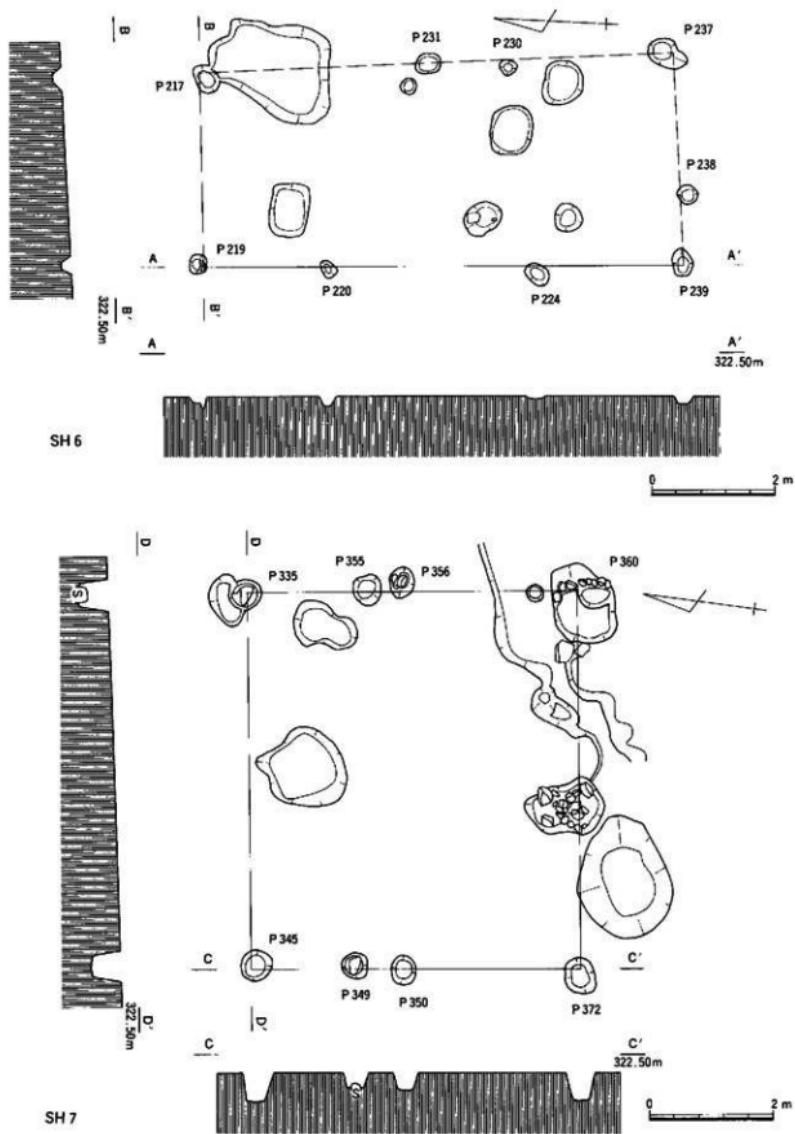
第8号掘立柱建物跡は、1A～2Bグリッドにかけて位置する。桁行2間×梁行2間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.5～0.85m、深さ0.25～0.45mを測る。建物の規模は桁行5.6m×梁行4.8mであり、北側の東西方向の柱間距離は、東から3.6m、2.0m、西側の南北方向の柱間距離は、南から3.7m、1.1mを測る。支え石と考えられる石はP521、P525で検出した。桁行の方向は、N-87°-Wであり、ほぼ東西方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。

(9) 第9号掘立柱建物跡 (SH9) について

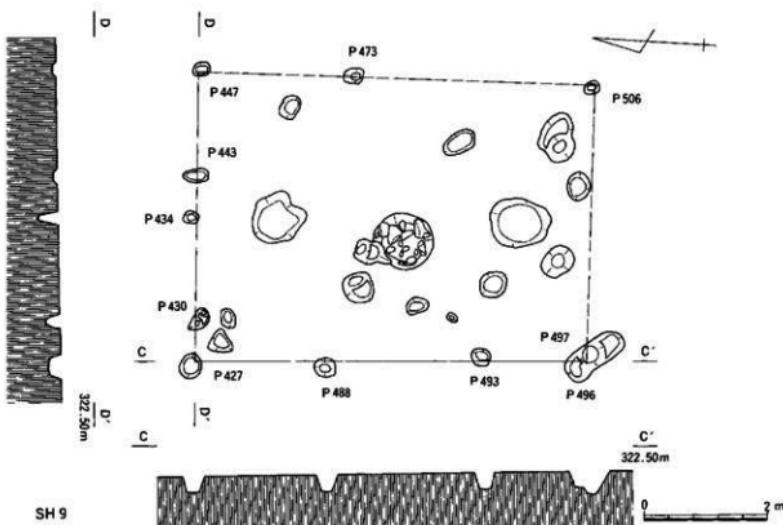
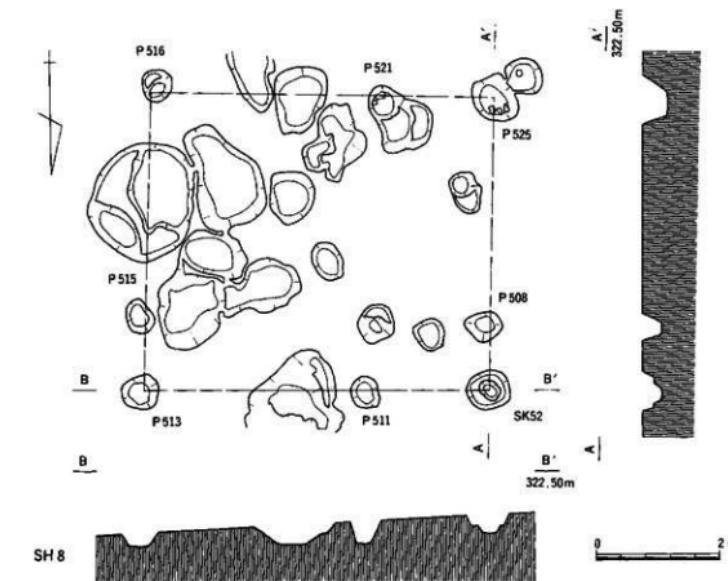
第9号掘立柱建物跡は、2B～3Cグリッドにかけて位置する。桁行3間×梁行2間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.25～0.5m、深さ0.1～0.35mを測る。建物の規模は桁行6.40m×梁行4.70mであり、北側の東西方向の柱間距離は、東から2.4m、2.3m、西側の南北方向の柱間距離は、南から1.7m、2.6m、2.1mを測る。柱穴内に根石・支え石と考えられる石は検出されなかった。桁行の方向は、N-2°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。

(10) 第10号掘立柱建物跡 (SH10) について

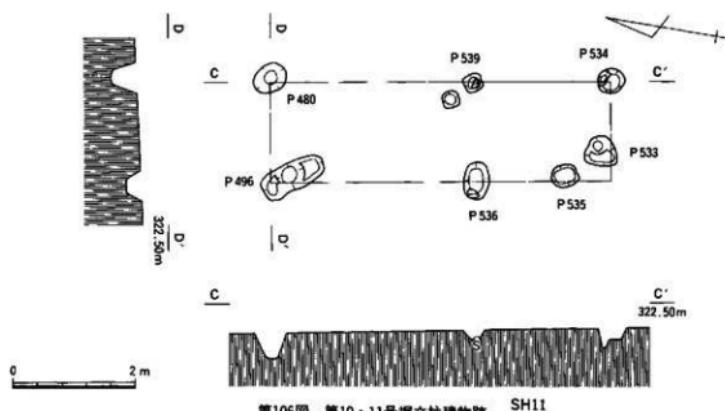
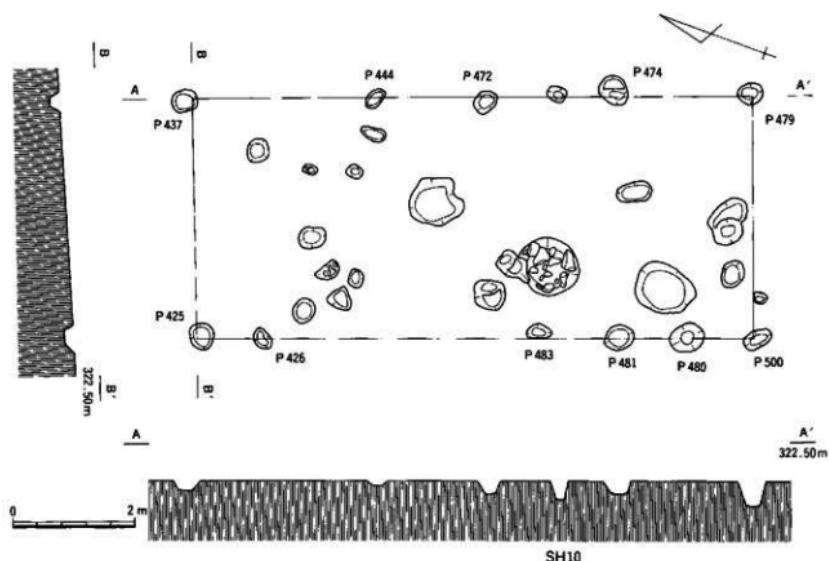
第10号掘立柱建物跡は、2B～3Cグリッドにかけて位置する。桁行4間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.3～0.6m、深さ0.05～0.45mを測る。建物の規模は桁行9.1m×梁行3.9mであり、北側の東西方向の柱間距離は、3.95m、東側の南北方向の柱間距離は、南から2.2m、2.1m、1.85m、2.95mを測る。柱穴内に根石・支え石と考えられる石は検出されなかった。桁行の方向は、N-23°-Wである。なお、出土遺物はなかった。



第104図 第6・7号据立柱建物跡



第105図 第8・9号掘立柱建物跡



第106図 第10・11号据立柱建物跡

(11) 第11号掘立柱建物跡 (SH11) について

第11号掘立柱建物跡は、2A～3Bグリッドにかけて位置する。桁行2間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.3～0.6m、深さ0.2～0.5mを測る。建物の規模は桁行5.5m×梁行1.6mであり、北側の東西方向の柱間距離は、1.6m、東側の南北方向の柱間距離は南から2.2m、3.3mを測る。根石はP539、支え石はP536で検出した。桁行の方向は、N-12°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。

(12) 第12号掘立柱建物跡 (SH12) について

第12号掘立柱建物跡は、3Cグリッドに位置する。桁行1間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.35～0.5m、深さ0.2～0.3mを測る。建物の規模は桁行3.6m×梁行1.5mである。柱穴内に、根石・支え石は検出されなかった。桁行の方向は、N-10°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。

(13) 第13号掘立柱建物跡 (SH13) について

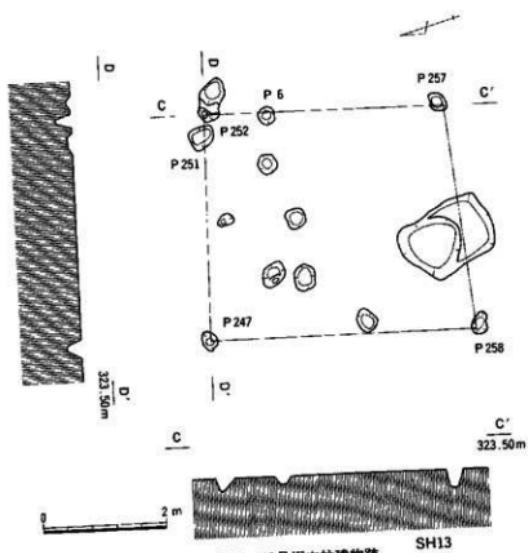
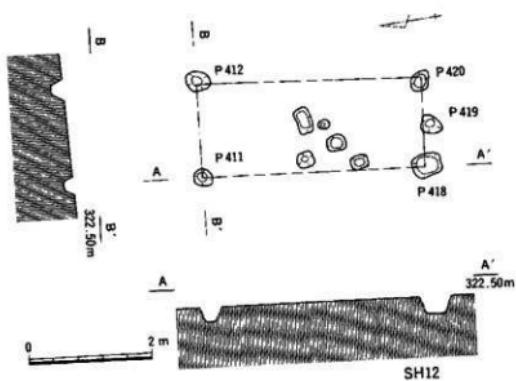
第13号掘立柱建物跡は、4Rグリッドに位置する。桁行2間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.3mを測る。建物の規模は桁行3.9～4.25m×梁行3.7mであり、東側の南北方向の柱間距離は南から2.9m、1.0mを測る。柱穴内に、根石や支え石は検出されなかった。桁行の方向は、N-18°-Wであり、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。

(14) 第14号掘立柱建物跡 (SH14) について

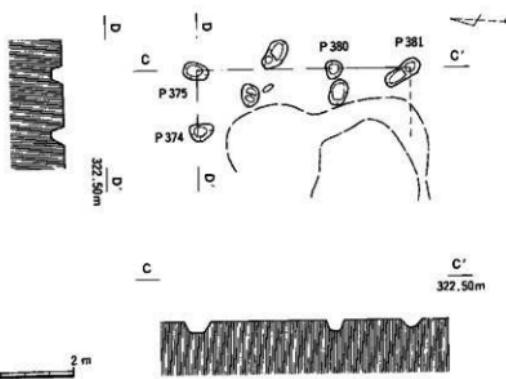
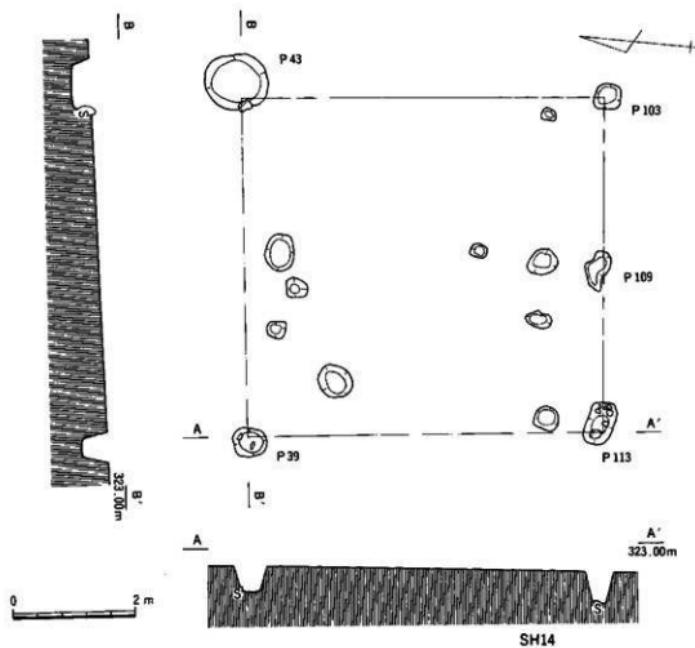
第14号掘立柱建物跡は、5N～5Oグリッドにかけて位置する。桁行1間×梁行1間の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.4～0.7m、深さ0.2～0.6mを測る。建物の規模は桁行5.85m×梁行5.5mである。支え石と考えられる石は、P39、P43、P113で検出された。桁行の方向は、ほぼ南北方向を向いている。出土遺物は、P109より18C後半の呉須絵(瀬戸美濃)の細片が1点出土した。

(15) 第15号掘立柱建物跡 (SH15) について

第15号掘立柱建物跡は、3Eグリッドに位置する。桁行2間×梁行1間(以上)の南北掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は、径0.3～0.45m、深さ0.2～0.3mを測る。建物の規模は桁行3.5m×梁行1m(以上)であり、東側の南北方向の柱間距離は南から1.25m、2.25mを測る。柱穴内に、根石・支え石は検出されなかった。桁行の方向は、N-3°-Wで、ほぼ南北方向を向いている。なお、出土遺物はなかった。



第107図 第12・13号掘立柱建物跡



第108図 第14・15号据立柱建物跡

2. 山手宮前遺跡で検出した掘立柱建物跡について

山手宮前遺跡では、全部で15棟の掘立柱建物跡を検出した（第39表）。

SH 1が、3間×2間の純柱の構造で、周囲に根石を伴う付属施設を持つ特別な建物の可能性がある以外は、小規模な掘立柱建物と考えられる。これらの建物の時期については、出土した遺物より SH 6は、14～15世紀頃、SH 1・14は18世紀後半頃の建物と考えられるが、他の建物については、出土遺物もなくはっきりしない。しかし、そのほとんどが、川に沿った段丘と同じ南北方向を向いており、SH 1・6・14より中世から近世にかけての集落群の可能性も考えられる。篠山地区の民家は、川に沿って平行に群立するのが通例であり、近世なら、揖斐川右岸の段丘上に棟をそろえて群立する妻入農家が考えられる。¹⁾

1) 愛知工業大学助教授 岡野清先生のご教授による。

第39表 掘立柱建物跡一覧表

番 号	位 置 (検出グリッド)	規 模(cm)			柱 穴(cm)		出 土 遺 物	時 期
		間 数	長 径	短 径	直 径	深 さ		
SH 1	4K～5L	3 × 2	640	500	50～75	40～65	古瀬戸・青磁・瀬戸美濃	-18C後半以降か -1,730年頃
2	3M～3N	4 × 2	950	585	40～80	10～40		
3	3N～4N	3 × 1	735	375	40～70	30～40		
4	4N～5O	3 × 1	735	195	40～60	25～50	古瀬戸	
5	4P～5Q	3 × 1	565	255	40～60	20～40		
6	2I～3J	3 × 1	775	320～350	30～70	15～25	青磁	-14～-15Cか
7	3E～4F	3 × 1	610	530	30～65	30～50		
8	1A～2B	2 × 2	560	480	50～85	25～45		
9	2B～3C	3 × 2	640	470	25～50	10～35		
10	2B～3C	4 × 1	910	390	30～60	5～45		
11	2A～3B	2 × 1	550	160	30～60	20～50		
12	3C	1 × 1	360	150	35～50	20～30		
13	4R	2 × 1	390～425	370	30～40	20～30		
14	5N～5O	1 × 1	585	550	40～70	20～60	瀬戸美濃	-18C後半以降
15	3E	2 × (1)	350	100以上	30～45	20～30		

*SH 1については、主となる掘立柱建物の規模を計測した。また、SH 1の時期1,730年頃は放射性炭素年代測定の結果による。

3. ピット・土坑

古代以降の土器・陶磁器類の出土したピット・土坑は全部で33基である（第99・100図及び第40表）。33基の分布は、下流側のA区に10基、上流側のB区に23基で、中でもB区川側の2J～3Jグリッド辺りに集中している。前述のように、掘立柱建物跡の柱穴からの遺物の出土も5基あった。

出土した遺物をみてみると、10～11世紀の灰釉陶器の出土したピット・土坑が2基、古瀬戸・常滑青磁など中世後期の遺物の出土したピット・土坑が11基、17～19世紀の遺物の出土したピット・土坑が18基、その他不明2基で、中世後期から近世にかけての遺物の出土したピット・土坑の多さが目につく。

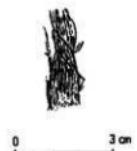
4. さし鉄

F4グリッドの第II層暗褐色土より、渡来銭81枚が、さし（縫）の状態で出土した（図版11）。プランは検出できなかつたが当時の生活面を掘り込んで埋設したものと考えられる。銭は合計81枚であり、一部紐が残存していた（第109図）。

紐は分析の結果、藁の可能性が高いということである（第6章）。その銭種はすべて渡来銭で開元通寶（621年 唐）から永樂通寶（1405年 明）までの24種81枚で、そのうちわけは、開元通寶3、宋通元寶1、淳化元寶1、至道元寶2、咸平元寶3、景德元寶2、祥符元寶2、祥符通寶1、天禧通寶2、天聖元寶5、明道元寶1、景祐元寶1、皇宋通寶6、至和元寶5、嘉祐通寶1、治平元寶3、熙寧元寶12、元豐通寶9、元祐通寶5、紹聖元寶5、聖宋元寶6、政和通寶1、皇宋元寶1、永樂通寶2、不明1である（第42・43表）。なお、共伴遺物はない。

徳山地区では、上開田村平遺跡（平成4年度調査）からも、合計87枚のさし鉄が出土している。¹⁾

1) 出土銭貨第5号より



第109図 さし銭の紐実測図

第40表 その他の時代のピット・土坑一覧表

No.	グリッド	大きさ(cm) 長軸×短軸	平面形	出土遺物 ()は点数	時 期	切り合い他	
P 5	4 R	35×30	円形	大窯(1)	17C前半		
P 40	5 N	60×50	楕円形	古瀬戸(1)	14~15C		
P 41	5 N	30×25	不整形	灰釉(1)	10C後半~ 11C前半		
P 92	4 N	90×70	不整形	古瀬戸(1)	中世	< P574(SH4)	
P 109	5 N	60×30	不整形	瀬戸美濃(1)	18C後半~ 以降	(SH14)	
P 146	5 K	70×60	不整形	古瀬戸(1)	14~15C	(SH 1)	
P 186	3 L	65×55	円形	不明(1)	(?)		
P 194	4 K	65×60	円形	瀬戸美濃(1) 青磁(1)	18C後半~ 以降	(SH 1)	
P 209	2 J	75×75	円形	越前(1)	16C	>SK28	
P 210	2 J	35×30	不整形	大窯(1)	16C後半	>SK28, >P211	
P 211	2 J	80×(70)	(不整形)	瀬戸美濃(1)	江戸末期	<P210, <P212	
P 224	3 J	45×30	楕円形	青磁(1)	14~15C	(SH 6)	
P 228	3 J	90×70	楕円形	常滑(1)	中世		
P 229	2 I	80×65	楕円形	産地不明(1)	近世		
P 233	2 J	(50)×45	不整形	瀬戸美濃(1) 越前(1)	18C後半~ 以降	<SK31	
P 234	2 I	90×75	隅丸方形	産地不明(1)	近世	> P 595	
P 243	3 I	50×30	楕円形	瀬戸美濃(1)	江戸末期		
P 331	3 E	50×45	円形	瀬戸美濃(1)	江戸末期		
P 334	4 F	(40)×30	不整形	古瀬戸(1)	14~15C	< P 335	
P 364	4 E	80×(60)	不整形	瀬戸美濃(1)	江戸末期		
P 510	2 B	65×60	円形	古瀬戸(?) (1)	14~15C		
P 561	3 O	130×100	隅丸方形	瀬戸美濃(2)	江戸末期	> P 560	
SK 1	4 R	105×90	不整形	瀬戸美濃(1)	江戸末期		
SK 6	5 Q	160×150	円形	瀬戸美濃(2) 肥前(1)	江戸末期		
SK11	4 N	100×60	不整形	瀬戸美濃(1)	19C		
SK28	2 J	150×(70)	不整形	瀬戸美濃(1)	江戸末期	< P 209, < P 210	
SK31	2 J	130×90	不整形	古瀬戸(1) 不明(1)	(?)	> P 233	
SK33	3 F	190×70	不整形	大窯(1)	16C後半		
SK43	2 D	160×160	円形	瀬戸美濃(5)	江戸末期		
SK46	2 C	105×80	楕円形	瀬戸美濃(1)	江戸末期		
SK53	2 B	110×90	不整形	灰釉(1)	10~11C		
SK79	2 A	120×70	不整形	瀬戸美濃(2)	18C後半~ 以降		
SK80	2 A	100×65	楕円形	瀬戸美濃(1)	18C後半~ 以降		

■グリッド：複数にかかる場合は面積の広い方のグリッドとした。

切り合い：>切る、<切られる

第3節 遺 物

1. 古代以降の土器・陶磁器（1～34）

古代以降の遺物としては大半が中世陶磁器であり、接合前の總破片数で672点を数える。遺構内出土遺物は数少なく、大部分が包含層からの出土であり細片が多い。そのうち34点を図示した（第110・111図）。以下、器種毎に説明したい。

須恵器は1点のみ出土した。細片のため図示していないが、色調は暗青灰色を呈し、径1mm以下の長石粒を幾つか含む。古代の須恵器が他に出土していないため、あるいは珠洲系諸窯の製品かもしれない。

灰釉陶器は35点出土し、そのうち3点（1～3）を図示した。器種は碗、皿、瓶類などがみられる。緻密な胎土を有するものよりもやや粗雑な胎土を有するものの方が多い。

土師器は8点出土し、そのうち2点（4、5）を図示した。器種はいずれも皿である。（4）と（5）は形態と整形方法が全く異なる。なお、（4）は口縁部の1箇所に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。

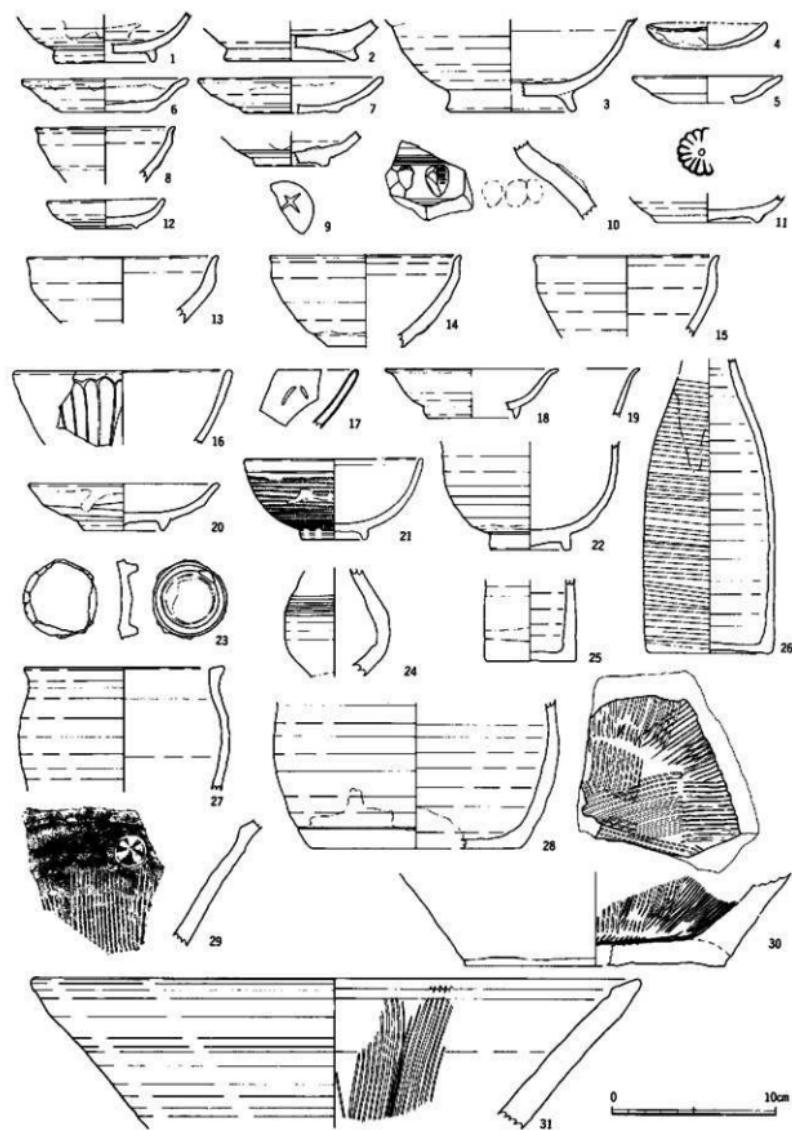
古瀬戸陶器は18点出土し、そのうち5点（6～10）を図示した。器種は縁軸小皿、卸皿、折縁深皿、卸目付大皿、天目茶碗、小天目茶碗、平碗、有耳壺、擂鉢などがみられる。このうち（9）の底部外面にはヘラ記号が施されている。これらはいずれも古瀬戸後期に比定され、後期古段階の遺物はわずかあり、大半は新段階の遺物である。

大窯陶器は22点出土し、そのうち6点（11～15、25）を図示した。器種は稜皿、丸皿、志野丸皿、天目茶碗、九碗、擂鉢、茶入などがみられる。なお、この他に、天目茶碗などの体部破片で、古瀬戸と大窯の識別ができなかった破片が23点出土している。

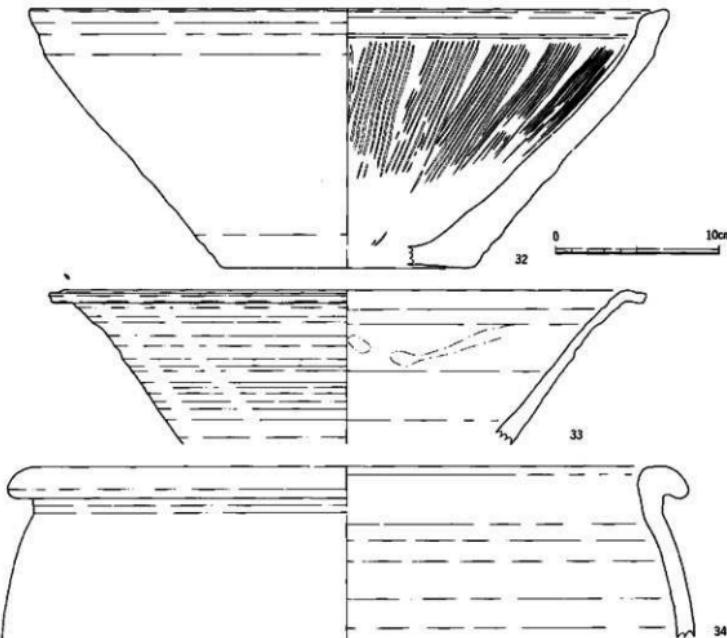
中国磁器は12点出土しており、そのうち4点（16～19）を図示した。青磁の器種はいずれも碗で、体部外面に蓮弁文を有するもの、体部外面が無文のもの、端反碗などが、白磁は端反皿、小杯などがみられる。（10）は丸彫り、（11）は片切彫りによる蓮弁文が施され、（12）は蓮弁部の盛り上がりがみられない。（13）は体部の傾きから小杯と思われる。

越前陶器は19点出土し、そのうち3点（30～32）を図示した。器種はいずれも擂鉢であるが、擂鉢の他に甕の体部破片が4点出土しており、これらは常滑陶器か越前陶器か識別できなかった。（14）は底部内面にも擂目が施されている。（15）、（16）は体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに内寄する。口縁端部は断面三角形に近い形状である。なお、いずれも口縁部よりやや下位に一条の沈線が施されている。

近世の遺物は530点出土し、瀬戸美濃511点、肥前1点、土製品3点、産地不明15点を数える。そのうち11点（20～24、26～29、33、34）を図示した。器種は各種碗類、各種皿類、小杯、小鉢、鉢類、折縁鉢、捏鉢、擂鉢、片口、香炉、徳利、壺、土瓶、甕、十能、蓋などがみられる。（17）は花瓶と思われ、内面に付着物がみられる（第6章）。（18）は瀬戸美濃でもなく越前でもないため、産地不明とした。内面に「大」の字に類似する文様が押印され、ヘラ状工具により丸く囲む。なお、この擂鉢と同一胎土の鉢は戸入村平遺跡でも出土している。（19）は他の器種に比べ、胎土が精良で堅緻である。



第110図 中世陶磁器(1)



第111図 中近世陶磁器(2)

これらの遺物を時期別にみると、灰釉陶器は10世紀前半～11世紀前半の遺物が確認できるが、大半は10世紀後半(猿投編年H72段階)に属する。それ以後の中世前期の遺物(山茶碗等)は確認できない。中世後期の遺物は古瀬戸、大窯、中国磁器、越前などがみられ、古瀬戸は15世紀(後期新段階)の遺物が多い。また、越前は擂鉢の出土が目立つが、いずれも16世紀中頃に比定される。¹⁾ 大窯の擂鉢と越前の擂鉢の関係は興味深いが、大窯の擂鉢の口縁部破片が出土していないためその時期が確認できず、詳細は言及できない。近世陶磁器は17世紀～19世紀の遺物が少量ながら連続して出土しており、なかでも18世紀後半以降の遺物が目立つ。

1) 岩田隆氏の御教示による。

(参考文献)

- 斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心にして—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』
- 藤澤良祐 1996 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～ 資料集』
- 福井県教育委員会・福井県立朝倉市遺跡資料館 1983 「第36次調査報告」『県道鈴江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書』
- 岐阜県文化財保護センター 1994 『戸入村平遺跡』

(古代以降の土器・陶磁器については小野木 学)

第41表 その他の時代の遺物観察表

番号	遺構	器種	汎量(cm)		整形、調整	胎 土	色 調	残存率(X/12)	その他の	
			口径	底径						
1	包含層	灰陶輪鋸 鏡	(6.2)		底部外側面削除 切口、底部外側面削除 切り、鏡口	面、底1cm以下の後 砂粒をわずかに含む	灰白色	底部 2.2	体部内外面灰釉	
2	包含層	灰陶輪鋸 鏡	(6.2)			面、底1cm以下の後 砂粒をわずかに含む	灰白色	底部 2.1		
3	包含層	灰陶輪鋸 鏡	(8.0)		底部外側面削除 切口	面、底1cm以下の後 砂粒をわずかに含む	灰白色	底部 4.3	口縁部周辺に灰釉	
4	包含層	土器	7.4	1.5	体部内面帯状工具 による二方向削除 切口、底部外側面削除 切り	面、底1cm以下 の後砂粒を含む	灰白色	口縫 9.3	口縫部に灰釉	
5	包含層	土器	(9.2)	1.7	体部内外面削除 底部外側面削除	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	にじい黄 褐色	口縫 2.6		
6	包含層	灰陶小口 罐	(10.2)	5.2	2.1	底部外側面削除 底部外側面削除 切り	面、底1cm以下の後 砂粒をわずかに含む	灰白色	口縫 5.7 底部 5.6	口縫部周辺に灰釉
7	包含層	灰陶小口 罐	(11.1)	(5.9)	2.2	底部外側面削除 底部外側面削除 切り	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	浅黃褐色	口縫 0.8 底部 5.0	口縫部周辺に灰釉
8	包含層	古陶小口 瓶	(8.6)			面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	口縫 1.7	底部外側面削除を除く	
9	包含層	青釉小口 瓶	(4.5)		体部外側面削除 底部外側面削除 ヘラ削り	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	にじい黄 褐色	底部 4.7	底部外側面削除を除く 底部外側面削除 底部外側面削除 にじい黄褐色	
10	包含層	青釉有肩 瓶			底部外側面に平行 洗削し底部内面 面削除直列窓	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	暗灰色～ 浅黃褐色		外外面に灰釉、耳欠 無	
11	包含層	大腹 盆		5.2		底部外側面削除 底部外側面削除 切り	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	浅黃褐色	底部 12.0	底部内面中央に菊花 紋飾、底部外側面 に横筋文
12	包含層	大腹 盆	7.3	3.6	1.7	底部外側面削除 底部外側面削除 切り	やや粗、底1cm以 下の後砂粒を含む	灰白色	口縫 12.0 底部 12.0	全面上に灰釉
13	SK33	大腹 天目茶碗	(11.9)			やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	灰白色	口縫 2.3	全面に灰釉	
14	P'210	大腹 天目茶碗	(11.8)		体部外側面下方削 除～底部外側面削除 ヘラ削り	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	浅黃褐色	口縫 3.3	体部外側下方を除き 灰釉	
15	P'5	大腹 天目茶碗	(11.3)			底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	口縫 1.8	全面に灰釉	
16	灰陶 瓶	(13.3)				やや粗、底1cm以上 の後砂粒を含む	にじい黄 褐色	口縫 1.0	体部外側面に溝文文	
17	包含層	青釉 瓶				面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	口縫 0.7	体部外側面に溝文文	
18	包含層	白磁 罐	(10.0)	(5.5)	3.0	面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	口縫 1.2 底部 0.5	全面に白磁、外側部 に沙粒付着	
19	包含層	白磁 瓶				面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	口縫 1.2	全面に白磁	
20	包含層	灰陶輪 鏡	(11.8)	5.0	2.9	体部外側面下方 ～底部外側面削除 ヘラ削り	面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	口縫 1.6 底部 12.0	口縫部周辺～体部内 部灰釉
21	包含層	灰陶輪 鏡	(10.8)	3.8	5.0	体部外側面に圓輪 工具による溝文 と螺旋状の透空文 様	面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	口縫 3.2 底部 12.0	体部内面～口縫部周 辺～底部外側面、高台 部に白磁
22	包含層	灰陶輪 鏡			4.9	体部外側面下方 ～底部外側面削除 ヘラ削り	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	にじい黄 褐色	底部 12.0	高台周辺を除く外側 面
23	包含層	加工円盤	底さ4.8cm 重さ27.7kg			やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	灰白色		内面斜面、外側面 に丸み化粧、底面 に丸み化粧の高台部	
24	包含層	灰陶輪 鏡			体部外側面に比較 4枚	やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	にじい黄 褐色		内面および体部外 側面を除く底面、高台 部に丸み化粧	
25	包含層	大腹 盆	(5.6)		体部外側面下方削 除～底部外側面削 除～底部外側面削 除～	やや粗、底1cm以下 の反折を含む	灰白色	底部 5.7	内面および体部外 側面を除く底面	
26	包含層	灰陶輪 鏡			底部外側面削除 切り	面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	底部 12.0	体部外側面	
27	包含層	灰陶輪 鏡	(12.4)			やや粗、底1cm以下 の後砂粒を含む	灰白色	口縫 2.0	体部外側面に附着と 離れた小塊	
28	包含層	灰陶輪 鏡	(12.8)		体部外側面下方削 除～底部外側面削 除～底部外側面削 除～	やや粗、底2cm以下 の後砂粒を含む	灰白色	底部 3.2	体部外側面を除く	
29	包含層	底面不明 盤			体部外側面削除 ヘラ削り	やや粗、底2cm以下 の後砂粒を含む	暗灰色		全面に灰釉、底面 16本、幅4.0cm、体 部内面に斜面と縦割 れ	
30	包含層	青釉 盤	(16.0)			やや粗、底3cm以下 の長ねぎチャコを含む	にじい黄 褐色	底部 3.4	底部 13本、幅3.8cm	
31	P'233	青釉 盤	(20.0)		口縫部内面に・ 朱の沈糊	やや粗、底2cm以下 の後砂粒を含む	浅黃褐色	口縫 0.8	底面原本9本、 幅2.7cm	
32	P'209	青釉 盤	(39.0)	(15.6)	16.0	体部外側面下方削 除～底部外側面削 除～口縫部内面に・ 朱の沈糊	やや粗、底13mm以下 の後砂粒を含む	にじい黄 褐色	口縫 3.0	底面原本10本、 幅3.0cm
33	包含層	灰陶輪 鏡	(36.8)			口縫部内面に複 数あり	面、底1cm以下の後 砂粒を含む	灰白色	全面に灰釉、体部内 面に附着の底面	
34	包含層	灰陶輪 鏡	(42.2)			やや粗、底2cm以下 の後砂粒を含む	灰白色	口縫 3.3	全面に白磁	

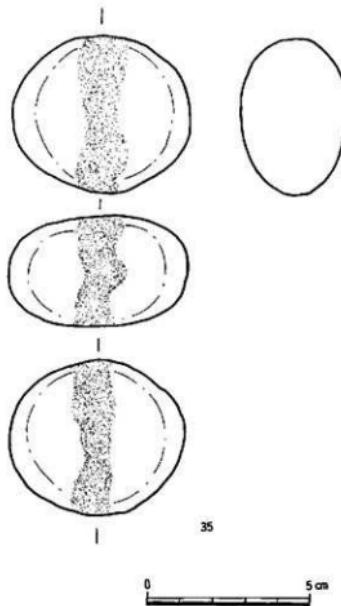
2. はばき編みの錘

1点(35)出土した。表掲資料である。縦4.9×横5.5cm、厚さ3.4cmの丸い川原石(安山岩製)を利用して、短軸中央部に幅0.8~1.5cmの「糸巻きの帶状痕跡」(縄文時代の石錐の所で定義)が認められる。この「糸巻きの帶状痕跡」は、縄文時代の石錐で見られたものとよく似ているが、両端に切日や打ち欠いた跡は見られない。

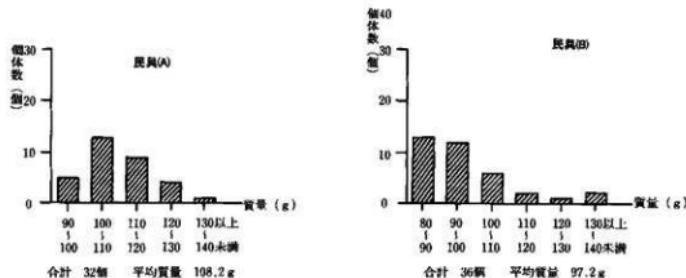
この石器については、藤橋村歴史民俗資料館に収蔵されている、旧徳山村の民具の中のはばき(すね当て)等を編むアミダイ(編み台)の錘(第115図)の可能性が考えられる。「糸巻きの帶状痕跡」は、糸が巻かれていた跡であり、左右の磨耗して光沢の見られる部分は、民具の例から見て、手ずれ等によるものと考えられる。質量107.5gも藤橋村歴史民俗資料館よりお借りした民具の錘2セットの平均質量97.2g、108.2g(第113図)ときわめて近いものである。

なお、旧徳山村に残った民具の錘と、縄文時代の石錐との関係についてはここでは言及せず、旧徳山村の民具の中にこういうものがあるという指摘にとどめておきたい。

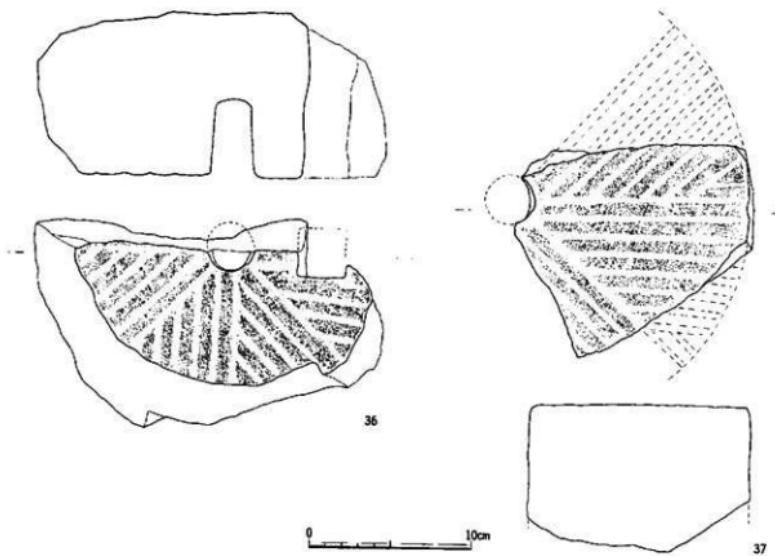
1) 藤橋村歴史民俗資料館に収蔵されている民具の実見および借用にあたっては、藤橋村教育委員会の脇田雅彦・節子のお二方に大変お世話になった。



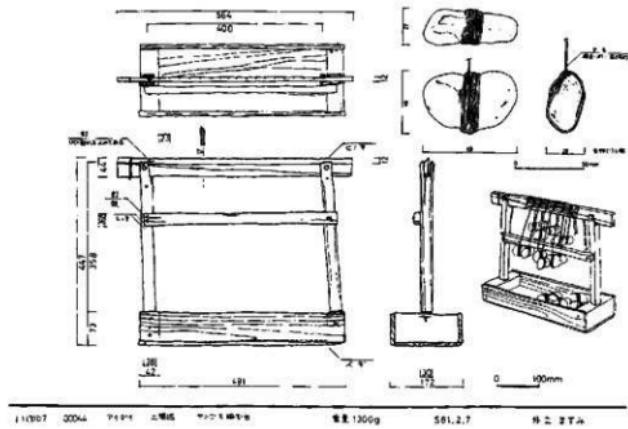
第112図 はばき編みの錘実測図



第113図 「はばき編みの錘」の質量分布表



第114図 石臼実測図

(徳山の山村生産用具実測図集 徳山村教育委員会より)
第115図 アミダイの実測図

3. 石臼

2点（36・37）出土した。いずれも表探資料である。側は上臼で、残存径19.5cm、厚さ10.2cm、質量4.0kgである。心棒用の穴（径3.0cm）および供給口（一辺3.0cmの四角形）が見られる。摺り合わせ面の口は8分角で、各分角内に5~6本の副溝が主溝と平行に等間隔（1.0~1.2cm）で刻まれている。溝幅は0.3~0.4cm、深さ0.1cmである。（37）は下臼で、径29.5cm、残存厚9cm、質量2.5kgで、心棒用の穴（径3.0cm）が見られる。摺り合わせ面の口は8分角で、残存する1区画内に、7本の副溝が主溝と平行に等間隔（1.2~1.3cm）で刻まれている。なお、隅の方の副溝は方向をかえて刻まれている。溝幅は0.2~0.3cm、深さ0.1cmである。側・側とともに溝の残りはよくそれほど磨耗していない。

石材は、2点ともに砂岩製で、福井県の小和清水（こわしょうず）産の石臼（越前臼）と考えられる。¹⁾ 摺斐川上流域の他の村々（坂内、旧徳山村合併以前の藤橋、久瀬の各村）では、花崗岩製の滋賀県伊吹町曲谷（まがたに）産の石臼（曲谷臼）を使っていたのに対して、旧徳山村では越前臼を使っていたそうである。²⁾ 「越前臼は石質がよいからと、分厚い粉食用の石臼を刃物や農器具といった鉄製品とともに背負って、峠（冠峠）を越えた。粉挽き臼は、どこの家庭でも越前製であった。」とのことである。³⁾ 近代の旧徳山村においても、越前（福井県）とのつながりが見られる好例である。

なお、坂内村に近い西谷の戸入村平遺跡（S63・H元調査）では、越前臼と考えられるもの（砂岩製）1点、曲谷臼と考えられるもの（花崗岩製）1点が出土している。⁴⁾

1) 摺斐郡久瀬村在住の岐阜地理学会名譽会長高橋俊示氏のご教示による。

2) 高橋俊示 建設省越美山系砂防工事事務所公報誌 1996 Vol.11より

3) 江口義春著『故郷の灯は消えて』1987より

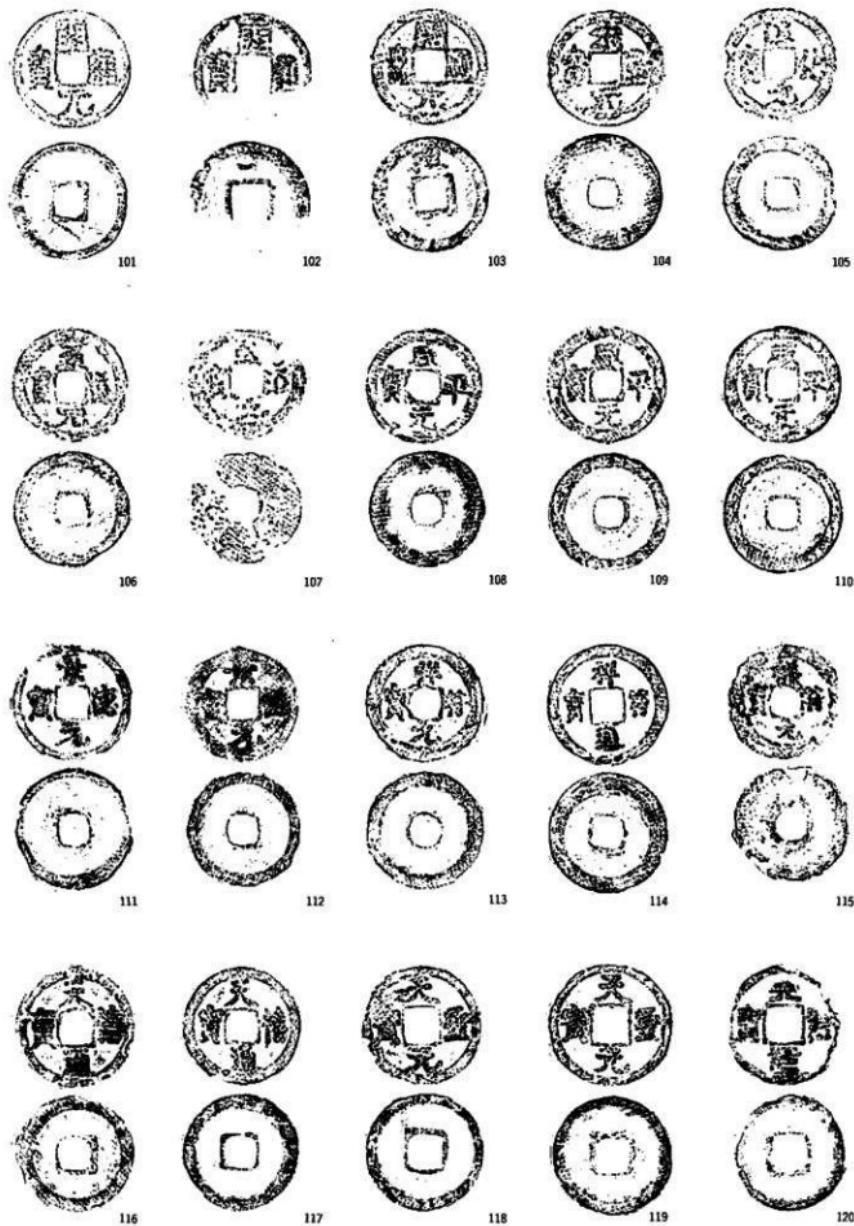
4) 戸入村平遺跡では、茶臼（安山岩製か）7点も出土している。

4. 銭貨類

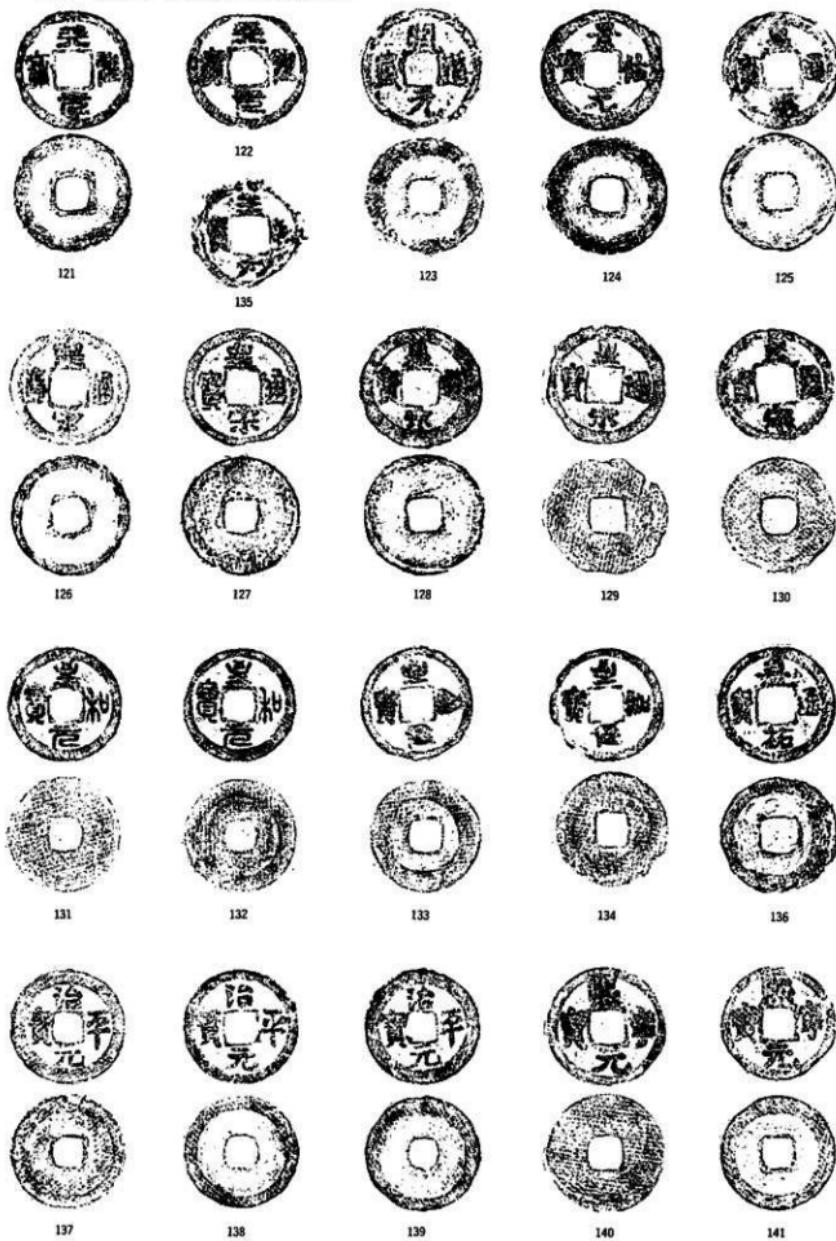
山手宮前遺跡では、101枚（101~201）の銭貨が出土している。

101枚のうち、81枚（101~181）はさし（櫛）の状態で検出した。（184頁・図版11）これらはすべて渡来銭で、開元通寶（621年 店）から永樂通寶（1405年 明）までの24種81枚である。（第42・43表）これらの銭貨のうち、4枚には背文が見られる（101・102・103・178）。

残りの20枚のうち、2枚は遺構、即ちP233より（182）、P546より（183）が出土し、18枚（184~201）は包含層より出土している（第44表）。（182）の元祐通寶、（184）の景德元宝、（185）の至和通寶の3枚が北宋からの渡来銭である以外は、江戸時代に鋳造された寛永通寶である。このうち（190）は鉄錢である。



第116図 さし鉄拓影(1)



第117図 さし銭拓影(2)



142



143



144



145



146



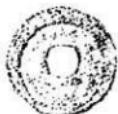
147



148



149



150



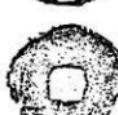
151



152



153



154



155



156



157



158



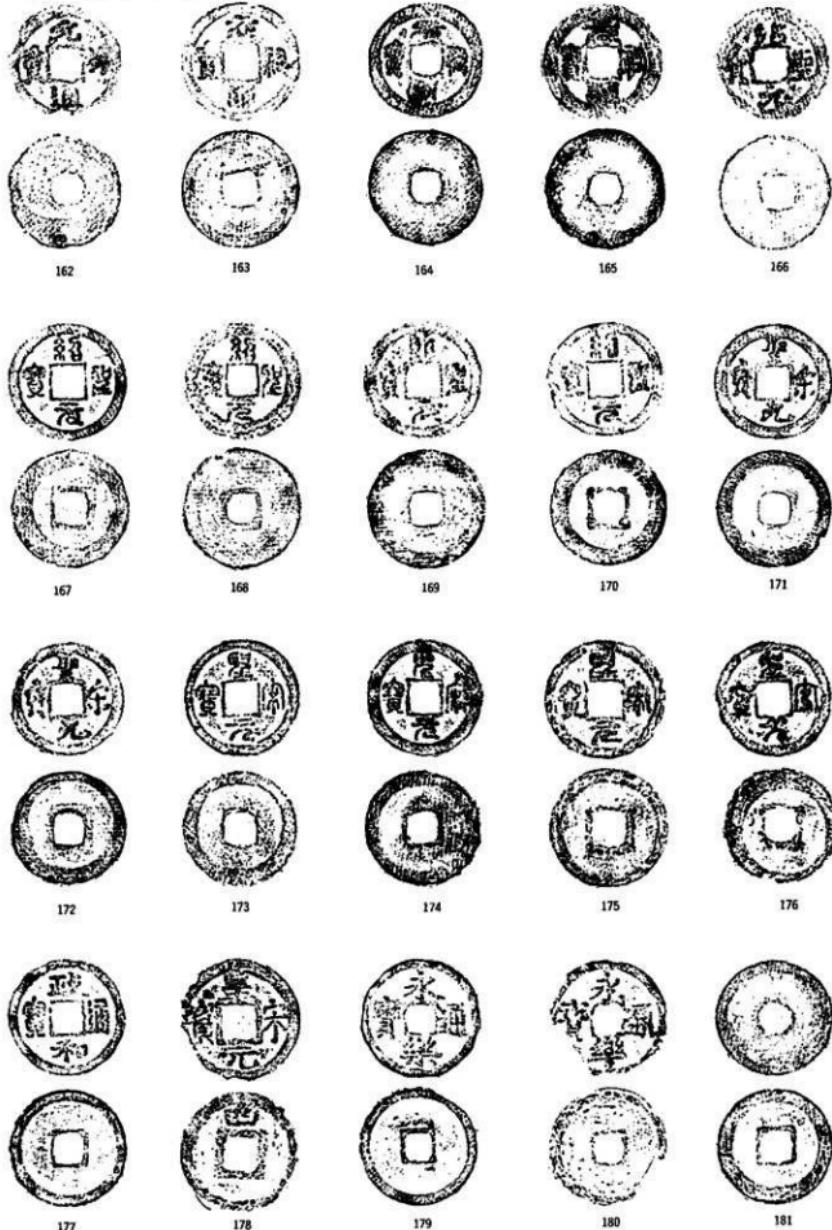
159



160



161



第119図 さし銭拓影(4)



182



183



184



185



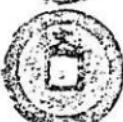
186



187



188



189



190



191



192



193



194



195



196



197



198



199



200



201

第42表 銭貨・さし銭計測表(1)

No.	出土区	銭貨名	背文	径(mm)	孔径(mm)	厚(mm)	重(g)	材質	初鑄年	遺物 備考	回収 番号	国名
1	4 F	開元通寶	丶	24.5×24.5	7.0×6.9	1.2	3.4	銅	621	101	116	唐
2	4 F	開元通寶	一	24.2	7.0	1.1	(1.7)	銅	621	102	116	唐
3	4 F	開元通寶	興	24.2×24.1	7.1×7.0	1.2	3.5	銅	845	103	116	唐
4	4 F	宋通元寶		24.0×24.0	6.0×6.0	0.9	3.0	銅	960	104	116	北宋
5	4 F	淳化元寶		23.8×(22.8)	6.1×6.9	1.0	(2.4)	銅	990	105	116	北宋
6	4 F	至道元寶	(23.7)×24.2	6.4×6.5	1.0	(2.6)	銅	995	106	116	北宋	
7	4 F	至道元寶	(22.6)×24.0	7.1×7.0	1.3	(2.0)	銅	995	107	116	北宋	
8	4 F	咸平元寶	23.9×24.1	6.5×6.5	1.0	2.9	銅	998	108	116	北宋	
9	4 F	咸平元寶	24.3×24.2	6.5×6.4	1.2	3.1	銅	998	109	116	北宋	
10	4 F	咸平元寶	24.4×24.3	6.5×6.9	1.0	2.7	銅	998	110	116	北宋	
11	4 F	景德元寶	(23.9)×24.6	6.0×6.2	1.2	(2.8)	銅	1004	111	116	北宋	
12	4 F	景德元寶	23.2×23.5	6.1×6.4	0.5	1.7	銅	1004	112	116	北宋	
13	4 F	祥符元寶	24.2×24.0	6.9×6.7	1.1	2.8	銅	1009	113	116	北宋	
14	4 F	祥符通寶	24.6×24.5	6.5×6.7	1.1	3.0	銅	1009	114	116	北宋	
15	4 F	祥符元寶	23.1×23.1	6.0×6.1	0.9	(1.8)	銅	1009	115	116	北宋	
16	4 F	天禧通寶	24.7×24.8	6.9×6.5	1.0	2.6	銅	1017	116	116	北宋	
17	4 F	天禧通寶	24.0×24.1	6.1×6.4	1.1	2.9	銅	1017	117	116	北宋	
18	4 F	天聖元寶	24.5×24.3	7.5×7.5	1.1	3.0	銅	1023	118	116	北宋	
19	4 F	天聖元寶	24.6×24.8	7.1×7.3	1.0	3.3	銅	1023	119	116	北宋	
20	4 F	天聖元寶	24.1×(22.6)	7.2×7.4	1.0	(2.0)	銅	1023	120	116	北宋	
21	4 F	天聖元寶	24.1×24.4	7.0×7.0	1.2	3.1	銅	1023	121	117	北宋	
22	4 F	天聖元寶	(23.2)×24.3	6.4×6.9			銅	1023	122	117	北宋	
23	4 F	明道元寶	(23.8)×24.4	6.5×6.9	1.0	(2.0)	銅	1032	123	117	北宋	
24	4 F	景祐元寶	24.7×25.1	7.0×6.9	0.8	3.0	銅	1034	124	117	北宋	
25	4 F	皇宋通寶	24.4×24.2	7.3×6.9	0.9	2.8	銅	1038	125	117	北宋	
26	4 F	皇宋通寶	24.6×25.0	7.4×7.5	1.4	4.0	銅	1038	126	117	北宋	
27	4 F	皇宋通寶	(23.6)×24.1	6.8×6.8	1.0	3.1	銅	1038	127	117	北宋	
28	4 F	皇宋通寶	25.0×24.8	6.9×7.0	1.0	3.5	銅	1038	128	117	北宋	
29	4 F	皇宋通寶	25.0×(23.3)	7.3×7.3	0.8	2.9	銅	1038	129	117	北宋	
30	4 F	皇宋通寶	23.5×23.9	7.4×7.1	1.2	3.4	銅	1038	130	117	北宋	
31	4 F	至和元寶	23.2×23.5	6.5×6.3	0.7	2.2	銅	1054	131	117	北宋	
32	4 F	至和元寶	23.3×23.0	6.5×6.2	1.1	2.9	銅	1054	132	117	北宋	
33	4 F	至和元寶	23.0×23.0	6.1×6.3	1.0	2.4	銅	1054	133	117	北宋	
34	4 F	至和元寶	23.2×23.2	6.3×6.4	0.9	(2.7)	銅	1054	134	117	北宋	
35	4 F	至和元寶	(24.0)×(24.1)	7.5×8.0			銅	1054	135	117	北宋	
36	4 F	嘉祐元寶	23.7×23.9	6.7×7.1	0.9	2.7	銅	1056	136	117	北宋	
37	4 F	治平元寶	23.8×23.7	6.0×6.5	1.0	2.7	銅	1064	137	117	北宋	
38	4 F	治平元寶	23.6×23.6	6.3×6.5	0.9	2.9	銅	1064	138	117	北宋	
39	4 F	治平元寶	23.8×23.8	5.9×6.1	1.2	3.6	銅	1064	139	117	北宋	
40	4 F	熙寧元寶	24.5×24.4	6.8×6.9	0.9	3.1	銅	1068	140	117	北宋	
41	4 F	熙寧元寶	23.3×23.5	6.2×6.2	0.9	3.1	銅	1068	41	117	北宋	

No.1 背文(丶)……背下月 No.2 背文(一)……背上月 No.3 背文(興)……铸造地 山南道興州

※No.22とNo.35はくつついでいる

第43表 銀貨・さし銀計測表(2)

No	出土区	銭貨名	背文	径(mm)	孔径(mm)	厚(mm)	重(g)	材質	初鑄年	出物 番号	回版 番号	国名
42	4 F	熙寧元寶		22.9×22.9	6.1×6.1	1.3	3.1	銅	1068	142	118	北宋
43	4 F	熙寧元寶		23.8×23.7	7.1×7.0	1.1	3.6	銅	1068	143	118	北宋
44	4 F	熙寧元寶		22.7×23.2	6.3×6.2	1.2	3.6	銅	1068	144	118	北宋
45	4 F	熙寧元寶		22.6×22.8	6.1×6.1	1.1	2.8	銅	1068	145	118	北宋
46	4 F	熙寧元寶		24.2×23.6	6.9×7.1	1.0	3.3	銅	1068	146	118	北宋
47	4 F	熙寧元寶		23.4×23.3	7.0×7.0	1.0	3.3	銅	1068	147	118	北宋
48	4 F	熙寧元寶		24.2×24.0	7.0×6.8	1.2	3.2	銅	1068	148	118	北宋
49	4 F	熙寧元寶		(23.2)×(23.4)	7.0×7.4	0.7	(2.2)	銅	1068	149	118	北宋
50	4 F	熙寧元寶		23.6×23.9	6.0×6.0	1.1	2.7	銅	1068	150	118	北宋
51	4 F	熙寧元寶		(22.9)×23.4	6.1×6.1	1.2	3.1	銅	1068	151	118	北宋
52	4 F	元豐通寶		24.0×23.9	7.1×6.8	1.1	3.2	銅	1078	152	118	北宋
53	4 F	元豐通寶		23.0×23.2	6.0×5.8	1.0	2.9	銅	1078	153	118	北宋
54	4 F	元豐通寶		24.6×24.6	6.3×6.3	1.2	3.1	銅	1078	154	118	北宋
55	4 F	元豐通寶		24.5×24.2	7.0×7.0	1.1	3.0	銅	1078	155	118	北宋
56	4 F	元豐通寶		24.8×25.0	6.0×6.4	0.9	2.7	銅	1078	156	118	北宋
57	4 F	元豐通寶		(23.6)×24.1	6.2×6.0	1.2	(2.5)	銅	1078	157	118	北宋
58	4 F	元豐通寶		23.6×23.7	6.3×6.4	1.0	3.1	銅	1078	158	118	北宋
59	4 F	元豐通寶		(23.7)×(24.0)	6.9×6.9	1.1	(3.1)	銅	1078	159	118	北宋
60	4 F	元祐通寶		23.6×23.7	6.2×6.1	1.2	3.6	銅	1086	160	118	北宋
61	4 F	元祐通寶		23.6×23.7	7.0×6.5	1.1	3.3	銅	1086	161	118	北宋
62	4 F	元祐通寶		(22.1)×(23.4)	6.5×6.3	0.8	(2.3)	銅	1086	162	119	北宋
63	4 F	元祐通寶		24.2×24.5	7.0×7.3	1.0	2.9	銅	1086	163	119	北宋
64	4 F	元祐通寶		23.7×23.5	6.1×6.2	0.8	2.7	銅	1086	164	119	北宋
65	4 F	元祐通寶		24.4×24.4	6.0×6.0	0.9	3.0	銅	1086	165	119	北宋
66	4 F	紹聖元寶		23.5×22.8	6.9×7.2	0.7	2.8	銅	1094	166	119	北宋
67	4 F	紹聖元寶		24.1×24.2	6.8×7.0	0.9	3.0	銅	1094	167	119	北宋
68	4 F	紹聖元寶		23.9×23.9	6.0×6.0	1.0	2.8	銅	1094	168	119	北宋
69	4 F	紹聖元寶		24.2×24.3	6.5×6.4	0.7	2.3	銅	1094	169	119	北宋
70	4 F	紹聖元寶		23.5×24.0	6.4×6.3	1.0	3.3	銅	1094	170	119	北宋
71	4 F	聖宋元寶		23.6×23.7	6.2×6.3	1.1	3.4	銅	1101	171	119	北宋
72	4 F	聖宋元寶		23.4×23.3	6.0×6.3	1.1	3.5	銅	1101	172	119	北宋
73	4 F	聖宋元寶		23.5×23.4	6.4×6.4	1.1	3.0	銅	1101	173	119	北宋
74	4 F	聖宋元寶		23.5×23.6	6.2×5.9	1.0	3.2	銅	1101	174	119	北宋
75	4 F	聖宋元寶		24.2×24.4	6.3×7.0	1.0	2.5	銅	1101	175	119	北宋
76	4 F	聖宋元寶		23.7×23.4	6.2×6.2	1.2	3.3	銅	1101	176	119	北宋
77	4 F	政和通寶		24.1×24.1	6.1×6.1	1.1	2.7	銅	1111	177	119	北宋
78	4 F	皇宋元寶	四	(24.8)×(24.1)	6.5×6.8	0.9	(2.6)	銅	1253	178	119	南宋
79	4 F	永樂通寶		24.4×24.5	5.2×5.7	1.5	4.0	銅	1408	179	119	明
80	4 F	永樂通寶		(23.6)×(24.4)	6.1×6.0	1.3	(2.4)	銅	1408	180	119	明
81	4 F	○○元○		23.6×23.6	7.0×6.2	0.8	2.6	銅		181	119	明

第44表 銭貨計測表

No	出土区	銭貨名	背文	径(mm)	孔径(mm)	厚(mm)	重(g)	材質	初鑄年号	遺物 備考	回版 番号	備考
1	P233	元祐通寶		24.9×25.1	6.0×5.8	1.1	3.3	銅	1086	182	120	北宋
2	P546	寛永通寶	文	24.3×(20.6)	6.1×6.1	0.7	(1.4)	銅	2期	183	120	
3	2 J-II	景祐元寶		24.4×25.2	6.0×6.3	0.8	3.0	銅	1004	184	120	北宋
4	5 N-II	至和元寶		23.5×23.6	6.4×6.3	1.0	2.4	銅	1054	185	120	北宋
5	2 J-II	寛永通寶		24.9×24.3	5.4×5.6	1.0	(2.3)	銅	1期	186	120	
6	4 E-II	寛永通寶	/	24.4×24.2	5.3×5.5	1.0	3.6	銅	1期	187	120	
7	3 N-II	寛永通寶		(24.0)×(24.1)	6.0×6.0	0.9	(2.3)	銅	1期	188	120	
8	4 N-III	寛永通寶	文	25.4×25.5	5.9×5.9	1.0	2.5	銅	2期	189	120	
9	4 E-II	寛永通寶	文	22.2×22.2	6.3×6.4	0.7	2.0	銅	2期	190	120	
10	2 I-I	寛永通寶		23.3×23.1	6.0×6.0	0.9	2.7	銅	3期	191	120	
11	2 J-I	寛永通寶		23.5×24.1	6.3×6.3	0.9	2.5	銅	3期	192	120	
12	2 J-I	寛永通寶		×(21.9)	×6.9	0.7	(1.2)	銅	3期	193	120	
13	2 J-I	寛永通寶		(22.8)×(21.8)	6.2×6.1	1.1	(1.9)	銅	3期	194	120	
14	4 L-Aトレ	寛永通寶		24.5×24.4	6.4×6.4	0.9	3.1	銅	3期	195	120	
15	4 R-III	寛永通寶		24.1×24.0	6.3×6.3	0.8	2.2	銅	3期	196	120	
16	3 E-I	寛永通寶		24.5×24.5	6.1×6.0	0.9	(2.3)	銅	3期	197	120	
17	3 E-II	寛永通寶		21.9×21.7	6.9×7.0	0.8	2.2	銅	3期	198	120	
18	2 J-II	寛永通寶		23.5×23.5	5.2×5.5	1.0	3.3	銅		199	120	
19	2 J-II	寛永通寶		24.1×24.0	5.5×5.4	1.0	2.6	銅		200	120	
20	2 J-II	○○○○		23.3×23.7	5.2×5.3	1.6	2.9	銅		201	120	

鋳造期間

- 1期（古寛永） 1636～1659
 2期（新寛永） 1668～1683……背面に「文」字のある文銭
 3期（〃） 1697～1747及1767～1781

参考文献

- 兵庫埋蔵銭調査会 1996 「日本出土銭銭鑑」
 出土銭貨研究会 1996.5 「出土銭貨」
 日本貨幣商協同組合 1993 「日本貨幣カタログ」
 索引不能な箇所は空欄とした

5. 木柱根

第1号掘立柱建物跡（SH1）の柱穴より、7本の木柱根（301～307）が出土した（第101・121・122図）。

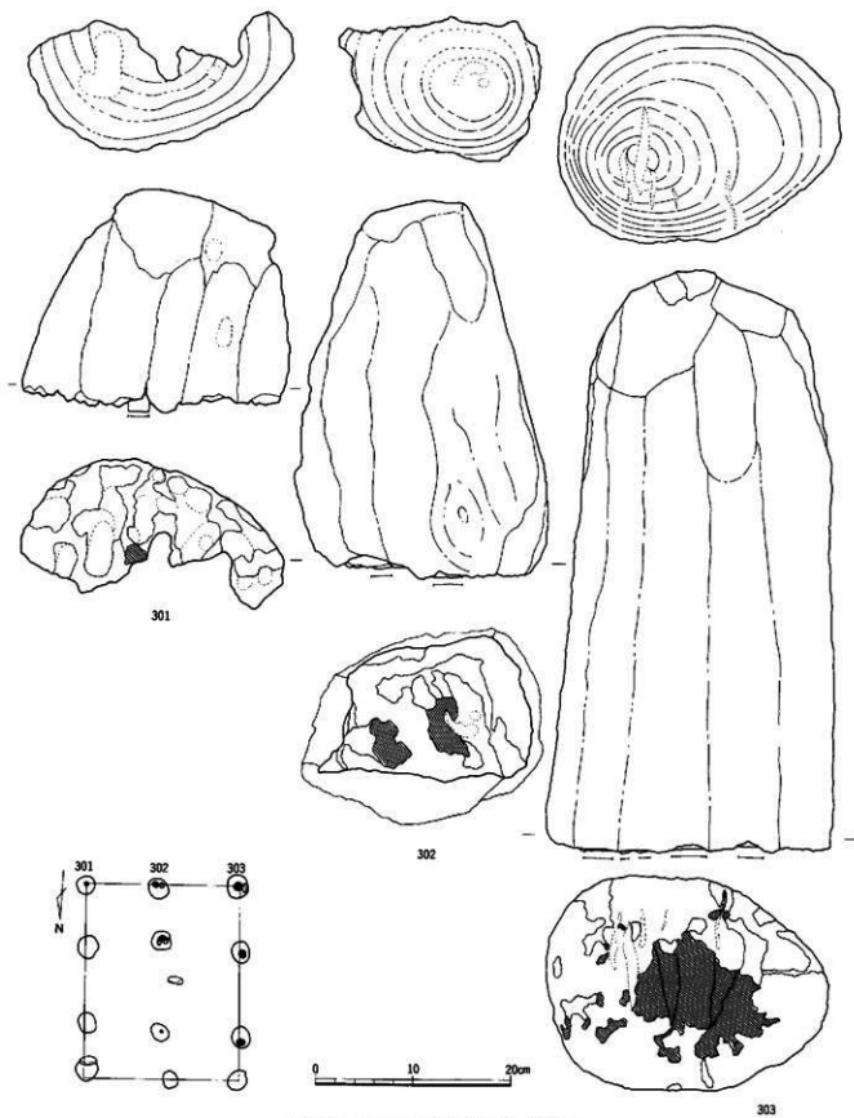
(301)は、P194より出土した。残存する長さ22.5cm、残存する太さ26.7cmで下端に工具（鋸と考えられる）による加工痕（切断面）がわずかにみられる。芯の部分は残存しておらず、半截に近い状態で出土した。(302)は、P192より出土した。残存する長さ38.6cm、残存する太さ25.5cmで下端に工具（鋸と考えられる）による加工痕（切断面）が残る（図版62）。断面は段差のある2つの面がみられる。(303)は、P191より出土した。残存する長さ59.0cm、残存する太さ28.8cmで下端に工具（鋸と考えられる）による加工痕（切断面）が芯の部分を中心によく残る（図版62）。切面には、微妙な段差がいくつもみられる。加工面には、土が固まって付着したり、径1～2mm程度の小縫が食い込んでおり、柱にかなりの重量がかかっていたと考えられる。残存状況は大変よい。(304)は、P146より出土した。残存する長さ43.6cm、残存する太さ17.2cmでやはり下端に工具（鋸と考えられる）による加工痕（切断面）がみられる。(305)は、P145より出土した。残存する長さ32.6cm、残存する太さ20.9cmである。(306)は、P147より出土した。残存する長さ29.0cm、残存する太さ15.9cmで、芯の部分は残存していないかった。(307)は、P144より出土した。残存する長さ17.8cm、残存する太さ17.4cmであった。

(301)・(306)以外はいずれも芯が残っており、当初は、丸太のまま、(302)・(303)などに残る切断面を下にして立てられたものと考えられる。なお、木柱根の材はクリで、放射性炭素年代測定の結果 AD1,730年頃という年代が得られた（第6章）。

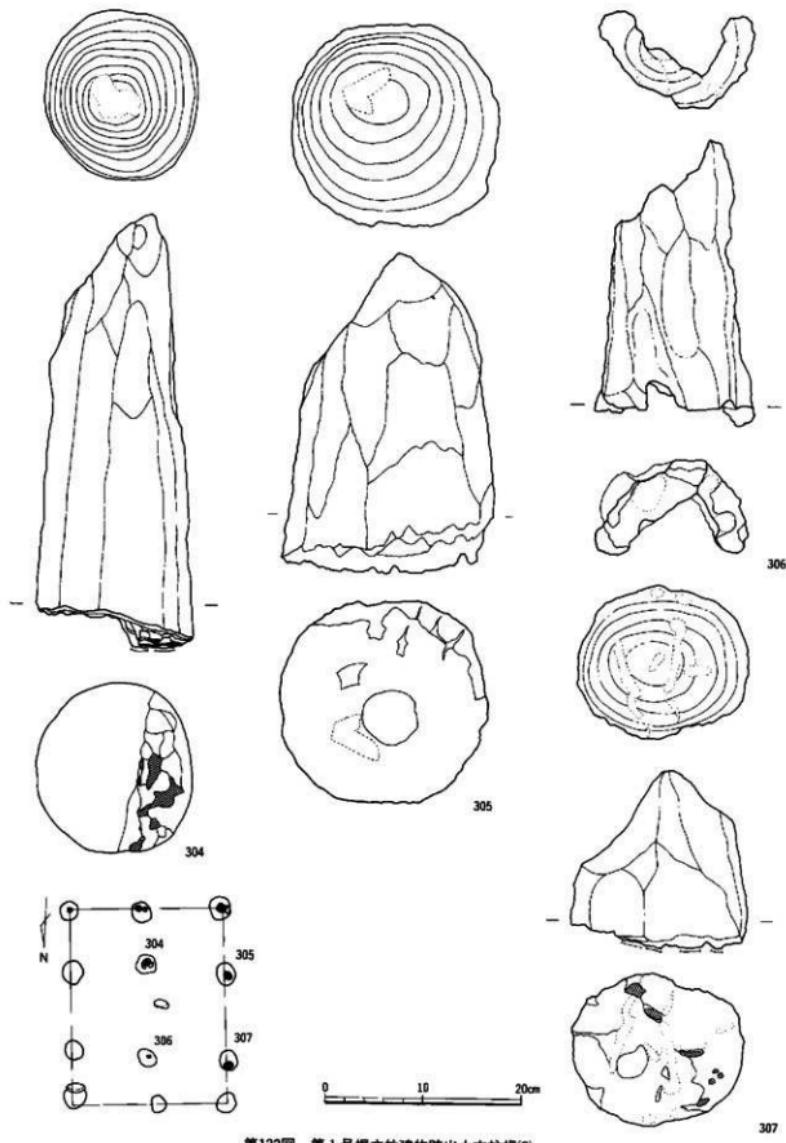
第4節 まとめ

徳山の古代については、史料がないため不明な部分が多くあった。そんな中で、「徳山」関係の地名が史料に現われるのは「美濃国神名帳」（天慶～天德938～960年間の頃に修撰されたもの）の「山手」集落の加茂神社の記載が最初であるが、今回の「山手宮前遺跡」の発掘調査で10世紀後半～11世紀の灰釉陶器が少數ながら出土したことは、文献の記載を裏付けるものである。しかしながら、文献に登場する加茂神社が山手地区にあったかどうかについては、今回の調査では明らかにすることはできなかった。対岸約1km上流の「磯谷口遺跡」（H2年度調査）からも、比較的多くの灰釉陶器が出土しており、また、そのすぐ北の尾根上の「寺屋敷遺跡」（H5～7年度調査）からは、10世紀の礎石建物跡が検出されており、両遺跡の整理を待ちたい。

次に、中世から近世にかけてであるが、今回の調査で出土した遺物をみてみると、前節でも述べたように、中世前期の遺物（山茶碗など）は確認できなかった。中世後期になって遺物（古瀬戸、火窯、中国磁器、越前など）がみられ、古瀬戸は15世紀の遺物が多い。今回の調査で検出した掘立柱建物跡のうち、第6号掘立柱建物跡（SH6）の柱穴からは、14～15世紀の遺物が出土しており、この時期の遺構の可能性が考えられる。14～15世紀の古瀬戸や16～17世紀の大窯・中国磁器・越前などの出土したピット・土坑は11基検出している。徳山出羽守常長の名がみられる永享3（1431）年の山錢渡状の



第121図 第1号掘立柱建物跡出土木柱根(1)



第122図 第1号堆立柱建物跡出土木柱根(2)

中に、「やまで」「いそたに」「戸入」「つか」「はしさら」などの地名がみられるが、15世紀頃から山手地区に人々の生活の場が営まれ始めたようである。なお、埋納された時期は不明であるが、81枚のさし錢を検出している。

17世紀以降19世紀まで近世陶磁器は、少量ながら連続してみられるが、中でも18世紀後半以降の遺物が目立つ。第1号掘立柱建物跡（SH1）、第14号掘立柱建物跡（SH14）の柱穴からは18世紀後半以降と考えられる遺物が出土しているが、これらも含めて18世紀後半から19世紀にかけての遺物の出土したビット・土坑は、18基検出している。第1号掘立柱建物跡（SH1）の柱穴からは、7本の木柱根を検出し、分析の結果、材はクリで、放射性炭素年代測定で1,730年頃という年代を得ることができた。18世紀に入って、山手地区における人々の生活の場の拡大の様子をうがうことができよう。遺物の出土しなかった他の掘立柱建物跡も、川に沿った段丘と同じ南北方向にそろえて建っており、これらが中世から近世にかけての集落群である可能性も考えられる。

昭和62年の廃村時に42戸（遺跡の範囲内には9戸）あった山手集落も、明治2年の村差出明細帳によると、15戸（人数合計101人）の集落であった。文献からははっきりとしなかったそれ以前の山手集落の様子¹⁾について、わずかではあるが浮かび上がらせることができた。このことは、古代以降、中世から近世にかけての徳山地区全体の様子を考えるうえでも、価値のあることである。

最後に、近代以降についても、地図の上から消えてしまった旧徳山村の生活の様子を一つでも多く記録したいとの思いもあり、「はばき編みの鍤」と「石臼」を取り上げた。「はばき編みの鍤」は繩文時代の石鍤と似たところもあり、今後の議論を期待したい。

「石臼」からは、近代においても、徳山地区の人々が越前と深いつながりをもって生活していたことが浮かび上がってきたが、それは、文明4（1472）年の徳山家文書に越前朝倉家に従っていたことを物語る記録がみられ、それを裏付けるかのように、本遺跡から越前、特に16世紀中頃の擂鉢の出土した16世紀以来のものである。こうした越前との深いつながりは、徳山地区のおかれた地理的な要因によるところが大きいと考えられる。

1) 徳山村史（1973）によると、「山手集落の江戸期の様子は明らかではないが、記録の残る権原村の状況からみて、戸数・人数とも江戸時代を通してさしたる変化もなく続いたであろうことは十分考えられる。」とある。

第6章 自然科学分析

本書では、山手宮前遺跡の自然科学分析として、放射性炭素年代測定・炭化材の樹種同定・赤色顔料及び陶器内側の付着物質について、そして、さし鉄のひもの分析を㈱パレオ・ラボ及び財團法人元興寺文化財研究所に依頼して行った。以下、その報告を掲載する。

1. 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

(1) 放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化リチウム（カーバイド）の生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管(400cc)を用いて、 β -線を計数した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期として Libby の半減期5570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。

曆年代の補正是、CALIB3.0 (Stuiver and Reimer, 1993; IBM-PC 用 : Reference (Stuiver and Pearson, 1993)) を使用した。

(2) 放射性炭素年代測定結果

測定No.	試 料	^{14}C 年代値 (1950年よりの年数)	曆年代 (1σ)
PLD-163	炭化材 SB5-Pit2の埋甕内 (下層)	$4,150 \pm 140 \text{ yrBP}$ (BC 2,200年)	BC 2,860年(BC 2,900 – 2,550) BC 2,820年(BC 2,540 – 2,490) BC 2,690年 BC 2,670年
PLD-167	木材 (クリ) SH 1 P147	$220 \pm 90 \text{ yrBP}$ (AD 1,730年)	AD 1,670年 (AD 1,640 – 1,700) (AD 1,730 – 1,820) (AD 1,920 – 1,950)

引用文献

Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

2. 炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

当遺跡は岐阜県揖斐郡藤橋村大字山手字宮前に所在し、標高約300mの解析谷に立地し、縄文時代中期や近世の住居跡が発掘されている。ここでは縄文時代中期の複数の住居跡・土坑などから出土した炭化材と、近世の掘立柱建物跡 (SH 1 P147) から出土し放射性炭素年代測定に測られた木柱根の樹種同定結果を報告する。この調査は当地域においてどのような樹種が生活の場で利用されていたのかを知る目的で行われた。

また住居跡 SB 5 の Pit 2 に埋められていた土器の内部からは骨片と炭化材が検出された。この土器は咲焼式の土器で底部は穿孔され、伏せた状態で埋められており、中部地方を中心で当時期に例を見る埋甕と考えられる。埋甕の中から出土した炭化物の分析は、これまでにあまり例がなく、また、現在諸説唱えられている埋甕の用途・機能について考える資料とする目的で樹種同定を依頼された。

(2) 方法

まず試料の横断面を手で割り、実体顕微鏡下でおおよその特徴を捉え大別した。次に分類した典型試料と不確定の試料を走査電子顕微鏡で組織を観察し同定した。観察試料は、横断面（木口）は手で割り、接線断面（板目）と放射断面（胚目）は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り新鮮な面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子（㈱）JSM T-100型）で観察・写真撮影をした。

(3) 試料と結果

SB 5 · Pit 2 の埋甕内と埋甕外の炭化物の結果は表1に、そのほかの遺構の結果は表2にまとめた。なおすべての試料は1cm角以下の破片状のものがほとんどであった。

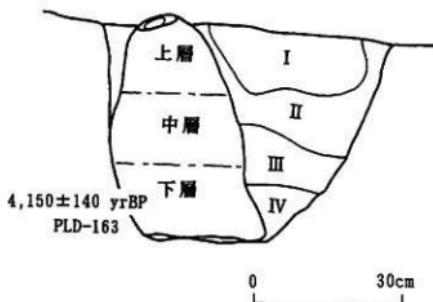
〔SB 5 · Pit 2 の埋甕内と埋甕外の炭化物〕(第45表、図版70 24, 25.)

埋甕内下層の一部試料が放射性炭素年代測定にかけられ 4150 ± 140 yrBP の結果がえられた。炭化試料は埋甕内の上を上中下の3層に分け取り上げたものと、土器が埋められていた Pit 2 の埋土 I ~ IV 層から検出されたものがあり(第123図)、埋甕の中と外の樹種組成と、かつ各層ごとの樹種構成を比較し検討した。埋甕内の試料は、土の上層からは骨片10片と炭化物15.3gが、中層からは骨片20片と炭化物7.4g、下層からは骨片5片と炭化物21.0gが検出された。これらの炭化物のほとんどは炭化材であった。観察可能なすべての試料を同定し、第45表に出土した樹種を分類順に並べ、各層ごとに検出された樹種を丸印で示した。また破片数が多かった樹種と微量ではあったが果実微破片についてはその重量を測定し、ほかの樹種との含まれ方を比較する目安とした。

分析の結果、各層に共通して出土した樹種はブナ属・クリ・カエデ属・果実微破片であった。ブナ属・クリは破片数も総重量も他の樹種と比べ非常に多く、カエデ属は下層で非常に多かった。果実微破片はすべて微破片で同定には至らなかったが同一種と見られ、破片はゆるくカーブしており断片の

第45表 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種 (I)
SB 5・Pit 2 の埋甕内と埋甕外の炭化物

	埋甕内の炭化物			埋甕外の炭化物			
	上層(15.30 g)	中層(7.40 g)	下層(21.00 g)	I層	II層	III層	IV層
カヤ	○	○					○
イヌガヤ			○				
クマシテ属イヌシテ節			○				
クマシテ属クマシテ節		○					
アナ属	○(0.15 g)	○(1.17 g)	○(3.16 g)	○			
クリ	○(2.16 g)	○(1.56 g)	○(1.17 g)	○	○	○	
ケヤキ		○(0.05 g)	○				
カツラ			○(0.37 g)				
アワブキ		○(0.45 g)					
カエデ属	○	○	○(2.43 g)				○
エゴノキ属		○					
トネリコ属			○				
環孔材A		○					
散孔材A		○					
散孔材B			○				
散孔材C			○				
果実微破片	○(0.38 g)	○(0.05 g)	○(0.04 g)				
タール状炭化材 (クリを含む)		○(4.68 g)					
広葉樹(クリ?)				○			



第123図 SB 5・Pit 2 の埋甕内と埋甕外の炭化物取り上げ層位

厚みは約1mm、一部に土手状の盛り上がりがあるものも見られた。出土種類数は、上層は少なく5分類群であるが、中層と下層はそれぞれ11分類群と12分類群で多かった。タール状炭化物と記した試料は上層のみで出土し量的にも多い。これらの試料はタール状に黒びかりしており組織は溶けて見られないが一部で非常に小型の管孔が火炎状に配列しているのが観察され、クリの晩材部と似ているもの多かった。中・下層からは量的には少ないが針葉樹のカヤとイヌガヤが検出された。アワブキは中層のみから検出されかつ破片数も量も多かった。下層ではカエデ属とカツラが多く検出された。このほかに分類群を絞ることができなかった環孔材Aと散孔材Aが中層から、散孔材BとCが下層から出土している。

土器が埋められていた Pit 2 の埋甕外の粘質埋土は土層により上部よりIからIV層に区分され、各層のサンプルとして取り上げた土壤から検出された破片数は各層に5点前後で少ないが、含まれていたすべての炭化材についてその樹種を調べた。同定結果は上位のI層からはブナ属2片・広葉樹（クリ？）2片が同定され、II層とIII層の炭化材は各1片がクリと同定されあとの炭片は脆く同定に至らなかった。IV層はカヤ・クリ・カエデ属が各1片ずつ同定された。埋甕外に含まれていた炭化材は少なく層位的に埋甕内の炭化材と比較することはできなかったが、ブナ属・クリ・カエデ属・カヤは埋甕内からも出土しており、これらは共通して出土した樹種であった。

[縄文時代中期の他の遺構から出土した炭化材]

SB 6・Pit13の埋甕外の炭化物はサカキ・ヒノキ属であった。

住居跡（SB 5・SB 6・SB 8）の石囲炉内の炭化材は燃料材の一部が残ったものと思われる。その樹種はSB 5はクリと散孔材D、SB 6はクマシデ節・ガマズミ属・ケヤキ、SB 8はカエデ属であり、各炉ごとで樹種がまとまっていた。

SB 6 埋設土器2内の炭化物はすべてクリでありその半数は一部がタール状になり溶けていた。

土坑（SK17・SK18・SK19）からはクリが共通して出土し、そのほかにSK17ではケヤキ、SK19からはブナ属・ケヤキ・クワ属・カエデ属・エゴノキ属が出土した（第46表）。

[SH 1 P 147 挿立柱建物跡出土放射性炭素年代測定試料]

この樹種はクリであった。

(4) 樹種記載

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版63 1 a - 1 c. (SB 5 Pit 2 埋甃内下層)
 仮道管・放射柔細胞からなる樹脂細胞をもたない針葉樹材。仮道管に2本が対になるらせん肥厚がある。分野壁孔は小型、1分野にヒノキ型がおもに2個ある。以上の形質からカヤと同定した。

第46表 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種 (2)

遺構	樹種(破片数)
SB 6 · Pit 13の埋甃外の炭化物	サカキ(2) ヒノキ属(1)
SB 5 石窯炉内炭化物	クリ(1) 散孔材D(6)
SB 6 石窯炉内炭化物	クマシテ属クマシテ節(3) ガマズミ属(8) ケヤキ(1)
SB 8 石窯炉内炭化物	カエデ属(9)
SB 6 埋設土器 2 内の炭化物	クリ(10: 約半数は一部タール状)
SK17出土炭化物	クリ(1) ケヤキ(1)
SK18出土炭化物	クリ(1)
SK19出土炭化物	ブナ属(1: 直径1cmの小枝) クリ(15以上) ケヤキ(1) クワ属(1) カエデ属(1) エゴノキ属(1)

カヤは本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、種子は食用となり油も食用油となる。材は水湿に強く加工しやすい。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.koch イヌガヤ科 図版63 2. (SB 5 Pit 2 埋甃内下層)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。試料が小さいため放射断面のみを作成し観察した結果、仮道管にらせん肥厚があり、樹脂細胞があり、分野壁孔は小型で1分野に1~2個ある。以上の形質からイヌガヤと同定した。

イヌガヤは本州の岩手県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山林下に生育する常緑小高木である。種子からは灯油用の油が取れ炎が明るく冬は凍らない利点があるが悪臭がある。材は緻密で固く縄文時代から弓に用いられていることで有名である。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版63 3 a-3 c. (SB 6 Pit13 埋甃外)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は少なく、樹脂細胞は年輪の後半にあるのが確認できた。分野壁孔はやや小さく、1分野に普通2個、型は壁が瘦せて不明瞭であるが一部でヒノキ型が観察された。以上の形質からヒノキ属と同定した。

ヒノキ属は山中に生育する常緑高木でヒノキとサワラがあり特に中部地方に天然林が多い。ヒノキは福島県以南の暖帯から温帯に分布し、材は発火しやすく火切りの台に用いられた耐朽性・切削性・割裂性にすぐれた有用材である。サワラは岩手県以西の温帯に分布し材はヒノキに比べると軟らかく材質はやや劣る。

クマシテ属イヌシテ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 図版64 4 a-4 c. (SB 5 Pit 2 埋甃内下層)

放射組織が集合する部分と2~数個の小型の管孔が放射方向に複合し配列する部分とがある散孔材。ビスフレックがあらわれる。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は單一である。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、1~3細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。集合放射組織があり、穿孔も單一であることから、イヌシテ節と同定した。なおクマシテ節は集合放射組織の出現頻度が低く、穿孔は横棒が10本以下の階段状のものが多いことで区別している。

クマシテ属は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大型低木である。イヌシテ節にはイヌシテとアカシテがあり山野に普通である。クマシテ節には山地の谷沿いに多いサワシバ・クマシテ、乾いた山麓に生育するイワシテがある。いずれの材も丈夫で有用である。

クマシテ属クマシテ節 *Carpinus sect. Distegocarpus* カバノキ科 図版64 5 a-5 c. (SB 5 Pit 2 埋甃内中層)

小型の管孔が単独または2~4個が放射方向に複合して散在する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒の数が少なく10木前後で管孔の細いものは横棒数がそれよりやや多い階段穿孔である。管孔の内壁には細いらせん肥厚が密にある。放射組織はほぼ同性、單列のものと3から4細胞幅の纺錐形のものが多い。当試料は直径5mmの軸であり、実体顕微鏡下で横断面を観察した結果は集合放射組織は観察されなかった。このような形質からクマシテ属のうちサワシバとクマシテを含むクマシテ節と同定した。現在でも器具柄・シャトル・荷棒などによく使われる材である。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版64 6 a-6 c. (SB 5 Pit 2 埋甃内中層)

丸みをおびた小型の管孔が密在し餘々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状で孔口がレンズ状で水平に大きく開く部分があり、穿孔は階段数が10から20本の階段状で單穿孔も混じる。放射組織は異性、1から3細胞幅のものと幅が広く背の高い広放射組織があり上下端に方形細胞が見られ、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は温帯域での極限に生育する落葉高木である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより海拔の低い所から生育しているイヌブナの2種がある。果実は食用となり、材は乾燥すると捻れが生じやすい欠点がある。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版65 7a-7c, 8, 9. (SB5 Pit 2 埋甃内中層) 図版8 26a-26c. (SH1 P147 木柱根)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し、除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は單一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。中心部に角形の鰐が確認されるもの、年輪界のカーブがゆるやかのものなど様々な太さの枝材が含まれていることが横断面の観察から判る。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は堅硬で耐水性・耐朽性にすぐれ、縄文時代から柱材の使用例が有名である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版65 6a-6c. (SB5 Pit 2 埋甃内中層)

年輪の始めにやや小型～中型の管孔が1層配列し、その後小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

暖帯下部から温帯の低地から山地の明るい川岸や谷あいに生育する落葉高木である。材は強靭で狂いが少なく木理が美しく。

クワ属 *Morus* クワ科 図版66 11a-11c. (SK19)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、除々に径を減じ、晩材部では小型で大きさの不揃いな管孔が集合して斜状、波状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、5細胞幅の紡錘形で上端に方形細胞があり、道管との壁孔の孔口はやや大きい。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。果実は食用となり、材は重硬・強靭で心材は特に保存性が高く有用材である。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版66 12a-12c. (SB5 Pit 2 埋甃内下層)

小型の管孔が年輪内に密在し年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材である。道管の壁孔はまばらな交互状あるいは水平に開いた口孔の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅、平伏細胞からなる多列部の上下端に方形・直立細胞が單列で1～3層のびる。

北海道から九州の温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

アワブキ *Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc. アワブキ科 図版66 13a-13c. (SB 5 Pit 2 埋甃内中層)

非常に小型でやや厚壁の管孔が単独または柔細胞を介して放射方向に2個複合し、疎らに散在し周囲状柔組織が顯著な散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔はおもに単一であるが階段数が1~3本ほどの階段穿孔もある。放射組織は異性、1~3細胞幅で背が非常に高く、放射柔細胞は薄壁で大きいので放射組織の全体は粗雑な印象をうける。

本州以南の暖帯の山地に普通の落葉高木である。枝は燃やすと切口から泡を吹き出す特徴がある。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版67 14a-14c. (SB 5 Pit 2 埋甃内中層)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、帯状の柔組織が認められる散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹で、約26種があり変種も多い。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

サカキ *Cleyera japonica* ツバキ科 図版67 15a-15c. (SB 6 埋甃 Pit II層)

非常に小型で多角形の管孔が密で晩材部では径が小さくなる散孔材である。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒の数が20~30前後の階段穿孔である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

亜熱帯・暖帯に生育する常緑小高木である。材は固く丈夫であり、農具の柄や小物器具類として使用されている。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版67 14a-14c. (SB 5 Pit 2 埋甃内中層)

中型の管孔が単独または2~4個が複合して放射方向に配列し、晩材部では径が減少する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1~4細胞幅、多列部は道管との壁孔は小型で交互状である。

暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木である。エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。エゴノキは山野や川辺に普通にあり果皮はエゴサボニンを含み石鹼の代用になる。材は柄や器具に使われている。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版68 17a-17c. (SB 5 Pit 2 埋甃内下層)

中型~大型の管孔が2~3層配列し、単独または2個複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材である。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。

おもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難い。遺跡からは建築材・板・杭・柄・碗などの使用例がありよく使用されている樹種である。

ガマズミ属 Viburnum スイカズラ科 図版68 18a-18c. (SB 6 石圓炉内)

非常に小型の管孔がほぼ単独でややまばらに散在する散孔材。道管の壁孔は交瓦状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔。放射組織は異性、1~4細胞幅、多列部の上下端の單列部は方形・直立細胞からなり、道管との壁孔は小型で交瓦状に配列する。

暖帯から温帯のおもに日当りのよい山野に普通に生育する常緑または落葉の低木または小高木である。約15種類あり、コバノガマズミ・ガマズミ・ムシカリ・ヤブデマリなどは山野に普通に見かける種類である。材は弾力性があり折れにくい。

環孔材A ring-porous wood A 図版68 19a-19c. (SB 5 Pit 2 埋甕内中層)

中型の管孔が1~2層配列しその後小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在する環孔材である。道管の壁孔は交瓦状、穿孔は單一である。放射組織は異性、1~3細胞幅、多列部の上下端は方形・直立細胞からなる單列部となる。ヤマウルシに似るが、小道管のらせん肥厚の有無、道管と放射柔細胞との壁孔が大きいかなど充分に特徴が捉えられず確定できなかった。

散孔材A diffuse-porous wood A 図版69 20a-20c. (SB 5 Pit 2 埋甕内中層)

非常に小型の管孔が放射方向や斜状に2~10個複合して分布する散孔材で、管孔の占める割合は多い。道管の壁孔は不明、穿孔は横棒の数が30~40本の階段穿孔である。放射組織は異性、おもに3細胞幅、多列部の上下端は方形・直立細胞からなる單列部になる。

散孔材B diffuse-porous wood B 図版69 21a-21c. (SB 5 Pit 2 埋甕内下層)

非常に小型の管孔が単独または2~3個が複合して散在しており、年輪界の管孔はやや径が小さい散孔材である。道管の壁孔は交瓦状、穿孔は單一か階段状か不明瞭であった。道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1~5細胞幅、30細胞高以上ある背の高いものが目立つ。

散孔材C diffuse-porous wood C 図版69 22a-22c. (SB 5 Pit 2 埋甕内下層)

単独または2個が複合した小型で厚壁の管孔がまばらに散在し、年輪界が不明瞭な散孔材である。道管の壁孔は交瓦状、穿孔は單一である。放射組織は平伏・方形細胞からなる異性、おもに單列である。

散孔材D diffuse-porous wood D 図版70 23a-23c. (石圓炉内炭化物)

非常に小型の管孔が単独または2~数個が複合し、日々に径を減じながら散在する散孔材である。道管の壁孔は交瓦状、穿孔は横棒の数が30本前後の階段状である。放射組織は異性、1~3細胞幅、多列部の上下端に方形または直立細胞が單列で約2細胞高ある。

(5) まとめ

当遺跡から出土した炭化材は落葉広葉樹林の代表的な樹種が多い。当遺跡の立地からしてもまた当報告の結果からも居住域の周辺にひろがる落葉広葉樹林から様々な材を利用していたことは明らかである。その中でもクリは複数の住居跡・土坑および埋甕内や埋設土器内から多数検出され、様々な用途に利用されていたことが伺える。当遺跡にはほど近い戸入村平遺跡（藤根・吉川、1994）の縄文時代中期後半の炭化材調査結果もクリの出土数が多く、また全国的にもこの時期はクリ材の出土例が多い。当地区もクリ材を多用する同様な傾向であったことが明らかとなった。

SB 5・Pit 2 の埋甕内から検出された炭化物は、土器の底部に穴があけられ伏せて埋められていることから、埋められた後に入ったとも考えられる。しかし下層の炭化物から測定された放射性炭素年代値は 4150 ± 140 yrBP であり土器型式の時期とはほぼ近い値であることから、大部分の炭化物は当時期のものである可能性が高いことが示唆された。そして複数の樹種が出土したがその内、ブナ属・クリは甕内の各層から検出され破片数・総量とともに多いことからもともと埋甕内に入っていた可能性がある。またブナ属・クリにつき量がやや多かったカツラ・アワブキは他の遺構からはまったく検出されなかったことから、選択的に埋甕内に入れられた可能性がある。そして微量ではあるが各層から検出された果実微破片も他の遺構からはまったく検出されておらず、もともと埋甕内に入っていた可能性が高い。これまでに埋甕内の炭化材の樹種を調査した例はほとんど知られておらず、今後このような資料の収集と蓄積をしていくことにより、その中にしていた樹種の特徴や意味、さらには埋甕の用途・機能についても明らかになってくるであろう。

引用文献

- 藤根 久・吉川純子 1994 「戸入村平遺跡出土炭化材の樹種同定および炭化種実同定」 314-318 P.
(財) 岐阜県文化財保護センター 1994 「戸入村平遺跡」 図版60-64

3. 徳山・山手宮前遺跡出土の赤色顔料および陶器内側の付着物質について

菱田 量 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

岐阜県・徳山・山手宮前遺跡から、縄文時代中期後葉?の土器に塗布された赤色顔料と、近世の陶器内側に付着した暗赤褐色物質が見いだされた。ここでは、赤色顔料および暗赤褐色付着物質に含まれる元素を、蛍光X線分析によって明らかにした。赤色顔料として用いられたものの種類としては、従来、水銀朱 (HgS)、ベンガラ (Fe_2O_3)、鉛丹 (Pb_3O_4) などが知られている(たとえば市毛、1984)。分析結果から、土器に塗布された赤色顔料がどの種類の赤色顔料に関連するものであるかについて検討した。また、陶器内側の暗赤褐色付着物質についても、若干の考察を行った。なお、試料は遺物であるため、すべて非破壊で分析を行った。

(2) 試料

第47表 分析試料一覧表

試料No	種類	色調	備考
1	赤色顔料部分	赤色(10R5/6)	縄文土器(中期後葉?)
2	顔料以外の部分	にぶい黄橙色(10YR6/3)	縄文土器(中期後葉?)
3	付着物質	赤褐色(5YR5/6)から 暗赤褐色(5YR3/3)	近世陶器の内側

(註) 色調は「標準土色誌」(小山・竹原、1967)を参考にした

(3) 分析方法

No.1~3の試料について、エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて、非破壊による分析を行い、含まれる元素を定性的に明らかにする。土器試料については、赤色顔料が塗布された部分(No.1)、および比較のために、顔料が塗布されていない部分(No.2)についても分析を行う。また、陶器内側の付着物質(No.3)については、測定面が得られない形状なので、付着物質部分にセロハン粘着テープをはりつけ、表面の一部を剥離させて採取したものを分析試料とする。

分析装置は、セイコー電子工業㈱製卓上型蛍光X線分析計 SEA-2001L である。X線発生部の管球はロジウム (Rh) ターゲット、ベリリウム (Be) 窓、X線検出器は Si (Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電圧50kV、試料室内は真空である。

結果については、各試料の蛍光X線スペクトル図を示し、蛍光X線のピークから、含有する元素を明らかにした。なお、ここでの試料は、検出される元素として、Fe (鉄) が顕著にみられるので、蛍光X線の強度比として、 Fe/Si の値を示して比較した。また、参考データとして、上記と同条件の中で、電圧を15kVにして測定し、 Fe_2O_3 (全 Fe) を定量した。定量には、通産省工業技術院地質調査所の岩石標準試料を用い、ファンダメンタルパラメーター法により、%で表した。なお、この定量値は、試料を非破壊で測定したものなので、他の分析方法でおこなわれた定量値とは若干異なる。

(4) 結果

図1~3に試料の蛍光X線スペクトルを示す。これらの試料には、主な主成分元素として Fe (鉄)

が顕著に検出され、No.1、2について、その他に Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、P (リン)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン) のピークがみられる。Hg (水銀) や Pb (鉛) のピークは、見い出されない。

以下に個々の試料の結果にみられる、上記以外の特徴的な点について述べる。

No.1 : Fe のピークが顕著にみられる。蛍光X線の強度比 Fe/Si は2.09である。Fe₂O₃は13.9%である。微量元素として Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Zr (ジルコニウム) のピークが認められる。

No.2 : No.1 と比較して Si のピークが強く表れている。蛍光X線の強度比 Fe/Si は1.11である。Fe₂O₃は7.9%である。微量元素として Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Zr (ジルコニウム) のピークが認められる。Cu (銅) ?、Zn (亜鉛) の不明瞭なピークがみられる。

No.3 : Fe のピークが非常に顕著に表れている。その他、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、P (リン)、Ca (カルシウム)、Mn (マンガン) のピークが確認できる。Ca (K α) と Mn (K α) の間に Fe (K α) のエスケープピーク?と考えられる小さなピーク (エネルギー4.66keV) がみられる。蛍光X線の強度比 Fe/Si は123.43である。Fe₂O₃は85.3%である。また、Hg (水銀) や Pb (鉛) のピークは、認められない。なお、試料No.3はセロハン粘着テープにより試料採取したものである。テープに Cl (塩素) が含まれるため、Cl の K α 、K β のピークが比較的明瞭にあらわれている。また、Cl のピークと X線管球ターゲットからの Rh (ロジウム) の L α 、L β のピークは重なっている。

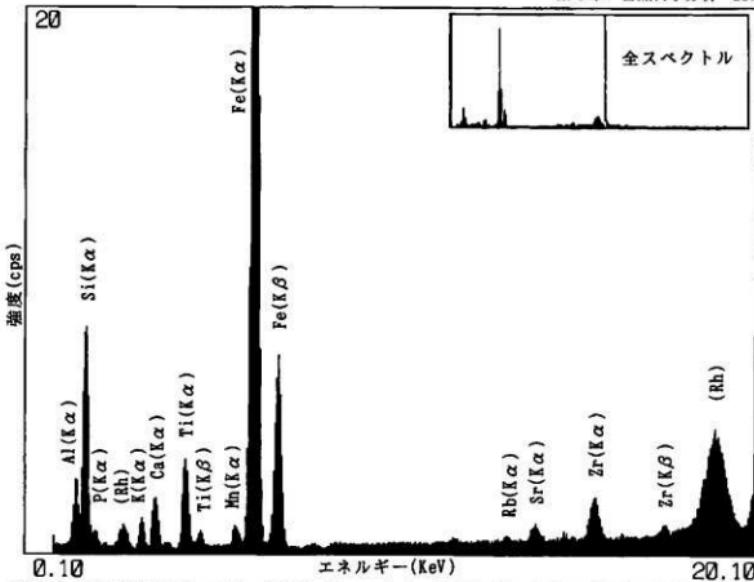
(5) 考察

①土器に塗布された赤色顔料について

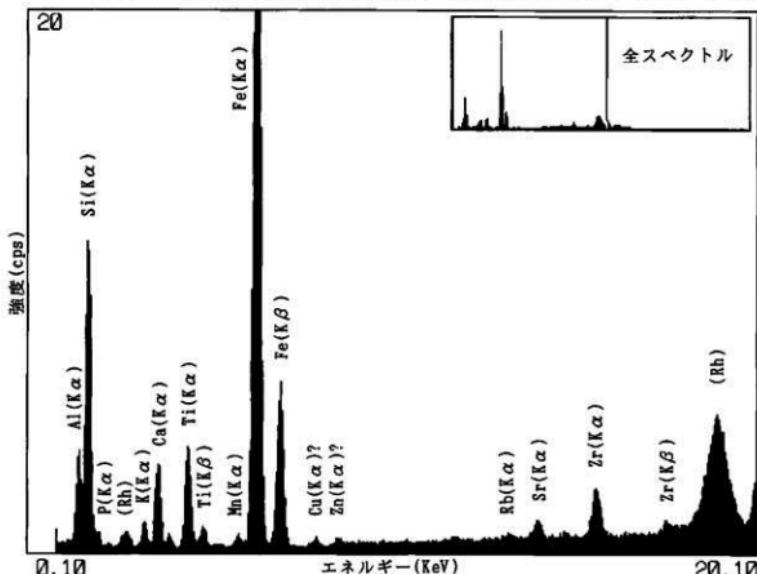
先にも述べたように、赤色顔料の種類として、水銀朱 (HgS)、ベンガラ (Fe₂O₃)、鉛丹 (Pb₃O₄) が知られている。土器に塗布された赤色顔料 (No.1)においては、分析結果から、Fe のピークが明瞭に確認された。さらに、No.1 では、顔料が塗布されていない部分 (No.2) と比較して、Fe/Si の強度比や Fe₂O₃の値が高くなっている。以上のことに加えて、Hg や Pb は検出されないことから、No.1 の土器に塗布された赤色顔料は、ベンガラであると考えられ、水銀朱や鉛丹ではない。

ベンガラは鉄の化合物である酸化鉄(III)、すなわち Fe₂O₃を主な成分とする。ベンガラは、古代においては、鉄分に富んだ土壤 (たとえば褐鉄鉱を含むものなど) を焼いてつくられたと考えられている (山崎、1987など)。もちろん、天然の赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した場合もあると考える。また、北野 (1994)によると、近世においては、上記の他に、硫化鉄 (磁硫鉄鉱: FeS、黄鉄鉱: FeS₂) が風化して形成された綠礬 (りょくばん、通称ロウハ、硫酸鉄(II): FeSO₄·7H₂O) を原材料とし、これを焙焼して酸化鉄(III)を製造し、ベンガラを生産していたことが知られている。さらに、矢彦沢ほか (1995) は、黄鉄鉱を含むグライ土層の堆積物の風化過程において、含水酸化鉄(III) (Fe₂O₃·nH₂O) が沈積することを確認し、これがベンガラの原材料になる可能性を示唆している。

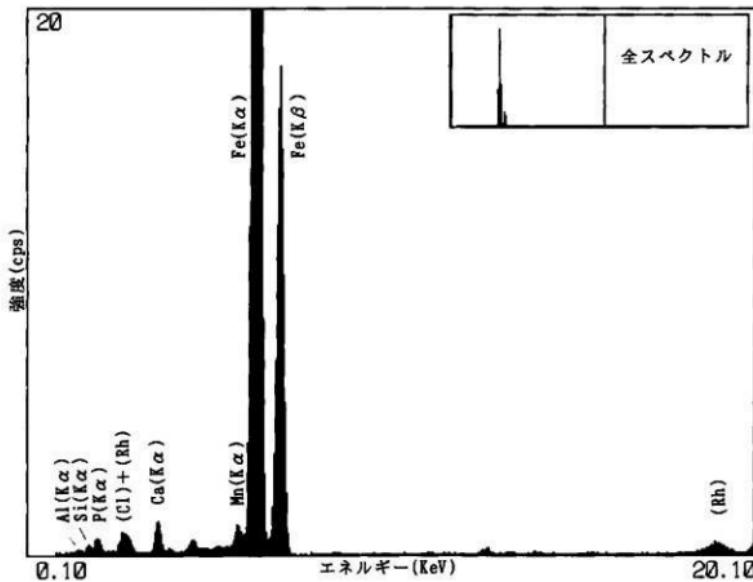
このように、ベンガラの原材料や製法については、いくつかのものが示されている。そして、含有する元素の違いによってベンガラを分類できる可能性がある。今回の土器の赤色顔料の分析では1点だけなので、種類を分類することはできないが、今後、多くの資料 (試料) の分析例から解析していくことが有効と考える。



第124図 (図1) 蛍光X線スペクトル図(1): No.1、徳山・山手宮前遺跡、縄文土器赤色顔料塗布部分
Al: アルミニウム、Si: ケイ素、P: リン、K: カリウム、Ca: カルシウム、Ti: チタン、Mn: マンガン、Fe: 鉄、
Rb: ルビジウム、Sr: ストロンチウム、Zr: ジルコニウム、(Rh): ロジウム (X線管球ターゲットから)



第125図 (図2) 蛍光X線スペクトル図(2): No.2、徳山・山手宮前遺跡、縄文土器の顔料が塗布されていない部分
Al: アルミニウム、Si: ケイ素、P: リン、K: カリウム、Ca: カルシウム、Ti: チタン、Mn: マンガン、Fe: 鉄、Cu: 銅、Zn: 鋼
Rb: ルビジウム、Sr: ストロンチウム、Zr: ジルコニウム、(Rh): ロジウム (X線管球ターゲットから)



第126図 (図3) 單光X線スペクトル図 (3): No.3、徳山・山手宮前遺跡、陶器内側の暗赤褐色物質
Si: ケイ素、P: リン、Ca: カルシウム、Mn: マンガン、Fe: 鉄
(Cl): 塩素 (セロハン粘着テープから)、(Rh): ロジウム (X線管球ターゲットから)

②陶器内側の暗赤褐色付着物質について

No.3の暗赤褐色付着物質の分析結果をみると、Feのピークが非常に強く表れている。蛍光X線の強度比 Fe/Si が123.43と非常に大きく、 Fe_3O_4 の定量値も85.3%と高い値になっていることから、大部分が鉄分からなる物質であることが分かる。

状況的な証拠が少ないので、明確なことはいえないものの、以下のようなことを推定した。陶器内に普通の水が入れてあっただけでは、このような鉄分が多い付着物が生成することは考えにくい。おそらく、陶器内には、鉄が多く含まれる液体を入れ、保存してあったことが示唆される。このような液体の可能性としては、ベンガラのように鉄を主成分とする顔料に由来する溶液、あるいは鉄くずなどの金属の鉄に関連し、なんらかの用途で溶液状になっていたものなどが考えられる。

一方、P（リン）のピークが認められることから、植物起源の物質が混入していたことも予想される。

こうした物質については、分析結果とともに、遺物の出土状況などから考古学的な判断を加えた上で、さらに検討を加えるべきであろう。そして、他の遺跡での出土例なども考慮して総合的に解釈することが望まれる。

引用文献

- 市毛 熊 1984 「増補 朱の考古学」、第2版、考古学選書12、雄山閣出版。324P。
 北野信彦 1994 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点II—文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について—」『古文化財の科学』、39、93-102P。
 小山正忠・竹原秀雄編 1967 『新版 標準土色帖』、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修、日本色研事業株式会社 発行。
 矢彦沢清九・両角秀俊・藤松 仁・村上 泰・森嶋 稔 1995 「弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来—フォッサマグナ東端地域を中心として—」『考古学雑誌』、80、4、75-87P。
 山崎一雄 1987 『古文化財の科学』、恩文閣出版。352P。

4. 山手宮前遺跡出土さし銭のひもの分析

財団法人元興寺文化財研究所

(1) 分析の概要

① 使用機器・原理

- 電子線マイクロアナライザー (EPMA) (㈱堀場製作所製 EMAX2000)

EPMAは試料に電子線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のX線を検出することにより元素を同定する。

- フーリエ変換型赤外分光光度計 (FT-IR) (日本電子㈱製 JIR-6000)

赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

- 走査型電子顕微鏡 (SEM) (日立製作所㈱製 S-415)

② 分析試料

- さし銭のひも

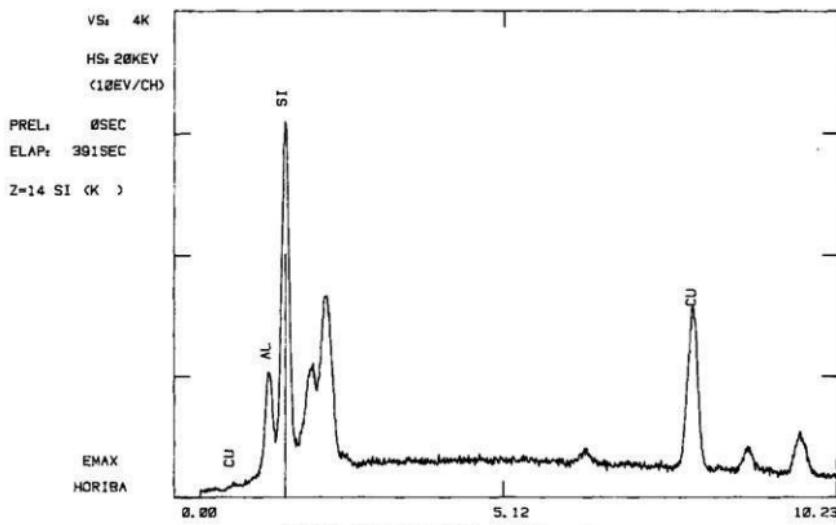
(2) 分析結果

① さし銭のひも

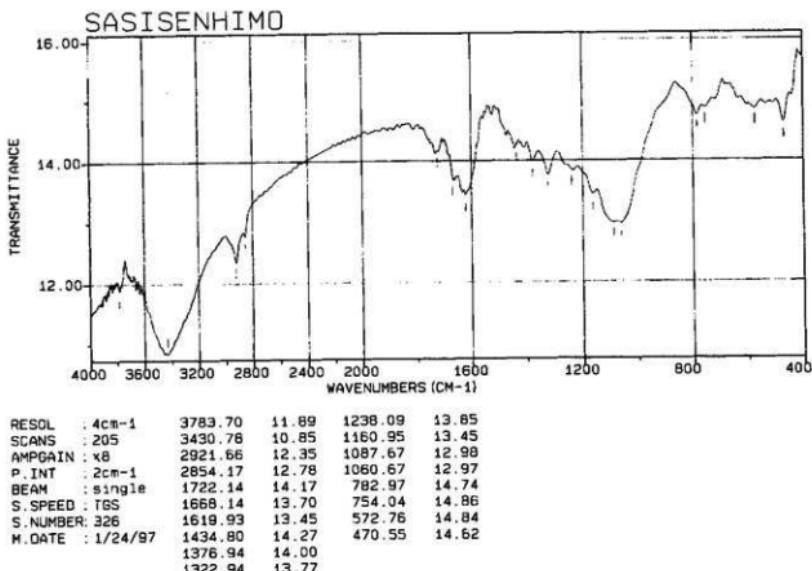
SEM観察(図版71、写真8・9)、EPMA(第127図)、FT-IR(第128図)の結果、イネ科の茎(ワラ?)の可能性が高い。

(ワラの標準試料に類似している。図版71、写真10・11、第129図を参照)

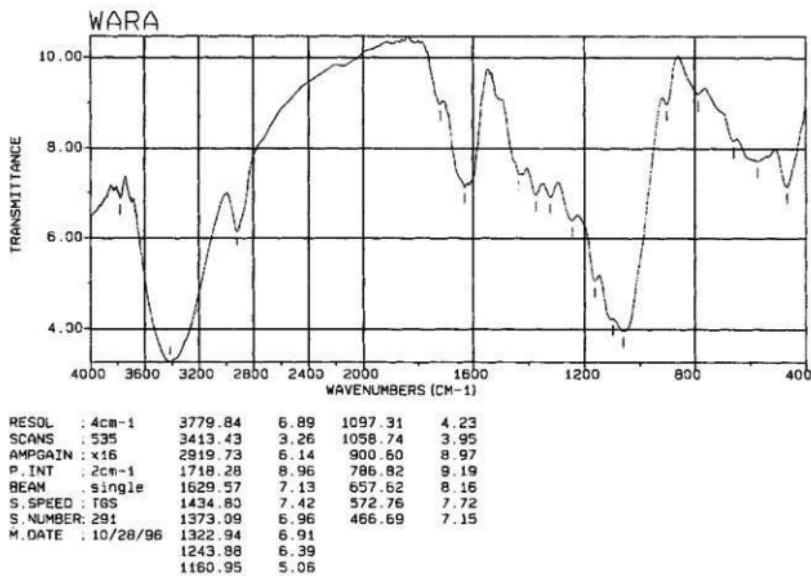
— CAB: ARAOMINAMI SASISENHIKO



第127図 さし銭のひもの分析(1) EPMAチャート



第128図 さし銭の紐の分析(2) FT-IRチャート



第129図 番の分析 FT-IRチャート

5. 山手宮前遺跡出土の黒曜石製石片の原材産地分析および非破壊分析による水和層測定

薬科 哲男（京都大学原子炉実験所）

(1) 分析方法

遺物試料は超音波洗浄器により水洗を行うのみの完全な非破壊で、エネルギー分散蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。分析元素はAL、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石ではCa/K、Ti/K、Mn/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrをそれぞれ用いる。今回分析を行った山手宮前遺跡出土の黒曜石出土の黒曜石製石片の元素分析結果を第48表に示す。

(2) 同定方法

相間を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT²検定である。これによってそれぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する。原石群を作った原石試料は直径3cm以上で分析値は誤差が小さく分析することができる。多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり短時間で測定を打ち切ったとき、得られた遺物の測定値には大きな誤差範囲が含まれ、希に原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行ったときに判定の信頼限度としている0.1%に達しない確率を示す場合がみられる。この場合には原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D²の値で、この値が小さい程遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いがそこの原石産地と考えてほん間違ないと判断されたものである。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では99個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略し、高い確率で同定された産地のみの結果を第49表に記入した。

第48表 山手宮前遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
47860	0.149	0.066	0.131	1.381	1.056	0.361	0.273	0.089	0.015	0.247
47861	0.138	0.068	0.101	1.176	1.522	0.339	0.283	0.082	0.000	0.203
JG-1	0.768	0.228	0.077	3.674	1.002	1.320	0.261	0.058	0.016	0.226

JG-1: 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192 (1974)

(3) 非破壊分析による黒曜石製遺物の水和層測定

分析は黒曜石の表面に顕微鏡を通して光を照射したときに、黒曜石の表面で反射する光と、水和層で反射する光で生じるの干渉波の波長から水和層の厚さを求める方法。光の反射を利用するため、遺物の表面にできた使用痕および埋土中にできた摩耗傷などが水和層測定の障害になり測定できない場合が多々ある。また、水和層と新鮮面との境界面での反射光が非常に弱いため、境界面が顕微鏡下で探して分析を行うため、試料によっては週1個に三時間以上かかることがある。今回遺物の異なる場所について3ヶ所を分析し、平均値と標準偏差を求めて第49表に記した。遺物の水和層厚さを経年年代に換算するには、水和層を分析した黒曜石の経年年代を炭素-14法、フィッショントラック法で求めた絶対年代から、徳山地区における水和速度を求めて行う。仮に長野県御代出町における霧ヶ峰産黒曜石の水和速度 $4.44\text{ }\mu\text{m}/\text{千年}$ を用いて年代の換算を行うと、 $4.12\text{ 年} = 4.426^2 \div 4.44$ になる。また、和田岬第1群の黒曜石の水和速度は霧ヶ峰産黒曜石より大きいが、和田岬第3群の水和速度は不明で実年代へ換算はできない。この水和速度は黒曜石の埋土中に受ける温度によって異なるため、各地域毎に黒曜石が環境から受けた温度を正確に求めなければ、正確な年代の換算はできない。また、水和層厚さを旧石器の石器様式で校正すれば、様式の不明の石器でも水和層厚さから何時の時期の石器か判定でき、縄文時代であれば水和層厚さを土器編年で校正すれば、土器を伴わない遺跡であっても黒曜石の水和層厚編年から時代が特定でき、データー積み上げることにより、古代の各時代（水和層厚さ）における地域間交流（産地分析結果）を明らかにする重要な資料が与えられると思われる。

第49表 山手宮前遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定結果

分析番号	遺物番号、遺物名、出土区、層	原石产地(確率)	判定	3ヶ所の水和層厚さ(μm) 平均値±標準偏差	遺物品名(備考)
47860	1-008, SB 6,	霧ヶ峰(37%)	霧ヶ峰	4.426 ± 0.053	剣片
47861	2-029, SB 6 SU	和田岬第3群(D ² =42)	和田岬	5.018 ± 0.038	"

第7章 まとめ

徳山ダム建設に伴って廃村となった旧徳山地内の埋蔵文化財発掘調査も11年が経過した。

これまでに、西谷のはいづめ・小の原・戸入村平遺跡や東谷の下開田村平・追分・長吉遺跡、普賢寺跡などの調査が進み、特に戸入村平遺跡の第4号住居跡からは、中期後葉の土器多数が出土し、学会の注目を集めようになつた。

そうした中で、平成4年度と平成5年度の2年次にわたって行われた、山手宮前遺跡の2700m²余りの発掘調査によって検出された層序・遺構、そして出土遺物の概要是次のように要約できるであろう。

基本的層序は、表土・耕作土層（第I層）と、地山である段丘堆積物層（第IV層）との間に暗褐色土層（第II層）と、明黄褐色土（第III層）とがみられ、暗褐色土層が中期後葉を主体とする前期後葉から弥生前期までの遺物包含層で、その他、古代から中・近世の遺物も認められた。

また、部分的に残る明黄褐色砂質土からは早期の土器が比較的まとまって出土し、これまででは地山とされてきた黄褐色土への再検討が必要となってきた。

出土遺物の総点数は約1万点にのぼり、その約9割は縄文時代の遺物で、時期を判断できる土器からみると、その9割以上は中期後葉のものが占める。その他は早期・前期のものとごく少量ながら後期・晚期から弥生前期のものが認められた。また、古代・中世から近世にかけての遺物も約800点出土した。

縄文時代については、遺構として縄文時代中期後葉の住居跡（炉跡）8軒と、土器埋設遺構1基、中期後葉を中心とするピット・土坑88基を検出した。このうち、住居跡2軒からは、逆位で埋設された埋甕や、石皿、さらには炉内に敷かれた土器や扁平円盤もみられ、中期後葉の住居についての好資料が得られた。なお、SB5の埋甕内の土には多数の炭化物が含まれており、分析の結果、様々な樹種の材であることが判明した。

石器についてみてみると、本遺跡では、多数の切目石錐が出土し、その割合は、46.5%に及ぶ。の中には、「糸巻きの帯状痕跡」の認められるものもかなり存在し、特にSK17より出土した切目石錐では、被熱による変色によって長軸方向中央部にかけられていた糸巻きの跡が観察された。

P586からは切目石錐13点がまとめて出土し、その出土状況からは、糸か網状のものにつながっていた可能性が考えられる。

切目石錐とともに打欠石錐も多数出土（13.4%）しているが、平均質量でみると打欠石錐は切目石錐の約2倍となり、用途の違いも考えられる。

P585からは、チャート製の剥片20点がまとめて出土し、うち2点が接合した。本遺跡出土の石器の石材としては、地元で入手できるチャートや砂岩が多く、これらの石材を器種ごとに使い分けて利用している。なお、黒曜石や下呂石製の製品もわずかではあるがみられた。

出土した土器の大半は、中期後葉の地文に燃糸文の施された里木II式に類似する土器と、キャリバー形口縁をもつ器形を呈し、口縁部には渦巻文や楕円形区画文を配して、胴上部には棒状工具による連弧文を施すいわゆる咲焼式土器で、特に第6号住居跡の炉内や腹土下層からは、まとまった出土をみた。なお、本遺跡ではその出土状況より、里木II式に類似する土器と咲焼式土器とは、同時に存在し

たと考えられる。

その他、早期の高山寺式土器、前期後葉から末葉にかけての北白川下層III式土器、中期後半の船元III・IV式土器が比較的まとまって出土し、後期や晚期から弥生前期にかけての土器もわずかではあるが出土した。

なお、住居や配石土坑（壙）の配置には、環状構造がみられ、中央部の広場状のエリアを避けるようにして、半円形の分布がみられた。

次に、その他の時代としては、中世から近世を中心とする掘立柱建物跡15棟と、ビット・土坑33基を検出した。特に、第1号掘立柱建物跡からは、7本の木柱根を検出し、分析の結果材はクリで、江戸時代のものと判明した。15棟のうち何棟かは、川に沿った段丘と同じ南北方向にそろえて建っており、中世から近世にかけての集落である可能性も考えられる。出土した遺物からも、18世紀後半以降の遺物を中心に、14～15世紀の古瀬戸や、16～17世紀の越前、さらには、わずかではあるが、10世紀後半から11世紀の灰釉陶器片も出土した。また、さし銭81枚が紐に通された状態で出土し、これまで文献でははっきりとしなかった、明治以前の山手集落の様子についての貴重な資料を得ることができた。なお、越前産の石臼からは、廃村時まで続いた越前との深いつながりがしのばれる。

引用・参考文献

〈縄文時代早期の土器関係〉

- 南知多町教育委員会 1980 「先丸貝塚」
 勝山市教育委員会 1977 「破入遺跡」
 米原町教育委員会 1986 「磯山城遺跡」
 平安学園考古学クラブ 1956 「石山貝塚」
 東浦町文化財保存会 1955 「入海貝塚」
 南知多町教育委員会 1976 「清水ノ上貝塚」
 茅野市教育委員会 1986 「高風呂遺跡」
 洞戸村教育委員会 1988 「市場遺跡発掘調査報告書II」

〈縄文時代前期の土器関係〉

- 大野政雄 1960 「村山遺跡」
 岐阜市歴史博物館 1991 「美濃平野のあけぼの」
 坂祝町教育委員会 1988 「芦戸遺跡」
 岐阜市教育委員会 1995 「御望遺跡」
 綱谷克彦 「北白川下層式」「器様式」「縄文土器大観1」
 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989 「京都府遺跡調査報告書第12集 志高連跡」
 直良信夫 1926 「播磨国明石郡垂木村山田大歳山遺跡の研究」
 直良信夫 1943 「大歳山遺跡」「近畿古代の文化叢業」
 中村義則 1986 「播磨大歳山遺跡1」「神戸市博物館研究紀要3」
 「十三菩提式土器様式」「縄文土器大観1」

〈縄文時代中期の土器関係〉

- 萩原町教育委員会 1974 「飛驒桜洞・沖田」
 辰口町教育委員会 1978 「莊生遺跡」
 間壁忠彦・間壁蘋子 1971 「里木貝塚」「倉敷考古館研究集報」第7号
 間壁忠彦 1988 「船元・里木式土器様式」「縄文土器大観3 中期II」
 小江慶雄 1954 「滋賀県龍淵遺跡発見の縄文式土器」「京都学芸大学学報」A(文科) No.5
 京都教育大学考古学研究会 1989 「考古学資料室所蔵遺物の資料紹介」「史林」第22号
 泉拓良 1982 「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文時代中期後半を中心に—」「考古学論考 小林行雄博士
 古希記念論文集」
 京都大学埋蔵文化財研究センター 1985 「京都大学埋蔵文化財調査報告III—北白川追分町縄文遺跡の調査
 —」
 泉拓良 1988 「呪烟・履醜式土器様式」「縄文土器大観3 中期II」
 京都大学文学部博物館 1991 「先史時代の北白川」
 泉拓良 1996 「縄文土器出現」「歴史発掘」2
 春日井恒 1996 「東海地方縄文中期における中富式土器群の問題」「美濃の考古学」創刊号
 北勢町教育委員会 1993 「川向遺跡発掘調査報告」
 矢野健一 1993 「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」「江口貝塚I」
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「牛岡遺跡II」

- 磯部幸男・久永春男他 1960 「呪煙貝塚」(愛知県知多郡師崎町立師崎中学校)
- 豊田市教育委員会 1968 「船塚遺跡」
- 各務原市教育委員会 1973 「炉烟遺跡発掘調査報告書」
- 南知多町教育委員会 1983 「林ノ峰貝塚I」
- 袋井市教育委員会 1984 「長者平遺跡」
- 奥川弘成 1986 「呪煙貝塚の呪煙式土器」「知多古文化研究」2
- 奥川弘成 1990 「知多半島における縄文時代中期の諸様相(その1)」「知多古文化研究」6
- 奥川弘成 1993 「知多半島における縄文時代中期の諸様相(その2)」「知多古文化研究」7
- 岩瀬彰利 1991 「呪煙式土器の分布とその背景—縄文時代の通婚圈—」「三河考古」第4号
- 岩瀬彰利 1994 「遠古文化土器小考」「転機」第5号
- 刈谷市教育委員会 1993 「尾張三河地方の考古資料図録」
- 桐生直彦 「遠古文化土器」
- 紅村弘 1957 「東海の先史遺跡—美濃編一」
- 紅村弘・増子康真他 1977 「東海先史文化の諸段階 資料編」
- 増子康真 1969 「木曽川下流域の縄文中期後半期土器について」「古代学研究」第54号
- 増子康真 1978 「縄文中期後半土器の編年—東海地方西部地域—」「古代人」34
- 増子康真 1981 「第3章 東海地方西部の縄文化」「東海先史文化の諸段階」(本文編)
- 増子康真 1986 「東海西部沿海地域縄文中期土器型式の検討~北屋敷式の細別と呪煙式の再検討~」「知多古文化研究」2
- 増子康真 「近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点—東海西部との対比から—」
- 稻武町教育委員会 1995 「ヒロノ遺跡緊急調査報告書」
- 美濃加茂市教育委員会 1971 「神明遺跡発掘報告書」
- 美濃加茂市教育委員会 1973 「牧野小山遺跡」
- 可児町北森遺跡発掘調査団 1973 「北森遺跡」
- 可児町教育委員会 1976 「宮之脇遺跡発掘調査報告書」
- 坂下町教育委員会 1976 「門垣戸遺跡」
- 福井県 1985 「福井県史 資料編13考古—本文編」
- 坂靖志 1990 「天神遺跡」「福井市史 資料編1」
- 和泉村教育委員会 1976 「和泉村の埋蔵文化財」
- 和泉村教育委員会 1978 「後野遺跡」
- 大野市教育委員会 1985 「右近次郎遺跡II」
- 勝山市教育委員会 1982 「三室遺跡調査概要」
- 勝山市教育委員会 1983 「三室遺跡調査概要II」
- 勝山市教育委員会 1984 「三室遺跡調査概要III」
- 金沢市教育委員会 1984 「金沢市新保本町チカモリ遺跡—石器編—」
- 金沢市埋蔵文化財調査委員会 1981 「金沢市笠舞遺跡」
- 南久和 1995 「溝巻状文—飛驒と北陸の交流—」「飛驒と考古学」
- 南久和 1984 「相対的編年の方法論に関する試論(改編)ー北陸の縄文時代中期の編年他9編ー」「南久和著作集」第1集
- 永峯光一編 1981 「縄文土器大成2—中期」
- 小林達雄他 1981 「縄文文化の研究4・縄文土器II」
- 小林達雄・小川忠博 1988 「縄文土器大観2・中期I」
- 小林達雄・小川忠博 1988 「縄文土器大観3・中期II」

- 小林達雄 1994 「縄文土器の研究」
 戸沢充則編 1994 「縄文時代研究事典」
 財団法人岐阜県文化財保護センター 1995 「岡前遺跡」
 古川町教育委員会 1993 「中野山越遺跡発掘調査報告書」
 松本市教育委員会 1990 「松本市坪ノ内遺跡」
 鈴木博彦・山本輝久 1988 「加曾利E式土器様式」「縄文土器大観2 中期I」
 鈴木博彦他 1980 「神奈川考古第10号 縄文時代中期後半の諸問題ーとくに加曾利E式と曾利式土器との
 完形についてー 土器資料集成図集」
 山梨県考古学協会 1996 「すまいの考古学ー住居の廃絶をめぐってー」

〈埋甕関係〉

- 渡辺誠 1970 「縄文時代における埋甕風習」「考古学ジャーナル』No.40
 渡辺誠 1975 「桑飼下遺跡発掘調査報告書」(舞鶴市教育委員会)
 木下忠 1981 「埋甕—古代の出産習俗」
 桐原健 1988 「縄文のムラと習俗」
 植田文雄 1991 「拡張、あるいは展開する縄文文化—西日本における埋甕の出現とその変容をめぐってー」
 『滋賀考古』第5号
 財団法人岐阜県文化財保護センター 1993 「陰地遺跡」
 日義村教育委員会 1995 「マツバリ遺跡」
 桜井秀雄 1995 「埋甕の用途・機能をめぐる素描—研究史を振り返ってー」
 『長野県埋蔵文化財センター紀要4』
 長野県史刊行会 1988 「長野県史」考古資料編
 鹿田雅彦 1990 「一モノーとココローその軌跡」『東海考現』創刊号

〈石錐関係〉

- 渡辺誠 1973 「縄文時代の漁業」
 渡辺誠 1981 「編み物用錐具としての自然石の研究」「名古屋大学文学部研究論集』80
 渡辺誠 1983 「縄文時代の知識」
 渡辺誠 1978 「福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書」(勝山市教育委員会)
 蒲郡市教育委員会 1982 「形原遺跡発掘調査報告書」
 中津川市教育委員会 1985 「阿曾田遺跡」
 渡辺誠 1991 「石錐ピット出土の礫石錐について」「垣内遺跡発掘調査報告書」(高山市教育委員会)
 山本直人 1988 「北陸地方の漁網錐」「季刊考古学』25号
 伊藤祐樹・猪田通弘 1982 「美濃赤山村の切目石錐(越美山系をめぐって)」「岐阜史学』第76号
 後藤信幸・吉田英敏 1984 「洞戸村底津遺跡について—石錐考—」「岐阜県考古』第9号
 吉田英敏 1989 「III縄文時代」「塙原遺跡・塙原古墳群」(関市教育委員会)
 吉田英敏他 1994 「川合遺跡群」(可見市教育委員会)
 駒ヶ根市教育委員会 1988 「辻沢南遺跡」
 広島大学文学部帝釽铁遺跡群発掘調査室 1995 「帝釽铁遺跡群発掘調査室年報X」

〈その他石器関係〉

- 鈴木道之助 「石器入門事典—縄文—」

- 金津町教育委員会 1993 「桑野遺跡発掘調査概要」
 桃野真晃 1982 「石器を作るハンマー—凹石の用途について—」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』
 財団法人岐阜県文化財保護センター 1995 「西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡」

〈錢貨・石臼・アミダイ関係〉

- 日本貨幣商協同組合 1983 『日本貨幣カタログ』
 兵庫埋蔵鉄調査会 1996 『日本出土鉄統覧』
 小野木学 1996 「岐阜県下の櫛」『出土錢貨』第5号
 財団法人岐阜県文化財保護センター 1995 『下巾上遺跡』
 伊吹町教育委員会 1994 「伊吹町内遺跡発掘調査II 石臼生産遺跡」
 名古屋市博物館 1979 「臼一食の道具」
 三輪茂雄 1985 「徳山村の臼と全国的な分布との関係」『第3回徳山村ミニ学会 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い』
 三輪茂雄 1978 「石臼探訪」
 高橋俊示 1996 「越前や江州から伝えられた石臼」『建設省越美山系砂防工事事務所広報誌』
 江口義春 1987 「故郷の灯は消えて 徳山村の民俗散歩」
 徳山村教育委員会 1987 『徳山の山村生産用具一実測図編一』

〈旧徳山村の遺跡関係〉

- 小川栄一 1952 『美濃の石器時代文化』
 徳山村史編集委員会 1973 『徳山村史』
 小沢一弘 1975 「美濃徳山村宮ヶ原遺跡出土の縄文時代遺物」『古代文化』第27巻第10号
 徳山村の歴史を語る会 1984 「徳山村のあけぼのを求めて—岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告一」
 徳山村の歴史を語る会 1984 「徳山村の遺跡（増補版）」
 篠田通弘 1986 「大昔の徳山村—繩文人の息吹きを追って—」（徳山村教育委員会）
 岐阜県 1972 『岐阜県史 通史編原始』
 岐阜県教育委員会 1984 「揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書」
 岐阜県教育委員会 1989 「はいづめ遺跡」
 岐阜県教育委員会 1991 「小の原遺跡・戸入障子墓遺跡」
 財団法人岐阜県文化財保護センター 1993 「追分遺跡・下開田平遺跡」
 財団法人岐阜県文化財保護センター 1994 「戸入村平遺跡」
 財団法人岐阜県文化財保護センター 1994 「長吉遺跡・普賢寺跡」

図 版

図版 1



山手宮前遺跡調査前

(南より)



遺跡遠景および作業風景

(北西より)



作業風景

(南西より)

土層の様子

4列セクション
4 N杭付近

(西より)



土層の様子

4列セクション
4 K杭付近

(東より)



第1号住居跡

炉 跡

(南西より)



図版3



第2号住居跡

(南より)



第2号住居跡

履土中央部

最上層

土器出土状況 (1022)

(東より)



同上

(北西より)

第 2 号住居跡

炉 踪

(南東より)



第 3 号住居跡

炉 踪

(西より)



第 4 号住居跡

炉 踪

(西より)



図版 5



第5号住居跡

(南より)



第5号住居跡

炉跡

(南より)



第5号住居跡

P 2 埋甌出土状況

(南より)

第 6 号住居跡

(東より)



第 6 号住居跡
炉 跡

(西より)



第 6 号住居跡
P 13 埋甕出土状況

(南より)



図版 7



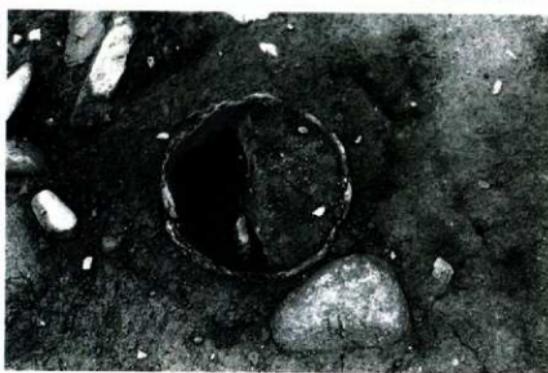
第 6 号住居跡
石出土状況

(南より)



第 6 号住居跡
土器出土状況 (1099)

(北より)



第 6 号住居跡
床面埋設土器 1 (1096)
出土状況

(南東より)

第 7 号住居跡
炉 跡

(南より)



第 8 号住居跡

(西より)



第 8 号住居跡
炉 跡

(北西より)



図版 9



第7号住居跡
土器出土状況 (1146)

(南東より)



土器埋設造構 (1150)

(東より)



土器出土状況 (1143)

割片集積出土状況

P 585

(東より)



切目石錐集積出土状況

(上部) P 586

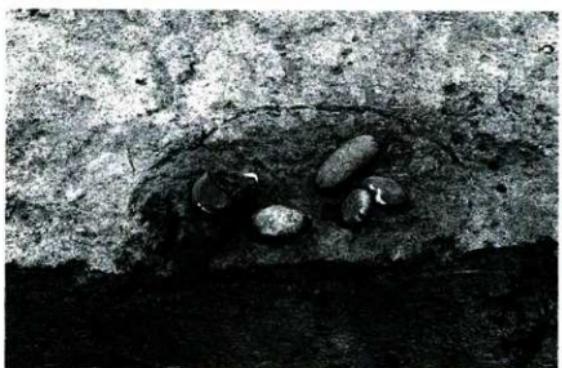
(北より)



同 上

(下部)

(北より)



図版 11



配石土坑群(北)検出状況

SK16 P 129

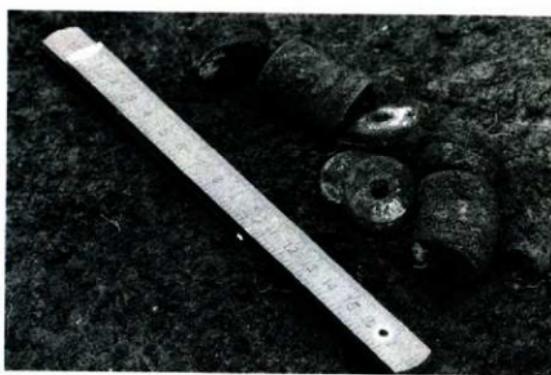
P 125 P 126 P 127

(西より)



土器出土状況 P 136

(北より)



さし銭出土状況

(西より)

第 1 号掘立柱建物跡

(SHI)

上空より

(左が北)



第 1 号掘立柱建物跡

(SHI・P 191)

木柱根検出状況

(南より)



第 1 号掘立柱建物跡

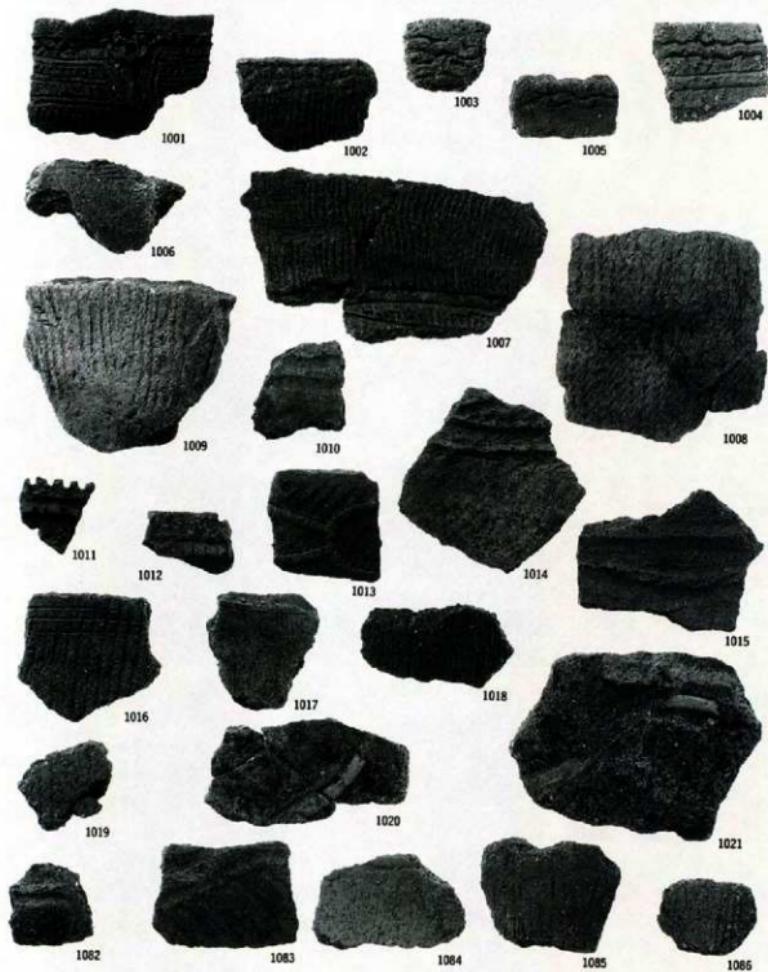
(SHI・P 145)

木柱根検出状況

(南より)



図版 13



第 1・3・4・5 号住居跡出土土器



1022



1023



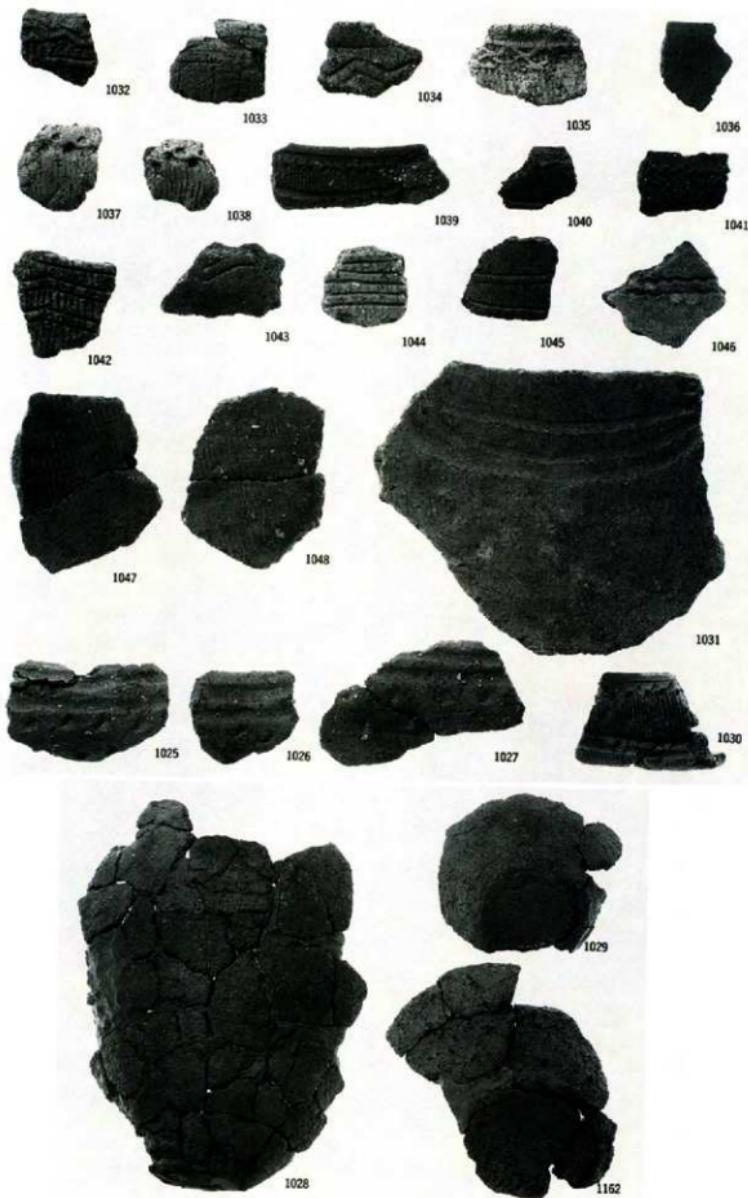
1022



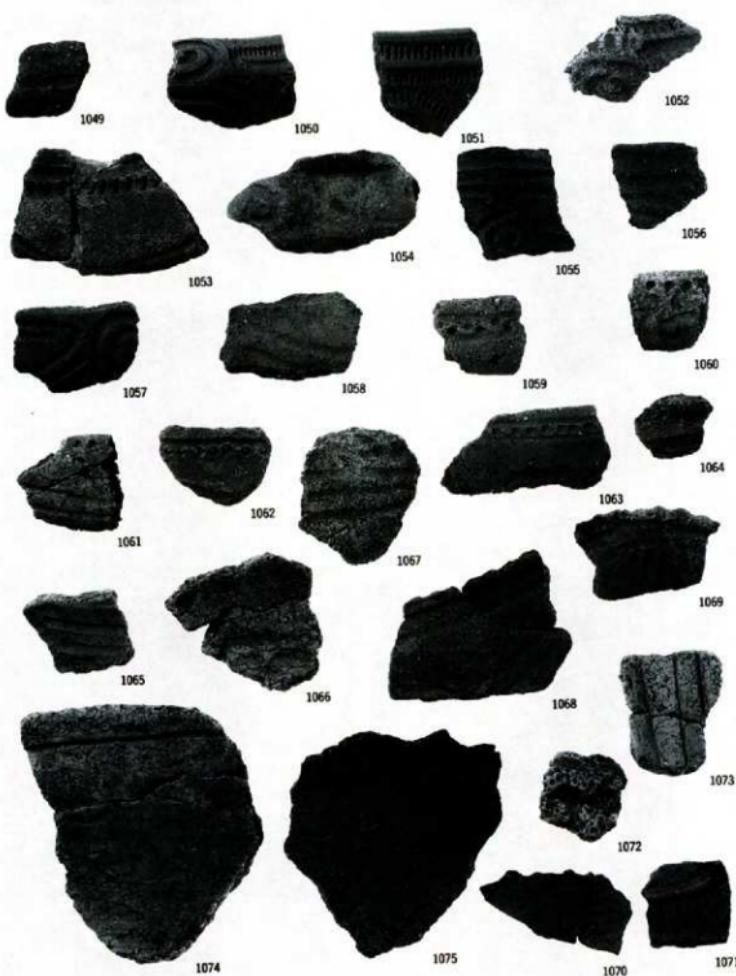
1024

第 2 号住居跡層土上層出土土器

圖版 15



第 2 号住居跡履土・炉内・埋設土器 P136出土土器 (右下)



第2号住居跡出土土器

図版 17



1076



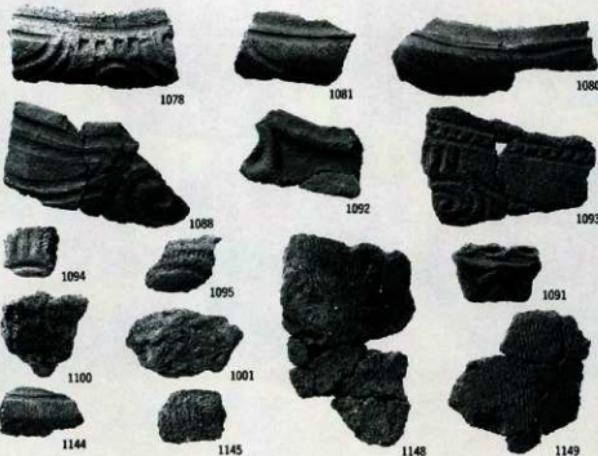
1077

1077

1079

第5号住居跡埋甕

第5号住居跡埋甕ピット出土土器
第5号住居跡履土出土土器



第5号住居跡ピット・履土出土土器



1087



1089

第 6 号住居跡炉内出土土器



1090

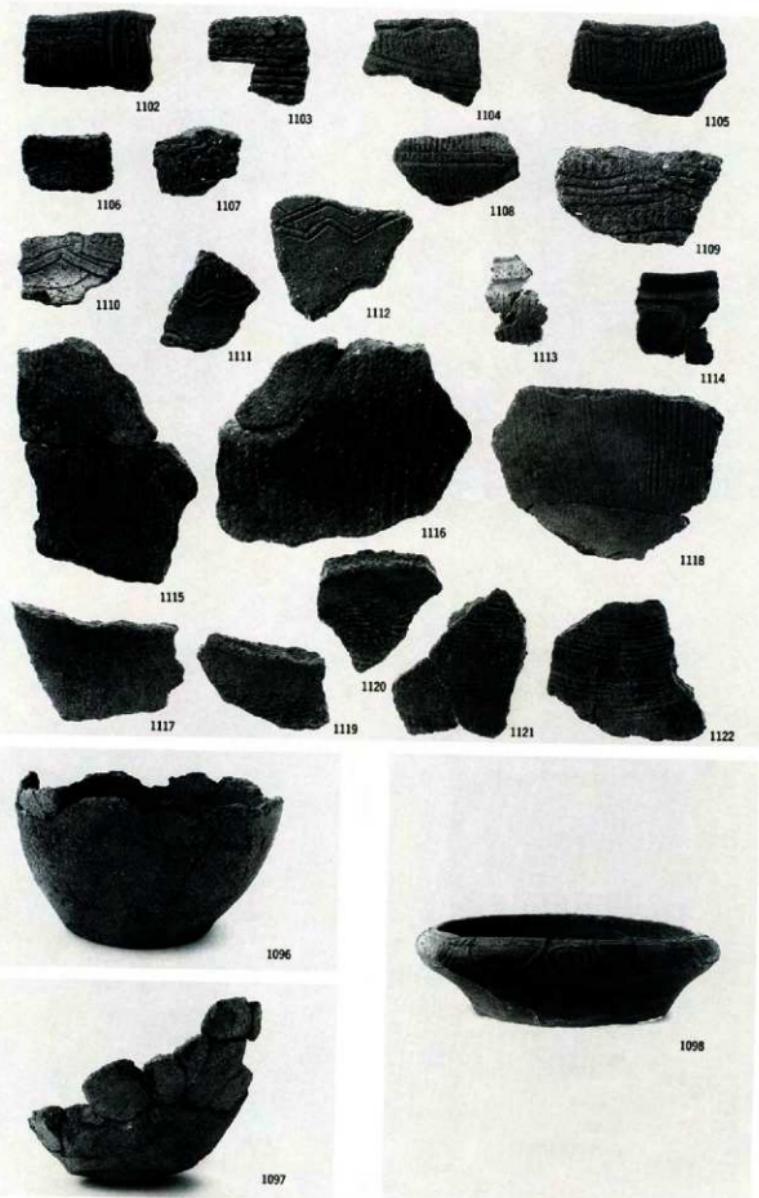


1099

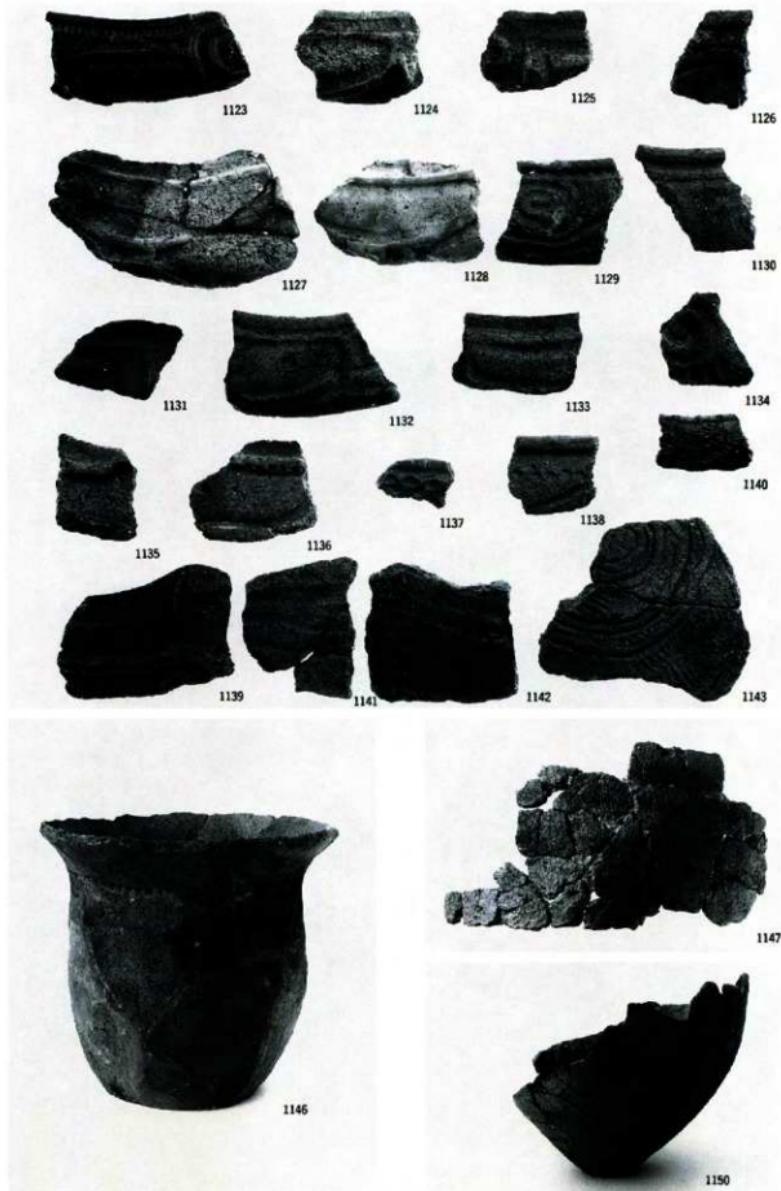
第 6 号住居跡埋甕

第 6 号住居跡履土下層出土土器

図版19

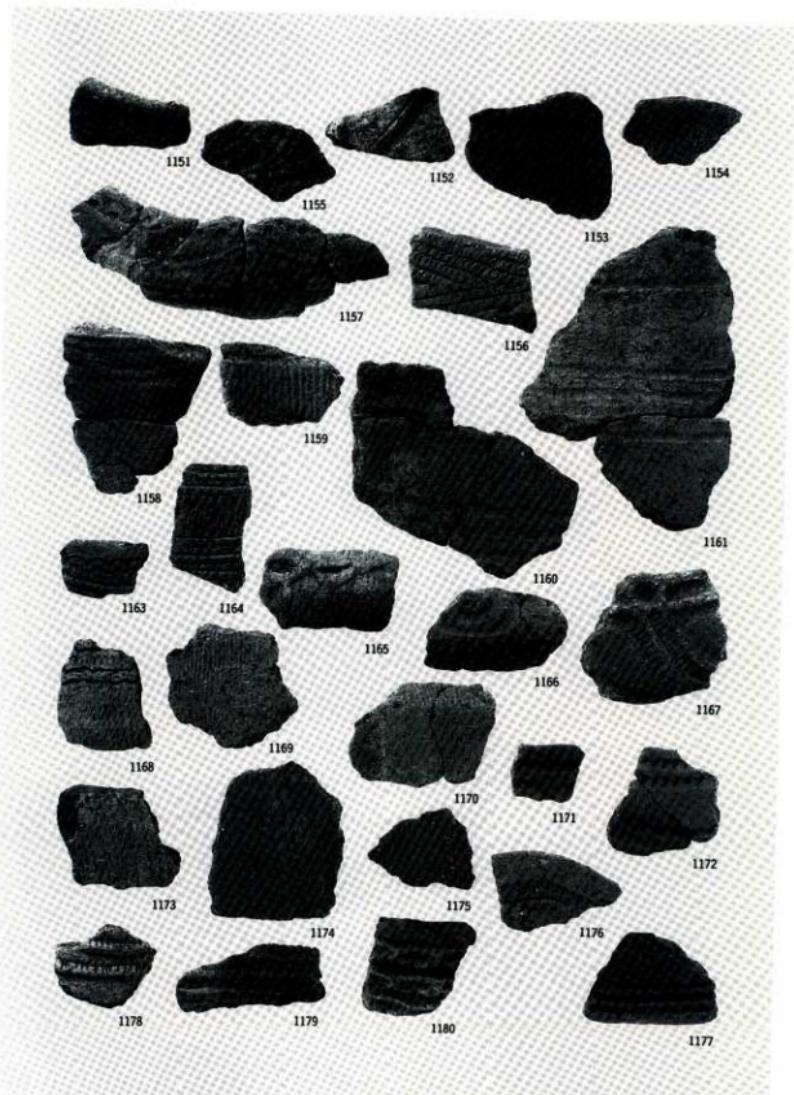


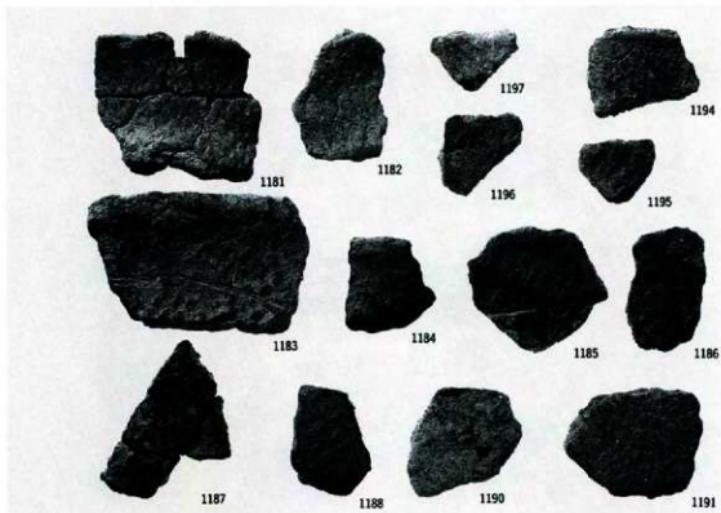
第6号住居跡履土出土土器（上・右下）
第6号住居跡埋設土器1（左中）・2（左下）



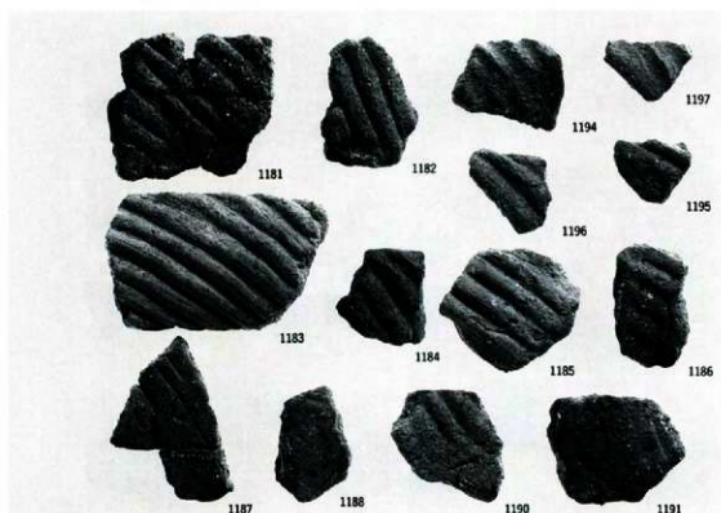
第6号住居跡出土土器（上）、第8号住居跡炉内出土土器（右中）
第7号住居跡出土土器（左下）、土器埋設遺構出土土器（右下）

図版 21



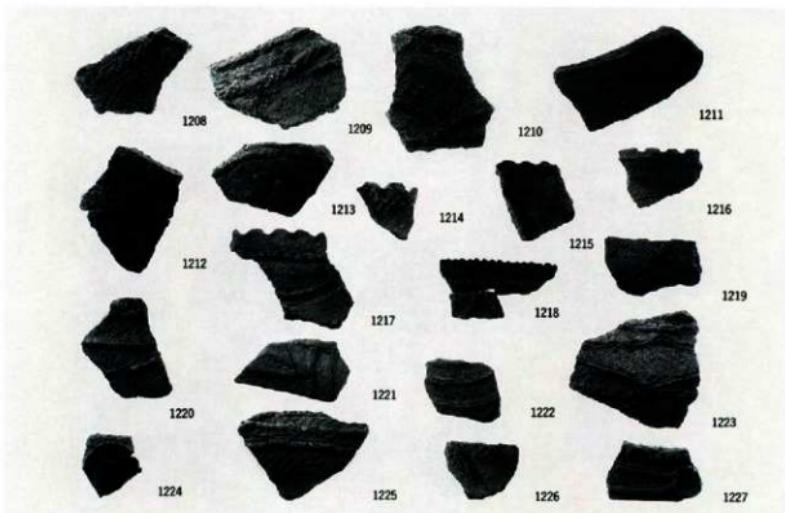


第 I 群 1 類土器

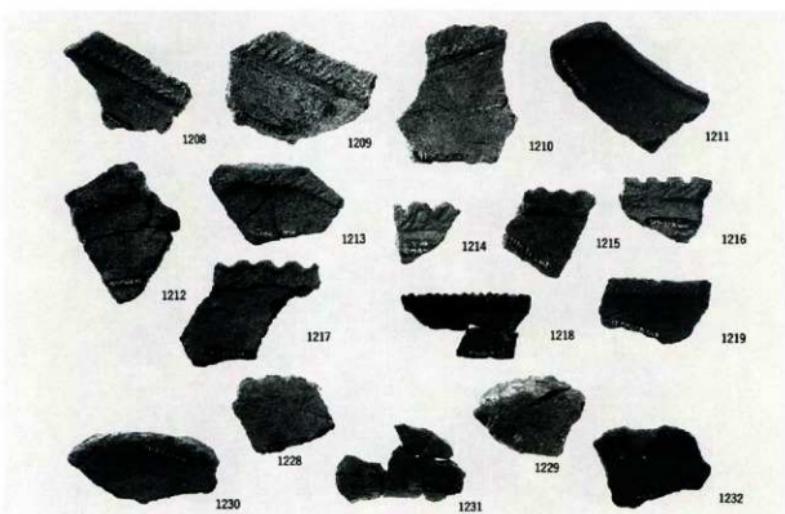


同上 (内面)

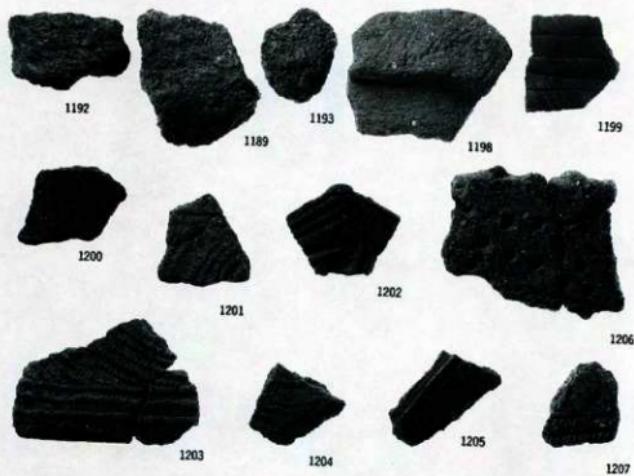
图版 23



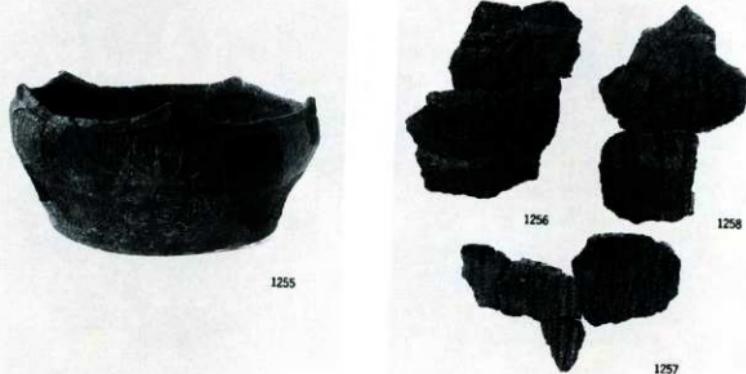
第二群 1 類土器



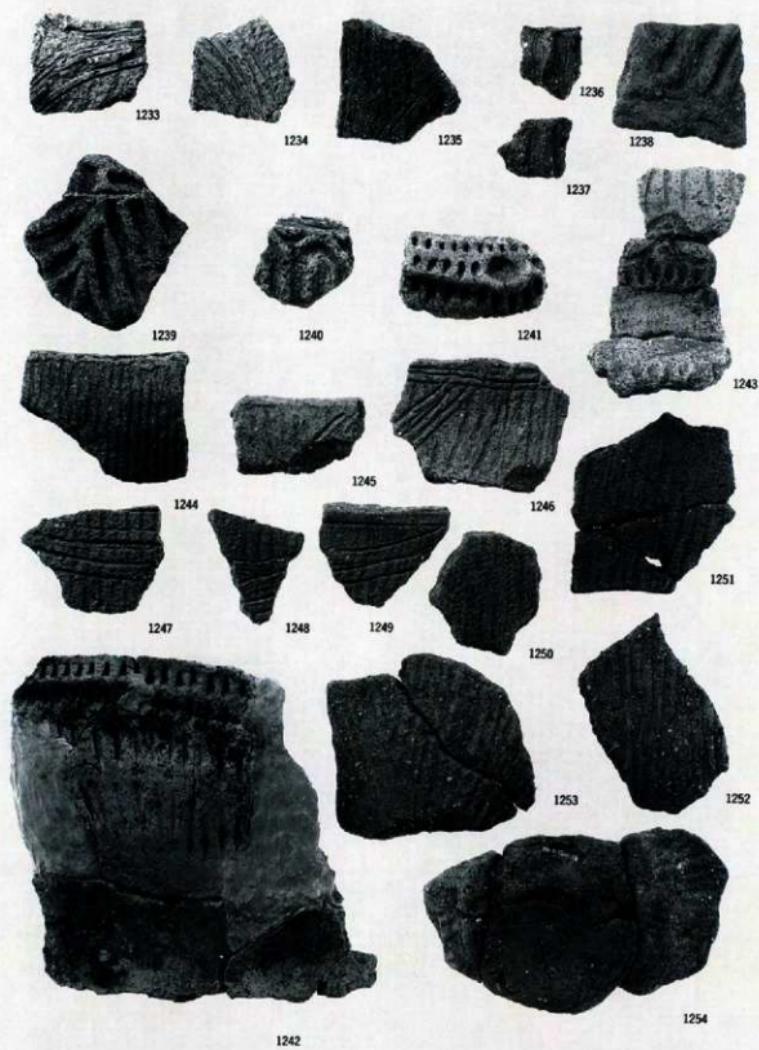
同上 (内面)
第二群 1 類土器底部



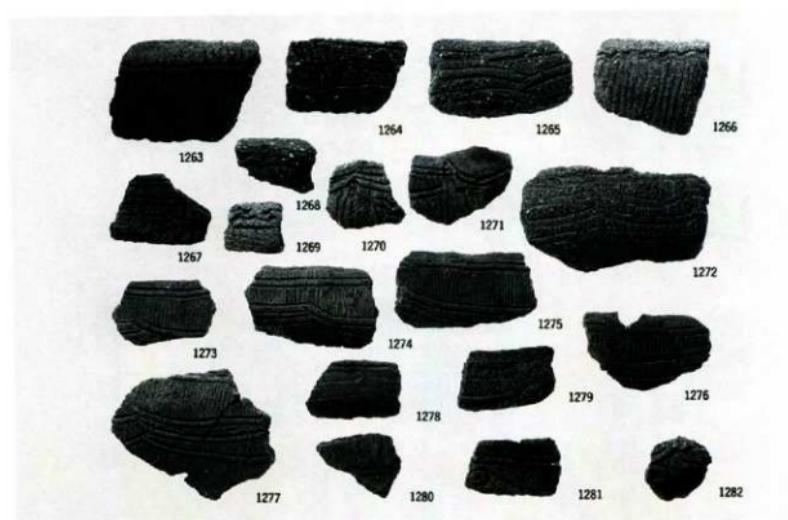
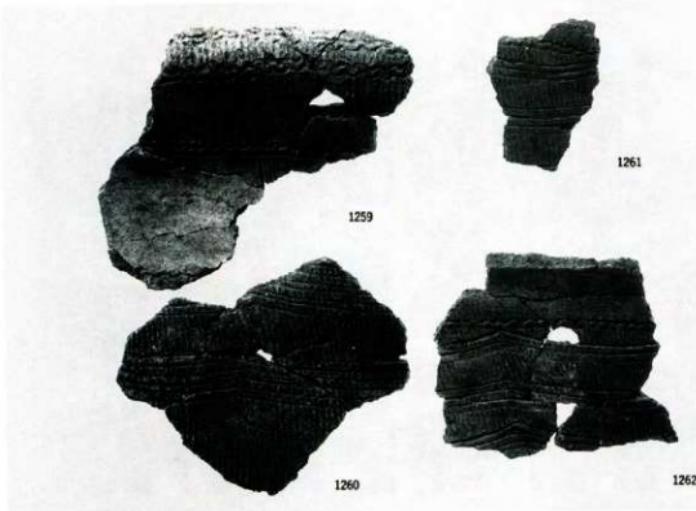
第Ⅰ群 1・2類土器
第Ⅱ群 2類土器



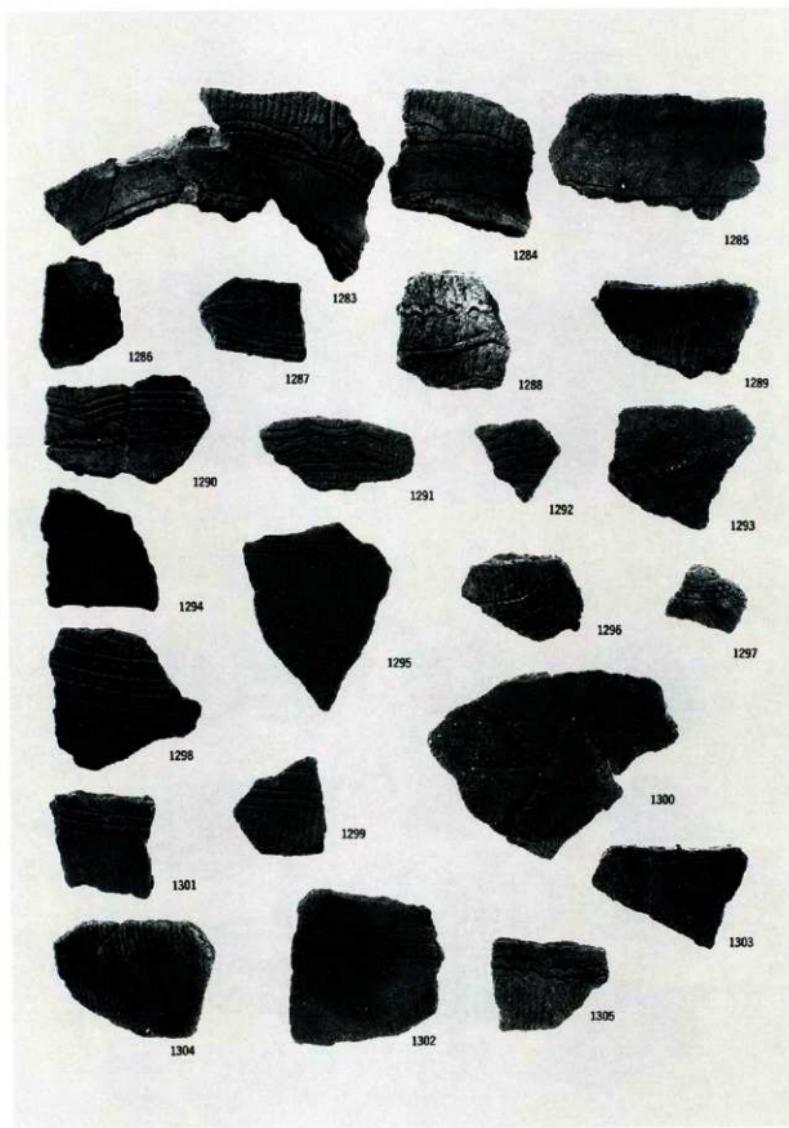
第Ⅲ群 2類土器



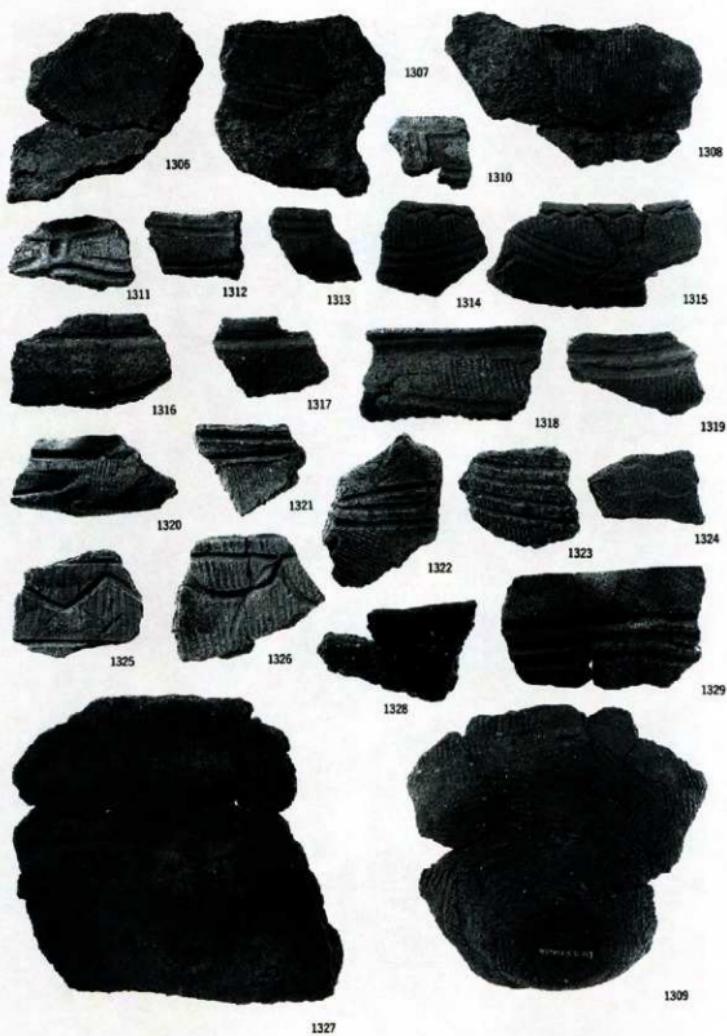
第三群 1 • 2 類土器



第三群 3 類土器 (a 横) (1)

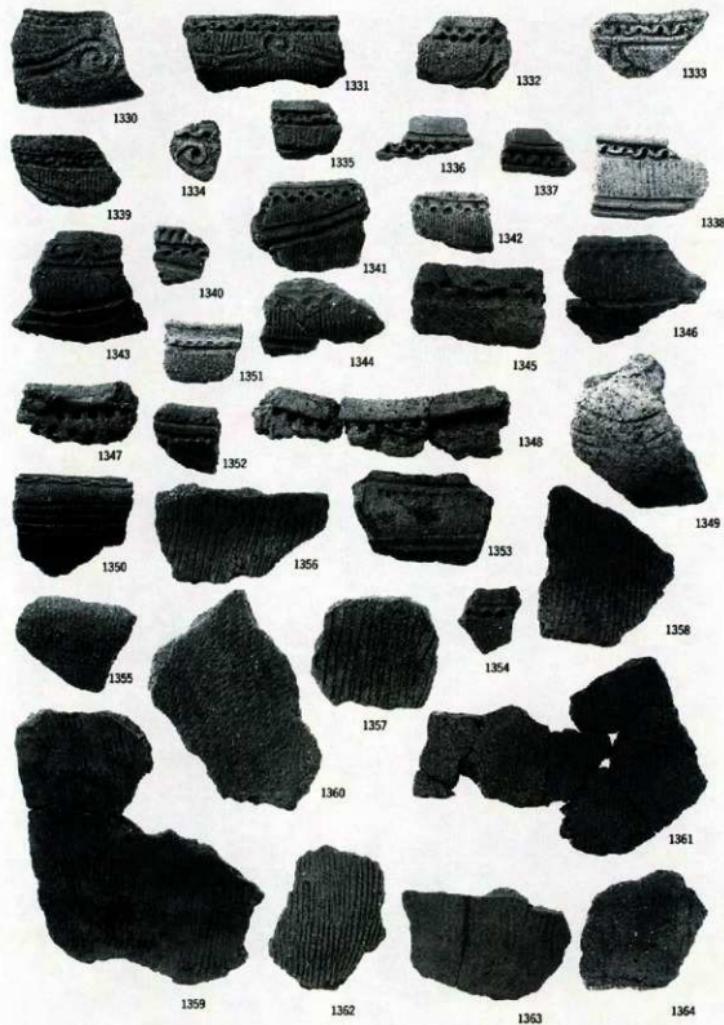


第三群 3 類土器 (a 種) (2)

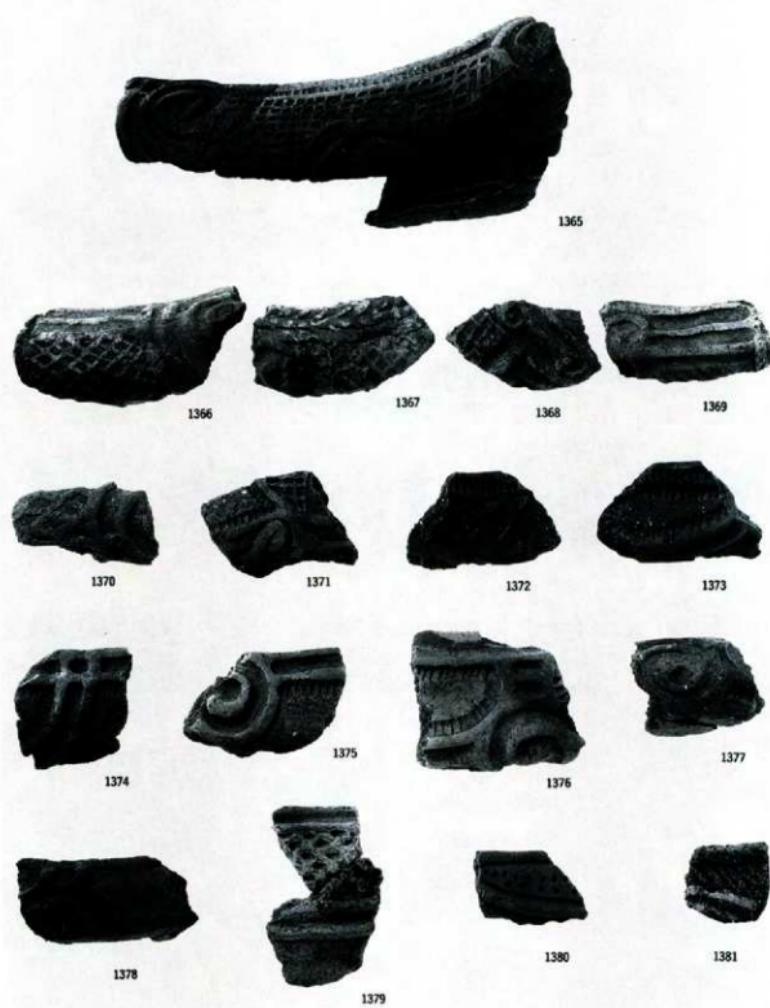


第3群 3類土器 (b・e・f種)

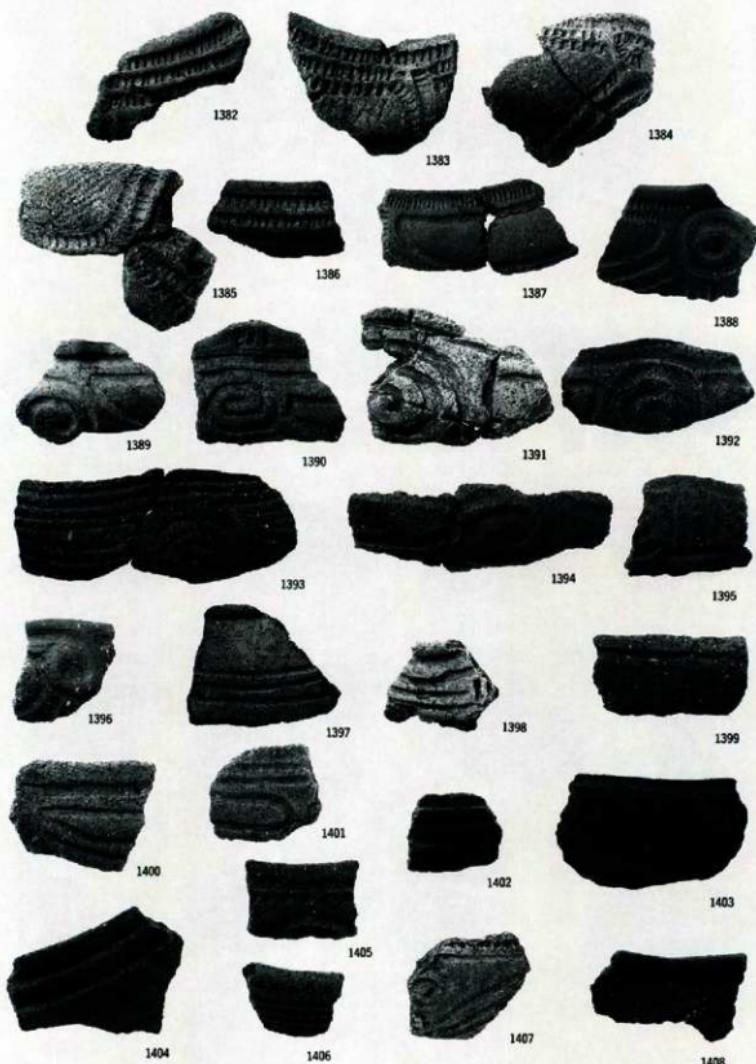
図版 29



第三群 3 順土器 (c + d 種)



第三群 4 類土器 (a 種)

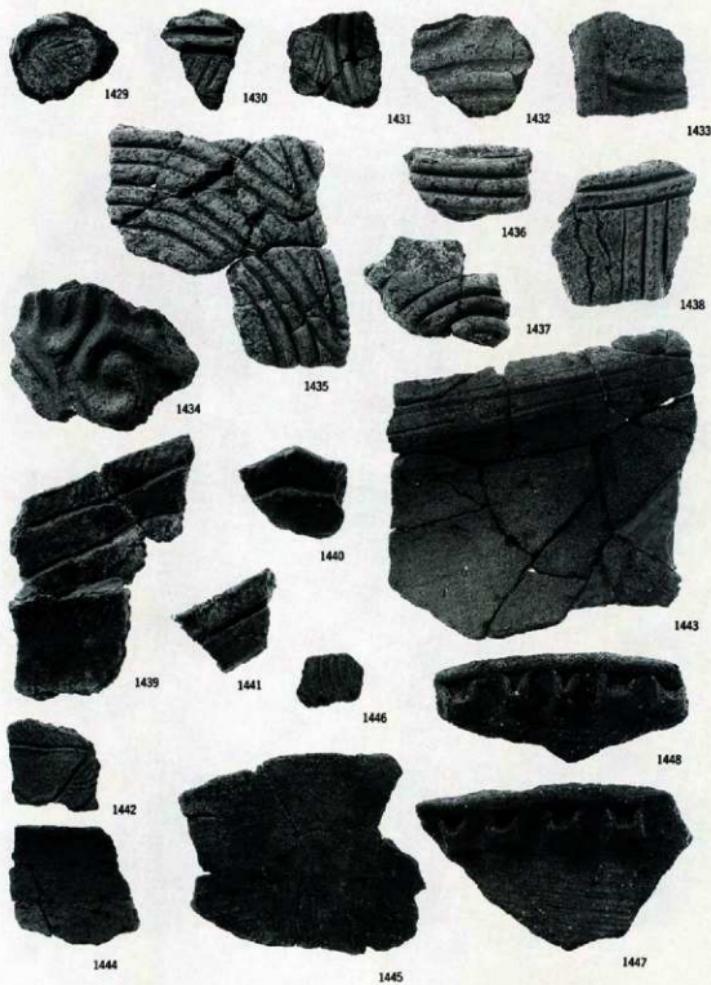


第三群 4 烟土器 (b種)

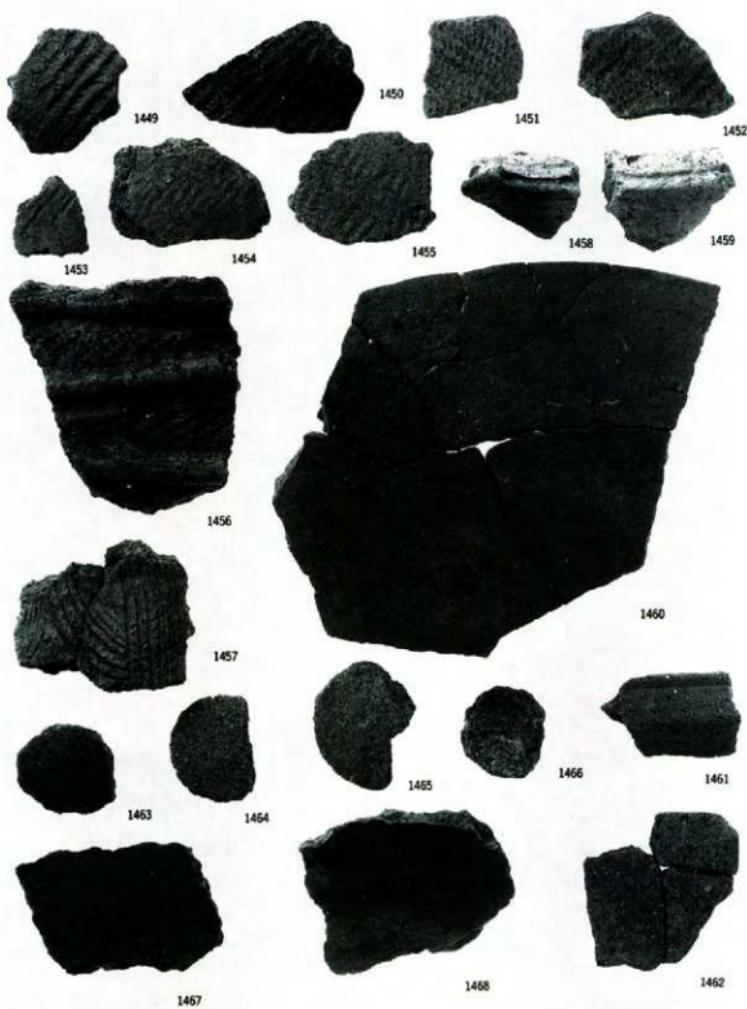


第三群 4 類 (c + d 種)、5 類土器

図版 33

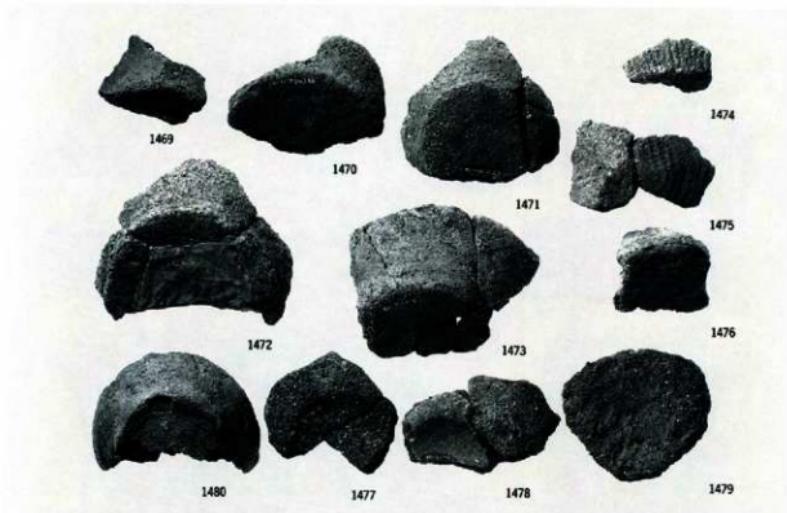


第三群 5 類、第IV群、第V群土器



第VI群 1・3・4・6・7類土器

図版 35



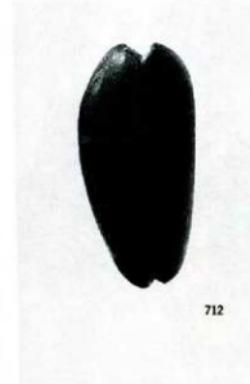
第VI群 5 類土器



P 585 出土制片接合資料 (501 - 505)



534



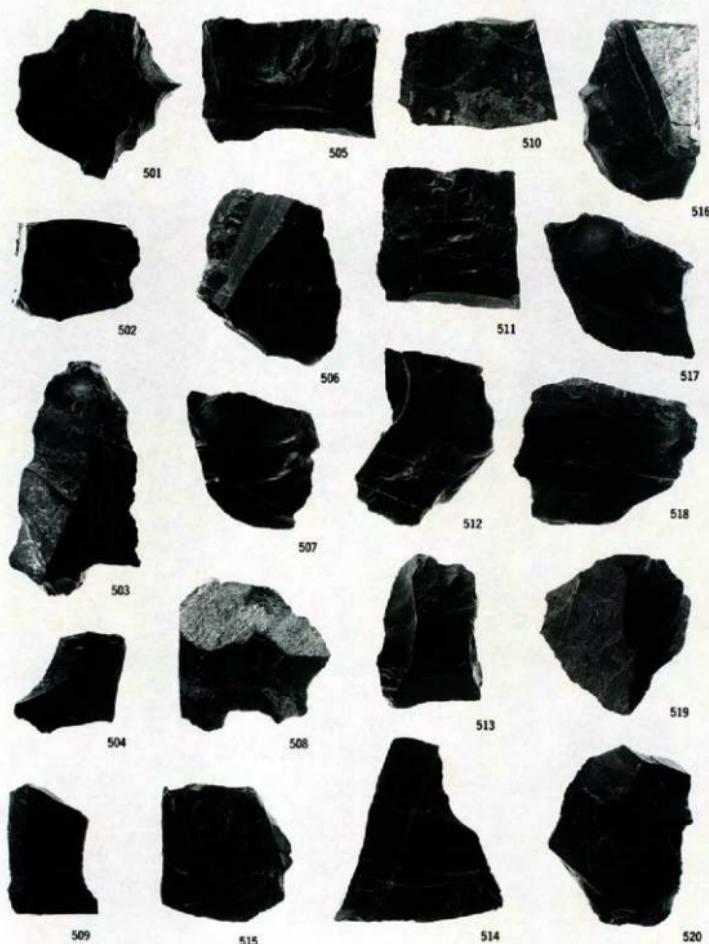
712



719

「糸巻きの帯状痕跡」の認められる切目石錐

图版 37

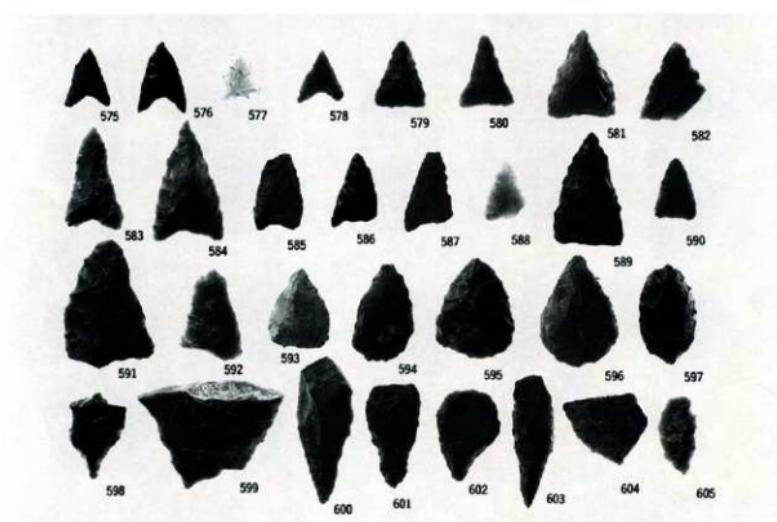
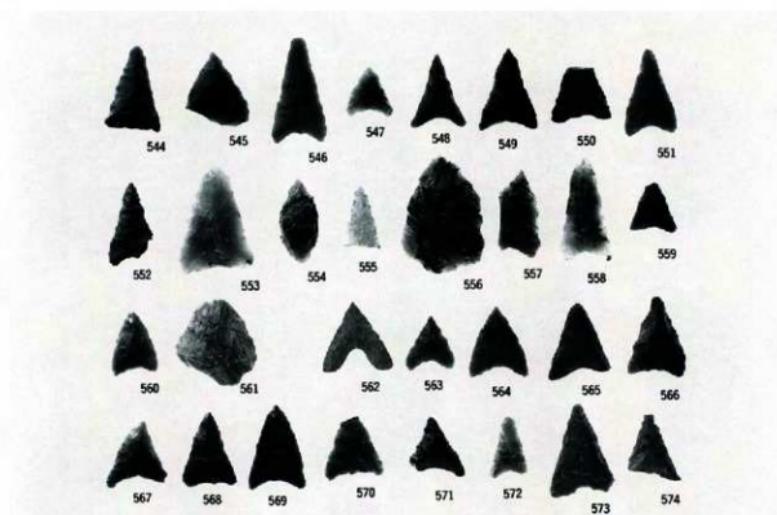


P 585 出土铜片

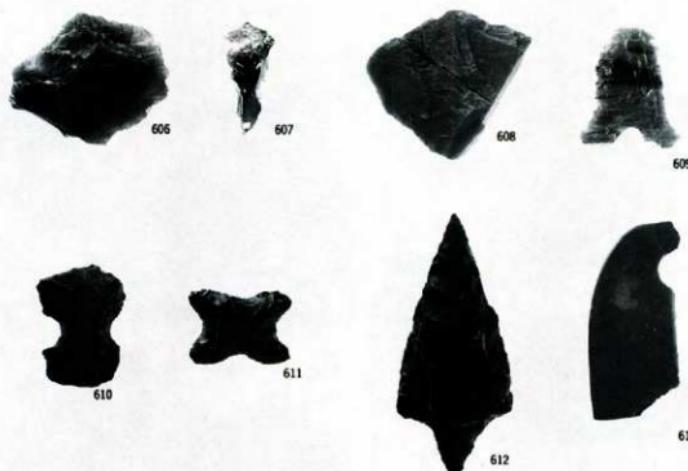


P 586, SK17 出土石錐

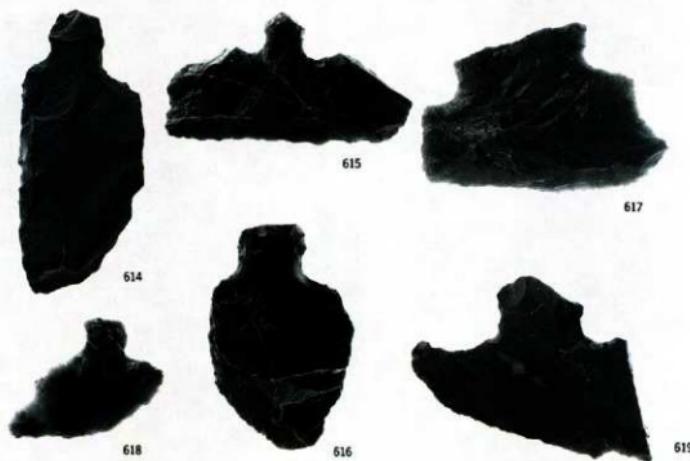
图版 39



石 箭

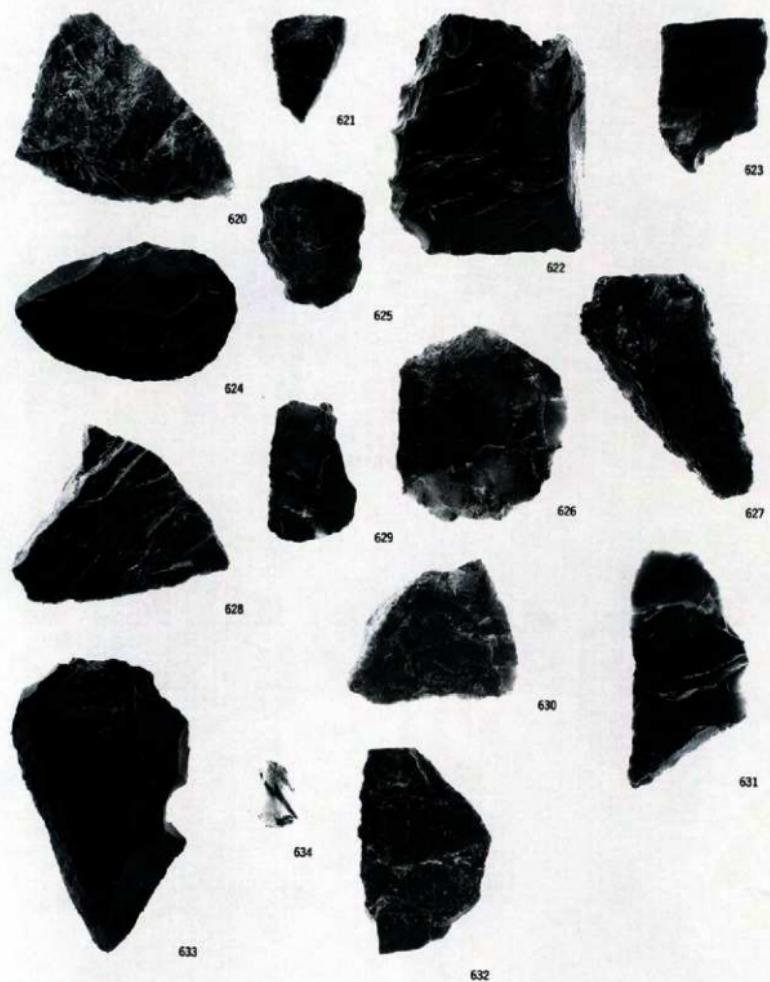


ピエス・エスキュー 異形部分磨製石器
異形石器 有舌尖頭器、块状耳飾

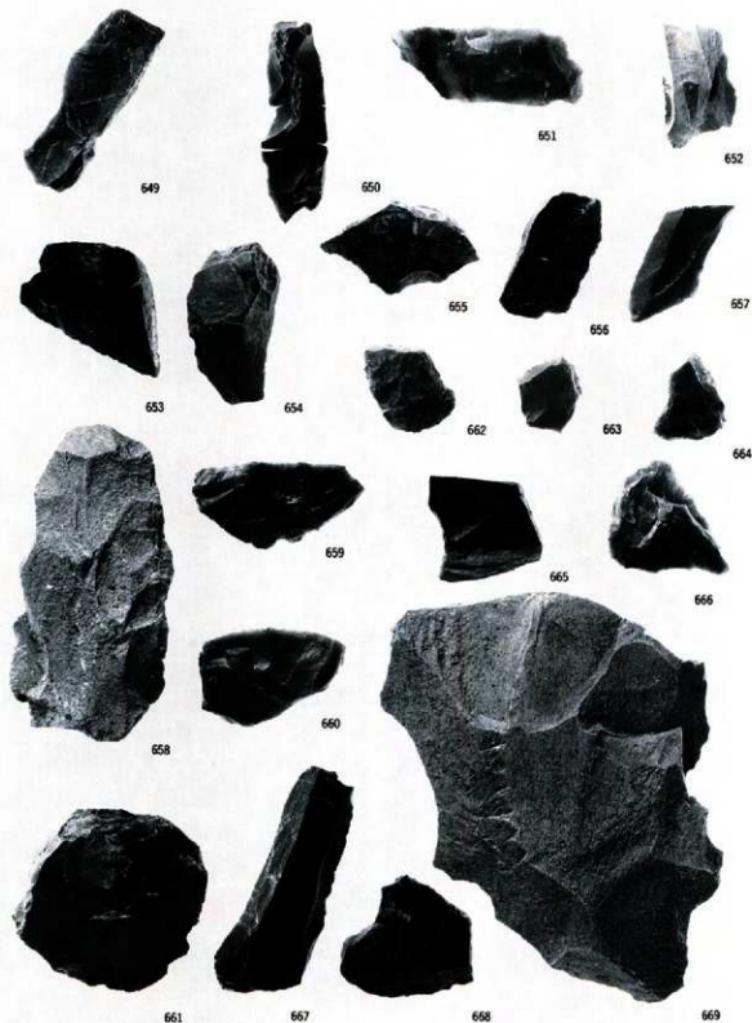


石匙

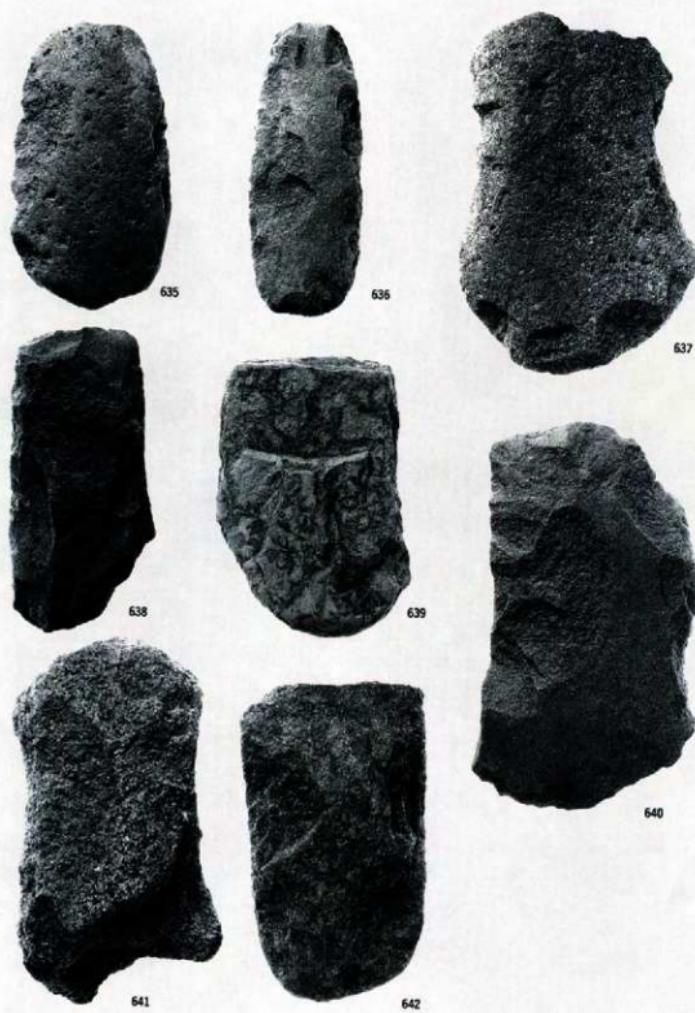
図版 41



摺器、削器、ノッチド・スクレイパー



使用痕のある剝片、2次加工のある剝片、石核



打製石斧



643



644



645



646



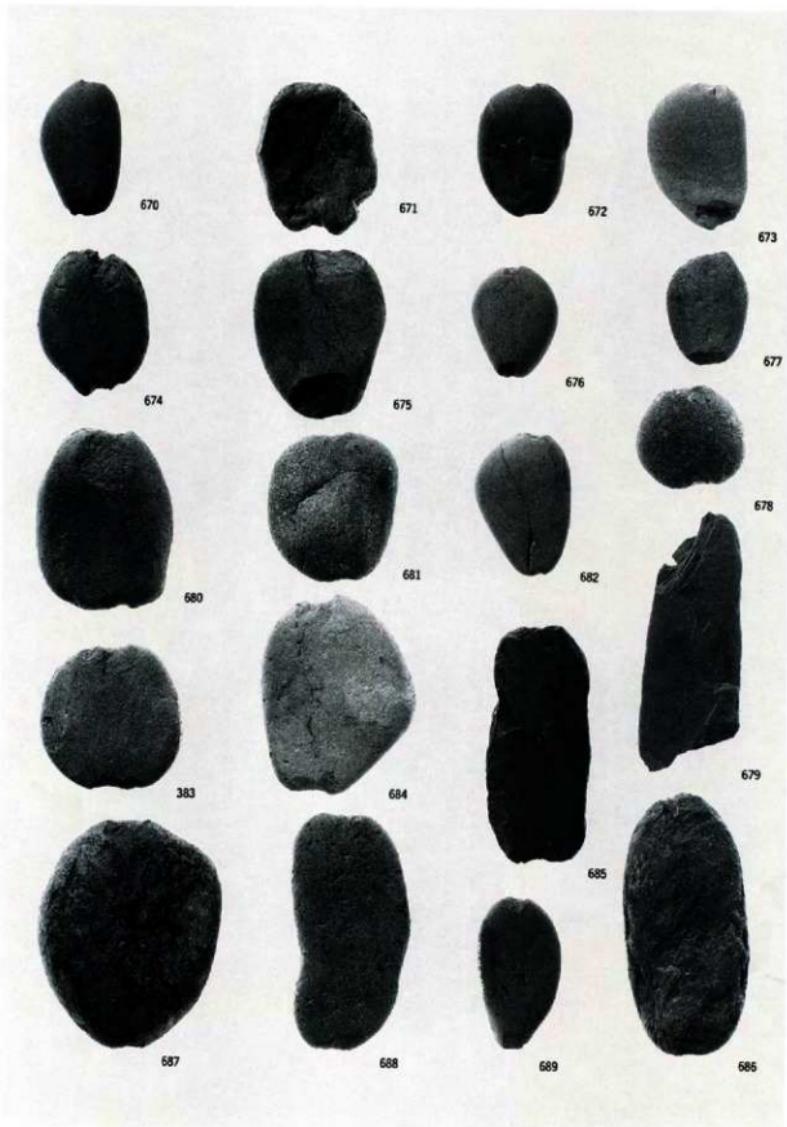
647



648

打製石斧、磨製石斧

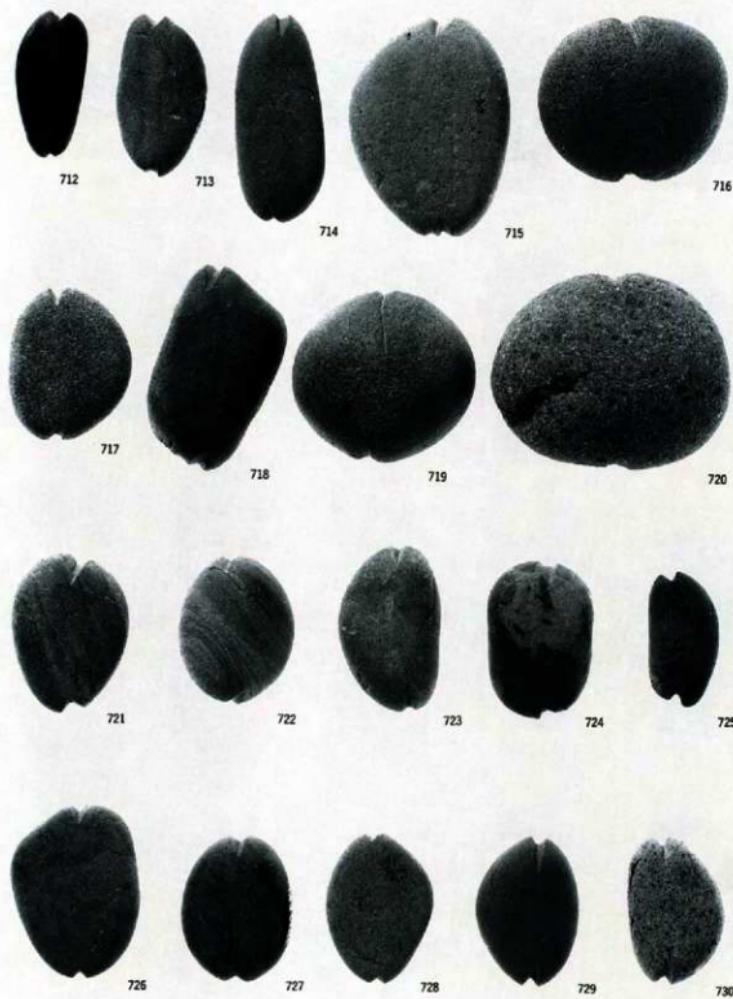
圖版 45



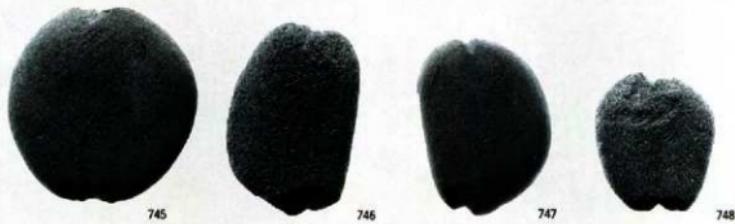
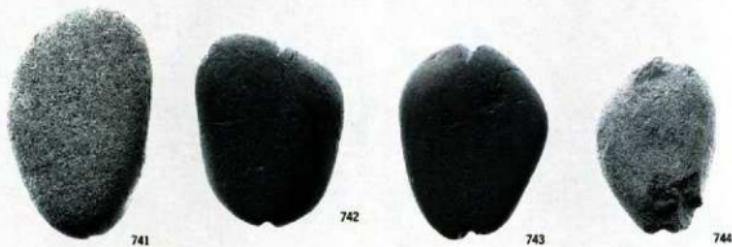
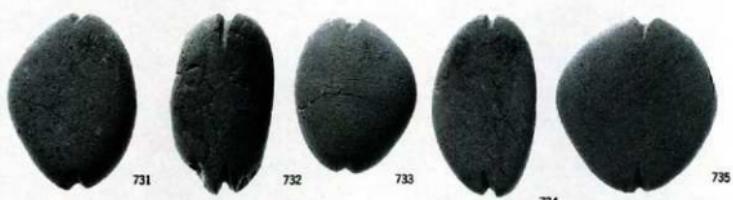
打欠石錐



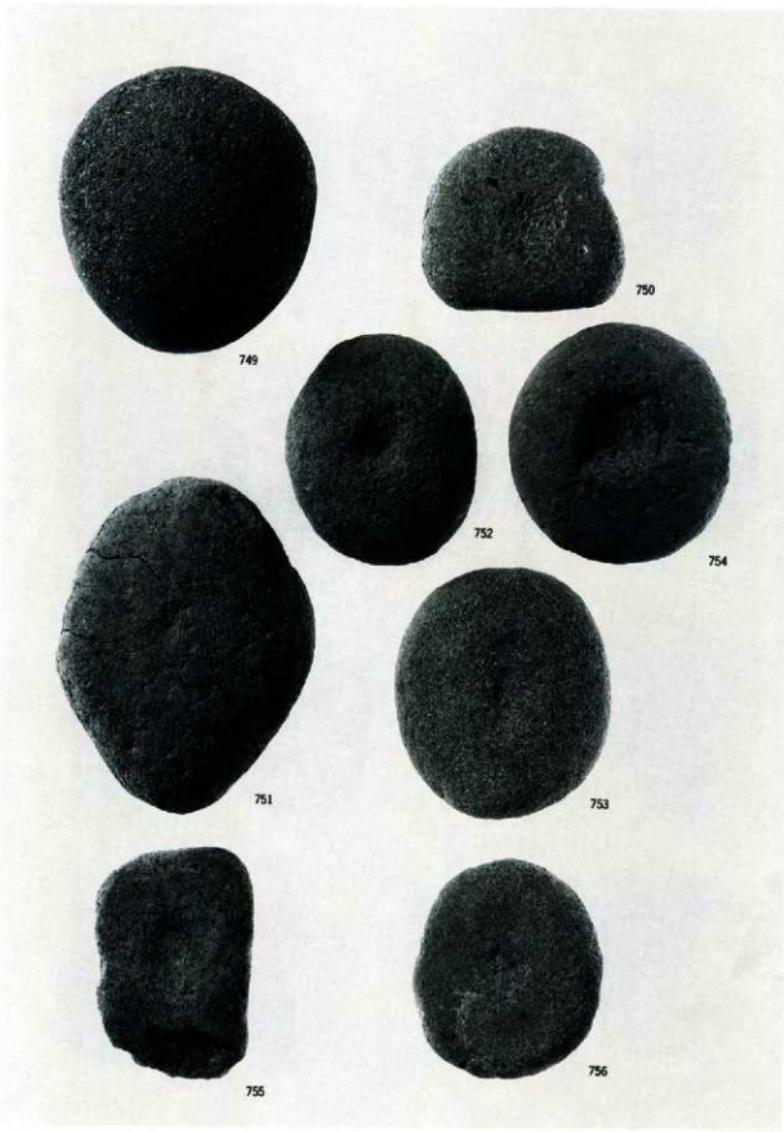
切目石壁 (1)



切目石蠍 (2)



图版 49



凹石、磨石、叩石 (1)



757



761



758



759



762



760



763

図版 51



765



766

石 畫



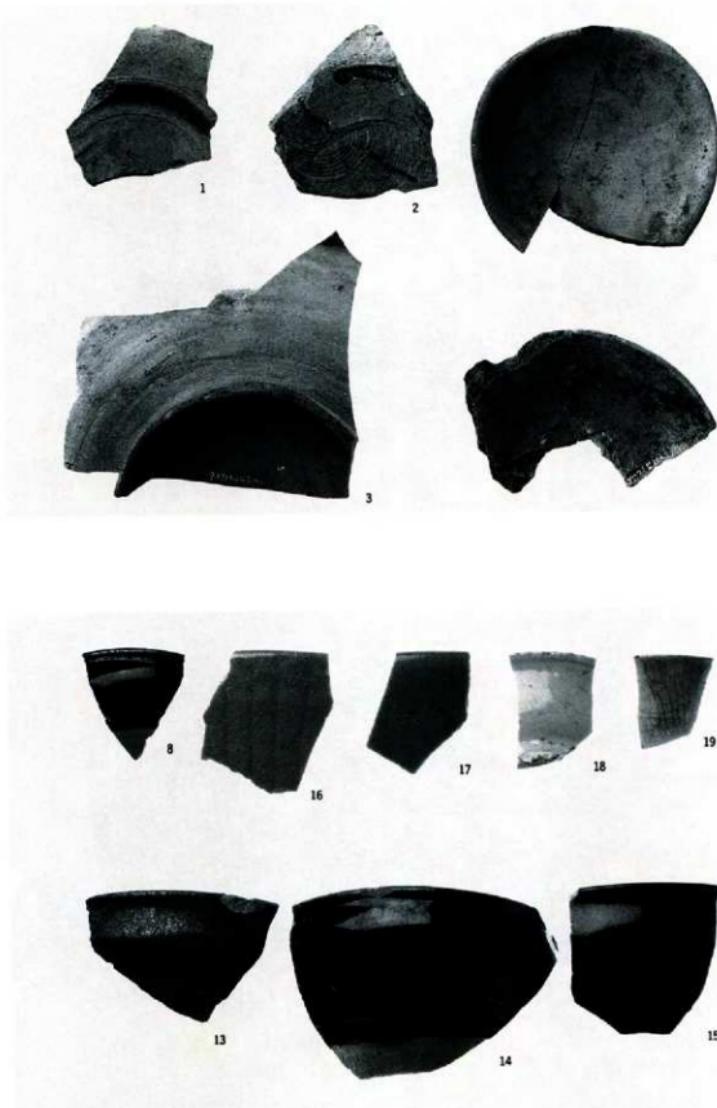
764

石 畫



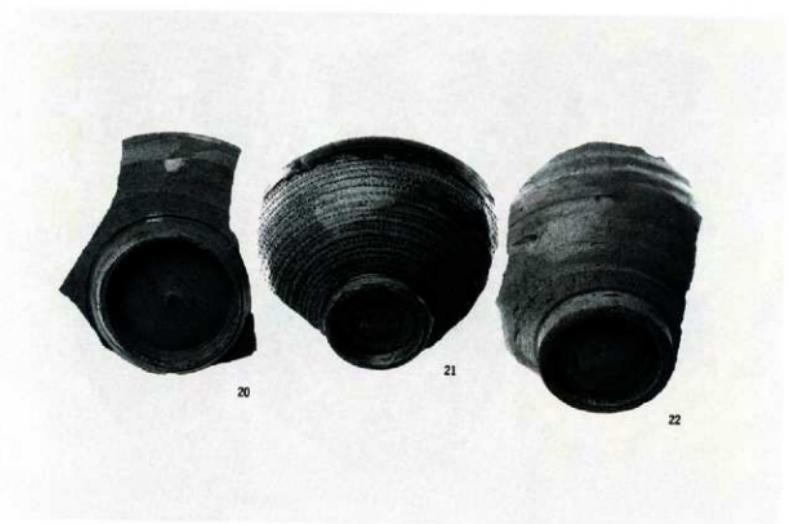
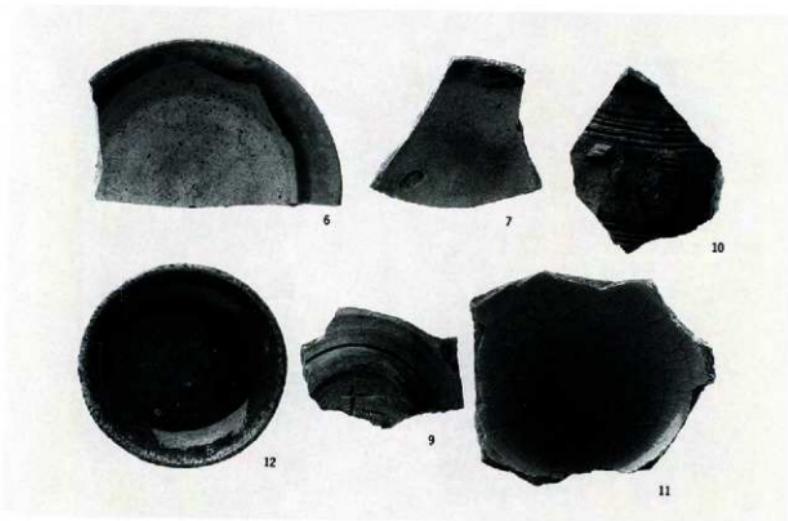
401

さし鉄の紐



中近世陶磁器 (1)

图版 53

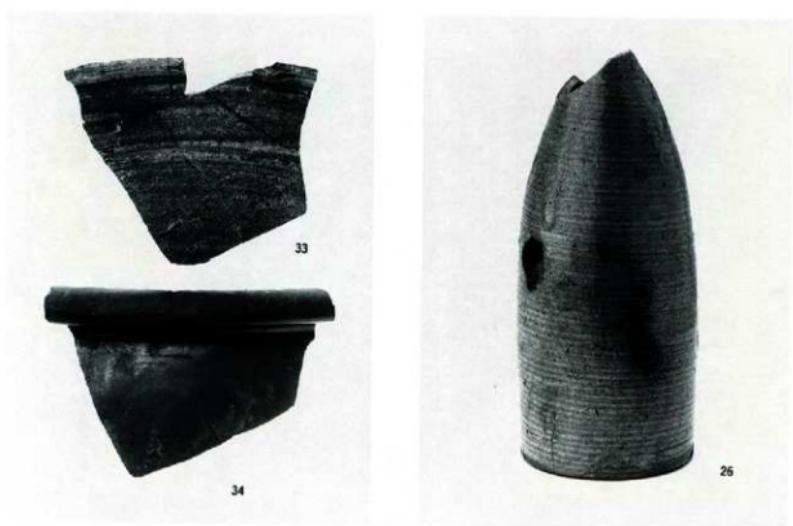
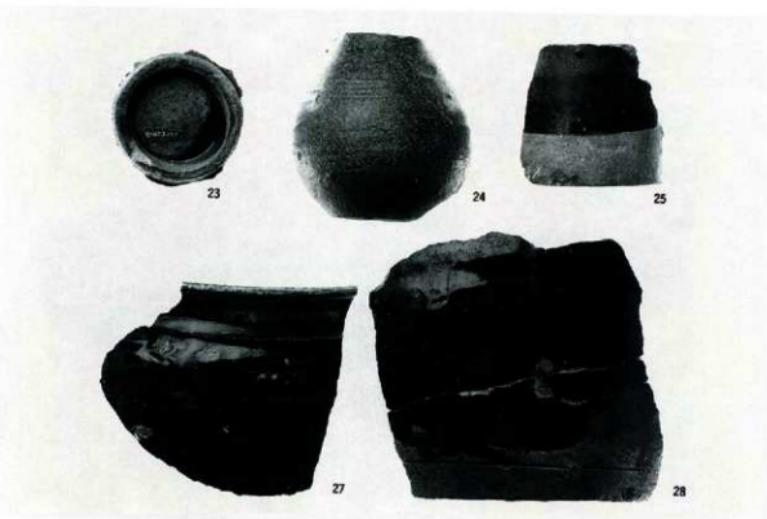


中近世陶磁器 (2)



中近世陶磁器 (3)

图版 55



中近世陶磁器 (4)



107



107 (角度をかえて)



37

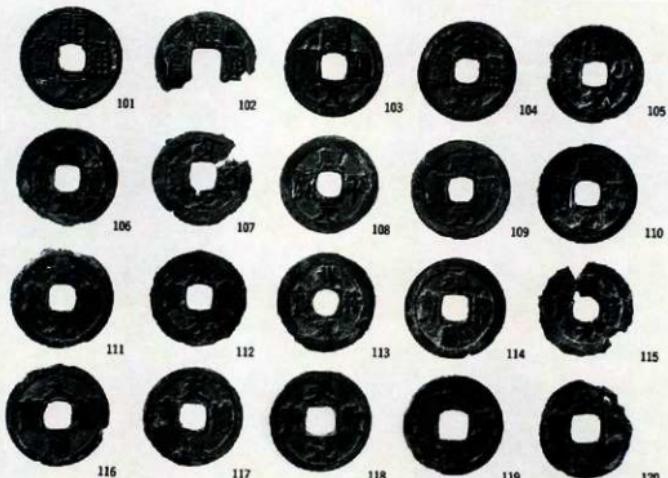


比較資料 (民具)

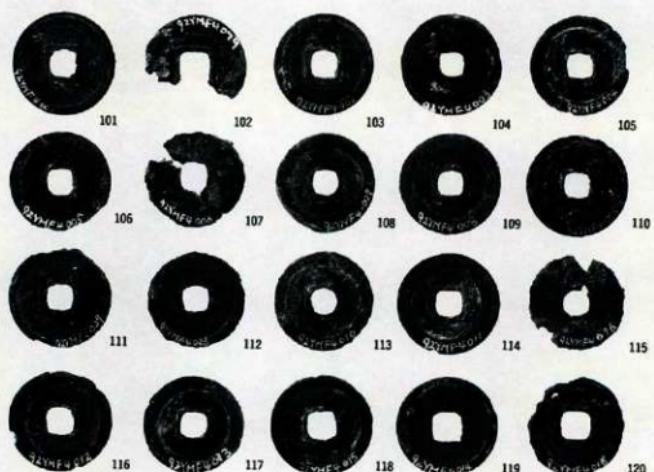


36

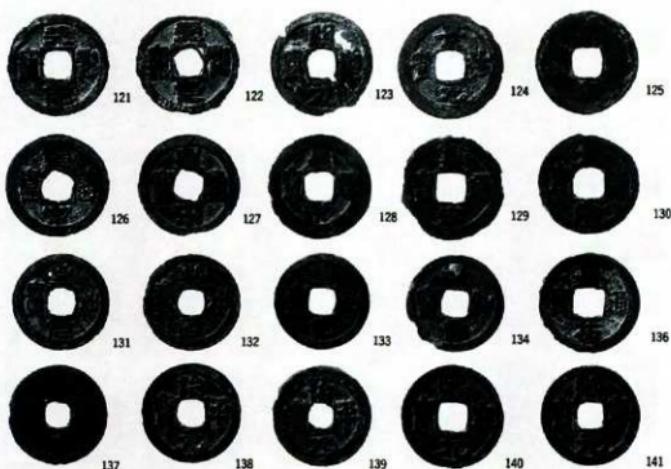
はばき編みの錠・石臼



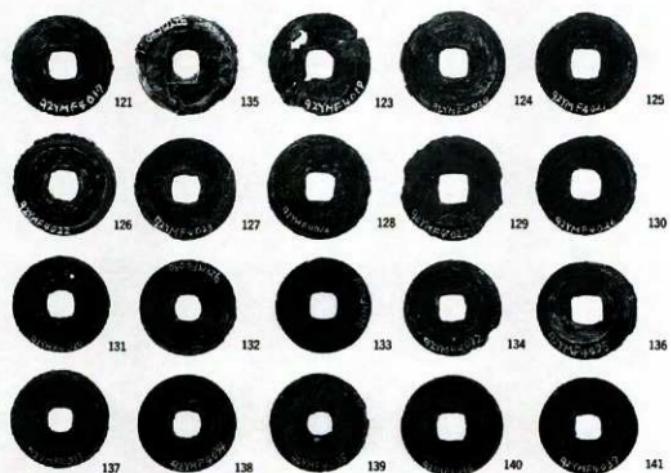
さし銭 (1)



同上 (裏面)

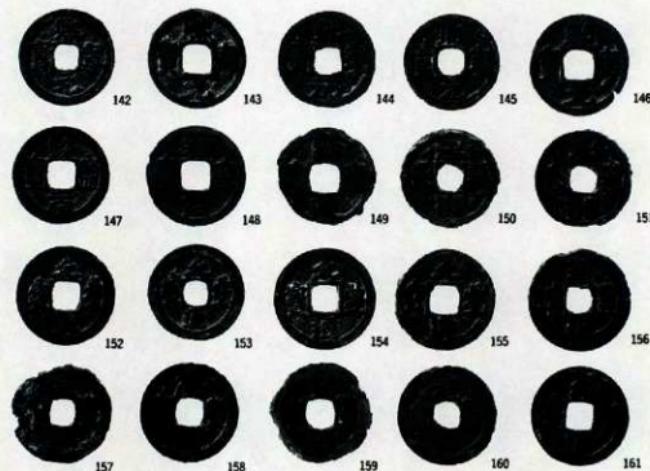


さし銭 (2)

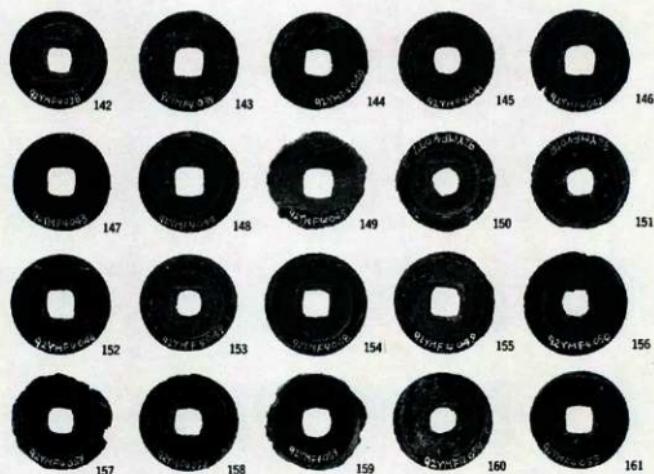


同上 (裏面)

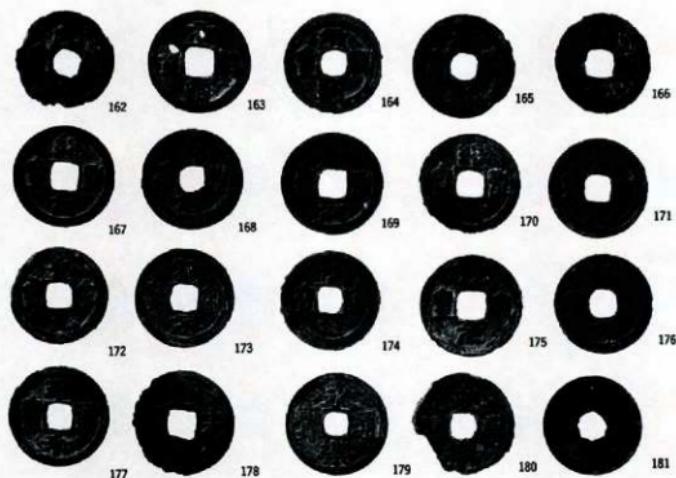
図版 59



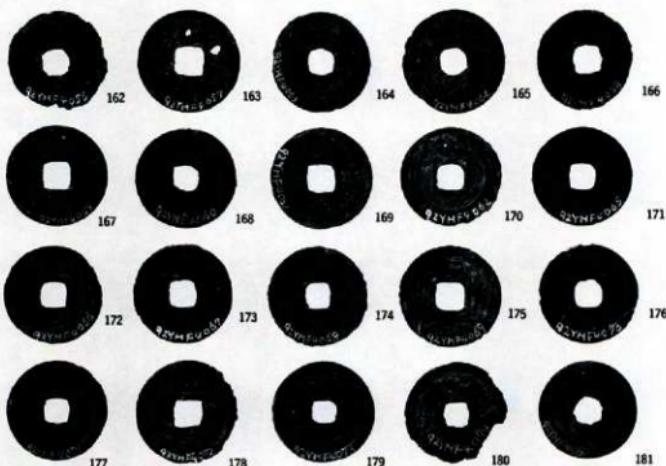
さし銭 (3)



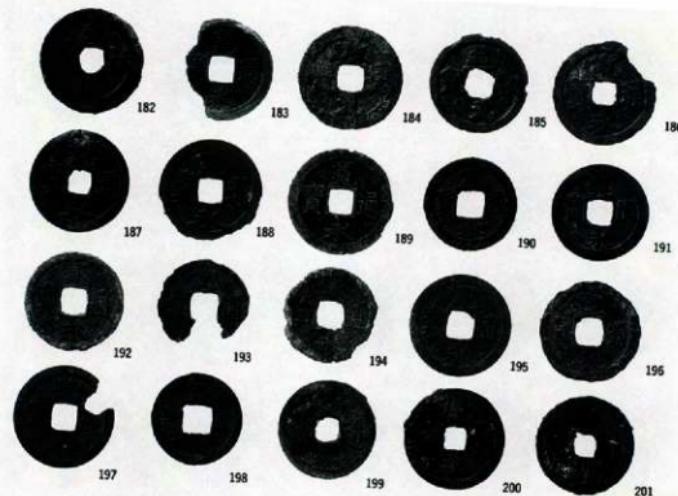
同上 (裏面)



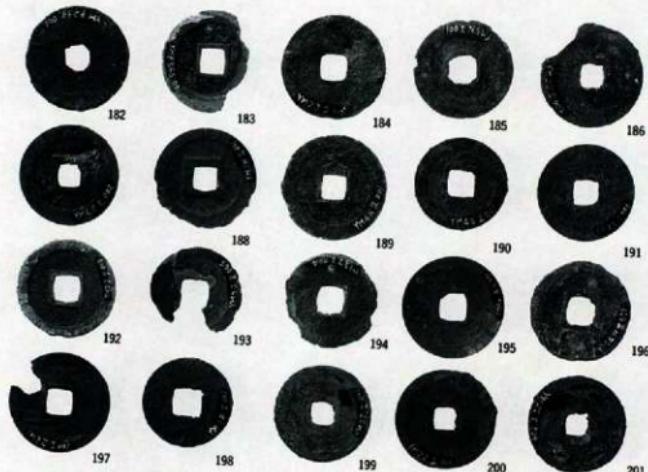
さし銭 (4)



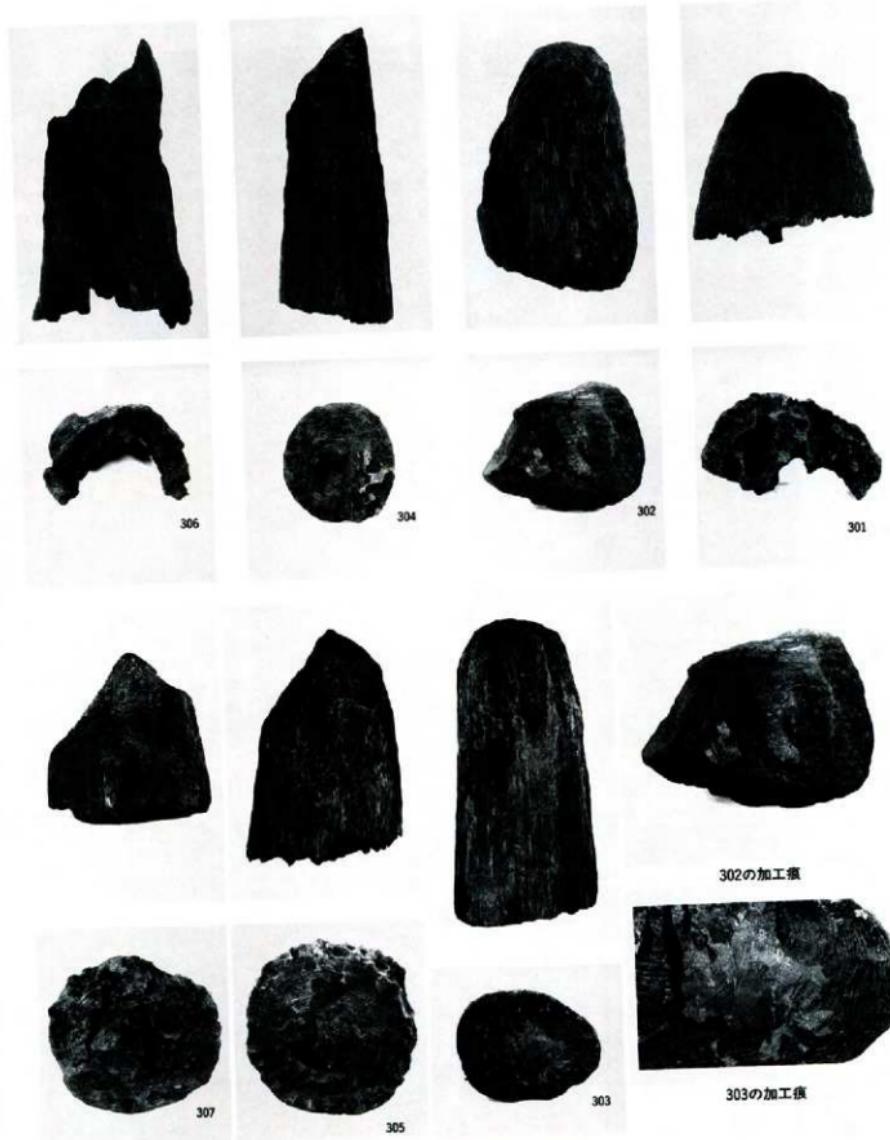
同上 (裏面)



錢貨類



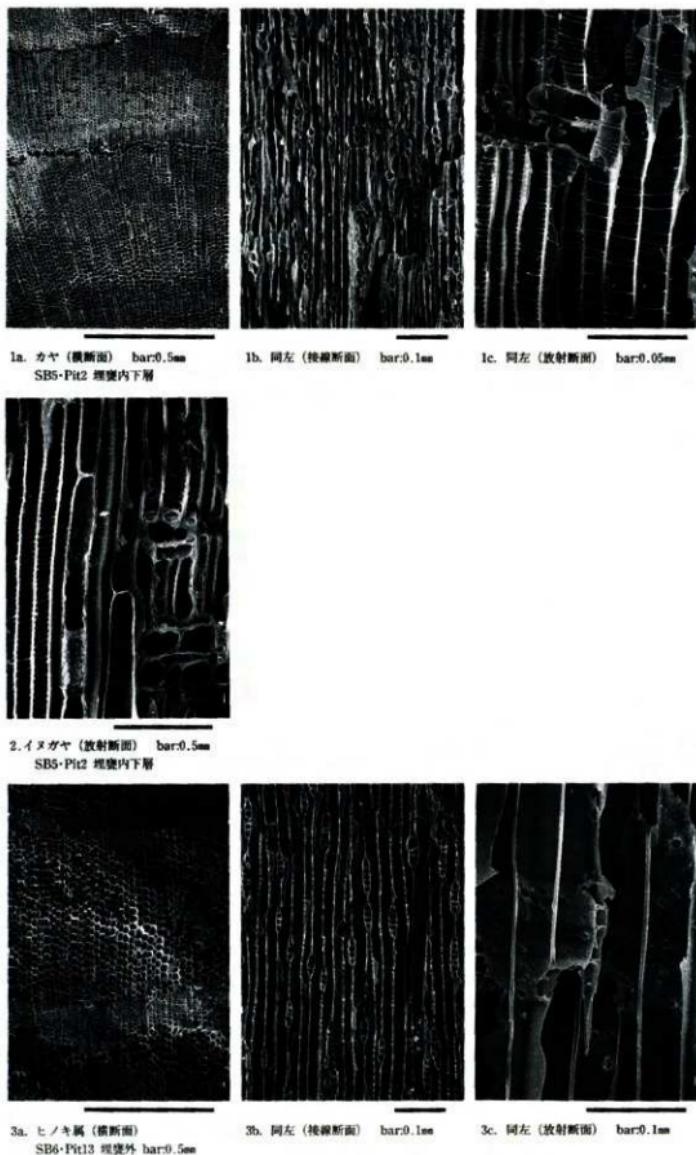
同上 (裏面)



第1号掘立柱建物跡出土木柱根

図版 63

図版 1. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種



図版 2. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種

4a. クマシデ属イヌシデ節 (横断面)
SB5-Pit2 埋甃内下層 bar:0.5mm

4b. 同上 (接縫断面) bar:0.1mm



4c. 同上 (放射断面) bar:0.1mm

5a. クマシデ属クマシデ節 (横断面)
SB5-Pit2 埋甃内中層 bar:0.5mm

5b. 同上 (接縫断面) bar:0.1mm



5c. 同上 (放射断面) bar:0.1mm

6a. プナ属 (横断面) bar:0.5mm
SB5-Pit2 埋甃内中層

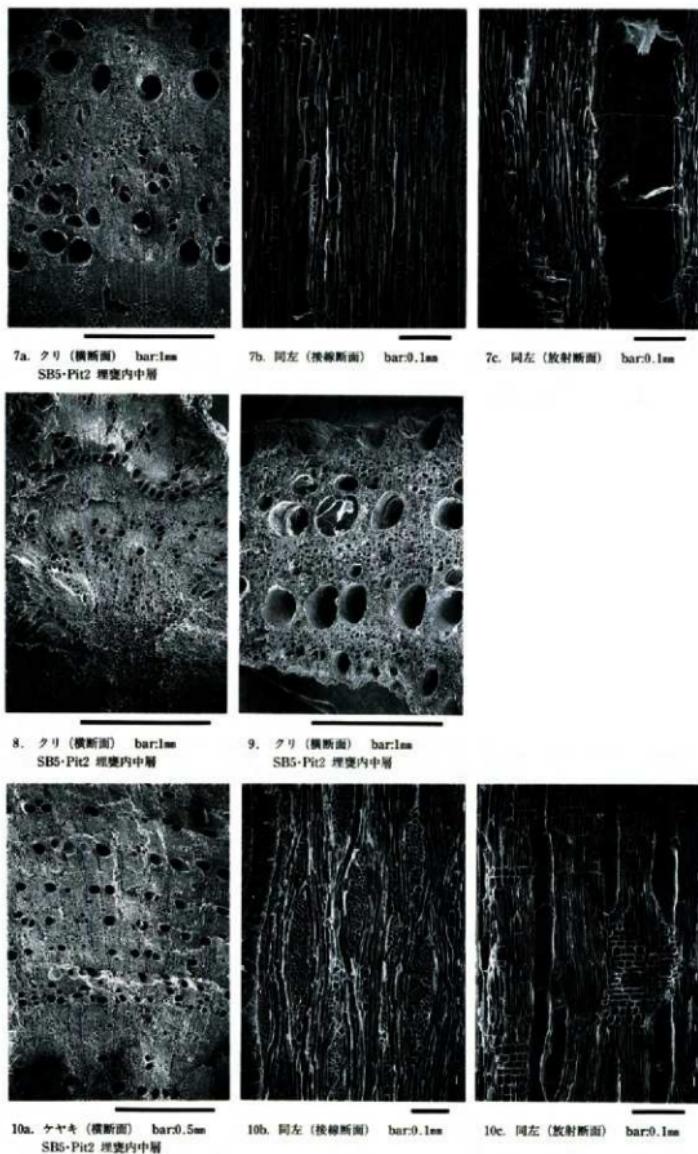
6b. 同上 (接縫断面) bar:0.1mm



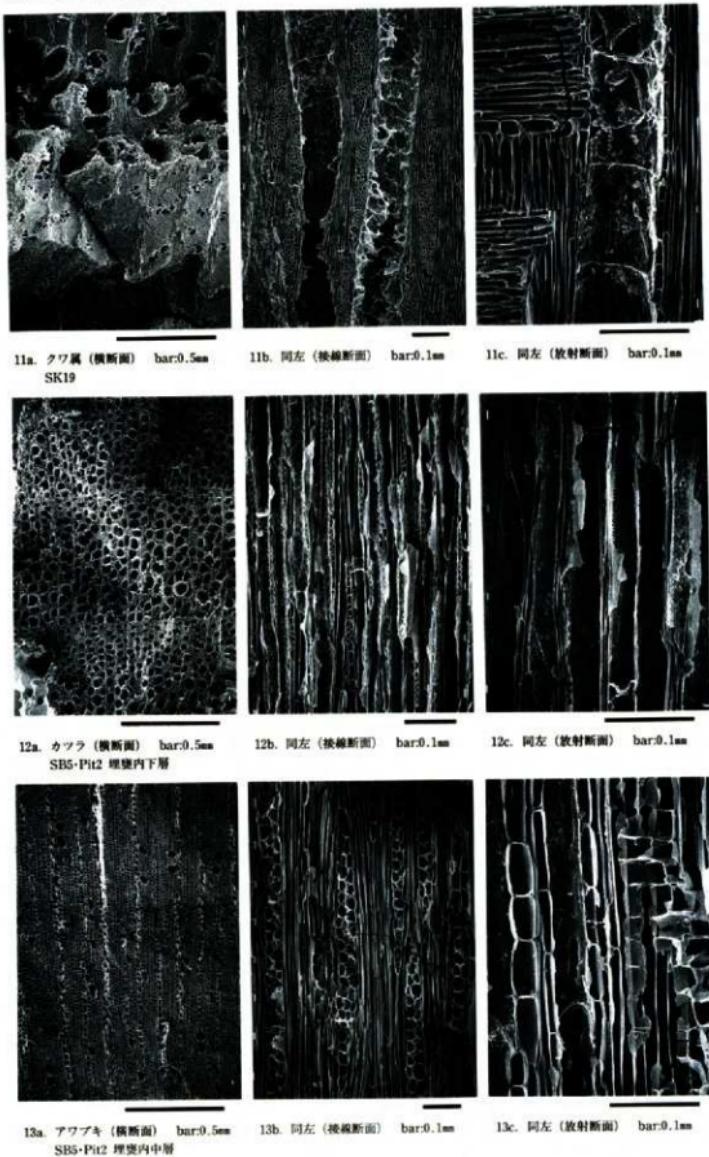
6c. 同上 (放射断面) bar:0.1mm

図版 65

図版3. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種

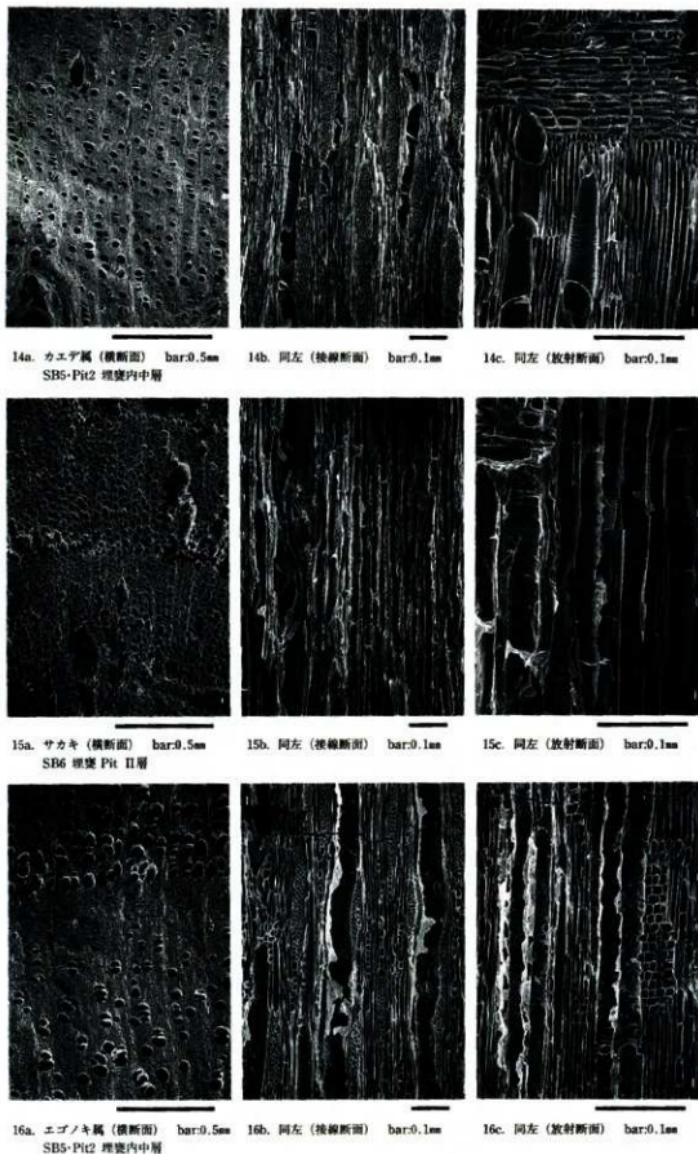


図版 4. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種

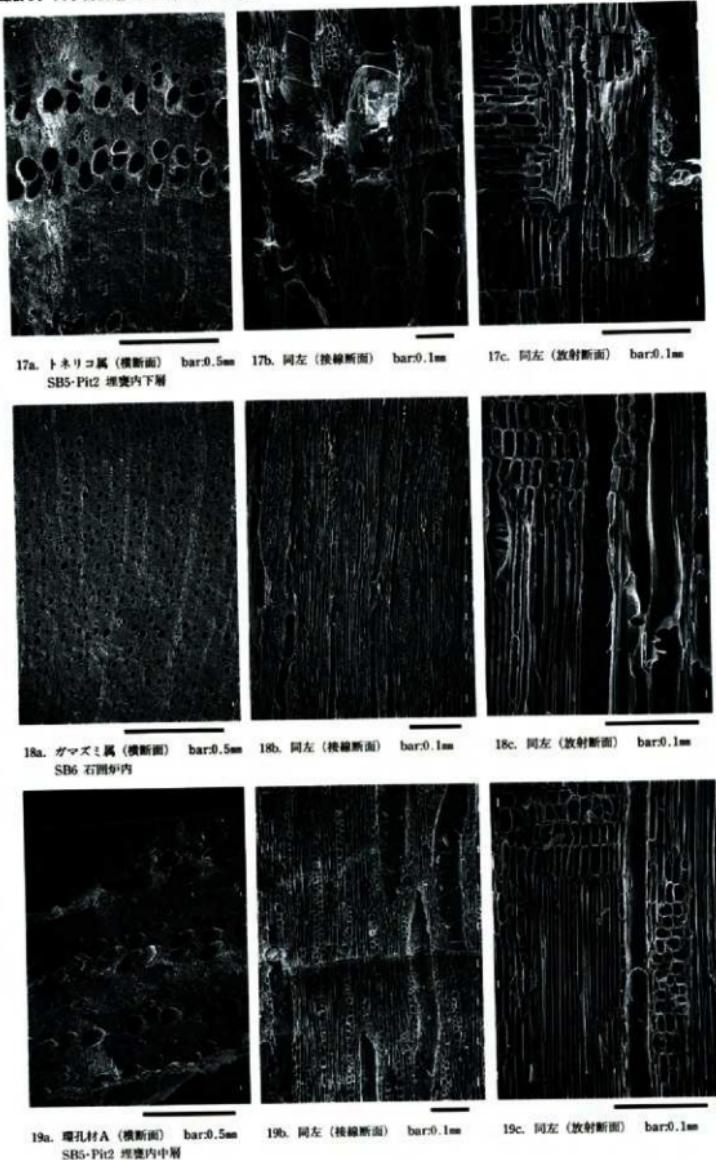


図版 67

図版 5. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種

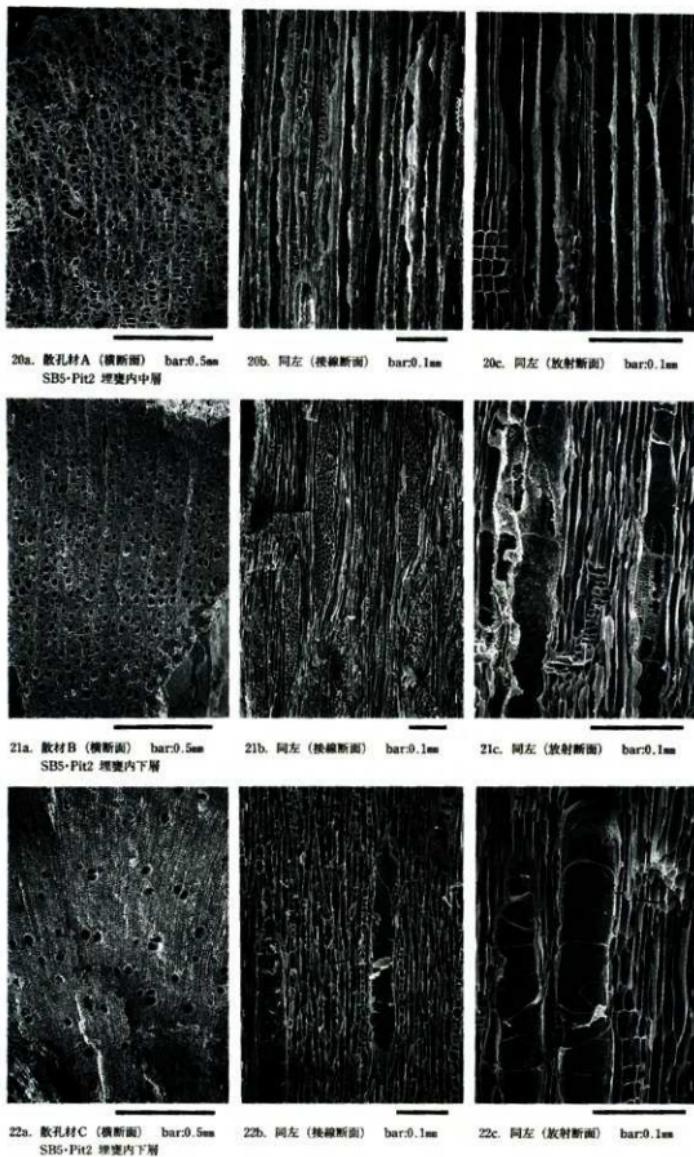


図版 6. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種

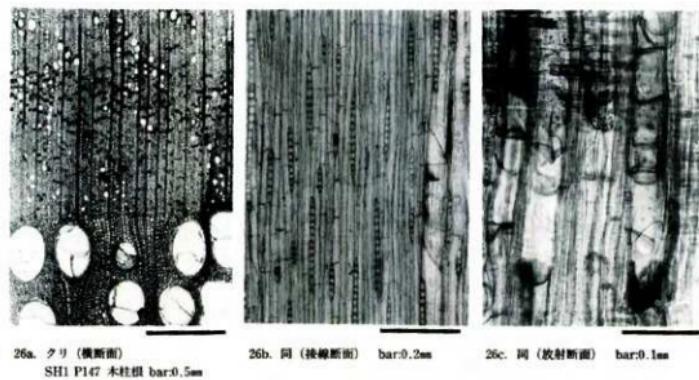
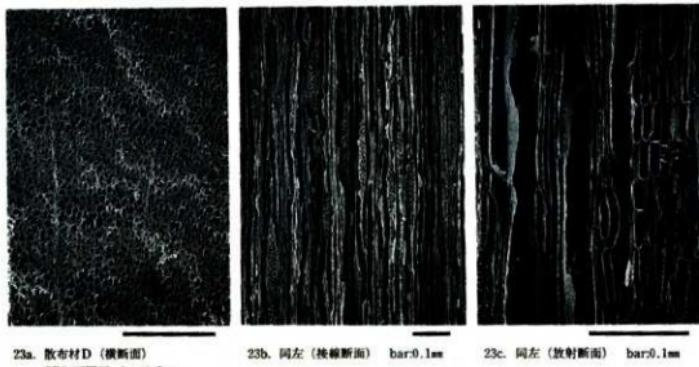


図版 69

図版 7. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種



図版 8. 山手宮前遺跡出土炭化材の樹種



図版 71

さし鉄のひも



写真8 (×200)



写真9 (×300)

わら（標準）



写真10 (×300)



写真11 (×300)

報告書抄録

ふりがな	やまてみやまえいせき					
書名	山手宮前遺跡					
副書名	徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第8集					
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第28集					
編著者名	小谷和彦、中島康夫、藤岡比呂志、小野木学、長屋幸二、植田弥生、藻科哲男他					
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター					
所在地	〒500 岐阜県岐阜市司町1(岐阜総合庁舎内)TEL058-(264)-1111(814)					
発行年月日	西暦1997年3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
山手宮前遺跡	岐阜県揖斐郡 藤橋村大字山手 字宮前	21407 06692	G19F 35° 42' 6'	136° 27' 36'	19920728 19921130 19930506 19931210 2,729m ²	徳山ダム建設事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
山手宮前遺跡	集落	縄文時代 中期後葉 中近世	竪穴住居跡8軒 土器埋設遺構1基 配石土坑(壙)群 掘立柱建物跡15棟 ピット・土坑683基	縄文土器 7,562点 石器 1,292点 中近世陶磁器 672点 錢貨 101枚 木柱根 7本	・縄文時代中期後葉の集落遺跡 ・第6号住居跡から咲烟式土器がまとまって出土 ・切目石錐が多数出土 ・さし錢出土	

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第28集

山 手 宮 前 遺 跡

徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

1997年3月24日 印刷

1997年3月31日 刊行

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内)

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社

『山手宮前遺跡』発掘調査報告書 正誤表

ページ	訂正箇所	誤	正
27・28	第14図	赤版（ドット）の位置	赤版（ドット）を4ミリ右下へずらす
126	第75図	612の実測図	612の実測図の表面・裏面を逆にする
156	第25図	21の石材・『結晶変岩』	『結晶片岩』